# 錬機動騎士スフォルツァンド

森鷺 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
錬機動騎士スフォルツァンド

【Ｎコード】
Ｎ１９４８Ｘ

【作者名】
森鷺　皐月

【あらすじ】
人類が生きていく為に錬機術が繁栄をもたらす時代。
異形の巨大な敵ルーディメンツに脅威を感じながらも、人々は政府直属騎士隊に全てを任せ平穏な生活を送っていた。
下町で配達のアルバイトに精を出す少年、シスカもその一人だった。
ある日、配達先である騎士隊の艦がルーディメンツに襲われる。
目の前の敵に恐怖を感じる中で、届け物のエオリアキーに導かれるがまま巨大兵器ブレスのスフォルツァンドにシスカは呼び寄せられ戦うことになる。

死に物狂いでルーディメンツを倒し危機から逃れられたと思えば、
今度は自分が知らないうちに騎士隊に入れられてしまい戦いに身を
投じることになる。
平穏に身を投じていた少年の運命が狂い始め、そして……。

# 第1話　平穏

人類が生きていく為に錬機術が繁栄をもたらす時代。
そんな時代に俺達は、生きている。
錬機術による蒸気機関、生活の火種、戦争の兵器までもそれで出来ている。
そうだ、俺達は錬機術に生かされている。それが当たり前の生活。
当たり前の平和。
でも、その平和は政府直属の騎士隊がいるからだ。
人々を脅かす、人類の敵…ルーディメンツ。
何者かが操縦しているのか、生物なのかわからない。
ただ、巨大で生身の人間がどう立ち向かっても敵うはずの無い、
大きなその存在は時に俺達の平和と心を掻き乱す。
だけど、それを守ってくれるのは騎士隊だ。
騎士隊を統括する政府に全部任せておけばいい。
誰もが安心しきっていた。
自分達には関係ない。外の世界のような…そんな感じがした。
太陽が昇って朝が始まり、陽が沈んで夜になるように…それが当たり前のことだって、ずっと思っていた。
明日の不安を恐れるより今日の食い扶持を稼ぐ。
貴族や中流の人間と違う下町の俺達にとって、生きていく為の術が全てだから。

＊＊＊

「ロイドさん、ただいま！」
バタバタと足音を立てて、少年シスカは小さな店の扉を開く。

見るからに泥だらけの擦り傷だらけ。しかし、笑顔で明るい声を上げる。

それを待っていたのは、スキンヘッドにサングラスをかけた派手なシャツを着た咥え煙草の男だった。

「んだ、シスカおめー…またやられたのか」

「はは…でもバイクと伝票は死守したよ。大事な商売道具だからさ」

下町で暮らす者たちは大人であろうと子供であろうと、生活の為に働くことを余儀なくされる。

幼い頃に家族を失ってからスラム街で育ったシスカは、ある人物に拾われ、そして今現在、ロイドの店で配達の仕事をしながら生活をしている。

だが、幼い頃の生活もあり、今でもシスカを色眼鏡で見る者は少なくなかった。

しかし、そういった冷遇や理不尽な暴力を受けても屈することは無かった。

「喧嘩買えたか？」

「まさか！　勝てるわけないし…なんか、面倒だし」

目を逸らして気まずそうにするシスカに呆れたロイドは、シスカにタオルを投げた。

「取り敢えず、風呂いってこい。そんな泥んこだとますます苛められんぞ」

「べ、別に苛められてるわけじゃ…」

「だったら一回くらい見返してやれ！　オメーはもう石投げられてスラムにこそこそ逃げるガキじゃねぇんだ」

「う…でも…」

「でも？　オイオイ、まだ弱虫シスカのままか？　…おめー、苛めっ子の貴族のガキと荒くれルカのどっち怖い？」

「ルカ！　断然、ルカの方が怖いですっ！　何するか分かんないから！」

「だったら胸張っておめーのバイクと共に突っ切って、そいつらを

轢き倒せ」
「そ、そんな無茶苦茶な…」
「あん？」
ロイドが睨み付けるとシスカは肩を震わせ、タオルを持ち直して扉へと急いだ。
「お、お風呂行って来ます！　わーい、銭湯楽しみだなぁ～」
伝票を置き、わざとらしく笑顔で逃げようとする。
「おい、シスカ」
代わりにタオルと桶を慌てて逃げようとするシスカをロイドが呼び止める。
「は、はい…」
これまでかと観念したシスカは、そろりとロイドを見た。
「風呂行ってからでいいからよ、もう一軒頼む。ちょっと町の外出るがいいか？」
「町の外…？　あ、そっか」
「根性なしで逃げやがった馬鹿の尻拭いで悪いが、次の奴見つかるまで頼むわ」
「うん、わかった」
さも当然のように返事をしてシスカは店を出る。
外でバイクのエンジンがかかる音がした。
シスカが去った後、ロイドは伝票をめくり煙草をふかした。
「…即答かよ」
くくっと喉元で笑い、ロイドは短くなった煙草を灰皿に擦り付けて消した。
「臆病で腰抜けのくせに根性だけはありやがる…。面白ぇガキだ」
そう言ってロイドは柔らかい笑みを扉の向こうに向けて店の裏口にある倉庫へと消えた。

＊＊＊

臆病者、弱虫、腰抜け、スラム育ちのドブネズミ。
もう何十回、いや…何百回かもしれない。聞き飽きた言葉だ。
俺の両親は、優秀な政府直属の研究施設のメカニックだった。
ルーディメンツを迎え撃つ為の兵器ブレスの開発に関わっていて、その影響か俺も小さい頃から機械が好きだった。
親の書いた設計図を参考にそれを改良して、新しい玩具を作っては友達に自慢して一緒に遊んでいた。

だけど、二人は俺が九歳の頃に突然死んだ。

本当に突然だったんだ。研究所にいた父さんと母さんは、実験中に死んだって聞かされた。
機密事項だから死因も分からない。
最後の顔を見ることすら許されなくて納得いかなかった。
でも、当時の俺には何も出来なくて、それどころか身寄りが無い俺は泥臭くて薄暗いスラムで生きることを余儀なくされた。
スラムは荒れ放題で食べ物も奪い合いで…力が無かった俺は、お腹が空いたら道を這ってでもパンの欠片を探し出して食べる。
そんな生活が毎日毎日続く。
人のものを盗むのは嫌だったけど、人の捨てたものを拾うのは罪悪感を感じなかった。
同じスラム街にいる奴等に殴られるのも日常だ。
その代わり、心は死んでいた。
自暴自棄になって何もかもが滅茶苦茶に壊れて、ただ息をしているだけだった。
そんな生活が四年も続いて、生きることすら面倒臭くてこのまま死んでも良いと思っていた。
そんな時に、そいつは現れたんだ。

「なーに死んだ振りなんかしてんだよ、てめぇ」

そいつは、態度も体もでかくて見上げるのが眩しくて…泥の中を無理矢理這い蹲って生きる俺とは違う太陽のような男だった。
その男が、俺を泥沼から太陽の下に戻してくれた。
それが…そいつこそが、ルカだ。

＊＊＊

「ちょっと待ったあああああぁぁ！」
バイクで走るシスカの前に両手広げて飛び出してくる男が一人。
「うわあああぁぁぁ！」
突然目の前に現れた人間にシスカはタイヤを思い切り地面に擦り付けてドリフトをして止まった。
「な、な、な…！」
ハンドルを震える手で握り締め、肩も震わせてその人物を見た。
「へっ！　湯にあたってのぼせてんのか？　ぼーっとして走ってたら危ねぇぞ」
「飛び出してくるほうがよっぽど危険だよ！」
「うっせぇなぁ。いちいち細かいこと気にしてっとハゲんぞ。ロイドのジジィみてぇにな」
「全然細かくない上に、ロイドさんのあれはハゲじゃなくてスキンヘッドだから」
「うっせぇ！　この俺！　ルスティカ＝ピッツィカード様がそう言ったらそうなんだよ！」
「…意味わかんないし。もうルカどいてよ。俺、まだ仕事中」
バイクに乗ろうとしたルカを退こうとシスカは溜息を吐いて、エンジンをかけなおす。
「配達か。何処だ？」
「町の外。ほら、ニムさん辞めちゃったから俺が…って何してんの？」

シスカが話をしている途中で、事もあろうかルカはバイクに乗った。シスカの前に。
「進め、シスカ！」
「何馬鹿なこと言ってんだよ！」
シスカはグッとハンドルを握り締め、勢いを付けてルカを振り払った。
「うおっ！　何すんだテメェ！」
再びバイクに縋り付き、ルカは牙を剥き出しにする。
今度は後方に積んである荷物を掴んだ。
「潰れる！　荷物潰れちゃうって！」
「だったら俺も連れてけ！」
いくら振り払ってもルカはしがみ付いて来るだろう。そういう男だ。今に始まったことじゃない。
「…分かったよ。ただ、荷物傷つけないでよ。怒られるのは俺で、最終的にロイドさんに迷惑掛けるんだから」
「おうっ！　俺もあの親父の拳骨は痛ェからちゃんと守ってやるぜ！」
無邪気な子供のように歯を出してルカは笑う。
こんな顔をされると、神経質になる自分が馬鹿らしくなって実際そうじゃないのにルカが正しいと思えてくる。
でも、それは嫌じゃなかった。
どこか体の中がほっとするようなそんな感覚で、自然に顔が綻んだ。

＊＊＊

町を出て広い荒野を走り抜けると、荒野に駐在している艦が見えてきた。
「おー、あのデカブツか。クソ政府の騎士隊の巣じゃねぇか」
「うん。暫く動かないらしいから直接持って来て欲しいって。なん

か、機密限定荷物だから俺も中身はわかんないんだけど」
「…開けちまおうぜ」
ニヤリとルカは笑う。
驚いてシスカはバイクを止めて、掛けていたゴーグルを頭へと上げた。
そして、後部座席に座るルカを見る。
「は、はぁ？　何言ってんだよ、駄目に決まってんだろ！」
「いいじゃねぇか、元に戻せば問題ねぇって」
「問題あるから！　怒られるだけじゃすまないって！　しかも政府のものだよ？　生活できなくなっちゃうよ！」
「大丈夫だ。そん時は俺が面倒見てやる！」
「あああああぁ！　開けちゃ駄目だって！」
シスカが止める暇も無く、ルカは積荷を開ける。
「お？　…なんだこりゃ」
「箱の中に箱…？」
「相当なお宝だぜ、こりゃ」
「もうやめようよ！　箱の重ねがけなんてほんとまずいよ、この荷物…って、あああぁぁぁ！」
シスカが制止する暇も無く、幾度も重なる箱をルカは開け続ける。
頭を抱えて悲鳴を上げるシスカの声は虚しく空に消えていく。

＊＊＊

「よし、これが最後だな」
小さな箱が目の前に現れる。
「だああぁぁ！　駄目だってばあああぁぁ！」
必死に守ろうとルカから箱を取り上げる。
「あ」
既に半分テープを開けられたその箱は、シスカが取り上げた反動で開き、中身が飛び出してしまう。

「あーあ、出しちまった。シスカ、お前も共犯だな」
ニヤリと笑うルカに抗うどころか涙目になりながらシスカは、中身を持ったまま放心する。
「んで、何だこりゃ。鍵か？」
それは鍵の形をした透明な宝石だった。
「え、えお…え、お…」
涙目でぱくぱくと口を開閉させて言葉にならない言葉を発するシスカの目の前で、ルカは手を振ってみせる。
「おーい、シスカ。大丈夫かー？」
「馬鹿ルカ！　これ、エオリアだよ！」
「は？　エオリア？　…なんだ、それ」
「何だそれって…錬機動の原石だよ！　錬機術ってこの石から物質作ってるんだって…子供でも知ってるよ！」
「ほう。んで、なんでそんなテンパってんだよ。そこまで仕事に命かけなくたって…」
「そうじゃない！　そうじゃないんだよ！」
中身を開けたショックと言うより、その中身自体に恐れをなしてるようにシスカは怒鳴る。
「エオリアの鍵！　これ、ブレス起動のキーなんだよ。こんなの俺達みたいなの持ってたら犯罪者って思われても不思議じゃないだろ！」
「…なんで持ってると犯罪なんだ？」
「ブレスは、政府の最重要兵器だし…。そんなのを動かす鍵なんか持ってたら、俺達みたいなのだって兵器を動かすことが出来……――――」
そこでシスカは止まった。
失言だった。こんなことを言ったらルカは面白がるに違いない。
恐る恐る目を向けると、案の定シスカが想定した通りの表情をルカは浮かべていた。
「よっしゃあ！　そうと決まったら、艦に行くぞ！」

「行ける訳ないだろ！　中身出しちゃったんだから、捕まっちゃうよ！」
「おいおい、お前のバイクがそんじょそこらの騎士なんかに捕まるかよ」
「全力で捕まるよ！　逃げられるわけ無いよ！　そんなにパワー出るわけじゃないんだから」
「いや、出る！　走れ、シスカ！」
「い、嫌だ！　――――――っ！」
首を振って拒否を示そうとするシスカだったが、手の中のエオリアキーが白く光り輝いた。
それが、一本の線となって艦へと導く。
「な、なんだ…こ、れえええっ！」
止めたはずのエンジンが掛かり、動かしてもいないのにも拘らず勢いよく艦に向かっていく。
「と、とと…止まれえええぇ！」
何度もブレーキをかけようとするも、全くびくともしないで勢いは止まらず、バイクは艦の中の格納庫へ転がり込む。
「うわあぁぁっ！」
バイクごと叩きつけられ、シスカとルカは目を回す。
「いってて…大丈夫か？　シスカ」
「う、うん。頭ぐわんぐわんするけど…」
頭の中で散る星を振り払うように首を横に振る。
流石のルカも頭を抑えて落ち着いた。
「誰っ？」
階段から少女が血相を変えて向かってくる。
「うわっ！　ルカ、逃げようよ！」
「おい、そこのお前！」
シスカの行動とは逆に、ルカはシスカの首根っこを掴んで少女へ向かっていく。
「ちょっと、ルカ！　何やってんだよ！　此処、騎士隊の艦なんだ

よっ？」
「んなもん知ってる！　おい、お前！　ブレスのとこに案内しろ」
「な、ななな…何言ってんだよ、馬鹿ルカ！」
そんな二人の掛け合いに少女は不信がり、通信端末をつけた。
「此方、ユリア＝アナリーゼ。不法侵入者が二名。指示をお願いします」
ユリアという名の少女が上に報告すると、シスカは震えながらごくりと息を飲む。
「…分かりました。では一時的な拘束を…はい」
雲行きが怪しくなり、シスカとルカは足をそろりと後ろに下げた。
「…行くぞ、シスカ」
「う、うん…。せぇーの…」
それを合図に二人はこの場から逃げるべく走った。
「あ、こら！　待ちなさい！」
『どうした？』
端末の向こうから男の声が聞こえる。恐らくユリアの上司だろう。
「二人が逃げました。足止めします！」
そう言って通信を切り、ユリアはホルスターから拳銃を取り出し二人を撃つ。
「ひいいぃっ」
「うっわ！　あっぶねーな、このクソ女！」
銃弾を避けながら二人は一心不乱に走る。
「ルカ、捕まって！」
「よっしゃ、あの女にぶちかましてやれ！」
「馬鹿！　逃げるんだよっ。完璧に俺達お尋ね者状態じゃん！」
そう言って、シスカはバイクのエンジンをかけようとする。
「あれ…？　あれっ？」
何度もエンジンを掛けようとするが、何の音もせず、鍵を回す音がカチカチと鳴る。
「何やってんだ、シスカ」

「エンジンがかからないんだよ！」
「は？」
「さっきので使い果たしちゃったのかな？　…ど、どうしよう」
「どうしようったって、お前…」
シスカが何度もエンジンをかけようとするが、鍵が虚しくカチカチと鳴るだけでエンジンがかかることはなかった。
タイムリミットか、ユリアは銃口を至近距離で二人に向ける。
「大人しくしなさい」
鋭い眼光でユリアは引鉄に手を添える。
シスカとルカは観念して、両手を挙げた。
「じゃ、ついてきて。下手なことしたら撃ち殺すわよ」
ビクッと肩を震わせ、シスカはカチカチと歯を鳴らした。
「る、ルカ…」
ルカの服の裾を引っ張り、シスカは視線で降伏を提案した。
「はぁ…。わーったよ！　行けばいいんだろ、行けば」
「じゃあ、はい」
ユリアは二人を拘束しようと手錠を用意する。
「て、手錠…。ルカ、やっぱり俺達捕まっちゃうのかな…」
「まぁ、半分もう捕まってるけどな。はは、悪ぃ」
「本当に悪すぎるよっ！　あぁ、もう…」
この先のことを考えると怖かった。
こんな重要犯罪を犯してどんな刑罰が待っているのだろうか。
もしかしたら、死刑にでもされたらと思うと涙が流れそうだった。
「この忙しい時に余計なものが…」
溜息を吐いてユリアが悩ましげに言葉を発する。
「良い？　取り敢えず大人しくしてなさい。そうすればこれ以上の罪は重くならないわ。多分ね」
ユリアなりの慰めといったところだろうか。
それでもシスカの震えは止まらない。
（情けない奴…。男の癖にめそめそしちゃって）

正直、シスカはユリアの嫌いなタイプだった。
思い思いに今後のことを考えながら歩く。
突然、ずしんと重い音がして激しい揺れを感じる。
この揺れは何度も感じたことがある。
敵襲だった。

# 第2話　初陣

「うわっ！」
「な、なんだ？」
大きな揺れにルカやユリアはよろけてしまい、シスカは尻餅をついた。
「いてて…」
床に打った尻を押さえながらシスカは立ち上がる。
艦内に警報が鳴り響き、クルー達が慌しそうに走り回っていた。
「これは、まさか…！」
ユリアは周囲を見渡し、シスカとルカを睨む。
鬼気迫る真剣な表情だ。
「早く来て！　ルーディメンツが攻めてくる！」
「ルーディメンツだと？　よっしゃ、見に行くぞシスカ！」
「馬鹿、何言ってんだよ！　この人の言うとおりにしないと危ないよ！」
外に出ようとするルカの腕を掴んで、シスカは叫ぶ。
途端、目が眩むような光がシスカのポケットから発せられる。
「これは、さっきの…！　いや、違う…」
先ほどの白い光とは違い、今度は青い光が強く発せられ道標を示す。
（…行かなきゃいけない気がする。さっきの光も今の光も何かを伝えたいのだとしたら…）
光の示す方にシスカは走り出した。
「ちょっと、待ちなさい！」
ユリアがシスカを追いかけようとすると、その腕をルカが掴む。
「な、何？」
「何じゃねー。その銃下ろせ。こうなったら逃げも隠れもしねーよ」
「…わかったわよ。ただ、妙なことしたら容赦なく撃つ！」

「へいへい。分かってっから、そんな怖い顔すんなって」
頭をぽりぽりと掻き、ルカは欠伸をする。
しかし、少女は警戒を怠ることなくルカを睨み彼の後ろを歩いていた。

「はぁ…はぁ、はぁ…」
光の示す方に走ると、格納庫の奥の暗い場所へと辿り着く。
エオリアキーが唯一の光となって、その場所を照らし、輝きは増していく。
「うわわっ！　眩しっ…！」
眩む目を堪え、光り輝くエオリアキーの示した先を見る。
一際輝く鋭い光がその方向を示すと、それが明らかになる。
「――ッ！　これって…ブレス？」
目の前には巨大な体があった。その顔は、高く見上げないと見えない。
綺麗に磨かれたスマルト色の装甲が薄暗い格納庫でその存在を主張し、視線を離せない。
瞬間、胸の高鳴りを感じた。
少しずつ、それに近付いていくうちに胸の高鳴りは増していく。
そしてひとつの単語が脳裏に響く。
「スフォル…ツァンド…？」
その名を呟いた瞬間、それに呼応するようにブレスが起動しスパークしたように光が発せられる。
眩しくて目を開けられない。
「うわあぁぁっ！」
あまりの眩しさに悲鳴が出た。
「シスカ！」
後ろからルカがシスカを呼んだ。
「ルカ！　これ…」

「ちょっとあんた！　何やってんのよ！」
ユリアが怒りの形相でシスカの胸倉を掴む。
その表情にシスカは、肩をビクッと震わせた。
「ご…ごめん」
「民間人が何でエオリアキーなんか持ってんのよ！」
「そ、それは…その…」
「はっきり喋りなさいよ！　あんた、ただじゃすまないわよ！」
「何やってんだ、ユリア！」
怒鳴り声を上げるユリアの背後から男の声が聞こえる。
カンカンカンと鉄製の階段を急いで降りる音がした。
振り向いて男に気付くと、ユリアの手がシスカの胸倉から外れる。
「ロック隊長」
「今、ジェントが戻る。ルバートもかなりの損傷だ。手があいてるなら手伝ってくれ」
「損傷ってまさか…！」
「左目と右足がやられてる。これ以上の戦闘は無理だ」
「そんな！　唯一ブレスに乗れる副隊長が動けなかったら、もう…」
ぐっと隊長と呼ばれた男、ロックは歯を食い縛る。
ガラガラとストレッチャーの音がして、そこには恐らく今話していたであろうブレスのパイロットが左目と右足を血塗れにして苦悶の表情を浮かべながら運ばれていた。
その姿にシスカの顔が青褪めた。
今まで考えたことも無い騎士隊とブレスの戦闘がこんな間近で現実として視界に入っている。
関係ないと思っていたものが、妙にリアルで戦場に出るのはこんな怪我が出るほど命がけでリスクが高いのだと理解できた。
「おい、誰がブレス乗りがいねぇって？　お前ら見ろよ。此処にいるじゃねぇか」
ルカがニヤリとシスカへと目を向けて肩に手を回した。
「なぁ、シスカ」

「へっ？」
何を言ってるのか分からないとでもいうようにシスカは不安げにルカを見た。
その様子を見てルカは不敵に笑い、シスカの背中を思いきり叩いた。
「いった！」
「この俺が説明してやろう。シスカの持ってるエオリアキーが光った先にブレスがある！　そんで、こいつはシスカが現れたことで起動した！　ブレスがシスカに反応したって事は資格があるってこったろ。　イケるぜ！」
「は…はあぁっ？」
ルカの簡易的な説明にシスカは、信じられないようなものを見る目でルカを見て叫んだ。
「無理！　無理だって！　俺なんか、ただの庶民だし騎士でも何でもないよ！　動かせるわけないから！　イケない！　全然、イケない！」
大体、怖いし。
死にたくないし。
涙目でルカに抗議するシスカは、自分には無理だと首を横に振った。
「無理に決まってる！　何も訓練を受けていない民間人が戦えるわけ無いでしょ！　あんた何言ってんの？　その子に死ねって言ってるようなもんよっ？」
怒りの頂点に達しそうなユリアも叫び、ルカを非難した。
だが、ロックは少し考えるように首を捻った。
「君のエオリアキーが反応したのか？」
「え、いや…俺のって言うか…これは、そもそも騎士隊のもので…俺は届けに来ただけで…その、えっと…ごめんなさい！」
焦ったように頭を下げて、シスカはエオリアキーをロックに渡した。

しかし、渡した瞬間、光は薄れ、次第にただの透明な石に戻ってしまう。
そしてブレスも反応を示さなくなった。
「……イケるな」
「…へ？」
ニヤリと何かを企むような凶悪な笑みをロックは浮かべ、エオリアキーをシスカに渡す。
再び青い光が瞬き、同じようにブレスも起動する。
「そのキーは持ち主を選ぶ。こいつに乗る資格のある奴以外に光を委ねることは無い。坊主やってみないか？　寧ろ、やれ」
「や、やってみるって？　え、や…やれって…どういうこと…ですか？」
ピクリとシスカの顔が引き攣った。
「ブレスに乗って戦わないか？　大丈夫だ、死んでも俺が全ての責任を持つ」
「し、死んでも…って…む、無理無理無理！　無理です！　俺なんかが戦えるわけ無いですっ」
首が取れそうなくらいシスカは首を横に振り、涙目で訴えた。
「隊長！　民間人に戦わせるなんて、いくらなんでも無茶苦茶です！」
「おー、おもしれぇじゃねぇか。やってみろよシスカ。こいつで勝って政府の鼻へし折ってやろうぜ！」
「じゃあ、ルカがやってよ！　無理だよ、俺には…！」
面白がるように笑うルカに対してシスカは拒否を止めず、ルカにエオリアキーを差し出す。
しかし、ルカはシスカの額をぺちんと叩いた。
「あたっ」
「お前、さっきこのオッサンが言った事忘れたかよ。そいつはもうお前のもんだ。このデカブツもな」
「だ、だけど…」

言い訳を探すシスカにエオリアキーを握らせると、ルカはシスカの頭に片腕を乗せて笑った。
「な？　やってみろって」
「うっ…そんな…だって…」
「頼む、坊主。もう乗れる人間がいない。さっき見たとおり、唯一のブレス乗りはとてもじゃないが戦える状態でもないんだ。俺が代わってやりたいところだが、条件が照合しない。このままだと、この艦も近隣の町も…いや、この世界が奴らに滅茶苦茶にされる」
「隊長…」
男が哀願するように頭を下げるとユリアは止めに入ろうとしたが、彼の命を預かるという責任の重さを覚悟していることを理解し、それ以上は言えなかった。
「お、俺がやらないと…みんな、死ぬ…」
「そうだ。出来る限りでいい。危険を感じたら逃げても構わない。少しでも可能性がある以上、賭けたい。どの道、奴らを倒さない限り俺達に未来は無い」
事の重さにシスカは震えた。
もしかしたらさっき運ばれた人間のように大怪我をして五体満足じゃいられなくなるかもしれない。
五体満足どころか、死んでしまうかもしれない。
でも、自分が負けたら人類は全滅だ。
自分が敵を倒さなければ、多くの命が失われる。
共に生きてきた友人も恩人も全て。
その重みで恐怖を更に煽られる迷いの中、大きな揺れを感じた。
「うおおおっ！」
「きゃあああっ！」
「くそ…もうこんな近くまでっ！」
大きな揺れに全員、体のバランスを崩してしまいゆっくりと起き上がる。
しかし、シスカは迷いの中で起き上がることなく、伏したままだ

った。
「俺…俺が……！」
可能性が低くても、今、沢山の命を守れるのは自分だけ。
だとしたら怖くても何かをやれるのは自分だけなんだとシスカは体を起こし、カタカタと震える肩を手でグッと押さえ身体を起こした。
「俺…やって、みます」
小さく呟いてシスカはブレスと向き合った。
「よっしゃ、それでこそ俺の認めた男だ！バシッと決めてやれ」
「う、うん！」
シスカとルカはハイタッチして、拳をぶつけた。
「よし、じゃあ坊主。改めて頼むな。騎士隊長のロック＝レントだ」
「シスカです。シスカ＝ブルーネル」
「ブルーネル…って、まさか…」
「え？」
シスカの名前を聞くや否やロックの表情が変わる。
「いや、こっちだ。来てくれ」
「あ、はい」
余計なことは考えまいと首を軽く横に振り、ロックはシスカを連れていく。
「頑張れよ、シスカ」
二人の背中を見送るルカは、腕を組んだ。
「こんな…民間人に頼るなんて…！」
ルカの隣にいるユリアは不安と緊張で悔しそうに小さく呟いたが、ルカは何も言わず視線を向けることも無かった。
今は何を気にするよりも友人の背中を応援することだけが今自分に出来ることだと、ルカはそう思った。

＊＊＊

『準備はいいか？』
コックピットの中に入ったシスカは、緊張の息を吐き、顔をあげた。
「はい…！」
エオリアキーを鍵穴に差し込むと、シスカが乗るブレス…スフォルツァンドは立ち上がった。
「うわわっ…、っと…」
バランスを崩しそうになり、慌てて操縦桿（そうじゅうかん）を握り直す。
握りなおした瞬間、スフォルツァンドは艦を飛び出しその勢いは止まらない。
それは、シスカが方向転換をして歯止めをきかせることで止まった。
「な、な、なんだこれ…」
目が回りそうな感覚に酔ってしまいそうで、思ったよりも上手く動かせないことに手に汗を握る。
（…落ち着け。落ち着くんだ、俺…）
深く深呼吸をして操縦桿を握り直す。
今度は勢いをつけることなく、脳内に操作が全て入ってくるような感覚を覚え、一歩足を前に出した。
「よし、歩いた」
第一関門突破とでも言うようにシスカは、ほっと息をついた。
『坊主、何やってんだ。敵に仕掛けろ』
モニター越しにロックとの通信が繋がる。
「し、仕掛けるって…どうやって…」
『遠距離ならライフルやマシンガンがある。接近ならナイフが搭載されてる。上手く使って戦え！』
「そ、そんな！　扱い方なんか、俺…ッ、うわあああっ！」
しどろもどろに言い訳している間もなく巨人を模したルーディメンツがスフォルツァンドに気が付き、エネルギー砲を発射する。
間一髪のところで避けるも、シスカの表情が恐怖で歪み、腕と膝

は震えて笑っていた。
「あ、あ…あんなのが当たったら…」
『しっかりしろ！　何もしなかったら的になるだけだぞ！』
「は、はいっ！」
やらなきゃやられる。
今、戦場に立っているのは他人じゃない。自分なんだ。助けてくれる人なんかいない。
シスカは俯いていた顔をあげた。
とにかく、仕掛けないと。
「うおおおあああぁっ！」
敵に向かい、マシンガンを撃ち込む。
戦意高揚のシスカに敬意を払うように、敵も負けじとエネルギー砲を発射した。
激しいエネルギー砲の粒子がスフォルツァンドに何発も狙い、シスカはそのたびにスフォルツァンドで逃げていた。
「ひいいぃぃ！」
やはり怖いものは怖い。
あんなものに当たったら死んでしまう。
「くっそおおおぉっ！　もう、どうとでもなれえぇぇ！」
むやみやたらに攻撃するより、敵の手を封じるのが先だとシスカは涙目で敵へ突っ込んでいった。
接近戦に持ち込めば、なんとかなる筈。あのエネルギー砲は武器の位置的に近いと死角で当たらない。
だが、それに持ち込むにはあまりにも無謀な突っ込み方をシスカはしていたのだ。
早く終わってほしい。これ以上此処にいたくない。怖い。逃げたい。
そんな事ばかり脳裏に浮かんでくる。
「うわっ！」
躓いて転んでしまう。

「いってて…。ひっ！」
顔を上げると、至近距離で敵がスフォルツァンドを狙っていた。
「ひいいぃぃっ！　死にたくないっ！」
情けない声を上げながら、敵から逃げる。
一定の距離を置くと素早くナイフを取り出し、敵に突き刺して体当たりをすると敵がよろける。
「い、今だ…！」
そこから距離を置くことも無くマシンガンを撃ち込む。
怖くて怖くてたまらないけど、初めて乗ったとは思えない。
自分の手足のように動かせる感覚に、シスカは自分の機敏さに驚いていた。
シスカだけではない。
艦の中にいた誰もが、その戦闘の鮮やかさに目を離すことが出来なかった。

# 第3話　覚醒

一方、ブリッジではその様子を艦の者達は唖然と見ていた。
「あれが…初めて乗った人間の戦い方か？」
ロックは、生唾を飲んだ。
モニター越しに情けない悲鳴が聞こえ続け、戦い方も滅茶苦茶だった。
しかし、確実にルーディメンツへダメージを与えている。
戦い方を磨けば、確実に化ける素材だった。
「こりゃ、いい拾いもんしたな」
ニヤリとロックは笑って見せると勝利を確信したように頷いた。
「敵前方から高エネルギー反応！」
オペレーターの少女が戦闘の状況を伝える。
「坊主、いいか。闇雲に突っ込むな。遠くから…――――」
「シスカ！　やれ！　やるんだ！　正面突破で蹴散らせぇぇ！」
ロックの言葉を遮ってルカが絶叫する。
「なっ…！　お前、何を…。ユリア！　お前、何をしているんだ。勝手にブリッジに入れるんじゃない」
「も、申し訳ありません…！　いきなりこの男が凄い勢いで走り出して…。はぁ…はぁ…。お、追いつかなくて」
ブリッジに息を切らしたユリアが入り、呼吸を整えた。
その様子に仕方ないとでも言うようにロックはルカに目を向けて肩を落とし、再びモニターに目を向けた。
「いいか、坊主。生き延びたかったら言う事を聞けよ。慣れないお前が出来ることには限界がある」
このまま焦って闇雲に突っ込んだままだと、死んでしまう確率が上がるだけだ。
必死にロックは指示を送った。

＊＊＊

ブリッジのやり取りと命令を聞き、シスカは操縦桿を握った。
しかし、それを握ったまま、敵からの攻撃を避けるだけで、中々反撃のチャンスを伺えない。
「遠くからにしても近くても…敵が素早くて狙えない…！　さっきの攻撃もあんまり効いてないし…あんなの当たったら、死んじゃうよ！　も、もう無理だよ！」
『シスカ、逃げるんじゃねぇ！』
ひたすら逃げ場を探し走り回るシスカの耳にルカの怒号が聞こえる。
「ルカっ？」
『お前は一度やるって決めたんじゃねぇか！　だったら、ちゃんとやりやがれ！　お前のやり方で！』
「お、俺のやり方？　何言ってんだよ。いい加減、限界が…」
『うるせぇ！　お前ほど根性のある人間はこの世界の何処にもいねぇんだ！　自分で限界作っちまったら、そこで終わりなんだよ！』
「そ、そんなこと言われても…だって、死んじゃうよ！」
『その程度の奴にやられるくらいなら死んじまえ！』
「なっ…！」
ルカのその言葉に流石のシスカも頭を熱くさせた。
「戦ってるのは俺なのに…好き勝手言ってんな！　こっの…馬鹿ルカァァッ！」
シスカの怒りと同調するようにスフォルツァンドもパワー出力を上げていく。
それをさせまいとでも言うように敵が一際強いエネルギー砲を発した。
「ちまちまちまちま…遠くから攻撃してんじゃねえっ！」
恐怖の震えではなく、やり場の無いルカへの怒りをぶつけるように突進をして敵の攻撃をエネルギーのシールドで防御し、拳をルー

ディメンツの顔に減り込ませる。
「お前を倒して、少しでも早く…ルカをぶん殴る！」
目的が履き違えたことを当然のようにシスカが叫ぶと同時にスフォルツァンドの拳から増幅されたエネルギーが溜まり、手を開くと大きなエネルギーが発せられルーディメンツが爆発する。

＊＊＊

その様子をブリッジにいたロックを始め、ルカを除いた全員が硬直した。
「ユリア…あんな防具と武器どうやってつけたんだ？」
「…あんなのつけようがないです。…というか初めて見ました」
「怒りと根性で新しいものを生み出したって…解釈でいいのか？」
「現実的には考えられないので…回答できません…」
結果はオーライだが、信じられないことと突っ込み所が多すぎて開いた口が塞がらない。
その中でルカだけが満足そうに笑った。
「相当、イケてんじゃねぇか」
新しい玩具を見つけた子供のようにルカはモニターに釘付けになっていた。
しかし、ほっとしたのも束の間、警報が鳴り響く。
「な、なんだ！」
「スフォルツァンドから高度の熱源発生！」
「パイロットはどうしたっ」
「脳波メーター、レッドゾーン！　パイロット生死不明！　コックピット内の温度が急上昇しています！」
艦内で警報が鳴り響く中で、バタバタと幾人もの者達が走り出す。
「スフォルツァンドを回収しろ！　パイロットの救出を最優先！早くしろっ！」
ロックが指示を出すとますます人数は増え、その場を動ける者全

員が機体回収と救護作業に入った。
「シスカ！　おい、起きやがれ！」
モニターに向かい、ルカは大声で叫んだ。
しかし、シスカにはその声は届かなかった。
「シスカ！　シスカァァァー！」
叫ぶことしかできないルカは友人の目を覚めることを願い、喉がはちきれそうな程にシスカの名を呼んだ。
しかし、スフォルツァンド内で倒れるシスカにその声は届かなかった。

＊＊＊

身体中が熱い。熱くて溶けそうで息が苦しくなる。
このまま死んでしまうのかな…。
そんなことを考えて、ぼやける頭が徐々にはっきりとしてくる。

「う、うぅん…」
薄っすらと目を開くと、シスカはベッドの上にいることを認識する。
いつも下宿しているロイドの店の古臭いベッドとは違う清潔感のある真っ白なベッドだった。
無機質で殆ど物が置いていない。
横を向くとベッドの隣には何かの波を刻む機械が稼動され、その機械はシスカの頭に取り付けられている。
「なんだ、これ…あぐっ！　う、うぅ…」
起き上がろうと身体を起こすと頭に激痛が走る。
眩暈がするほどの激痛に頭を抑えずにはいられない。
いう事の聞かない身体と謎の機械に混乱するシスカは目が回りそうだった。
その時、見たことの無い一人の少女が部屋に入る。

「あ、駄目ですよ。まだ安静にしていないと」
「え…あ、あの…君は？」
「あ、はい。アニーミ＝アナリーゼと申します。騎士隊の戦況オペレーターをしています」
「あ、う…うん。俺は…」
「シスカ＝ブルーネルさんですよね。もうこの艦であなたを知らない人はいないと思いますよ」
ふふ、とにこやかに笑い、アニーミは手に持ったタオルでシスカの汗を拭った。
「え、な…何で？」
「シスカさんはルーディメンツを倒した英雄さんですから。ただ、あの後コックピットがオーバーヒートして…あと少し遅かったら手遅れだったみたいです」
アニーミの言葉に想像したシスカは背筋を凍らせ、怯えた表情を浮かべた。
「お、俺…ちゃんと生きてるんだよね？」
「はい。足もついてますよ」
「良かった…本当に良かった。もう俺…あんな怖いの御免だよ」
「え？　シスカさんって…騎士隊に入隊するんじゃ…」
「はっ？」
アニーミの言葉に耳を浮かべた。
誰が何に入るって？
「ごめん、もう一回…」
「はい。だから、シスカさん…騎士隊でのブレスパイロットとして入隊するんですよね？」
「なっ！　なななななな…！」
動揺とショックで言葉にならない。
取り付けられた機械の波は激しくなり、シスカは目を回した。
「無理！　何が無理って、あんなの乗りたくないし戦いたくないし！　騎士なんて無理だし！」

「シスカさん、落ち着いてください！」
「うぅ…」
アニーミに怒鳴られ、シスカはしょんぼりと肩を落とす。
その様子にアニーミは苦笑をして機械を止め、機械からシスカの頭へ伸びてるコードも外した。
「これは…？」
「シスカさんの脳波状態を示す機械です。倒れた時、異常に高い脳波粒子が出てそこから脳死状態だったので」
「の、脳死？」
「はい。でも、三日前には通常の脳波に変わりましたのでシスカさんの意識が戻るのを待つだけだったんです」
「み、三日？　待って、あれから何日…」
「今日で七日目です。あ、でもあまり動くと…」
「あ、大丈夫。こう見えて身体は丈夫だか…ら？」
シスカが心配をかけまいとアニーミに答えようとした時、布団がもぞりと動いた。
「きゅ？」
「え？」
布団から飛び出し、白いゴムボールのような感触の動物がシスカの身体をよじ登り、頬を舐めた。
「うわっ！　な、何？」
「へー、もう生まれたのか」
シスカの肩に乗る謎の生き物をつつく突然現れた男に、シスカもアニーミも驚きの表情を浮かべた。「ジェント副隊長」
見覚えがあった。
先日の戦闘で大怪我をした人物だ。
左目には眼帯をしている。
引き摺っている右足は恐らく義足だろう。
ジェントは優しげな表情をアニーミに向けた。
「すまない、アニーミ。彼と二人で話がしたい」

そして、再びシスカに向き直る。
意味深なジェントの笑顔と謎の生き物に、シスカは戸惑いを隠せない表情を浮かべていた。

# 第4話　ソルフェージュ

「騎士隊の入隊…って、俺には、無理です…！」
震える声で、シスカは俯いた。
シスカが意識を失っている間、先日の戦闘の映像を見ていた上層部がシスカを騎士隊に入れる手続きを行っていた。
スフォルツァンドに唯一乗れる人物。
そして先日の戦闘でルーディメンツを倒したという功績。
戦力として、シスカを手放したくなかった。
「この間の戦い…。初めてにしては…いや、君のあれは熟練した騎士に値するほど君のブレスの扱いが巧みだった」
「でも、あの時は…無我夢中で……」
「それでも、上は高く評価していたよ。また、興味も示している。勿論、戦力としても欲しい逸材だ。でも、それ以上にシスカ＝ブルーネルという君個人に対する興味を持っている」
「え、俺…？」
「君は、ブレスを設計した技術者…ブルーネル夫妻の息子だそうだね？」
「は、はい。でも、父さんと母さんはもう…」
「うん、既に亡くなっている。六年前にね」
「はい…」
両親の死を知らされた時のことを思い出し、シスカは俯いた。
「辛いことを思い出させて悪かった。しかし、君とスフォルツァンドが共鳴したことに何かしらの可能性を感じているんだ。これは、君とブルーネル夫妻を繋ぐ形見に等しいものなんじゃないかい？」
「だけど、それとこれとは別で…！」
「…こういう言い方は、あまりしたくないんだが」

眉間に指を添えて、ジェントは溜息を吐いた。
「正直、君に拒否権はないんだよ」
「え…？」
シスカは顔を上げた。
拒否権が無い？
どういうことだろうか。
「君が元々この艦に来たのは何の為だ？」
「そ、それは配達に…。…あっ」
シスカは、艦に来たいきさつを思い出す。
政府極秘の配達物を開封してしまった上に成り行きとはいえ、それを持ち続けてしまった。
立派な犯罪で、捕まっても何ひとつ文句は言えない。
捕まるどころかこんな大きな犯罪を犯したら最悪、死刑になる可能性もある。
「分かってくれたみたいだね。明日にでも本部に来て欲しいんだが…身体は大丈夫かな？」
「は、はい…。大丈夫…です」
何も言い返せず、俯いて布団を爪が食い込むほど握り締めるシスカを見兼ねたように謎の生き物がシスカの頬を舐める。
「おー、随分懐かれてるね。俺の時は全然懐かなかったのに」
「あ、あの…これは一体…」
「ああ、そっか。何も聞いてないから知らないんだ？」
「へっ？」
目をパチクリとさせるシスカに小さく笑ってジェントは続けた。
「そいつはエオリアキーから生まれた生態系なんだ。普通は孵化するのにもっと時間かかる筈なのにな」
「…はい？」
「ブレスに乗り続けることでそいつは成長し、そいつとの信頼でブレスは強くなる。ブレス乗りとしては貴重な存在なのさ」
「…ということは…エオリアキーの分身って考えていいんですか…

？」
「物分りがいいな」
「いえ…そんなこと…」
言いかけた時、シスカの瞳が戦慄いた。
「ルカ！　ルカはっ？」
自分と同じようにこの艦に来たルカが何の処罰を受けない筈が無い。
自分が目を覚まさなかった七日間、ルカがどうなったのか。
シスカの中で嫌な予感がして声を荒げた。
「心配しなくていい。彼は今個室に監禁してる。食事も与えてるし大丈夫だ。ただ、退屈のせいか暴れてはいるがね」
「よ、良かったぁ…」
ほっと一息つくシスカにジェントは笑った。
「彼も君のことを心配してたよ。シスカに何かしたらこの俺がぶっ飛ばしてやる！　てね」
「…何やってんだよ。自分の立場考えろよ、少しは…」
小さく溜息を吐いて頭を押さえるシスカに再びジェントは小さく笑う。
「じゃあ、明日迎えに来るよ。それまでゆっくりと身体を休めるといい」
そう言ってシスカの返事を待たず、部屋を後にした。
「…でも。俺にはやっぱり…騎士隊なんか、無理だよ…っ」
声を搾り出すように震えてシスカは呟いた。
「きゅー？」
心配そうに謎の生き物は、シスカを見遣る。
それに見向きもせず、シスカは布団に潜り縮こまり、ただ震えていた。
＊＊＊

呆然とシスカは、その建物を見ていた。
今まで見たことの無いくらい巨大な建物。
この建物を見てしまえば、ブレスなんて小さな人間に見えてしまい、自分達はそれ以上にちっぽけな者だと思い知らされる。
これが、世界で一番大きな建物…。
政府直属の騎士隊を取り纏めるソルフェージュ。
ごくりとシスカは息を飲む。
今から自分がその組織の関係者になると思うと、緊張で震える。
そんなシスカの背中をジェントが優しく叩く。
「行こうか？」
「は…はい」
緊張したままシスカは、ジェントの後ろへついていった。

＊＊＊

中に入ると、錬機動を使った機械が数多に作動していた。
どれも興味の引くもので、アシスタントロボットや建物全体を把握するためのモニターや関係者のみ使用が許される指紋認識することで開くことの出来る扉。
「…凄い。まだ汎用的に使われてないシンフォニエッタまで登用されてる…」
自然とその言葉が出て、シスカは目を輝かせる。
機械好きで自然に錬機術の知識を蓄積し続けたシスカにとって、此処の最新技術は宝の山だった。
「ほう。随分と博識な少年だな」
背の高い中肉中背の軍服を着た男が歩いてきた。
どうやら、迎えらしい。
錬機術に夢中になってたシスカは、現実に引き戻され言葉を捜していた。
「す、すみません。えと…あ、その…」

「何を謝ってるんだ？　シロフォン＝サスティンだ。役職は大尉にあたる。…錬機術にお熱なのは良いが、先に用事を済ませようか。シスカ＝ブルーネル君」

「は、はい…！」

やってしまったとばかりに、シスカは肩を落とした。

どうしてもこういった技術を見ると興奮してしまう。

ずっと、昔からそうだった。

錬機術が、唯一の物質と残る家族との絆で自分にはこれしかないから。

だから、その興味だけは何があっても薄れることはない。

自然にそう出来ている。

それでも、この場所に来た意味を考えると気を落とさずにはいられなかった。

＊＊＊

シロフォンにとある一室に案内される。

「失礼いたします」

そうシロフォンが声をかけると、扉が自動でスライドされる。

部屋の主の操作によるものだ。

入っても良いという証拠だ。

どんな人物が待ち構えてるのかと思うと緊張で胸の高鳴りが止まらなかった。

部屋に入ると妙な匂いがした。

これは、煙草の臭いだ。

顔を上げると、アシスタントロボットに灰皿を持たせ気だるそうに椅子に座り堂々と煙草を吸っている女性がいた。

眼鏡をかけたスタイルの良い女性だ。

格好だけ見れば、キャリアウーマンに見えるがそのワイシャツの着崩し具合で胸の谷間が覗く。

灰皿には山のような吸殻。
「おー、やっと来た？　待っていたよ」
ニヤリと笑い、その女性は吸殻を揉み消し立ち上がった。
まさかと思うが…もしかして、彼女が…。
「初めまして、カペラ＝ノクターン。一応、どうでもいいけど…階級は大佐。ま、よろしく」
あまりにも軽い言葉だった。
「は、はい。シスカ＝ブルーネルです。あの…」
しどろもどろのシスカに、カペラはチッと舌打ちをする。
「あァ？　何だよ、ルーディメンツを瞬殺したっていうのに思いっきり草食系のガキじゃねぇか。シロフォン、マジでこいつがあのブルーネル？」
「はい、間違いありません。先日、資料をお渡ししましたが…」
「んなもん見るかボケ。あたし見る資料は戦績とサインするものだけって知ってんだろうが。ま、いいや…話には聞いてるし、あの映像で力は分かったしな」
そう言って、カペラはシスカに顔を近付けて睨む。
まるで性質の悪いチンピラだ。
「成る程…。面立ちは似てんな」
「え…？」
「ん、いや別に。まぁ、取り敢えず…今日からお前はあたしの部下…つまり騎士だ。よろしくっつーか、ご愁傷様」
人事のように言う。
とにかく、ルカとは違う意味で怖い人間だ。
しかし、スラム育ちのシスカはチンピラなど怖くないがこれが騎士隊のトップとなると話は別だ。
カペラに対する不信よりも、シスカは彼女の言葉が胸に刺さった。
騎士になる…。
その言葉が重い。
「ま、でもジェントがこの状態だ。人を動かすほど余裕はねぇし、

適応者もいない。…悪いけど、当分一人で戦ってくれ」
「そ、そんな！　無理…俺には、無理です！」
「こないだの戦い方なら問題ないだろ。命令だ。やれ」
「だって…あんなの、俺だってわけわかんなくて…次、同じようにいくか分からないし…それに…」
「あー、うぜぇ。逃げ道作るように言い訳すんじゃねぇよ。もう一回言うぞ。命令だ、やれ」
にっこりとカペラは笑う。
「…ッ」
苦しそうにシスカは俯いて拳を握った。
「おい、シロフォン」
「はっ」
「あとよろしくー。煙草切れた」
そう言って、カペラは部屋を後にする。
その背中をシロフォンとジェントは見送った。
「相変わらず適当な人だなぁ」
「しかし、それ故の力と信頼があってこそ、この場を束ねられる。…ブルーネル。軍服とエンブレム、それと資料を用意した。今日から、身に着けるように。資料は戻ったら熟読し、現場のレント少佐に従え」
「……」
シスカは言葉を発せず、動かなかった。
シロフォンが渡した紙袋をジェントが代わりに受け取った。
「サスティン大尉。あとは俺が…」
「うむ…」
シロフォンは頷き、ジェントを全てを委ね、その場を後にした。
「さ、行こう。シスカ」
ジェントは、シスカの肩を抱き歩かせた。
現実味が沸かなくて、シスカはただ呆然とするしかなかった。
言葉でしか理解できない現実が…明白になっていく。

そんなシスカをジェントは、真面目な顔つきで見ていた。
唯ひとつ言えることは、こんな状態のシスカが戦場に出たら間違いなく勝てない。
それだけだった。

# 第5話　決意

騎士隊の艦に戻ったシスカは、部屋に閉じ篭りベッドに横になっていた。
強制的に正式入隊。
しかも、前線に出るのは自分一人。
どうしてこうなった？
誰のせいでこんなことになった？
ルカだ。
ルカが積荷を開けなければ…こんなことにならなかった。
違う…。
ルカのせいじゃない。
誰のせいでもない。
人のせいになんかしちゃいけない。
分かってる。
分かってるけど…俺は、俺じゃない原因を探したがっている。
「最低だ、俺…」
掠れた声でシスカは呟いた。

＊＊＊

「様子はどうだ？」
エレベーターでジェントと居合わせたロックは、ジェントの顔を見ずに尋ねた。
「予想通りかな。震えて部屋に閉じ篭ってる」
「ま…かなり強制的にやらせたからな。ただの民間人がいきなりブレスに乗ったり騎士隊に入隊したり…展開が早すぎて、戸惑わない

方がおかしいな」
「それに加えてあの性格…か。まぁ、それだけ人と時間が足りないんだけど。悪いね、俺がヘマしちまったせいで」
「いや、よくやってくれたな。義足の調子はどうだ？」
「あんまり慣れてないけど何とか歩けるくらいには。まぁ、でもロック隊長も人遣いが荒いってか何と言うか…」
「すまん。人手が足りないんだ」
「分かってる」
チーンと音がして、エレベーターの扉が開かれた。
「んじゃ、行って来ます」
「ああ、気をつけて行けよ」
笑いながら敬礼するジェントに苦笑を浮かべてロックは手を振った。
エレベーターの扉が閉まり、再び動き出す。
「民間人の子供に無理矢理戦いを強要する大人か。人手不足とは言え、本人としては堪らないだろうな」
深い溜息を吐いてロックは頭を掻く。
「まぁ、早いとこ立ち直ってくれることを祈るしかないか」
そうでなければ、使い物にならない。
折角の適応者に簡単に死なれたのでは、それこそ取り返しのつかないことになる。
戦う術をなくしたら、人類が絶滅してしまう。
その為に、自分達がフォローをしてやらないといけない。
万全な状態で戦えるように、環境もコンディションのケアも仕事だ。
隊長として、一体何が出来るか…ロックは頭を悩ませた。
＊＊＊
部屋を出た後、シスカの足は自然に格納庫へと向かっていた。

与えられた軍服は、まだ着ていない。
今は、袖を通す勇気がない。
シスカの肩には、エオリアキーの具現化した謎の生き物が乗っていた。
シスカは、気にも留めなかった。
ただ勝手にこの生物がついてきただけで、気にする余裕なんてなかった。
スフォルツァンドを見上げた。
大きな大きなその存在は、自分の手には余りすぎて拾いきれない。
あの時、どうやって戦ったのかよく覚えていない。
だから、次に戦うことを考えると凄く怖かった。
「……」
シスカは、ぐっと胸を抑えて俯いた。
「ちょっと、あんた」
背後から声が聞こえる。
「うわっ！」
突然声をかけられ、シスカは驚いて声を上げる。
「そこに立たれると邪魔なんだけど」
「ご、ごめん。えっと…」
「ユリア＝アナリーゼ。メカニックよ。これでいい？　さっさとどいて」
「あ…うん」
ユリアの気難しい顔に怖気付いて下がると、シスカはその場を去ろうと踵を返した。
「ちょっと、あんた」
「え…？」
ユリアに声をかけられ、振り向く。
「あのバイクって、あんたの？」
格納庫に置かれたシスカのバイクを指差す。
「うん、そうだけど…」

「整備とかもあんたが？」
「え、うん。…何で？」
「何でって、錬機動エンジンとか部品とか普通の民間人が改造するには難しい部品ばっか使ってるから。何？　整備の仕事でもやってんの？」
「え、いや…。俺は、ただの配達のアルバイトだけど」
「…錬機術の知識があるってジェント副隊長から聞いたけど、知識どころの話じゃないわよ」
「え…？」
溜息をついてユリアは、少し考えた後にシスカの腕を引いた。
「うわっ」
「ちょっと来て」
ユリアに腕を引かれたまま、シスカはついて行く。
一体何事だろうか。
自分が何かしでかしたのではないかと不安になる。
連れて行かれたのは、奥にある機関室だった。
「一箇所が作動しないのよ。この艦が今、飛行出来ないのはこれが原因」
「そうなんだ…」
ぼうっと機関室を見渡し簡略的な感想を述べるシスカに、ユリアは訝しげな表情を浮かべる。
「…手伝って」
「え？」
「あたし、そこまで錬機動エンジンに詳しくないのよ。業者もあちこち忙しくてこっちまで回らないし…。飛行機関が無いと不便なのよ、色々とね」
「でも…俺、手伝えるかな」
自信なさそうにシスカが言うと、ユリアは少し離れた場所からいくつかの機械を持ってくる。
そしてそのうちのひとつをシスカに向けた。

「これは？」
「え？　錬機モーターのアゴーギグだよね」
即答。
ユリアは次の機械を取り出す。
「これは？」
「浮遊ＣＰＵ。タブ」
そして更に次を取り出す。
「これは？」
「錬機チップ。チター」
全て即答だった。
どれも一般的に使用用途がない部品ばかりだ。
ユリアは悔しそうに拳を握った。
「…く、悔しい」
「え…？」
「あんたがマニアックすぎて悔しいって言ってんのよ！」
ぺしっとユリアはシスカの額を叩く。
「いてっ」
「あー、もう！　チンタラしてんな。早く来なさい！　そんだけ詳しければ、業者なんかいらないわよ！」
「え、ちょ…ちょっと！」
無理矢理、ユリアはシスカの腕を引っ張り、制御室へと連れて行った。
少しだけ忘れられた。
沢山の命を抱えるプレッシャーから、少しだけ逃げる時間が出来たと、シスカはそう思った。

＊＊＊

機関室ではユリアがモニターでの操縦、シスカが飛行機関の内部での調整を行っていた。

「ユリア、タブ二番六番上げて」
「わかった」
シスカの指示に従い、ユリアはモニターを操作する。
機械の一部が上に上がると、シスカは更にそこに潜り込む。
その顔は普段の頼りない表情と違い、活き活きとした職人の顔をしていた。
オイルまみれで器用に部品を丁寧に取り付けていく。
それは、まるで機械に息を吹き込んでいくようだった。
そんな姿にユリアは、拳を強く握った。
悔しいが、メカニック技術では歯が立たない。
それを見せつけられた気がして悔しかった。
この艦では誰よりもメカニックでは一番の筈の自分が完敗だと思うと悔しい。
「次、七番と十一番お願い」
そんなシスカの次の指示。
だが、ユリアは拳を握って歯を食い縛ったままだった。
「…ユリア？」
反応がないユリアに何かあったかとシスカが顔を上げてゴーグルを外す。
俯いていたユリアに駆け寄る。
「…大丈夫？　どっか、具合でも…」
「触らないで！」
シスカが手を伸ばそうとした瞬間、ユリアはその手を叩いて振り払った。
「ご、ごめん。汚れちゃうよね。えっと、その…大丈夫？　結構時間経ってるし…疲れた？」
「…違うわよ。何でもないから。次、何処？」
「え…タブ七番と十一番。多分、これで故障部分は終わると思う。…まだ飛べないけど、準備くらいなら…。多分、飛行まで一気に手を回すと、早くても寝ずに三日くらいかかっちゃうから」

「そんなにかかるもんなの？」
「う、うん。プログラムで設置しても…シュミレーションテストと欠陥調整、浮遊速度と高さの計算、耐熱衝撃テストとか…」
何で初めて触ったのにそんなことまで分かるのか、本当に整備士じゃないのかと疑ってしまう。
ただの知識だけだったら、此処まで実際に手を付けられるわけがない。
少し、意地悪をしたかっただけだ。
民間人が簡単に戦場で戦って騎士隊に無条件で入れたシスカが妬ましい。
ずっと勉強して何回も試験に落ちて、漸く入れた自分と全く違う。
努力もしないで…此処にいる。
そんな気持ちがあって、嫉妬していただけだ。
自分が如何に幼稚か分かる。
「やっぱ、あんた…メカニック業やってたでしょ？」
「や、やってないよ」
「…絶対、暴いてやるわよ！　あんたの秘密！　早く行くわよ、七番と十一番よねっ？」
「う、うん」
一体何事かと流れについていけないシスカだったが、早いとこ終わらせてしまおうと再び飛行機関に潜り込んだ。

そして暫く経つと、漸く故障された部分が修復された。
「悔しいけど、本物だわ。あんたくらいのメカニックがいればいいのに…」
「……」
再び現実に戻されて、シスカの表情が暗くなる。
「でも、あんたの仕事は別よね。ま、頑張りなさいよ」
「頑張るって…何を頑張るんだよ」
語気を荒くして、シスカは呟く。

「一人であんなのと戦えなんて、俺に死ねって言うのかよ！　死なないように頑張れってことか？　それとも死んでもいいから敵を倒せってことかよ！　無理だ、そんなの…俺は…俺なんか…――――」

捲くし立てるシスカの言葉の途中でユリアの平手打ちが、シスカの言葉を遮った。

シスカは、腫れたその右頬を抑えた。

「甘ったれてんじゃないわよ」

「だって…俺なんか、勝てるわけないよ。こないだのなんてまぐれだし…次、同じことが出来るかなんて…」

「何言い訳して、自分正当化させようとしてんのよ！　じゃあ、何であんたは此処にいるの！　何ですぐ逃げようとするのよ！」

ユリアは、強くシスカの胸倉を掴んだ。

「無理だって決め付けて、自分を卑下してそれで何？　そんなに抱え込む必要なんかある？　自分が周りに認められてるなら、自分の出来ることやりたいことを貫きなさいよ！　何でスフォルツァンドに乗ったのよ！　あんたのそういうとこが嫌いなのよ、あたしは！」

「俺は…怖くて…でも、俺がやらないと皆死んじゃうって…皆を守らなきゃって…でも、怖い…怖いんだ！　何が悪いんだよ！」

「だから何よ！　いいじゃん、そんなの怖くたって！　あたし達だって戦ってんのよっ」

ユリアのその言葉に、シスカは止まった。

「え…？」

言っている意味が分からない。

戦っているのは自分だけじゃない？

「パイロットとブレスを万全な状態にして、常にサポートする。それがあたし達の仕事。パイロットが命をかけて戦ってるなら、あたし達は命がけで最良の環境を作る！　パイロットの命を預かるのがあたし達の仕事なの！　一人で戦えるわけなんてないんだから、思いっきりあたし達を頼りなさいよ！」

真摯に向けるユリアの表情にシスカは、この目を逸らしてはいけ

ないと思った。
怖くてもいい、怖かったら頼ればいい。
その言葉が、安心を与えてくれる。
「きゅー」
地面にいた謎の生物がシスカの身体をのぼり、肩に伝わると頬を舐めた。
「…一緒に戦ってくれるのか？」
「きゅきゅきゅっきゅー」
任せろとばかりに、それは頷いた。
分かっていた。
逃げたかっただけだ。
誰かが助けてくれるのを待っていた。
でも、毎回誰かが助けてくれるなんて甘い世の中じゃない。
だったら、俺が…俺が、手を伸ばす側に入りたい。
だから…！
「…ありがとう。ユリア」
シスカは、ユリアの手を解いた。
まだ、恐怖は残っているが、決意を固めた瞳だった。
「俺、頑張ってみる。何処までできるか分からないけど…多分、その…出来る事は少ないと思う。でも、皆が支えてくれるなら…きっと、怖くても大丈夫な気がするんだ」
「…シスカ」
先程の臆病風に吹かれたシスカではなく、まだ頼りないけどそれでも充分だった。
そして、シスカは柔らかい笑みを浮かべる。
緊張して泣きそうで張り詰めていた顔ではない。
「よしっ」
自分の両頬を叩いて、気合を入れたシスカは謎の生物に笑顔を向けた。
「一緒に頑張ろうな、スフォル」

「きゅっ」
その言葉にユリアは首を傾げた。
「スフォル？」
「あ、うん。エオリアキーの具現化された生き物だし…こいつの場合、スフォルツァンドだし。長いから、スフォルで」
その言葉に、ユリアは噴き出して笑った。
「何それ。単純すぎ」
くくっとユリアは、笑いを堪えた。
「な、なんだよ。いいじゃないか…こいつだって気に入ってるんだし」
「ま、何だっていいけどね。…それより、あんた」
「え…？」
「シャワー浴びたら？　オイル臭いし。悪いけど、そのままでコックピットに入らないでよね。後処理大変だから」
「あ…う、うん」
思えば、自分はオイルだらけで汚れてることに気付いた。
服も顔も汚れていて、流石にこのままでいたら、スフォルツァンドが可哀相だと思うのは否定できない。
それに、覚悟も出来た。
戦う恐怖はまだあって、考えるだけで震えそうになる。
それでも、みんなも戦ってくれている。
その人達の助けになりたい。
そう思うと、少しだけ勇気が湧いて来る。
一人じゃない。
ただの捨て駒なんかじゃないと、そう思えた。

＊＊＊

ソルフェージュ本部。
ジェントは、再びカペラに会いに行った。

傍らにはシロフォンもいる。
「じゃあ、頼むよ。お前も今日からあたしの部下だ」
煙草を吹かして、カペラは笑った。
その人物も同じように不敵に笑う。
「おうよ、任せておきな！　このルスティカ＝ピッツィカードのでっけぇ花火見て驚きやがれ！」
そう言って、エンブレムと軍服を手に取ったのは、ルカだった。
「あ、でもまだ戦闘は出られないよ。ジェントの代わりなんだし、ルバートも今修理中。ま、周りに迷惑かけない程度に大人しくしてな」
「んだとォ？　じゃ、あれか！　俺の派手なステージは？　ルーディメンツの打ち上げ花火はっ？」
「暫く後だね」
「くっそぉぉぉぉぉ！」
ルカの悲鳴がソルフェージュ内に響いた。
その後、うるさいとカペラに蹴られシロフォンに叩かれジェントの毒舌を喰らったルカは肩を落とした。
こうして、彼も騎士隊に入隊することになった。それもジェントの後継として。
その事実をシスカは、今は知る由もなかった。

# 第6話　蜘蛛の脅威

「んで、話って何だ？」
ロイドの店に戻ったシスカは、今までのあらましを話した。
そして、今後の自分のことを説明した。
積荷を勝手に開けたことの謝罪。
騎士隊に入隊して、ブレスパイロットになること。
そして、この店を辞めること。
「なるほどな。まぁ、騎士隊と二足の草鞋は無理だしな」
「勝手ですみません。でも、俺…」
「何言ってやがる。おめぇが決めたことだ。やるからには、しっかりやれ。――…と、その前に」
ロイドは、拳をコキッと鳴らし、シスカの頭に拳骨をした。
「いって！」
ゴツい拳の第二関節が思いっきり当たって痛い。
半分涙目になり、シスカは頭を抑えた。
「積荷勝手に開けやがって。馬鹿か、お前ら！　つーか、ルカも一緒だったんだろ？　あいつはどうした」
「それが…ちょっと、わかんなくて」
「あ？　どういうことだ」
「なんか、捕まってるらしいんだけど…会うのも駄目だって」
「ま、あの野獣は何するかわかんねぇからな」
「や、野獣って…」
はは、と苦笑するシスカの頭の上にロイドの大きな手が乗る。
優しい撫で方だ。
「ま、あんま気ィ張るなや。おめぇの部屋はそのままにしとくからよ」
「はは、うん。ありがとう。でも…」
頬を掻いて笑うシスカは、何かを決意したようなそんな笑みを浮

かべた。
「逃げ道は、自分で作らないって決めたから」
その笑みに、ロイドは喉元で笑った。
弱虫シスカなんかじゃない。
まだ頼りないが、強い意志を込めたその表情に成長したのだと嬉しくなった。
しかし、何処か無理してその意思を固めたようにも見える。
「ま、人間やろうとしてすぐに出来るものとそうじゃないものがある。ゆっくりやんな」
「…今まで、お世話になりました」
最後の教えを感謝すると同時に、今までの礼を含めシスカは頭を下げた。
こんなに自分のことを考えてくれている恩人の為にも自分は、”守られる側”ではなく”守る側”にいたい。
その為に、戦う。
怖くても、少しずつ…出来ることを。

＊＊＊

騎士隊に戻るとシスカは、軍服に袖を通し左肩にエンブレムを付けた。
きっちりとした着方はどうも堅苦しくて苦手だった。
胸元のボタンを二つ程外し、袖は七分に捲くった。
軍服をいかに動きやすく着こなす為の措置だった。
格納庫でスフォルツァンドを見上げる。
「おー、似合うじゃねぇか」
「ロック隊長…」
背後から聞こえたロックに振り向き、シスカは顔を強張らせ、敬礼をした。
「本日付より、騎士隊ブレスパイロットとして尽力させていただき

ます。シスカ＝ブルーネルでっ…」
　折角の堅苦しい言葉が最後まで言えなかったのは、言葉を噛んでしまったからだ。
「あ、そ…その…。あぅ…」
　顔を赤くして恥ずかしそうに慌てるシスカにロックは笑った。
「え、な…わ、笑わないで下さい！　俺だって慣れない言葉使って…えと…」
「いや、悪い悪い。ホント、そういうとこゼウスさんに似てるな。顔はジェシカさん似なのに」
「え…」
　ロックの言葉から両親の名前を出されてシスカの表情が固まった。
「ああ、アレだ。ブレスの設計チームがあの人達がいた研究所だからな。俺も昔、世話になったんだよ」
　ロックは、シスカの背中を軽く叩いた。
「ま、あんま気張るなよ。俺達もいるんだからな」
「あ…はい」
　ぼうっとシスカは、ロックを見た。
　この人が騎士隊の司令だなんて思えなかった。
　確かに戦闘での指示は、それっぽいが目の前の人物は妙にフランクで…。
「どうした？」
「あ！　い、いえ…！何でもないです」
「お前なぁ…」
　ロックは、呆れたように溜息を吐いた。
「言葉飲み込むのやめろよ。ストレス溜まるし、周りにも良い影響与えないぞ」
「…でも」
「でもじゃねぇ！　気合を入れろシスカァァー！」
　ロックから目を逸らしたシスカの背中にぶつけるように大きい声が響いた。

ハッと振り向くとそこには仁王立ちのルカがいた。
軍服のボタンを全部外して、胸元が全開になっている。
シスカが驚いた顔で瞳を戦慄かせると、ルカはニヤリと笑った。
「何、豆が鳩鉄砲喰らった顔してんだよ」
「それ、逆だから」
鳩が豆鉄砲喰らうだろと内心冷静に思いながらも、ルカが軍服を着ている事実にシスカは驚きを隠せなかった。
「何でルカが軍服着てんのっ？　…誰かの身包み剥がして着たの？」
「お前、俺を何だと思ってんだ？　あァ？」
「いや、だって…信じたくないんだけど…まさか。いや、冗談だろ？」
「冗談なわけあるかよ！」
ビシッとルカは、天井を指差した。
「このルスティカ＝ピッツィカード！　騎士隊ブレスパイロットとして就任！　でっけぇ花火上げてやっから、覚悟しやがれィ！」
「……」
シスカは、手元にあったレンチをルカに投げ、それはルカの頭に直撃した。
「いってえええぇぇぇ！　てめぇ、何しやがる！」
「寝言は寝てから言えよ！　現実に持ってくんな！」
「寝言じゃねぇ上に、信じらんねぇからってこんなもん投げんじゃねぇ！　下手したら死ぬぞ！」
「だって、何でルカが…！　これ以上ブレスないだろ、此処に！」
「あ、それ俺の後継」
シスカとルカが取っ組み合いをしている所にジェントが現れた。
「よう、お勤めご苦労さん」
「一応、俺…安静にしないといけないんだけどね」
ロックが手を振ると、ジェントは苦笑する。
そして、再びシスカとルカに目を見遣る。
「俺の乗ってたルバートとの相性ばっちり。下手したら俺よりもね。

現に俺って右足と左目潰れちゃったから戦えないし。だから、ルカの言うことは本当だよ」
「まぁ、まだ修理中だし出撃は出来ないけどな」
「そ、そんな…」
シスカは膝を落とし、頭を抱えた。
心強い味方ではある。
しかし、それ以上に…。
シスカは、ルカを睨む。
「んだよ、やんのか？」
「…馬鹿ルカ」
シスカはぼそりと呟き、走っていく。
「あ、テメ…！　待てコラァ！　やんのか？　おい、やんのか！」
ルカがシスカを追いかける。
その慌しい姿にロックは、深い溜息を吐く。
「やれやれ…元気があるんだか無いんだか」
「彼、あんな表情もするんだね。これは、ルカを配置して正解かな？」
「どうだろうな」
「え…？」
安心するジェントだったが、ロックは二人が去った入り口を見た。
「あいつの性格だ。友達を危険な目に遭わせたくない。…大方、そんな所だろ」
「だからこそのバイオレンス？　成る程。でも、あいつらだったら上手くやっていけそうな気がするよ」
「珍しいな。お前がそこまで目を置くなんて」
「んー…というか、面白いタイプの二人だからかな。期待はしていないけど、楽しみだよ」
「期待してねぇのかよ。やっぱ、お前らしい」
ロックとジェントは笑った。
今後、どんなアクションを若い二人が起こすのか楽しみと言う意

味では共感出来た。
そんな中、艦内に警報が響いた。
シスカが初めて戦闘に出た以来の警報だ。
ロックとジェントは、ブリッジへ。
ルカと戯れていたシスカは、格納庫へと走った。

＊＊＊

スフォルツァンドの中で、シスカは目を伏せ小さく深呼吸をした。
精神のを集中させ、操縦桿を握る。
「スフォルツァンドとの同調が…。これ、どこまで上がるんだ」
ジェントがシステムモニターを見ると、シスカとスフォルツァンドのシンクロ率を表すメーターが上がっている。
最初に乗った時とは比べ物にならないくらいの安定したシンクロ率。
「まだ、テストもしていないのに…。相性が良いと言うよりも、これじゃあまるで…」
その後の言葉をジェントは、飲み込んだ。

＊＊＊

スフォルがシスカの肩を降りてエオリアキーに変化し鍵穴に入り込むと、シスカはゆっくりと目を開きエオリアキーを捻った。
スフォルツァンドの目がカッと開き、動き出す。
シスカの手は小さく震えていた。
いくら、前向きに考えても怖いものは怖い。
周りもサポートしてくれるのは、分かってるけど…それでも理屈とは違う。
「…ッ、落ち着け。落ち着けば…きっと…」
そう自分に言い聞かせるが、手の震えは止まらない。

『シスカ！』
通信でルカの声が聞こえた。
また勝手に通信に割り込んできたのは、安易に想像出来る。
『此処でお前を縛るもんなんて何もねぇ！　いいか、お前はお前の思うように進め』
「ルカ…」
『お前はもう弱虫でも何でもねぇ。お前の傍には俺達がいる！　だから思いっきり暴れて来い』
いつもの無茶無謀とは違う頼もしく心に勇気を与えてくれる言葉だった。
その言葉に、不安な表情から勇ましい表情になり頷いた。
「スフォルツァンド、シスカ＝ブルーネル。出撃します！」
そう言って、スフォルツァンドは艦を飛び出した。

＊＊＊

着地すると、そこに見えたのは巨大で足が沢山生えた蜘蛛のようなルーディメンツだった。
「こないだと形が違う…」
『ルーディメンツには、色んな種類がいる。そいつに捕まると厄介だ。遠距離からの攻撃をメインにしていけ』
「は、はい！」
ロックの言葉にシスカは頷いて、スフォルツァンドがビームライフルを構えて敵に向かって撃つ。
ビーム状の粒子が敵を貫いて、轟音が響いた。
「や、やった！」
一発で倒せた。
自分でも出来るんだと、シスカの中に僅かだけ自信が沸いたその時だった。
『シスカ、逃げろ！』

「え…？」

気付くのが遅かったか、背後にいたルーディメンツが糸を吐いてスフォルツァンドを拘束した。

「うわっ…！　こ、こんなものっ」

ビームサーベルで糸を切ろうと操縦桿を動かした。

糸に絡まれて身動きが取れなかった。

「な、何で…？」

それどころか、凄まじい速さでエネルギーが消費していく。

「な、何なんだよこれ！　エネルギーが…！　お、俺…どうしたら…」

無闇やたらに操縦桿を動かすが、びくともしない。

そういえば、先ほどから通信の声が聞こえない。

完璧に遮断されている。

影が落ちる気配を感じて、ハッとシスカは顔を上げた。

ルーディメンツが大きな口を開けていて、そこからは禍々しい霧が吐き出された。

「う、う…うわあああああぁっ！」

恐怖でシスカは叫んだ。

機体が軋む。吐き気がするほどの気持ち悪さにシスカは涙目になる。

「な、んだ…これ…。身体の中に…変なの、が…！　うぁ…ぁ…」

息が苦しくなる。

口や耳だけじゃない身体の穴という穴に黒い霧が入り込み、コックピット内のシスカは身体ごと捕らえられた。

吐き出すことも出来なくて、窒息しそうになる苦しみに意識が薄れていった。

＊＊＊

一方、ブリッジは混乱していた。

通信が遮断され、モニターには糸に絡まれて黒い霧に覆われたスフォルツァンドがビクとも動かない。
「パイロットの様子も見れないのか！　コックピットの生体反応はっ？」
「ただいま、リンクしています。…照合！　…あっ…」
アニーミが言葉を詰まらせ、顔を青褪めた。
「パイロットの生体反応、レッドから沈黙…しています」
「何だとっ？」
その言葉にロックが瞳を戦慄かせる。
アニーミは涙を浮かべていた。
「おい、ど…どういうことだよ。分かるように言えよ！」
ルカが、ロックの肩を掴んだ。
それを振り払い、ロックは悔しそうな表情で口を開いた。
「死んでるってことだよ」

# 第7話　おかえり

黒い霧に包まれたシスカの意識は、淀んだ海に浮いていた。
周囲一面、禍々しい濃厚な紫と黒が支配する。
一体、何が起きたのか。
まるで、此処は地獄のようなイメージを持つ。
（死んだ…のか？　身体の感覚が全然ない）
自分の筈が、感じる感覚は何もない。
身体の温かさも感覚も、そして…感情も。
「……」
きっと、このままこの混沌の海を彷徨うのだろう。
終わった。
全て、終わった。
結局、自分は何の役にも立てずに無駄死にだったのだと、そう思っても何も生まれてこない。
その目には光が無く、虚ろに濁っていた。
ルーディメンツに飲み込まれ、全て支配されてしまった。

混沌の海の中で彷徨っていると、僅かに光るものを見つけた。
それを感情のない瞳で見ていると、何かが映し出された。
男性と女性…それと、小さな子供。
シスカの両親と、彼らが生きていた頃の幼いシスカだった。
みんな、笑いあって楽しそうにしている。
温かい家族。
仕事の忙しい両親は家をあけることが多かった。
しかし、家の中に一人でいても父親が書いてくれた簡単な設計図で玩具を作っている楽しそうな自分。

二人が帰ったら、見せてやるんだ。
そうはしゃぐ幼いシスカは、成長した自分とは切り離された別人のように感じた。
『おお、凄いな。素質あるぞ、シスカ。将来の夢はメカニックか？』
『ううん、父さんや母さんより凄い優秀な技術者になる！』
『大きく出たわねー。楽しみじゃない？』
『流石は俺達の息子だなー』
そうやって、両親は頭を撫でてくれる。
作った玩具は、友達にも人気があったし、作る楽しみもあった。
そして何より、両親が褒めてくれる。笑ってくれる。
認めてくれる。
これしか能のない自分を…周りは認めてくれる。

二人が死ぬまでは。

二人が死んで、身寄りがなくなった自分を認めてくれる人なんていない。
優しい近所の人も友達も、二人が優秀だから、その子供の俺に媚を売っていただけだ。
可哀相で哀れな子。身寄りも無く、引き取ってくれる人なんかいない。
ただ、同情されて見て見ぬ振りをされた。
自分には何も出来なかった。
同じじゃないか。
二人が死んで、スラムに逃げていた頃と全く同じ。
心なんてない。それでも身体に僅かでも栄養を入れれば生きてこれた。
でも、今は…奴らの栄養となってるのが、自分なんだ。
（もう…駄目だ。早く…楽になりたい。こんなのは、嫌だ）
黒い霧が纏わりついて、シスカの体を蝕む。

どこまでも深くなる混沌の海に沈んでいくシスカに、先程までの光が遠ざかっていく。
（いっそ…殺して。死んで楽になりたい…）
恐怖も何も無い。
呼吸が出来ない。
それなのに感覚は何も無い。
早く楽になりたい。
『シスカ、駄目よ』
声が聞こえた。
（母…さん？）
間違いなくその声は、シスカの母であるジェシカの声だった。
『駄目。そっち側に行っちゃ駄目よ』
『戻るんだ、シスカ。負の心が奴らの餌となる。お前は、餌じゃない。何も出来ない奴じゃない。奴らに身を委ねちゃ駄目だ』
今度は、父親のゼウスの声まで聞こえた。
いや、俺は何も出来ない。
誰かの為に何かをするなんて…出来ない。
『シスカ、あなたを待っている人たちがいる。あなたを必要としてくれているわ。諦めては駄目よ』
『手を伸ばすんだ。そして、掴み取れ。大丈夫だ、俺達もずっと傍にいる。見えなくても、お前の近くにいるから』
二人の懸命な言葉に、シスカは漸く本来の思考を巡らせることが出来た。
（待っている…人。そうだ、戻らなきゃ。諦めたら…諦めたら、終わり…。終わって…しまう）
シスカの指先がピクリと動く。
『シスカ』
『シスカ、行こう』
二人が、シスカの名を呼ぶ。
（俺は…違うって…あの頃とは違うって、そう自分に言い聞かせて

いたのに）

シスカの目から一筋の涙が零れ、全ての感覚が戻ってきた。

「ぁっ、ごふっ！」

急に息苦しさが戻ってきて、水の圧迫感に苦悶の表情を浮かべる。

「…ッ、かっ…！」

禍々しい黒い霧が体を蝕み続ける。

苦しくて、痛くて…でも、その痛みに生きているということを実感させてくれる。

また精神が蝕まれかけている。これに身を委ねてしまったら、二度と戻れない。

（行かなきゃ…。戻らなきゃ…。待ってる。皆が…俺を待ってる。待ってるんだ）

シスカは、苦しさと痛みを堪えて、硬直した手を無理矢理伸ばした。

その目には、光が戻っていた。

禍々しいそれは急速に絡み続けるが、それを抗った。

「ッ、がほっ！　ぁ…ッ！」

黒いものが喉の奥に入り、水もそれに続いて意識が飛びそうなほど苦しい。

それでも、シスカは気を強く持った。

（俺は…俺は……！）

身体が冷たい。

痛くて苦しくて、頭がおかしくなりそうだ。

だけど、そんな身体の痛みより何より…皆の所へ…帰りたい！

その意志だけでシスカは、抵抗してひたすらに手を伸ばした。

＊＊＊

ブリッジ内で、ルカは瞳を戦慄かせた。

「し、死んでるって…シスカが死んでるってどういうことだよ！

んなわけねぇ…あいつが、そんな簡単に死ぬわけがねぇ！」
「……事実だ」
ロックの言葉に、ルカはカッと顔を熱くさせる。
「ふざけんじゃねぇ！　んなもん誰が認めるか！」
ダンッ、とルカは壁を殴りつけた。
突如、モニターの色が変わり始めた。
反応が切れた生体反応が動き出し、それは徐々に赤から緑に変わっていく。
「スフォルツァンドに生体反応あり！　パイロットの安否を確認！　オールグリーン」
アニーミが、それを伝える。
「蘇生しただとっ？」
信じられないが、モニターの生体反応は裏切ることなく緑色の上限まで行った。
そして、通信がスフォルツァンドから送られた。
『隊長…』
掠れた声のシスカだった。
「シスカ！どういうことだ！？」
何故、生きている？
あんなに蝕まれていたのに…。現に今も黒い霧は健在だ。
『…ッ、かはっ…！　…俺、分かりました』
今もきっと黒いそれが、シスカの身体を蝕んでいるに違いない。
その中で意識を保って喋る。
よっぽどの強い意志と根性がないと無理だ。
『…あいつを…うぐっ…倒す方法が』
その声に驚いたが、ブリッジにいた人間の表情が徐々に柔らかくなる。
「……分かった。お前に任せる。必ず生きて帰って来い」
『…はい』
そう言って、通信は切られた。

ルカは、外のモニターから目を離さなかった。
「お前の全力出して…絶対に帰って来い。絶対だ！」
真面目な顔つきで、ルカは戦う親友にそれだけを伝えた。

＊＊＊

黒い霧に覆われながらも、スフォルツァンドは立ち上がった。
機体に絡む糸を熱源を上げて焼き尽くす。
いつの間にか、エネルギーメーターが上限まで達していた。
「――ッ、ぐ…」
黒い霧は止むことを知らず、シスカの身体の中に入る。
痛みと苦しみを振り払い、シスカは顔を上げて操縦桿を握り締めた。
身体には大量の汗が流れていたが、シスカは目の前の敵しか見えていない。
ビームナイフを取り出し、敵へと突進する。

＊＊＊

その様子にブリッジにいる誰もが、驚愕の表情を浮かべた。
「一体何をする気だ？　近づいたら益々餌食になるだけだぞ！」
「大丈夫だよ」
ロックが驚愕する中で、ルカが軽く言い放つ。
「シスカは、馬鹿じゃねぇ。大丈夫だ」
その言葉は信頼している証だった。
口こそはロックに言っているものの、ルカの目はスフォルツァンドを見据えたままだった。
そんなルカの表情を見て、ジェントは小さく笑った。
根拠もなくこの圧倒的に不利な状況で自信満々に言い切るルカと、その信頼を勝ち取るシスカに興味が湧いた。

＊＊＊

外ではスフォルツァンドが蜘蛛の形をしたルーディメンツに飛び乗り、背中を何度もナイフで突き刺し、銃弾を撃ち込む。
先程のライフルで生きているということは、跡形もなく消すしかない。
苦しさで息が詰まりそうでも、シスカはルーディメンツへの攻撃は止めない。
「ぐっ、げほっ…――ッ」
吐き出したいのに吐き出せない。
だけど、此処で…気持ちで負けたら、それこそ終わりだ。
「うおおおおおおっ！」
シスカが叫ぶと、ナイフに更に大きな粒子が密集し、刃先が伸びて敵を貫く。
そして、同時に爆発が起こる。
爆風の中で立っていたのは、スフォルツァンドだった。

黒い霧は消えていた。
スフォルツァンドからも、シスカからも。
そのまま、スフォルツァンドは艦に戻り、膝をついた。
「ふっ…はぁはぁはぁ…げほげほっ、げほっ！」
一度に呼吸が戻った所為か、シスカは咽た。
「きゅー？」
鍵を抜き取ると、スフォルが心配そうにシスカを見ていた。
その様子に汗だくの状態で無理して笑い、シスカはスフォルを抱きしめた。
「大丈夫、平気だよ。…ちゃんと、生きてる」
ふぅ、と息を吐いてシスカは、シートに寄りかかる。
（あの時、父さんと母さんの声が聞こえてなかったら俺は…）

今更ながらに寒気がした。
死の恐怖。
どうして死んでもいいなんて…楽になりたいって思ったのだろう。
死んでしまったら全部終わってしまうというのに。
戦闘中、殆ど息が出来なくて痛くて辛かったけど、諦めなかったから勝てた。
諦めなかったから、此処にいる。生きていられる。
そして、守れた。
自分でも、それが出来たんだという達成感があった。
ハッチが開かれ、覚束ない足取りでシスカは、コックピットを出た。
「うわっ…」
まだ頭に酸素が行っていない。
頭がくらくらして、平衡感覚がよく分からない。
それでも、この生きてる足で歩きたかった。
「シスカ」
ロックやジェント、ユリアにアニーミ達、艦のクルー、そしてルカが迎えてくれた。
「あ…えっと…うわっ」
ロックは、足が縺れて転びそうなシスカを支えて頭の上に手を置いてぐしゃぐしゃと撫でた。
「よく頑張ったな！」
笑顔だった。
誰もが笑顔をシスカに向けてくれた。
「よく生きて帰って来てくれたな」
「顔に似合わずやるじゃん、アンタ。見直したわ」
「シスカさん、無事で何よりです」
ジェント、ユリア、アニーミが優しい言葉をかけてくれた。
あの厳しい人達が、認めてくれた。
「ま、これがシスカの実力よ！　こいつを甘くみるんじゃねぇぞ！」

「うわっ！」
ルカがロックから奪うように、無理矢理シスカの肩に腕を回して引き寄せ歯を見せて笑った。
「何でアンタが偉そうなのよ！」
すかさずユリアが突っ込みを入れて周囲は、どっと沸いた。
みんな、笑っている。
その笑顔を見て、シスカは呆然と見ていた。
そして、自然と顔が綻ぶ。
見たかったのは、これだった。
この笑顔だった。
「みんな…」
シスカが笑みを浮かべる。
その言葉に全員が口を閉ざし、シスカを見た。
そしてシスカは、一呼吸を置いて続けた。

「ただいま」

その柔らかい口調と言葉に、誰もが嬉しさと喜びを露にするのだった。

# 第8話　芽生えた心

「どうだ、様子は？」
ロックがスフォルツァンドのシミュレーションテストを行っているスフォルツァンドを見ながら、ジェントに尋ねる。
「安定も安定。可もなく不可もなく。精神状態も戦闘テストも耐吸力も平均的だね」
「そっか。まぁ、安定してるなら良いが…。この間のあれは、一体何だったんだ？」
先日の戦闘…。
確かに敵に取り込まれて、シスカの心臓は止まった。
しかし、絶望的な状況で彼は立ち上がることが出来た。
根性とかの問題じゃない。
有り得ない。
しかし、それを目の前で実現した。
分からなかった。
「さぁね。火事場の馬鹿力か、才能が開花しきれてないのか…様子見かな」
「ふむ…。よし、シスカ上がっていいぞ」
ロックが通信を送ると、シスカは伏せていた目を開き脱力感に煽られたように深い溜息を吐いてシートに凭れ掛かった。
初めに比べれば、張り詰めていた緊張感や変に入る力は無くなったものの少しは緊張はする。
適度な緊張が丁度いいというのは分かっているが、どうも慣れない。

＊＊＊

スフォルツァンドから降りると、視界にルカとユリアが入った。
「だから、こし餡だっつってんだろうが！」
「アンタ馬鹿じゃないの？　粒餡に決まってんでしょ！」
何か言い合いをしている。
この二人は顔を合わせると、いつも何か言い合っている。
犬猿の仲なのか、それとも仲が良すぎるのか。
気にする必要は無い上に、絡まれる可能性があるから此処は逃げよう。
そう思っているうちに二人がシスカを見つけた。
「おうっ！　シスカ、ご苦労さん」
「テストもかなり慣れたみたいね。お疲れ」
二人の労いの言葉に、シスカは苦笑した。
「う、うん。ありがとう。じゃ、俺はこれで…」
「ちょっと待て！」
逃げようとした矢先、ルカがシスカの首根っこを引っ張った。
「ユリア、この際だ。シスカに判定貰おうじゃねぇか！」
「面白い。受けて立つわよ！」
「え…？　え、あの…」
二人で話を進行していて、シスカには何のことだか分からない。
しかし、二人の言い争いの中心に立たされてるのは確かだ。
「おい、シスカ！　餡子つったらこし餡だよなっ」
「粒餡よね？　何を分かりきったことを！」
成る程。
この二人は、餡子の好みについて喧嘩していたのか。
ちょっと馬鹿馬鹿しいけどそれが妙におかしくて、シスカもその話題に乗った。
「…ものによる、かな」
「あ？」
「何よ、はっきりしないわね」

ルカとユリアが怪訝な表情を浮かべる。
「えーと…例えばの話なんだけど、鯛焼きは基本は粒餡が主流だろ。逆にこし餡は柏餅や団子とかによく使われるし。だから、一概にどっちとは言えないよ」
「つーことは…お前」
「うん。俺、どっちも好き」
シスカの回答に、ルカもユリアも盛大な溜息を吐いた。
「お前らしいっちゃお前らしいけどよ…」
「正論すぎ…。なんか馬鹿馬鹿しくなってきちゃったわ」
興醒めしたとばかりに、ルカとユリアの熱も下がった。
「あれ、そういえばアニーミは？　なんか今日見かけなかったけど」
同じ年頃の四人は、割と一緒にいることが多い。
しかし、今日は朝からアニーミの姿が無いのだ。
「ああ、あの子はサークルで遅くなるって」
「サークル？」
シスカとルカは顔を見合わせて首を傾げた。
初めて聞いた言葉だ。
「いや、あのさ。前から疑問だったんだけど…」
眉間に指を添えて、ユリアが溜息を吐く。
「あんたら、学校は？」
ユリアの言葉から出た単語に、二人は目を逸らした。
「いや、俺…下町育ちの貧乏だから」
「俺は、なんとなく。面倒くせぇ」
シスカの困った表情とルカの当たり前のように言う口調に、ユリアは呆けた。
つまり、この二人は何の教養も無い。
シスカはバイトをしていたというのは聞いていたが、学校と二足の草鞋かと思っていた。
ルカに至っては、ただの馬鹿である。
「あー、いたいた。お前ら今いいか？」

タイミングを見計らったように、ロックが三人に声をかける。
「ロックさん」
「おー、ロックじゃねぇか。どうした？」
「コラッ！　アンタら、仮にも上司なんだから隊長って呼びなさいよ」
あまり堅苦しい事は苦手なシスカとルカは、どうもその呼び方が苦手だった。
シスカは呼ぼうと思って努力しているものの、しどろもどろになり不自然だからとロックが了承した。
ルカに至ってはこの性格。もう諦めた。
「仮にもって…俺、階級少佐なんだけど。まぁ、いいか。シスカ、ルカ。お前ら、学校行け」
ナイスタイミングな話題。
しかし、ただの雑談の中の一部と違ったロックの言葉にシスカとルカは驚愕する。
「お前ら、ガキだろ。騎士隊にいるってことは、政府関係者。それが、教養がねぇっつーのは建前的に悪いんだよ」
面倒臭そうにロックが煙草を吹かす。
「金ならこっちが出す。節度守ってある程度の成績出せば遊んでいいから、とにかく行け」
「で、でも…」
「命令」
シスカが言い逃れの言葉を捜すも、ロックのその言葉に従わざるを得なかった。
「既に準備は出来てる。部屋に制服やら必要なモンは置いてあるから、明日から行けよ」
「…はい」
「ちっ、しゃーねぇな」
あまり乗り気でない二人だったが、命令なら仕方が無い。
それに暇を持て余して艦にいるよりは、退屈しなくて済みそうだ。

「それから、シスカ」
「え？　あ、はい」
「お前の場合は、こっちのテストとかあるからサークル活動禁止な。あくまで本業はこっちだからな」
「はい、分かりました」
シスカが返事すると、ロックは満足そうに笑い踵を返してその場を去った。
「あんたもう怖くないの？　妙にあっさりしてるけど」
ユリアが、シスカに尋ねる。
「いや…うーん、別にそんなことはないけど」
「ま、良い傾向だからいっか。そういや、学校の授業に錬機術もあったっけ。あんた、好きでしょ？」
「錬機術っ？」
ユリアの言葉に、シスカは目を見開き輝かせた。
「錬機術の授業なんてあるの？　え、どういうのかな。あ、もしかして将来的に一般開発されるシンフォニエッタとか。それとも錬機動エンジンの実習かな。どんなの？　どんな授業？」
輝かせた目とやたら饒舌（じょうぜつ）に興奮するシスカを見て、ユリアの口が引き攣る。
「あんた…それ、学校でやらない方いいわよ」
「え？」
「あんたのマニアックぶりって、半端じゃないのよ。自覚しなさいよ」
「え、でも普通……――」
「あんたみたいな錬機オタクは普通って言わないの。変人もいいとこだからやめなさいよ！」
「あー、無駄だぜ」
頭をぽりぽりと掻いてルカが話に入る。
「こいつにとって身体の一部みてぇなもんだし。多分、教えてる奴より詳しいぜ」

「信じらんない…。あたし、自分でも結構マニアだと思ってたけど…シスカに比べたら全然底辺だわ。ルカ、行くわよ」
「あ？」
「一応ブレスパイロットなんだからシミュレーションテストしなさいよ。シスカが終わったんだから、次はアンタ。ルバートは修理中だからテスト専用のブレスでやるわよ」
「あ、おい！　引っ張るなって！」
ずるずると引き摺られルカは、ユリアと共にシミュレーションルームへと向かった。

ぽつんと取り残されたシスカは、特にやることも無いし部屋に戻ろうとエレベーターへ向かう。
「きゃっ」
頭上から声がした。
携帯端末を持ちながら階段を降りていたアニーミが、足を引っ掛けてしまい宙に浮いた。
その行方は空中から床へ向かっている。
「アニーミ！」
落ちたら大怪我をしてしまう。
シスカは、宙に浮いたアニーミへと走る。
アニーミが持っていた携帯端末が転がる無機質な音がした。
そして静かになった。
床に激突したのではないかとアニーミは、目を瞑っていた。
しかし、その衝撃は無い。
その代わり、温かく柔らかい感触。それは、人の温もりだった。
恐る恐る目を開くと、足が浮いていた。
浮いてはいたのだが…。
「…シスカさん？」
シスカに抱きかかえられていた。
お姫様抱っこで。

「よそ見しながら降りるの危ないと思うんだけど…。えっと…大丈夫？」

少しほっとした様子でシスカは、息を吐く。

「は、はい。ごめんなさい」

アニーミは、呆けてシスカを見た。

情けなくて戦闘以外は頼りなくて不安定な男の子。

それなのに、抱えられてる手が男性特有のもののせいか何故か今は頼りがいのある男に見えた。

アニーミの頬が若干紅潮する。

多分、抱きかかえられて恥ずかしいせいだと自分に言い聞かせる。

「あ、あの…重くないですか？」

「え？　全然。寧ろ軽いけど…。よっと」

階段を降りて、シスカはアニーミを降ろした。

ふと、落ちた携帯端末が視界に入る。

それを拾ってアニーミに渡した。

「はい」

「ありがとうございます。…あっ」

携帯端末を受け取り、アニーミはショックを隠しきれない様子でそれを見ていた。

「嘘、電源入らない…！　壊れちゃったのかなぁ」

大きな溜息を吐いて今にも泣き出しそうなアニーミを…いや、壊れてしまった携帯端末をシスカは見た。

「…ちょっと見せてもらって良い？」

「え？　あ、はい」

アニーミが携帯端末を渡すと、穴が開くほどにシスカはそれを見る。

「あのさ…その…」

「…はい？」

「悪いけど、俺の部屋まで来てもらっていい？」

「はっ？」

部屋に来て欲しい？
女を簡単に自分の縄張りに誘うような男には見えないのだが、アニーミはそう思ってしまった。
「あ、いえっ…でも」
「俺の部屋に工具があるからそこで見てみるから…って、どうしたの？」
きょとんとしてシスカはアニーミを不思議そうに見た。
慌てふためくアニーミは首を横に振った。
「あっ！　いえ、何でもないですっ」
「…？　うん、じゃあこっち」
そう言って先に進むシスカにアニーミは顔を赤くした。
（うぅ…何かドキドキする。シスカさん相手に何でこんなにドキドキするかなぁ）
アニーミは落ち着かせる為、深呼吸をした。
そして、二人はエレベーターに乗った。
しかし、エレベーターの中で会話が弾むことはなかった。
（そう言えば、シスカさんと二人でいるのってこの人が最初に倒れた時以来だっけ。…何話せばいいんだろ）
思考を巡らせるが、思いつかない。
ルカやユリアみたいにシスカは前に出て話すことはしない。
アニーミもどちらかと言えば聞き役だ。
沈黙がその場を支配する。
気にしているのは、アニーミだけだ。
「あ、そういえば…」
「は、はいっ？」
「…アニーミ？」
「あ、いえいえ。何でもないです！　続きをどうぞ」
挙動不審なアニーミに首を傾げ、シスカは続けた。
「サークルって…何？」
「え？　サークル…ですか？」

意外な質問だった。
「うん。さっきユリアに聞いたんだけど、いまいち分かんなくて。まぁ、ロックさんには入っちゃ駄目って言われたけど気になってさ…」
「あ、なるほどですね。えっと、サークルっていうのは同じ趣味を持った友達と活動することですよ。私は料理サークルに入ってるんです」
「へぇ、そうなんだ。何か楽しそうだね」
「ええ、そうですね。料理も楽しいですし、友達と一緒にやるってのが一番楽しいです。あの…シスカさんは何か趣味とかあるんですか」
アニーミが尋ねると、シスカは少しだけ無言になった。
そして口を開いた。
「…俺には、錬機術しかないから」
何でもない言葉の筈が、何処か寂しそうに感じて違和感を持つ。
エレベーターが音を立てて開く。
その後、部屋に着くまで二人は会話をしなかった。
話題を振っても良かったが、何故か空気が重い気がした。
(何か…まずいこと聞いちゃったのかな)
しょんぼりとアニーミは項垂れる。
「あ、此処だよ」
暗証番号を入力すると、扉が横にスライドした。
「お、お邪魔しま～す」
少し緊張気味にアニーミは部屋に入る。
「えーと、確か…。あ、適当に何かつまんでていいよ。お茶とかコーヒーとかもあるし」
「あ、はい」
部屋の中に入り、小さなキッチンにあるインスタントコーヒーを手に取ってお湯を沸かす。
顔を上げると、工具箱に向き合うシスカが視界に入った。

「さて、と…」
ドライバーでネジを外して部品を抜いていき、バラバラになった携帯端末がただのパーツになってしまった。
「な、何やってんですかぁ！」
「え？　…だって、バラさないと修理できないし」
「へっ？」
「この端末、衝撃にあんまり耐えられないみたいだから…故障した部分の修理ついでにパーツ交換して耐久度高くしようかなって…。あと防水にもなってないし。デザインは新しくても中は旧型。ソフトウェアやアプリとかで誤魔化してるけどね」
口数の少ないシスカが機械になると饒舌になるというのは知っていたが、活き活きとした表情が小さな子供みたいでアニーミの顔が綻んだ。
「そうなんですか？　あたし、可愛いからってつい機種変しちゃって」
「あ…か、勝手にやっちゃ駄目かな？　よ、余計なことだった…？」
「いえ、全然！　寧ろそこまで考えてくれて光栄です！」
「…良かった。俺、こういうのすぐ気になっちゃって…。割と暴走しちゃうから…迷惑かなって…」
シスカが苦笑をする。
しかし、アニーミはそこで疑問に思ったことがあった。
「あの…さっき開けなかったですよね。何で分かったんですか」
「いや、開ければ分かると思って。本当に故障してるって分かんなかったし、欠陥部分も今分かったんだ」
端末を開けて一瞬で全部理解したということだろう。
本当にこの人は、凄いメカニックなのではないかと疑ってしまう。
そしてシスカは、作業に入った。
基盤を眺めて、自分の工具箱から新しい基盤を取り出して器用に部品を接着していく。
次々と出す部品は見たことも無いものばかりだった。

器用さだけではない。
とにかく速い。
次のものへ次のものへと伸ばす手は止まることを知らない。
そんな姿にアニーミは、呆けながら彼の真剣な横顔を見ていた。
(何か…かっこいいなぁ)
シスカに釘付けのアニーミは、目が覚めた。
沸いたお湯をカップに注いでいたが、それが零れて自分の手にかかってしまう。
「あっつぅ!」
その言葉にハッとシスカは顔を上げる。
「大丈夫っ?」
「す、すみません」
「いや、とにかく水で冷まして」
そう言ってシスカは、アニーミの手をとった。
そんな場合じゃないのは分かっているものの、掴まれた手に胸が高鳴った。
火傷部分に蛇口の冷水が流れる。
「…アニーミって、こんな…ドジなの?」
「お恥ずかしながら…。オペレーター機器に慣れるのも一番遅かったし」
「ん、でもさ…余計なことかもしれないけど、気をつけた方いいよ。女の子なんだし」
「あ…ありがとうございます」
俯き加減にアニーミは、心配をかけた申し訳なさと恥ずかしさに顔を赤くした。
「あ、もう大丈夫です」
水を止めてアニーミは手を拭いた。
まだ少し腫れていてじんじんと痛むが、これ以上心配はかけたくなかった。
「…手出して」

「え…？」
きょとんと目を丸くするアニーミに構うことなく、シスカは先程アニーミが冷水で覚ましている時にあらかじめ切り目を入れていた湿布をアニーミの手の患部に貼った。
「きゃうっ」
突然の冷たさに悲鳴が出た。
その悲鳴にも構わずにシスカはアニーミの手に包帯を巻いた。
これもまた手際がいい。
「多分、すぐ引くと思うけど…もし酷かったら医務室で見てもらった方がいいと思う」
「…ありがとうございます」
「ちょっと座ってて」
「……？　はい」
言われたままに椅子に座るとキッチンに消えたシスカを見ていた。
そして深い溜息を吐いた。
（…呆れられちゃったかな。いくら何でも迷惑かけすぎ…。最悪かも）
徐々にアニーミのテンションが下がっていく。
「はい」
アニーミの目の前のテーブルに置かれたのは、アイスコーヒーとクッキーだった。
カランと氷が涼しい音を立てる。
「それでちょっと待ってて。もうすぐ終わるから」
特に怒っても呆れても無い様子でシスカは、作業に戻った。
全く気にしていないようだ。
寧ろ作業に集中したくてアニーミのドジなど気にも留めていない。
アイスコーヒーにストローを差してくれたのは、火傷した手で飲みにくいだろうというシスカの気遣いなのかもしれない。
これ以上のドジを踏まれると困るという意味もありそうだが。
（優しいなぁ…）

嬉しそうに笑いながら、シスカを見る。
蓋を閉じてドライバーで螺子を締めている。
もう終わるのだろう。
しかし、その後にシスカが出したのは裁縫道具だった。
（え、何だろう…）
裁縫道具で何か縫っているようだ。
後姿ゆえにそれが何を作っているのか見えない。
だが、それはすぐに分かった。
「はい、完成したよ」
シスカがアニーミに携帯端末と、パンダのような形を模した可愛らしく柔らかなケースを渡した。
「え、これ…」
「ほら、液晶とか本体に傷つくと嫌だろうし…。一応、液晶も交換してカバーも塗装したから。元の色が無地でラッキーだったよ…」
完璧リフォームおまけ付き。
この人は何処まで器用なのかと尊敬してしまう。
「ありがとうございます！　このケースも可愛いですっ。お店で売ってるやつみたい」
「いや、それ褒めすぎだと思うよ…。ちょっと待ってて、工具片付けて送っていくから」
「え、そんな…。大丈夫です、一人で帰れます」
「駄目」
きっぱりと言われた。
普段の頼りなくて遠慮がちな声色と違う。
「とてもじゃないけど、この状態で帰せないよ。危なっかしくて見ていられないから…」
「うっ…」
確かに今回の失態を考えれば当然なのかもしれない。
「…お願いします」
「うん。じゃ、ちょっとだけ待ってて」

明らかに重そうな工具箱二つを軽々とシスカは持ち上げた。
「お、重くないんですか？」
「ん、別に。配達業やってたから力はあるし」
そう言って、シスカは定位置に工具箱を戻した。
器用で優しくて力もある。
全面的に情けなさが滲み出ていたせいで気がつかなかった。
（お、王子様…！）
アニーミが恋に落ちた瞬間だった。

# 第9話　憂鬱の学園

シスカは、口を開いてそれを見ていた。
大きくて広い庭園。
まるでプロが大会で使用するような大きな校庭やテニスコート。
町に普通にあるようなお洒落なカフェテリア。
そして、巨大な塔の如く大きな建物…所謂（いわゆる）、校舎。
完璧に貴族クラスのお嬢様お坊ちゃまが通うような学園だった。
「こ、これが…フィルイン学園…。ど、どうしよう…！」
いくら政府関係者と言えど、場違いすぎるこの学園にシスカは挙動不審になる。
その後頭部をユリアが殴った。
「いてっ！」
「きょろきょろしないの。ほら、行くわよ」
そう言ってユリアは、シスカを引き摺る。
ルカは、シスカみたいに驚く様子も無く眠気で欠伸をしている。
興味が無いようだ。
アニーミは、どうやらシスカしか見えてないようでその後姿を追いかけた。

＊＊＊

校舎に入ると、益々高級な一流の学園だと思い知らされる。
あまりにも広すぎる校舎に迷子になりそうで目が回る。
「此処があたし達の教室。あんた等もあたし達と同じクラスにしてもらったの」
「へぇ、そうなんだ。ルカ、俺達今日から…って、ルカ！」
シスカが振り向くと、ルカは鼻提灯を垂らして寝ていた。

「…立ちながら寝るなんて、器用な奴ね」
「あ、そういえば…」
ふと思い出したようにアニーミが言葉を発する。
「今日の昼から艦はソルフェージュに移動するそうです。これからの拠点はソルフェージュになるので、帰宅次第荷物を整えて配置された部屋に移動するようにと隊長から言付けを頂きました」
「…結局、艦の修理する金が無いってことね。シスカみたいなのいても部品がなかったら意味ないし」
「ははは…」
顰めっ面のユリアにシスカは苦笑を漏らす。
ユリアがルカを叩き起こして漸く四人が教室に入る。
「席は決まってないから適当に座って」
「うん、分かっ…」
最後の言葉を言えず、シスカは固まった。
その瞳は戦慄き、青褪めていく。
視線の先は、何人か固まった男子生徒のグループだった。
男子生徒達は顔を上げて、教室の扉…シスカを見た。
「あっれぇ？　シスカじゃねー？」
「おー、マジで？　何であいつが此処にいんの？」
「つーか、まだ生きてたんだ？　神経図太いドブネズミはやっぱ違うねぇ」
げらげらと笑いながら男子生徒達は、シスカに暴言を吐いて笑う。
シスカは、拳を握り俯いていた。
「ちょっと！　あんた達、やめなさいよ！」
「お前ら、そいつといると臭くなるぜ？　何たって、スラム育ちのきったねードブネズミなんだからよ！」
ユリアが怒った様子で止めるも男子生徒達は下卑た笑いをやめない。
そんな言葉に周囲もシスカを軽蔑したような目で見た。
貴族からしたら、スラムに住んでいたような者を人間とは認めて

いない。
故にシスカは、彼らにとっての格好のストレス発散だ。
いくら暴言を吐いても傷つけても構わない。
だって、人間じゃないから。
汚い汚いネズミだから。
「ふざけんじゃないわよ！　あんた達、誰のお陰で生きてるか……」
「やめよう、ユリア」
ユリアがクラスの人間に腹を立てて抗議しようとするが、シスカの言葉で止まった。
「言いたい奴には言わせておけばいいよ。俺…こういうの慣れてるから」
その言葉は何処か冷たくて、シスカは席に着いた。
「シスカさん…」
「何よ、あれ…。こんなの慣れてるって…おかしいでしょ。ルカ！　あんた何で何も言わないのよ」
「あ？　此処で俺らがキレてどうすんだよ。益々シスカの肩身狭くなんだろうが」
正論だった。
普段のルカだったらこういうことがあれば真っ先にキレる所だが、シスカの事を思うとルカが正しい。
漸く分かった。
シスカが金銭的なことを理由に学校へ行きたくないと言い訳をする理由も。
ルカがこういう面倒な事を想定してだらけたように見せて渋っていた理由も。
ユリアは何も出来ない自分が悔しかった。
「しかも、ネズミの飼い主までいんじゃん？　何お前ら、来るとこ間違ってんじゃねー？」
「身分わきまえろっつーの！」

男子生徒達は、ルカも馬鹿にして笑った。
しかし、ルカは気にする素振りも無かった。
「へいへい。俺らはこれから人間様の勉強するんですよ。でも、言っとくけどよ…」
ルカは軽くあしらうが、男子生徒達を睨んで声にドスをきかせた。
「シスカに手ェ出したら、ただじゃおかねぇ」
その言葉に教室が静まる。
そして普段の表情に戻り、ルカはシスカの隣に座った。
ユリアやアニーミもそれに続いた。
「んだよ…つまんねー奴ら」
「おい、俺いーこと思いついちゃった」
男子生徒の一人が固まっていた仲間に耳打ちした。
「え、それヤバくね？」
「いーんじゃねぇの？　面白そうだし」
「へっ、荒くれルカが何だってんだよ」
ニヤリと男子生徒達は笑って、授業の準備をした。

＊＊＊

授業が開始される。
大好きな錬機術の授業だったが、シスカは憂鬱だった。
クラスのシスカを見る目が痛い。
あちこちで、こそこそと話して笑っているのが聞こえる。
そんな姿にユリアは怒りを抑えるので精一杯だった。
（ユリア、私たちが怒ったら…シスカさんやルカさんの立場悪くなっちゃうから）
（んなもん分かってるわよ…）
アニーミがユリアを落ち着かせようとするが、ユリアの怒りは納まりそうも無い。
「それじゃ、入ったばかりで悪いが…ブルーネル」

「はい」
教諭がシスカを指名する。
返事をしてシスカは立ち上がった。
「この部品がどのような用途に使用するか、答えよ」
モニターで、教諭はある部品を映した。
「ハンマリングフィルタですね。主に液晶関係に使用します。厚さや大きさにもよりますが、現在主流と言えるのはこのようなモニターや携帯端末にカメラのレンズにテレビ等…数えたらキリが無いと思います。何に使うかという質問にするには、あまりにもざっくばらんだと思いますけど。あ、それから現在のハンマリングフィルタは軽量化設計の他に傷や曇り防止などの…」
「ブルーネル。すまん、私が悪かった。うん、凄く分かりやすかったからもういいぞ」
教諭が冷や汗を流してシスカを止めると、黙ってシスカは席に着いた。
その様子にクラスの誰もが驚愕に目を丸くする。
エリートコースの錬機術教諭よりも、ずっと詳しいのだろう。
だから、慌てて教諭も止めた。
自分の分からない知識を口に出されそうだったからだ。
「うっわー、容赦ないわね」
ユリアがぽつりと呟く。
その顔は若干引き攣っているものの、クラスのお高く留まってる連中を黙らせるには充分な知識を見せたシスカに感心した。
「えー…何アレ。言ってること意味分かんない」
「何でスラムに住んでいた女子生徒が怪訝な表情を浮かべる。
近くに座っていた奴が錬機術なんて分かるのよ…。おかしくない？」
ユリアは、こっそりとガッツポーズをした。
アニーミも嬉しそうだ。
ルカは寝ていたが、このくらいのことは想定済みだったようだ。

しかし、シスカの表情が晴れることは無かった。
シスカにとって、折角の錬機術の授業も当たり前すぎて退屈だった。

＊＊＊

一日の授業が終わり、帰宅してさっさと用事を済ませてしまおうとユリアとアニーミが話しているとルカが戻ってきた。
用を足してきたらしい。
「あー、すっきりしたぜ」
「ちょっと…やめなさいよ」
清々しい表情のルカに対してユリアは怪訝に眉を寄せる。
「あの…ルカさん。シスカさんは？」
「あ？」
見るとシスカの姿が無い。
「おい、何処行ったんだアイツ」
「え、一緒じゃないの？　あんた出てから教室出て行ったわよ」
ユリアの言葉にルカは硬直したがすぐに口を開いた。
「…おい、お前ら先帰ってろ」
ルカの肩が震えていた。
その表情は怒りに満ちていた。
嫌な予感がする。
「な、何する気よ」
「心配すんな。ちょっとゴミ処理に行って来るだけだ」
ゆらりとルカがゆっくり歩いて口元に笑みを浮かべる。
「ちょ…ちょっとルカ！」
「うるせぇ！」
「ほんとに待ちなさいよ！」
「ルカさん、落ち着いてください！」
鼻息を荒くして怒るルカをユリアとアニーミが止める。

「あんたがシスカにこだわる理由って何なのよ。過保護って言うより、異常よ」
「…あいつに…あの時みてぇな顔されるのが一番嫌なんだよ！　俺はっ！」
ルカが大声を上げると、教室中が静まり返った。
「…あの時って…どういうこと？」
ルカは、呼吸を落ち着かせて溜息を吐いた。
「お前ら、これ知ってもあいつと今まで通りの付き合い出来るか？」
「え、何言って…」
「出来るかって聞いてんだ！」
真面目な表情だった。
シスカの過去に何があったのか…。
でも、それがどんなものだとしても変わらない。
大事な仲間…友達だから。
「シスカさんは、シスカさんです。過去は過去のこと。過去があるから今があると思います。私は、今のシスカさんが好きです」
言葉を一つ一つはっきりと言ってアニーミは、ルカに向き合った。
「変わるわけ無いじゃん。あんな錬機術オタクの過去の一つや二つ…。どんな過去だろうと、ルーディメンツが攻めてくるのに比べたらちょろいもんよ」
ユリアは笑った。
その言葉を聞いて安心したか、ルカは口を開いた。

＊＊＊

その頃、シスカは男子生徒達に押さえられて理不尽な暴力を受けていた。
殴打する音や蹴る音が誰もいない裏庭の茂みに響いた。
「げっほ！　げほげほっ…ッ」
圧迫感にシスカは咳き込むと、男子生徒はシスカの胸倉を掴んで

壁に叩き付けた。
「ぐっ…！」
壁に押し付けられたシスカの腹を別の男子生徒が靴底で踏み躙る。
「調子に乗ってんじゃねぇぞ、弱虫のドブネズミ」
「テメェみてぇな奴が視界に入ると、目が腐るだろうが！　あァ？」
そこらのチンピラよりも性質が悪い。
相手は貴族だ。
手を出せば、ただの喧嘩じゃ済まなくなる。
シスカは堪えた。
どうせすぐに飽きる。それまでの我慢だ。
こんなもの、ルーディメンツの攻撃に比べたら痛くも痒くも無い。
カラン、とエオリアキーがシスカのポケットから落ちた。
「お？　何だ、こりゃ」
男子生徒の一人がエオリアキーを拾う。
「だ、駄目だ！　それはっ！」
それだけは渡せない。
血相を変えたシスカに対して男子生徒達は面白そうに笑う。
「マジその顔最高じゃね？　よっぽど大事らしいな」
「つーか、エオリアキーじゃん。何でお前が持ってんの？　いやー、こんだけのお宝盗むなんて中々やるねぇ」
男子生徒が、エオリアキーで軽くシスカの頬を叩く。
「違う！　それは、俺の…！」
「テメェみたいな屑が、ブレスパイロットなわけあるかよ！」
「がはっ…！　いっ…！」
男子生徒の靴がシスカの腹に減り込み、壁に頭を勢い良く叩きつけられる。
腹をギリギリと踏まれ、痛い。
叩きつけられた頭が痛い。皮膚の一部が切れたかもしれない。
「じゃあ、本物か確かめてやるよ。あんだけ立派なブレスの鍵なんだ、そう簡単には割れねぇだろ」

「お、おい…それやばくね？　本物だったら、重罪だぜ」
「はっ、コイツがあんなのに乗って戦えるわけねぇじゃん？　どうせ偽物だよ。例え本物だとしても、上手く揉み消せるさ」
根拠も無く男子生徒は、エオリアキーを振り被った。
「や、やめろおおぉぉっ！」
シスカの叫びと共鳴したようにエオリアキーが光った。
「うおっ、何だよ！」
眩い光に、男子生徒達は目を瞑る。
押さえ込まれた手と足を振り払って、実体化したスフォルを涙ながらに抱いた。
「スフォル！」
「きゅっ」
スフォルもシスカに頬を摺り寄せた。
「良かった。本当に良かった…」
スフォルは、傷ついたシスカの頬と涙を舐めた。
「何なんだよ、一体…！」
男子生徒達は起き上がる。
彼らの目の前にいたシスカは背中を見せていた。
「…俺が我慢すれば、被害が俺だけで済む。俺を殴りたかったら殴ればいい。言いたいことがあるなら例え暴言だろうと言えばいい。気が済むまで」
落ち着いた声だった。いつもと変わらない…落ち着いた声。
「だけど、一線は越えちゃいけないの…いくら馬鹿なお坊ちゃんでも分かるよね。ちょっとやりすぎ」
徐々にその声は怒りに満ちてくる。
そして、シスカは振り向いた。
封印していたかのような危険なオーラを醸し出している…怒りの瞳だった。
「一線を越えたらどうなるか、教えてやるよ」
木々がざわめいた。

# 第１０話　光と影の交差

――二年前。

いつもその少年を見ていた。
スラム街で縮こまり、ボロ雑巾のような姿の少年。
冷たくて此方が凍えさせられそうな目。
同じ境遇の少年達に腹いせに殴られていて、孤立していた。
暴力を受けない間、ずっと壁越しに背中をついて座っているその少年に声をかけたかったが、凍て付いたその目が怖くてかけられなかった。
そんなことを気にしながら、毎日少年を遠くから見る。
いつも殴られてばかりの少年が、ある日…別の少年達を半殺しにしていたことを覚えている。
少し手を加えたら、確実に死ぬ。
そんな状態になるまで彼らに暴力を振るっていた。
「わ、悪かった！　俺達が、悪っ…がはっ！」
被害者の少年が謝罪をするも、彼は特に気にした様子も無く相手の胸倉を掴んで殴り飛ばした。
「…お前らが悪いのは、知ってるよ」
冷たい声に悪寒が走る。
足元には、家族の写真が入ったフォトフレーム…錬機手帳。
液晶が割れていた。
失った家族の思い出を踏み躙られて、切れてはいけないものが切れてしまった。
このままではいけない。
このままでは、本当に彼は戻れなくなってしまう。

この場所から連れ出して何とかしてあげないと。
彼を救ってあげたい。
無表情でもたまに見せる泣きそうで辛そうな顔が忘れられない。

＊＊＊

ある日、いつも通りに壁に凭れ掛かり俯いて座る少年に近づいた。
影が落ちたことで、少年は顔を上げた。
生気の無い…冷たい目だった。
「なーに死んだ振りなんかしてんだよ、てめぇ」
精一杯に声をかけるのには、これが限界だった。
正直、怖かった。
いつ粉々になって砕けてしまうか分からない繊細な少年を傷つけてしまうのではないかと恐怖した。
しかし、少年は無視をして俯いた。
「おい、シカトすんなよ」
「…あっち行けよ」
当然の返答だった。
これだけ荒んだ人間がすぐに目を合わせてくれる筈も無い。
「お前、名前は？　俺、ルスティカ＝ピッツィカード。ルカって呼んでくれ」
「……うるさい」
全く取り合ってくれない。
名前すら教えてくれない。
特に今は機嫌が悪そうだ。
でも譲れない。
この子は、こんな場所にいてはいけない。
太陽の下に戻してあげないと、本当に死んでしまう。
ぼろぼろの姿の彼の腕や足を見ると、擦り傷と痣だらけで痩せ細っていた。

「腹減んねーか？」
「……」
「お前、そんなんじゃいつか死ぬぞ。周りの奴らは死に物狂いで食べ物探してんのに、お前は動かないよな」
「……人のものを盗んで食べるのは嫌だ。俺の餌は人が捨てたゴミで充分だ。…パン屋の前に行けば、売れ残ったパンが捨てられる。俺は、犬のようにそれを漁って食べるだけだ」
淡々とした喋り方だ。
「いいのか？　お前はそれで」
「……」
「俺、分かるんだよ。お前はこんなとこで燻ってるような奴じゃねぇ。立てよ、お前がいるべき場所は此処じゃないんだ。俺と一緒に行こうぜ」
手を伸ばして笑顔を向けるも、少年はそれを鼻で笑って振り払った。
「…憐れみか。いい身分だね。俺を飼って優越感に浸りたいって？」
「違う！　そんなんじゃ…」
「帰れ」
「嫌だ。俺は、お前を連れて行くまで諦めない！」
「…ッ、うっぜぇんだよ！　相手を見下して心の中で笑いながら善人ぶってる表の人間は！　てめぇの優越感の為の道具なんて絶対に嫌だ！」
「話を聞け！　俺は…」
「そんなもんになるくらいなら、死んだ方がマシだ！」
少年のその言葉にルカの顔がカッと熱くなる。
気がついたら、少年を殴っていた。
少年は激しく吹っ飛び、ゴミ置き場に倒れた。
少年の喉元でクッと笑う声が聞こえ、そして彼は起き上がった。
「ほら、俺には此処がお似合いだ。散乱したゴミの中に屑みたいな俺。どうだ、絵になるだろ？　哀れで可哀相な汚いドブネズミの出

来上がりだ」
皮肉めいたような笑みを少年は浮かべた。
荒んでしまった心は、どうすれば修復できるのだろうか。
まだ、こんな子供なのに。
此処に来る前のこの少年は、どんな表情をしていたのだろうか。
どんな顔で笑っていたのだろうか。
見てくれじゃ同じように見えるが、この場所にいる誰よりも酷く歪んでいる。
心が壊れていた。
同情なんかじゃない。
隣で歩きたいんだ、この子と。
「…行くぞ」
「は？　ちょ、てめ…離せよっ！」
ルカは、無理矢理少年を担いだ。
軽くて細い身体だ。
「やめろっ！　俺に触るな！　このくそ野郎っ」
騒ぎ立てる少年をよそに、ルカは彼を文字通り持ち帰った。

＊＊＊

ピッツィカードの家は何の変哲も無い下町の一軒家だ。
これでもかと言うほど散らかってるが、それ故に生活している匂いがする。
「えー…と、俺の服で良いか？　多分、ちょっとでかいけど」
「……帰る」
「こらこらこら！　取り敢えず、風呂入れ。俺ん家の風呂狭いけど」
無理矢理、ルカは少年の身包みを剥がす。
「てっめ…触るんじゃねぇ！　ぶっ飛ばすぞ！」
「お前、無理してそんな言葉使ってんなよ。実際、そういう性格じ

ゃねぇんだろ」
「はぁ？　意味分かんねぇし」
「ま、何でも良いけどな。ほれ、風呂行こうぜ。洗ってやるよ」
「…ちっ」
腹は立つが、このまま騒いでもこの男は離さないだろう。
仕方なく、風呂場へ向かった。

＊＊＊

風呂場で楽しそうにルカは少年の髪と身体を洗っていた。
「ほーら、気持ちいいだろ？」
「……」
そっぽを向いたまま少年は無言だ。
「なぁ、いい加減名前くらい教えろよ」
「……」
反応なし。
「じゃ、年は？」
「……」
同じく反応なし。
「シャンプー気持ちよくて、悦に入ってんのか？」
「入ってねぇよ！」
少年は突然立ち上がり、叫んだ。
「…ッ」
目が染みる。
シャンプーが目に入ってしまったようだ。
「おら、流すから大人しくしろ」
シャワーを浴びせると汚れが取れて、綺麗になる。
しかし、その翡翠色の瞳はルカを睨んだままだった。
「…すっかり飼い主気分かよ」
「だから違うっつってんだろうが。ほら、次は飯だ。飯！」

脱衣所に連れて行って、タオルと洋服を少年に渡してキッチンへと向かう。
少年は、舌打ちをして身体を拭いて用意された服を着た。
ワイシャツが大きくて袖を捲くる。
ズボンは丈が長いが、ウエストはゴムが入っているので何とか履くことが出来た。
次第に良い匂いがした。
優しくて温かい匂い。
「…何してんだよ、俺」
深い溜息を吐いて少年は頭を掻いた。
食卓にパンとシチュー、サラダが並べられる。
「ま、かなりやっつけだけど食えよ。腹減ってんだろ」
「いらない…。帰る」
少年がそう言った途端、腹の虫が鳴った。
悔しそうに少年は、顔を赤くする。
タイミングが良すぎたその音に、ルカは噴出して笑った。
「おら、意地張ってねぇで食え！　冷めるぞ」
「……」
空腹には勝てないらしく、少年は椅子に座って食事を眺めた。
こんな食事を見るのは何年ぶりなのだろうか。
思わず涎(よだれ)が出そうだった
しかし、そこで少年は我に返った。
「ち、違う！　俺みたいな奴は、生きていく為に仕方なく食べるんだ！　勘違いするな」
「へいへい。いいからさっさと食え」
言い訳をする少年をあしらって、ルカは食べ始める。
怪訝そうに顔を顰めるも、少年も食事に手をつけた。

＊＊＊

食事が済むと、ルカは少年に帽子を被せた。
少しぶかぶかで顔が隠れてしまう。
「よっしゃ、行くぞ」
「は…？」
何処に？
何て慌しい奴なんだと少年は、ルカを見上げて睨む。
「お前の服とか日用品買いにだよ」
「…俺、金無いの知ってるよな？」
「だからツケとくんだよ」
「は…？　ツケ？」
「おう。明日から働け」
「なっ…！」
さも当然の如く笑って言ってのけるルカに、少年は固まった。
開いた口が塞がらなかった。
「ふっざけんじゃねぇ！」
我に返った少年の怒鳴り声と共にルカを思い切り殴る音が家に響いた。

＊＊＊

その後、町へ出た少年とルカはあちこちの店を回った。
ルカは楽しそうに少年に似合いそうな服を選んだり、使用用途が高い日用品を真剣に見定めたり、笑顔が絶えなかった。
それと比べて、少年は顰めっ面のままだ。
だけど、ルカは他の奴らとは違う…。そんな感じがした。
しかし、その気持ちを振り払うべく、少年は首を横に振った。
（何、気許してんだよ。あんなの、偽善だ。別に俺を見てるわけじゃない。可哀相なら誰でもいいんだ）
胸でぎゅと拳を握り、店員と話しているルカの目を盗んで走り出した。

「あっ！　コラ！」
気付いたルカは少年を追いかけた。
しかし、足は少年の方が速かった。
「無駄にぬくぬくと育った奴に俺が負けるわけな…ッ！」
走りながら振り返ると、必死の形相で周囲に砂煙を浴びせるかの如くルカが走ってくる。
先程と違い、そのスピードは少年の足の速さの三倍ほどあった。
「え、嘘だろっ」
「ホントだよ！」
息を切らせたルカが少年の前に現れた。
「絶対に逃がさねぇ…！」
「い、意味わかんねぇ。飼い慣らしたいなら、俺じゃなくてもいいだろっ」
「ばっか野郎！　お前じゃなきゃ駄目なんだよ！」
ルカが少年の肩を掴んで叫んだ。
「俺が何の為にお前に付き纏ってると思ってんだ、あァ？　俺は、お前がいいんだよ！　お前と友達に…いや、家族になりたいんだよ！」
家族？
馬鹿かコイツは。
何で俺なんかを選ぶ。
俺なんか、生きるのもどうでもよくてゴミ漁りをしてるどうしようもない屑なのに。
そもそも、他人が家族になれるわけがない。
「馬鹿馬鹿しい…」
「あァ？」
「簡単に…家族になりてぇなんて心にもないこと言うな！　迷惑なんだよ！」
家族を失った少年にとって、簡単に家族になりたいと言うルカが許せなかった。

「違うっ！」
ルカは、少年の肩を掴んだまま叫んだ。
「お前は、本当は助けを求めてた。だけど、我慢して堪えて本当は爆発しそうで泣きたいのに抑えてる。素直になれ！」
「んなもん、てめぇの勝手な妄想だ！　俺は誰も頼らない！　誰も信じないっ！」
「うるせぇ！　無理矢理、自分に言い聞かせてんじゃねぇ！　誰よりも人の温もりに触れたかったんじゃねぇのかよ、お前は！」
「だ、誰が……」
「俺を見ろっ」
少年は目を逸らすが、ルカがそれを許さなかった。
「お前は頑張りすぎた。長い間、よく頑張った。でもな…助けを求めるのは弱さじゃない。
助けを求めるのは弱さじゃねぇ！　逃げるな」
じゃあ、何か？　強いって言うのかよ。
本当にそうなのか？
そんなわけない。一人で自立して誰も頼らない。誰も信じない。
…違う。
俺は、怖いから逃げていたんだ。
存在を否定されるのが怖くて臆病になってひたすら逃げてて…気付いたらこうなっていた。
こんな奴の言うことなんか偽善だ。反吐が出る。
あの地獄を経験してないから、そう言えるんだ。
ゴミのように存在を否定されて罵倒されて殴られて、表の奴らやスラムに住む荒んだ奴らに抵抗するのだって相手が飽きれば終わるから耐えた。
だから、それなりの屑になれた。
誰も信じない。
誰も信じられない。
誰も助けちゃくれない。

人間扱いなんかしてくれない。
それなのに…。
「くっ…！」
それなのに、どうして…。
どうして涙が出るのだろう。
「泣きたい時は泣け。怒る時は怒れ。楽しかったり嬉しかったら笑え。それって、当たり前だけどよ…気持ちいいもんなんだぜ？」
何を綺麗事を。
ふざけんな。うざったい。消えてしまえ。
そう言いたかった。
「…っ」
言えなかった。
喉につっかえてそれが言えない。
「もう、楽になっていいんだ。本当のお前らしく生きればいい。そうすりゃ、こっから変わっていけんだよ。俺がいつでも近くにいてやる。だから心配すんな」
俺を見てくれてる。
この男は、どうして…。
どうして、俺が欲しい言葉をくれるのだろうか。
ルカが少年の頭の上に手を置く。
そして優しく笑ってくれた。
視界が歪む。
きっと今の自分の顔は酷い。
情けなくて弱々しくて小さな子供がぐずっているような、そんな顔に違いない。
「うっ…うぅ…ひっく…」
嗚咽が零れた。
涙が出たのなんていつ以来だろうか。
とっくに枯れていたと思っていた。
表でみんなと同じように生きていいのか？

こんな臭くて薄汚れた屑の俺が、みんなと一緒にいられるのか？
一緒にいて…いいのか？
言葉が出ない。
この感情は何だ。
嬉しい…。
嬉しいのか、俺は。
辛くて悲しい涙じゃなくて、安心出来て嬉しいのか？
そんなことを考える少年をルカが優しく抱きしめた。
「ほれ、これで誰にも見えねぇ。我慢すんな」
ルカの優しい言葉。
ルカの腕の中に顔を埋めて、彼のシャツを思い切り握った。
「うっ…う…う…ひっ…うあああぁぁっ！」
大声で今までの全てを爆発させるように泣いた。
誰もが振り返ったが、ルカは気にすることもなく何も言わずに少年を抱きしめていた。
少年が全てを吐き出し終わるまで、ずっとずっと…。

＊＊＊

泣くだけ泣いて、少年は公園のベンチに座っていた。
少年の目は、泣きすぎて目が真っ赤になっている。
「……」
何だろう。
今まで心の中に圧し掛かっていた大きな大きな腫れ物が、すっと消えていくようだった。
ぼうっと呆けてると、額に冷たいものが当たる。
顔を上げるとルカが、笑ってジュースを差し出していた。
太陽みたいな男だと思った。
暗闇の泥沼の中にいた自分を照らし続けてやっと外に出してくれた。

自然と顔が綻んだ。
「お、いいねー。その顔」
「…は？」
指をパチンと鳴らしやたらテンションが高いルカに、少年は怪訝な顔をした。
でも、今はそこまで嫌じゃない。
「ま、すっきりしただろ？」
「……うん」
素直に返事が出来た。
ジュースを受け取ると、ルカが隣に座る。
暫くの沈黙。
下を向いていた少年が小さく口を開いた。
「……シスカ」
「あ？」
少年は顔を上げた。
「シスカ＝ブルーネル。…俺の名前」
漸く名前を教えてくれたシスカにルカは目を輝かせて嬉しそうな顔をした。
「シスカ！　シスカか！　おう、わかった。俺は…」
「ルカだろ。聞いたよ」
呆れたような表情でシスカは溜息を吐く。
しかし、すぐに小さい笑みを浮かべた。
あたたかい。
こんな気持ちがまだ残っていたんだ。
「そんじゃ、これ飲んだらバイト先に行くぞ」
「…本当に働かせるのかよ」
「あったりまえだろ。働かざるもの食うべからず。特に下町の俺達はな」
社会に出れる。
大丈夫だろうか。

ルカ以外の人間は、きっと自分をゴミ扱いする。
気を許しちゃいけない。
そんなことを考えて顔を強張らせるシスカに、ルカはデコピンをした。
「いてっ」
「余計なこと考えんな。俺達ゃ、お前を蔑む余裕なんてねぇんだよ。行くぞ」
「う、うん…」
ルカがシスカの腕を引っ張る。
何故かルカの言葉だけは信じられた。
味方が一人いるだけで、こんなに気持ちが和らぐ。
不思議だった。

＊＊＊

「んで、そいつが例のガキか？」
咥え煙草の派手なシャツにスキンヘッドの男。
それが雇い主のロイドだ。
ロイドは麦茶をシスカに差し出して座らせた。
「おう、シスカだ！」
歯を見せて嬉しそうに笑うルカに対して、ロイドは溜息を吐いてルカの肩に手を回した。
シスカに聞こえないように距離を置いて、小声で話す。
「馬鹿野郎、お前マジでガキじゃねぇか。うちは託児所じゃねぇんだぞ」
「大丈夫だって。俺の目には間違いねぇ。頼むぜ、旦那」
期待していた分、気落ちしたロイドは頭を掻いてシスカに向き合った。
「おい、小僧。お前、力は？」
「は？」

「うちは配達業だ。力がねぇ奴は使えねぇ。だから聞いてんだ」
「…あるって言って信じんのかよ」
「いや、どんくらい力があるか見せてもらう。来い」
「ちょっ…触んな！」
有無を言わさず軽々とシスカを引っ張り、ロイドは倉庫へと連れて行った。
中に入ると、やたら重そうな荷物が並べられていた。
「このリストに従って箱に商品入れて整頓してラベル貼れ。因みに、かなり重いものもあるからな。それで見る」
「……上等だ。なめんなよ、ハゲジジィ」
シスカのその言葉にロイドは顔が引き攣り、倉庫に拳骨の音が響いた。
「いってぇ～…！」
頭を抑えてシスカは蹲った。
しかし、すぐに立ち上がりリストを見て溜息を吐いた。

＊＊＊

ずんずんと大股開きで歩いてロイドは扉を閉めて、店内に入った。
「ルカ！　何だ、あのクソ生意気なガキは！」
「落ち着けって。しゃあねぇだろ、それなりに大変なんだから」
「…ったく、言葉遣いから教えねぇと配達のたびにクレームの嵐だな。でも、ほんとに良いのか？　犬や猫じゃねぇんだぞ。こんなこととして、お前だってどんな目で見られるか」
「あァ？　俺を誰だと思ってんだよ。下町一の荒くれ者ルカ様だぜ？　怖いもんなんてねぇよ」
「嘘だろ」
「ああ、嘘。アンタの拳骨は怖ぇ。…それと」
ルカは視線を裏口の扉に向けた。
「あいつの死にそうだった顔がな」

「…そうか」
フッと笑い、ロイドは新しい煙草に手をつける。
「で？　何で、あのガキなんだ？」
「あ？　一目惚れ」
「…お前、そっちの趣味か。確かに顔だけ見れば、可愛い顔してっけどよ。ヤるなら合意の上でやれよ？」
「ちっげーよ！　何かな、放っておけなかったんだよ。それが何なのかわかんねぇ。だから多分、一目惚れ。あいつの笑顔が見てみたいって思ってよ」
「お前、よくそんなキモい台詞乱立出来るな」
「うっせーよ！　本心なんだからしょうがねぇだろうが！　気の利いた言葉なんか言えるか」
頭をがしがしと掻くルカにロイドは、おかしそうに笑った。
裏口の扉が開かれた。
「終わった」
短くシスカが言うと、ロイドもルカも驚いた顔をする。
あれから三十分も経っていないのにあれほどの荷物を？
いくら何でも早すぎる。
早いというより…速い。
中には五キロ以上もある荷物だってあった筈なのに。
ロイドはシスカを連れて倉庫へ向かう。
ルカもそれに続いてついていった。
倉庫の中は、綺麗にダンボールが整頓されていた。
いらないゴミは一つの袋にまとめられ、倉庫の端に置かれる。
ダンボールに貼ってあるメモとラベルは完璧に一致していた。
ロイドの理想通りの完璧な仕事だった。
呆気にとられてロイドの口から煙草が落ちる。
「…で、どうなんだよ」
怪訝な表情でシスカが尋ねると、ハッと目が覚める。
完璧だ。

丁寧で速くて正確。
一番欲しかった人材だ。
「よくやった、坊主！」
「うわっ」
ロイドは笑いながら、シスカの頭を撫でた。
武骨な手でぐしゃぐしゃと撫でられているのに、腹は立たなかった。
前だったら間違いなく、怒りに触れているはずだったのに。
「明日から此処に下宿しろ。一部屋余ってるからそれをやる。バイクもくれてやらぁ！」
「…は？」
きょとんとシスカは目を丸くした。
「認めてくれたってことだよ」
ルカが耳打ちして無邪気に笑った。
認めてくれた？
存在を肯定してくれた？
必要としてくれる？
何だろうか、この湧き上がる気持ちは。
…嬉しい。
そう、嬉しいんだ。
欠けていった心がパズルのピースみたいに一つずつ嵌まる。
自然と笑顔になれた。
やり直せる。
そう、最初からやり直せるんだ。
希望が湧いた。

# 第１１話　生まれる絆

その日は、ルカの家に泊まることになった。
家族だとは言ってくれたものの、ルカの家には他にも同居人がいるらしく部屋数が足りない。
だから、明日からシスカはロイドの店で下宿することになった。
でも、そんなことはどうでもいい。
家が違くてもルカとの絆は変わらないから。
ふかふかの布団で寝られるなんて贅沢だと思った。
何もかも嬉しくて、心の中がくすぐったい。
「じゃ、寝るぞ。おやすみ」
「…うん。おやすみ」
目を伏せるとすぐに深い眠りに入れた。
朝が来るのは一瞬のことだと思えた。
昨日までは、夜が長く感じていた筈なのに…。

＊＊＊

朝日の眩しさで目が覚める。
起き上がり重い瞼を擦ると、良い匂いがした。
コンソメスープの匂い…。
いそいそと着替えて、キッチンへ向かった。
「おう、おはよ！　待ってな、今出来るからよ」
鼻歌交じりで手際よくルカは料理する。
まな板の上で野菜を切るトントンという規則正しい音に何処か懐かしさを感じた。
「…何、すればいい？」

「あ？」
料理をしながら色んな音を聞いても、シスカの小さい声を聞き漏らすことは無い。
「…働かないと食えないんだろ。その、えと…手伝う」
少し遠慮がちな声に目を丸くしていたルカだが、嬉しくて満面の笑顔を浮かべた。
「おうっ！　じゃあ食器出してくれ。三人分な！」
「…三人？」
「ルカー！　腹減ったー」
シスカが不思議に感じてると後ろから眠たそうな男の声が聞こえた。
振り返ると、半分眠気眼の男がいる。年はルカと同じくらいだろう。
「ビート、てめぇも働け！　シスカですら手伝ってんのに今更起きてくんじゃねぇよ」
「やーん、ルカ君のいけずぅ～♪　朝起きたらだらだらしたいのー。だからご飯早くぅ～」
「ぶっ飛ばすぞ！　女と遊んで朝方に帰って来やがって！　あ、牛乳切れてる。買って来い」
「えー、朝寒いから…やだっ」
「…殺すぞ、マジで」
ルカに引っ付くビートと呼ばれた男を見て、シスカは呆然とした。
同居人がいるって言ってたっけ。
こいつが、そうなのか。
何故か表情が曇る。
それに気付いたビートは、シスカに視線を合わせて笑う。
「君がシスカ？　俺、ビート。ビート＝コンダクト。ルカと部屋シェアしてんの。邪魔かもしれないけど、よろしくね」
ヘラヘラとビートが笑う。
しかし、シスカは視線を逸らした。

この男は何となく…そう、不愉快だ。生理的に受け付けない。
「ルカ…」
少し震える声でルカの名を呼んだ。聞き取れるか取れないかの小さな声だった。
「俺が、買い物行って…来る」
「え、シスカ。でも、お前」
「だ、大丈夫だから…っ」
あまりこの場所にいたくない。
ルカが自分の知らない顔をしているのを見ると…心の中がちくちくと地味に痛む。
「ああ、んじゃこれ金な。パン屋の隣に店あっから、そこで買ってきてくれ」
「…うん」
金を受け取って、シスカは家を出た。
バタンと扉が閉められ、ぱたぱたと走り去る音がする。
「あー…まずった？」
「いや、しょうがねぇよ。でも、外の人間と触れるのはまだきつそうだな。おい、ビート」
「はーい、頼まれましたぁー。結局外に出る運命なのね、俺は」
ぽりぽりと頭を掻いてビートは家を出た。
心配そうにルカは、小さく溜息を吐いた。
「少しずつ…少しずつ頑張れよ。シスカ」
優しい声色で言った。

＊＊＊

「うぅ、さっぶ…！」
外に出たビートは身震いをする。
「あれ…？」
左右どちらを見てもシスカの姿は見当たらない。

「足、はっや…」
しょっぱなから見失ってしまった。

＊＊＊

息を切らせてシスカは走った。
別にいいじゃないか。ルカくらいの奴なら友達がいたって当たり前だ。
何で、俺だけ見てくれてるなんて勘違いをするんだ。
とてつもなく自分が恥ずかしい。
だから走ってその気持ちを振り払いたかった。
「はぁ…はぁ…はぁ…」
立ち止まって呼吸を整える。
そして深呼吸をした。
「…牛乳、買って帰らなきゃ」
とっくに店を通り過ぎてしまった。
引き返そうと振り向いて足を前に出そうとした時だった。
「…ッ！」
目の前には、昨日の昼までのシスカと同じ瞳をした少年達。
スラムに住んでいる少年達だった。
シスカの瞳が戦慄いた。
「よう、シスカ」
リーダー格の少年、バジルにシスカは震えた。
こいつは中々表に出ないはずなのに…仲間を率いて表に出るのは、本気で仕掛ける時だけだ。
力のある奴を厳選して連れ歩く…一番関わってはいけない存在だ。
「ちょっと、ツラ貸してもらうぜ」

＊＊＊

「ああ、ルカと一緒にいたあの子？　いや、見てないよ」
行く筈の店や近隣の店に聞いても誰も見ていないという情報しか聞けなかった。
一体何処へ行ったのか。
一度帰ってもいいと思ったが、シスカがいなくなったと分かったらルカは暴れて何処に行くかも分からない。
それを止めるのは、結局ビートだ。
「もちっと探すかー。…お？」
道端に光る何かが見える。
距離があって何なのか分からなかったから、近付いてそれを拾った。
「硬貨？　…もしかして、ルカから貰ったやつか」
そして周囲を見渡す。
「だから…何処にいんのよ、あの子」

＊＊＊

薄暗いスラム通り。
胸倉を掴まれ、シスカは壁に叩きつけられた。
「ッ、痛…！」
肩を強打してしまい、痛みに顔を歪める。
バジルは、シスカの髪を乱暴に引っ張った。
「光の世界のデビューおめでとう。…でもよ、こりゃ完璧な裏切りだぜ？」
「…別に、お前らの仲間になったつもりは…ッ、ぐっ！」
バジルの靴がシスカの腹に減り込む。
ぎりぎりと圧迫されて痛い。
「そういうことじゃねぇんだよ。俺達は、薄汚れた屑。一人であっち側行ってもどうせ屑扱いだ。そしたらいつかまたこっちに戻ってくる。今なら許してやる。戻れ」

「ッ、嫌だ！」
折角、認めてくれたのに。
友達…家族になれたのに。
離れたくない。
ルカと一緒にいたい。
「あー…そう？　おい、お前ら容赦しなくていいぞ。何だったら、ぶっ殺しても構わねぇ。コイツはもう俺達の敵だ」
バジルがニヤけて指示を出すと、少年達は歓声を上げてシスカを取り囲んだ。
今回ばかりは、まずい。
相手が飽きるまで殴られ続けるのとは違う。
そんなことをしたら、殺されてしまう。
しかも普通の奴らより桁違いに力もあって体も大きくて強い奴らを全員倒すなんて無理だ。
逃げないと…。
逃げなきゃ。
「は、離せっ！」
必死に抗うシスカだが、一人の力で敵うはずが無い。
重い拳で顔を殴られる。
「ぐっ…！」
「おっと。ほら、パース！」
反対側にいた少年が、シスカの腕を掴み、腹にストレートパンチを食らわせる。
「ッ、かはっ…！」
ローテーションで少年達に殴られ蹴られ、身体の感覚がおかしくなってきた。
本気だ。
全員、本気で楽しみながらシスカを殺そうとしている。
これ以上の地獄なんて無いから怖くない。
その思考が少年達を支配する。

立つ気力も無いシスカが傾くと、髪を掴んで何回も腹に蹴りを入れた後に落ちかけたシスカの背中をバジルの足が思い切り踏んだ。
「あぐっ！」
「結局、お前は一人じゃ何も出来ない可哀相な奴だよ。抵抗しても何も出来やしない。救われない。あっち側に行かなかったらこんな目に遭わなくて済んだのにな。俺達は人間になれない。俺もお前もな！」
「はっ…ぁ、ぐぅ…ぁ、うぅ…！」
呼吸が上手く出来ない。
どうやってするんだっけ？
ああ、そうか。
やっぱり、駄目なんだ。
俺なんか…俺なんかが、あの場所で笑って生活なんて出来ない。
ひと時の…夢だったんだ。
ルカ…。
やっぱり、俺達は住む世界が違うんだよ。

＊＊＊

その酷い暴行現場をビートは影から見ていた。
助けに入りたいけど、自分では助けにならない。
助けないと…止めないと、シスカが殺される。
息を切らしてビートは走った。
この場を何とか出来るのは…シスカを助けられるのは、一人しかいない。
「ルカ！」
家の扉を強く開けてビートは叫んだ。
「おう、どうだった？　シスカ、ちゃんと上手く出来たか？」
「んなこと言ってる場合じゃねぇ！　あいつ、殺されるぞ！」
血相を変えるビートの言葉にルカは硬直した。

殺される？
誰が？
「あいつ…スラムの奴らにボコられてて…いや、あれはそんなもんじゃない。早くしろよ！　手遅れになってもいいのかよっ！」
その言葉に、ルカは厳しい表情を浮かべた。
怒りを押し殺すが抑え切れていない…そんな表情だ。
「何処だ…。アイツは…シスカは何処だっ！」
「裏通りの…廃屋の前だ」
それを聞くと、慌しくルカは家を飛び出した。
ビートは何も出来ない自分が悔しくて、ただ友人の背中を見送ることしか出来なかった。

＊＊＊

バジルは、殆ど動けなくなったシスカの頭に足を乗せて靴底でぐりぐりと踏み躙る。
「はっ…ぅ…」
言葉が殆ど出ない。
このまま放置していたら、シスカは死んでしまうだろう。
ズタボロにされて動けなくなって気力もなくなって…昨日の出来事が夢のように霞んでいく。
それでも、夢にしたくなかった。
あの男の優しさをぬくもりを…夢にしたくなかった。
ただ、もう全て手遅れだ。
せめて…忘れて欲しい。
この醜い…自分を忘れて欲しい。
自分を心配するルカに重荷を積ませたくない。
それを願う。
「なぁ、シスカ。お前、自分の居場所何処にあると思う？」
「ふ、は…ぁ…い、ばしょ…？」

頭を鷲掴みにされて宙に浮かされる。
言葉を発する気力が無い。
息をするのも苦しい。
「何処にも無いよな？　裏切ったこの場所も一瞬出れたあっちの世界も…お前は、何処にもいられない！」
「ッあ…！」
ガンッと掴まれた頭が無遠慮に壁に叩きつけられ、押しつけられる。
バジルの言葉を否定したかった。
きっと、ある。
自分がいられる場所を…希望を持ちたい。
「…お前、死んだ方が楽じゃね？」
「……」
そうかもしれない。
死んでしまえば、こんな痛い思いも苦しい思いもしないで済む。
だけど…死んでしまえば、あのあたたかさも嬉しさも喜びも感じなくなってしまう。
ルカに出会わなければ、忘れられたのに。
それでも、俺は…まだ信じたい。
あの男を。
例え住む場所が違くても、優しく手を差し伸べてくれたあの男と一緒にいたい。

「シスカッ！」

ハッと目を開く。
幻聴？
ルカの声が聞こえる。
ルカがこんな所に来るわけ…。
昨日は、俺に会いに来ただけで…今、此処に俺がいるなんて分か

りっこないのに…。
「ル…カ…？」
本当にいた。
ルカが…助けに来てくれた。
これが幻覚だとしても嬉しかった。
最後にルカを見れて嬉しかった。
意識が霞んでいく。

「あ？　何だお前…」
バジルがルカを睨む。
息を切らしたルカは、バジルが掴んだシスカを見て顔を熱くする。
「てめぇらぁ！　シスカに何しやがる！　今すぐそいつを離しやがれ！」
今にもバジル達に掴みかかりそうな…怒りのあまり興奮したルカを見て、バジルは鼻で笑った。
「ああ、これか。いいぜ、返してやるよ。…そらっ！」
バジルは、まるで人形でも捨てるようにシスカを地面に叩き付けて蹴り飛ばした。
「シスカ！　てっめぇ…！」
動けないシスカに駆け寄りルカは抱きしめ、バジルを睨んだ。
「そんな死にかけの屑で良かったらいつでもくれてやるよ。精々、飼い慣らすんだな。つか、そのままだと死ぬんじゃね？」
楽しそうにバジルが言うと、他の少年達は声を上げて笑う。
下卑た笑い声を上げたまま、バジル達は何をするわけでもなく去っていった。
今にも殴り飛ばしたい気持ちはあったが、今はシスカが優先だ。
「シスカ！　目を開けろ、シスカ！」
ぐったりとして目を開かないシスカをルカは呼び続ける。
いくら叫んでも起きないシスカの冷たい手を、ルカは握り締めていた。

「シスカァァァァ！」
裏通りにルカの叫び声が響き渡った。

＊＊＊

目が覚めると、古臭い天井が見えた。
助かったのか…？
生きている。
今、生きている。
ほっとしたが、あの時を思うと怖くてたまらない。
死にたくないという気持ちが生まれて、恐怖というものを感じた。
身体が震えそうだった。
「ぐぁっ！」
身体を起こすと全身に痛みが走る。
痛くて痛くて涙が出る。
痛みや苦しみを感じることを想定すると寒気がした。
こんなに自分は弱くて臆病なのかと考えさせられる。
ふと寝息が聞こえる。
「…ルカ？」
傍らでルカが寝ていた。
疲れきっていて、目が腫れてクマが出来ている。
「ずっと、お前の看病をしてたんだよ。ルカは」
顔を上げると、水を持ったビートがいた。
そのコップいっぱいの水をシスカに渡す。
「酷かったぜ。泣きながら、お前が死んだらどうしようって…三日間、寝ないでお前を看病してた。こいつとは、長い付き合いだけど、あんなルカを見たのは初めてだったな」
「ルカが…俺を？　こんなになるまで…？」
信じられないわけじゃない。
ルカは、心からシスカを大事にしてきた。

だけど、こんなになるまで…此処まで自分を大切に思っていたとは思わなかった。
シスカは、コップの水面に映る自分とルカを交互に見た。
「それだけ、お前はこいつに必要されてるってことさ。じゃ、俺は行くよ」
手をひらりと振ってビートは背中を向ける。
「何処に…？」
「六番目の彼女のトコ。帰るのは明日の朝」
にんまり笑って、ビートは家を出た。
「……」
コップを置いて、シスカはルカの燃えるような赤い髪を触った。
「絶対、お前馬鹿だろ。あんなとこに飛び込んで…後先考えないで…」
ぽつりぽつりと呟く。
薄っすらとルカは目を開いた。
そしてぼんやりと視界に入ったのは、シスカの姿。
大きく目を見開き、シスカの肩を掴む。
「シスカ！　お前、大丈夫かっ？」
「いった…！　ルカ、痛いっ！」
全身怪我をしているシスカは、意識はあってもまだ重傷だ。
嬉しさのあまりルカはそれを忘れてしまう。
「あ、わり。…でも、良かった。ほんと良かった。お前、全然動かないし…身体冷たいし…死んだんじゃねぇかと思って、気ィ狂いそうだった」
「…心配かけてごめん」
シスカが俯く。
すっかり毒の抜けたような情けない表情だ。
「んなしょんぼりすんな！　やっぱ、お前無理してたんだな」
「…うん、かなり」
素直だった。

あの場所にいて、自分も自然にそんな風になってしまっていた。
だから、そんな自分は封印してしまおう。
本当の自分…此処で生きていける自分になる為に。
地獄を見る前の、太陽の下で過ごしてきたあの頃のように…。
「あ、ルカ。ロイドさんは…」
「あ？　ああ、仕事か。怪我治ってからでいいって…」
「そんなの駄目だよ。俺、やっと認めてもらえたのに…迷惑かけて」
表情が暗くなるシスカに、ルカはデコピンをした。
「いって！」
赤くなる額を押さえた。
これ以上、怪我が増えたら困る。
「無駄に頑張りすぎなんだよ、お前は！　ちったぁ肩の力抜け」
「でも…」
「そんな身体じゃ仕事なんねぇだろ。あの親父には事情説明してあるし、向こうも納得してるから大丈夫だ」
「…いや、治す。今日中に治す。誰がなんと言おうと。それがルカでもね。止めても無駄」
「おー…すげぇ根性」
呆気にとられて驚いた顔をするルカにシスカは笑った。
「…俺、此処からまた始めてみるよ。もう大丈夫。なんか、周り怖いけど…今考えると凄い怖いんだけど…何とかやってみるよ」
シスカの笑顔にルカもつられて笑顔になった。
毒が抜けたせいで何処となく頼りない。
だけど、それが本当の彼だ。
それだったら、自分は彼の居場所を守り続けよう。
迷惑だって嫌な顔されても。
だって、それが家族ってもんだろ？

# 第12話　ともだち

ルカの口から聞いた衝撃の過去に、ユリアもアニーミも…クラス全体が沈黙した。

「…臆病で情けない馬鹿だと思ってたけど、まさかそんな過去があったなんてね」

「でも、やっぱり…立ち直ってくれたんですよね。シスカさんとルカさんは、ただの友達と思っていましたけど…立派な家族なんですね」

ユリアとアニーミの言葉にルカは頷いた。

「ルーディメンツよりも何よりアイツの敵は…本当の敵は人間なんだよ。だから、アイツをイカれさせてしまう要素があったら俺は全力で潰す」

その言葉に、クラスの一部の人間がルカ達に近付いた。

「その話、本当なのよね？」

中流家庭の女子生徒だった。

「ったりめーだろ！　こんな話が俺の脳味噌で作れるとでも思ってんのか！」

敵視したようにルカが叫ぶ。

「ごめん。スラム育ちってだけで偏見持って軽蔑してた。でも、同情するわけじゃないよ。ただ、頑張っていたあの子に対した自分の態度が恥ずかしいだけ」

「貴族の奴らに煽られ過ぎってことだよな。今思うと腹立つぜ」

「そうね。皆でシスカ君を探しましょう。謝らなきゃ」

口々に他の生徒達が言うとルカ達は呆然とした。

勿論、それを快く思わない一部の生徒もいた。

だけど、皆のシスカに対する見方が変わってきた。

それが嬉しい。

しかし、そんな安心感を持つのも束の間だった。
バタバタと廊下を走り、一人の男子生徒が教室の扉を開いた。
「おいっ！　誰か先生呼んでくれ！」
「きゅー！」
血相を変えた男子生徒の後ろには、スフォルがいてルカ達に飛び掛った。
スフォルが必死に飛んできたということは、シスカ絡みだということが分かる。
「何かあったのか？」
恐る恐るルカが尋ねる。
「裏庭で…やべぇことになってんだよ！　あのままじゃ、死人が出るぞ！」
その言葉に、ルカは青褪めて慌ただしく教室を出た。
「ちょっとルカ！　アニーミ、あたし達も行きましょ！」
「うんっ」
「きゅー！」
ユリアとアニーミもスフォルもそれに続いた。

＊＊＊

裏庭では、シスカの周囲に男子生徒達が倒れ一人の男子生徒がシスカに胸倉を掴まれていた。
「ひっ…！　た、助け…」
「そうやって俺が助けを求めても…お前らは笑って踏み躙るんだろ？」
哀願する男子生徒にシスカは冷たい目で静かに話す。
普段の情けなくて頼りないシスカの面影は、そこには無かった。
「こ、こんなことして…お前どうなるか…わ、分かってんのか？」
男子生徒は恐怖で声が裏返りながら、脅しにならない脅しを吹っかけた。

「…どうなるか？」
シスカは鼻で笑う。
「やってみろよ」
「がっ…！」
シスカは男子生徒の首を絞めた。
その力は、徐々に強くなっていく。
このまま力を入れ続けていたら首の骨が折れてしまいそうだ。

「シスカ！」

ルカの怒鳴り声が聞こえる。
振り向いたシスカの瞳は怒りに満ちていた。
その瞳にルカは一瞬背筋が凍ったが、ずかずかと歩いてシスカの顔を思い切り殴った。
シスカの男子生徒を拘束していた手が離れ、そして倒れこんだ。
そして、ルカはシスカの胸倉を掴んで起き上がらせた。
「落ち着け！　何も壊れてねぇし傷ついてねぇから大丈夫だ！　目ぇ覚ませ！」
ルカがシスカの胸倉を掴んで叫ぶと、シスカの瞳が徐々に光を取り戻した。
「……ルカ？」
顔が痛い。
あいつらに殴られたものよりもずっと重い。
ハッと周囲を見てシスカは青褪めた。
「ま、まさか…また、俺…」
「おう。久々にぶち切れやがったな」
ルカの言葉にシスカが口をパクパクとさせた。
涙目になる。
「ど、どどどどどうしよう！　俺、やばいって。しかも貴族に手出しちゃったよ！　こ、これ…」

「いいから落ち着け。…この馬鹿野郎。見事に暴れやがって…」
安心したようにルカは溜息を吐いた。
いつものシスカに戻ってくれた。
いつタガが外れて暴れるか…最近は無かったからもう出ないと思っていた。
自分の何か大切なものを脅かされるとキレてしまう。
あの時の…家族との思い出を踏み躙られた時のように。
人格が変わるほどに暴走してしまう。
「やっぱ、ドブネズミは最終的にこうだもんな…。てめぇ、ただで済むと思うなよ」
呼吸を取り戻した男子生徒がシスカを蔑むような目で見て逃げようとした時だった。
バリケードの如くユリアやアニーミ達が行く手を阻んだ。
「あんた達こそ…ただで済むと思ってんの？　これ、集団リンチの上に自分の家に泥塗ってんじゃないの？」
「いくら圧力をかけても、無駄ですから」
ユリアやアニーミ達クラスメイトの眼光に男子生徒は、息を飲んだ。
「な、何でお前らまで…」
ユリアやアニーミはともかく、何故クラスメイトまで。
状況が分からなかった。
「別に俺ら、お前らの仲間でもねぇし」
「シスカ君に酷いことしたら許さないから」
クラスメイトの態度が一変したのは、男子生徒だけではなかった。
シスカもまた驚いていた。
明らかに昼間の時と態度が違う。
「…ルカ、何か余計なこと言った？」
「お、おう…。ちょっと昔話を…」
その言葉にシスカはルカを殴り飛ばした。
「馬鹿ルカ！　何でそう口軽いんだよっ。めちゃくちゃ恥ずかしい

じゃないか！」
「しょうがねぇだろ！　そのお陰で良い方向行ったんだから良いだろ！」
「結果的にだろ。もー…ホント勘弁してよ」
深い溜息を吐いてシスカは項垂れた。
その様子にユリア達は笑った。
「ちっ…何なんだよ」
男子生徒は悔しそうに顔を歪め、逃げて行った。
「さってとー…帰ろうぜ」
「いや、待ってよ。この惨状…どうすれば。…だって、俺」
しどろもどろに言葉を紡ぎ怯えるシスカの頭をユリアが平手打ちで叩いた。
「いった！」
「ったく、さっさと帰ってやんなきゃいけないことがあるでしょ。引越ししないといけないんだから、こんなのに構ってらんないからね。行くわよ」
「ちょ…ユリア！　く、首が…！」
シスカの首根っこを掴んで引き摺るユリアを見て、アニーミは小さく膨れた。
（私がシスカさん連れて行きたかったのに）
少し恨めしそうにアニーミは、ユリアを見ながらルカと共に歩いていった。

＊＊＊

学園から連絡が入りシスカは三日間の停学処分を受けた。
「転入初日に暴力事件起こしたっつーから、ルカだと思いきや…シスカ、お前何してんだ？」
「え、えっと…ちょっとハイになっちゃって…」
ロックに正座させられ、シスカは口篭る。

「大人しい奴がキレると怖いって言うけど…お前は特にそのタイプっぽいな」
「い、いや…えっと…ごめんなさい」
床に頭を擦り付けて涙目になりながらシスカは謝罪する。
「ま、やっちまったもんはしょうがねぇ。でも三日で済んで良かったな」
「即退学になるかと思ってましたけど。このままじゃ終わらないと思ってましたから…」
「あんた、感謝しなさいよ！」
ロックとシスカが首を傾げると背後からユリアの声が聞こえた。
何故か仁王立ちである。
「ユリア…一体、どういう…」
「モティーフの配達店に行きなさい！」
「へっ？」
そこは、前にシスカがアルバイトをしていた場所だ。
「そこであんたを待ってるわ。行って挨拶してきなさい！」
待っている？
どういうことだろうか。
「行って来い、シスカ」
「え…？」
ロックが、シスカの背中を押した。
誰かが自分を待っていてくれてる。
ユリアが呼んできたということは、悪い影響を与える奴じゃない。
シスカは頷いて、バイクを走らせた。

＊＊＊

モティーフに辿り着いて、配達店の前で止まる。
エンジンを止めて鍵を引き抜き、店の扉を開いた。
「あ……」

視界に入った人物は、シスカも見知った顔だった。
「よう、シスカ。久しぶり」
手を振ったのはビートだった。
すぐに怪訝な表情になり、シスカは店の扉を閉めた。
「待て待て待て！　いくらなんでも冷たすぎるわ！」
「だって、俺お前嫌い。視界に入ってくるなよっ」
ビートが扉を開き、それをシスカが懸命に閉めようとする。
「ひ、酷い！　一緒に寝床を共にした仲じゃないっ」
「…気持ち悪いからやめろよ」
あまりにも刺々しい言い方にビートは溜息を吐いた。
「二年経っても、俺には懐いてくれないのね」
「ていうか…何でビートがいるの？　正直、邪魔なんだけど」
あまりのシスカの毒舌ぶりにビートはカウンターに伏して涙を浮かべた。
そんなビートを無視して、店の中に入るとロイドともう一人、そこにいた。
「よう、シスカ。元気そうだな」
「おー、シスカ。おっひさー」
煙草を咥えるロイドと手を振る少女…制服からすると同じ学校だ。
その姿にシスカの顔が明るくなる。
「ニムさん！」
「あっははは。相変わらず元気そうだね。ビートに浴びせる毒舌っぷりも超サイコー」
その少女は、この配達店を一週間で辞めたニムだった。
「そんでごめんね。あたしが辞めたばっかりに変な事態なっちゃって」
「いえ、そんなこと…」
「この馬鹿女。今更また雇えってんじゃねぇだろうな？」
「まっさかー。楽しそうだと思ってやってみたら、疲れるし小遣いにもならない給料だしマジ勘弁」

あっははははと笑うニムにロイドの機嫌が悪くなる。
「ろ、ロイドさん。落ち着いて…。でも、ニムさん…何で？」
「んー？　どっかの誰かさんが学校で超楽しいことしたから、色々揉み消したお礼を貰おうと思って」
「へっ？」
揉み消した？
あ、そういえばニムさんって一流貴族のお嬢様だったっけ。
見てくれは完璧に下町のノリに似ているから忘れがちだけど。
学園の制服着てるって事は…つまり、そういうことであって。
「ま、まさか」
「うん。貴族の風上にも置けない恥知らずな馬鹿共にお仕置きしちゃった。てか、あたしシスカの超味方だしこんくらい朝飯前よ」
「は、はは…」
停学が三日で済んだのは、つまりこういうことらしい。
親の力だけじゃなく、いくつもの企業の代表取締役を務める彼女には貴族の殆どが逆らえない。
「でも水臭いなぁ、シスカ。学園来るなら教えてよー。分かってたら、昨日サボんなかったのにさー」
「ご、ごめん。いきなり決まったことだから…」
シスカの肩に腕を回しながら、ニムは笑った。
「ま、どんまい。あー、これから学校楽しくなりそ！　というわけでお礼して」
「お、お礼って…何すれば」
少し嫌な予感がした。
「可愛くて高性能の錬機手帳三十種類作って。そのための三日間だから。あ、安心して。素材はこっちで用意するから」
シスカの思考が停止した。
基本万能用途のある錬機手帳…。
アルバムに音楽プレイヤーに位置情報システム…挙げたらキリがないその機械を三十種類。

この三日間、睡眠を取ることは許されないだろう…。
いくらなんでも酷い依頼だった。
「友達だもん。断れないよね？」
ニムの笑顔が凶悪な悪魔の笑みに見えた。

# 第１３話　関係

三日後。

今日も変わることなく、学園内は生徒達の溌剌（はつらつ）とした声がざわめいてる。

「あ、そういえば今日だっけ。シスカ君来るのって」

「うんうん。錬機術の宿題教えてもらおーっと」

「アンタねぇ…シスカ君に教えて貰うために宿題やってないわけ？呆れるわ」

そんな一部の女子生徒が話をしていると教室の扉が開かれる。

「あっ、おは…よ？」

最初は明るい表情で振り向くが、次にはぎょっとした顔をしてその人物を見た。

彼女達が待ち望んでいた人物…シスカだった。

しかし、彼の周囲には禍々しい黒いオーラが渦まいており顔が青褪めていた。

「あーっ！　来た！」

ニムが軽いステップを踏んでシスカに駆け寄る。

「で、例のものは？」

「……これ」

ラッピングされた女子が好むような袋をニムに渡す。

「基本の情報ツールに三十種類違うデザイン…モニターは最新のハンマリングフィルタを使った十トンまでだったら傷一つつかない仕様…位置情報ナビはニムさんの大好きなキャラクターがご案内。それと」

「うんうん、いいわー。いいわね！　しかもラッピングとかケースとか頼んでないのに作ってくれるなんて流石だわ」

「いや…あの…此処までやらないと、言われたことしか出来ないのかとニムさんに殺されるから…。お陰でこの三日、仮眠すら取れなかったよ…」

口に出していないが、その他にブレスのシミュレーションテストや調整もプラスされてシスカは今すぐにでも倒れそうだった。

「いやー、ホント助かるわ。お礼のおつりが出ちゃうわね」

機嫌良さそうにニムは、にっこりと笑った。

そのやり取りの中、ルカとユリアとアニーミが雑談を交えながら教室に入ろうとした時だった。

「ありがと、シスカ。愛してる」

ニムがシスカの首に手を回してキスをした。

マウストゥマウスのキス。

柔らかい唇の感触にシスカの顔が紅潮した。

目が覚めるには、充分な衝撃だった。

それに呆然としたクラスメイトとルカとユリアだったが、アニーミは凶悪な珍獣でも見たかのような驚愕の表情を浮かべ身の毛が弥立った。

「それじゃ、また今度何かあったらよろしくね。良い出来の分だけ、良いことしてあげるから」

特に気にした様子もなくニムは笑いながら上機嫌で席に戻り、錬機手帳を弄り始めた。

放心したシスカは、胸の高鳴りが止まらなくて顔を真っ赤にさせたまま卒倒した。

「シスカさんっ」

誰よりも早くアニーミがシスカを支えた。

この三日間、シスカが殆ど部屋に閉じ篭っていたのも無茶難題を吹っかけたニムだということが今分かった。

アニーミは、眉間に皺を寄せた。

（いくらあの事件を救ってくれたからって…キスすることないじゃない）

アニーミは膨れた。
（はっ！　も、もしかして…この二人って既にそういう関係？　そ、そんなまさかっ！）
身分違いの恋愛？
超一流貴族のニムと下町に住んでいたシスカ。
二人が知り合いだとは聞いていたが、そんなまさか。
（い、い…いやあああぁぁぁ）
アニーミの表情が絶望したようなものに変わる。
「あ、アニーミ？」
恐る恐るユリアがアニーミに声をかける。
「ち、違うから！　そんなの絶対嘘だからっ！」
普段大人しいアニーミが叫ぶとその場の全員がビクッと身体を震わせた。
錬機手帳に夢中のニムと放心しているシスカを除いて。
「…アニーミ？」
双子の片割れに何があったのかと、ユリアは心配でならなかった。
「一体、何なんだ？」
流石のルカもアニーミの様子にただ驚くだけであった。

＊＊＊

その日の授業は、シスカにとっての睡眠時間だった。
その様子を隣で見ていたアニーミは、ぼうっとしていた。
（…何か無防備でいるシスカさんって、可愛いなぁ）
授業は殆ど耳に入っていなかった。
「では、次…。アニーミ＝アナリーゼ」
教諭がアニーミを指名する。
（シスカさんは、ニムさんのことどう思ってるんだろ。これ…積極的にアプローチしないと駄目かなぁ）
「アニーミ！　アニーミ＝アナリーゼ！」

教諭がアニーミの名を呼ぶ。
今度は怒鳴るような大きい声だ。
「は、はい！」
アニーミは現実に引き戻され、大声を上げて立ち上がった。
教諭は咳払いを一つした。
「これは、将来的に一般汎用として使用されるシンフォエニッタです。しかし、今は政府関連のみのトライアルとして使用されています。さて、このシンフォエニッタは、何に使用される錬機動システムでしょうか」
「え、えっと…それは…その…」
難題だった。
錬機術に詳しくない上に授業を聞いていなかったアニーミの頭は混乱していた。
加えて今日は、予習ノートを持ってきていない。
最悪だ。
「…いかにシステムを有効に使うための高性能ＣＰＵ」
シスカの声が聞こえた。
寝言なのか、授業を聞いているのか分からない。
「基本メモリは三十テラから三ペタまで。しかし、巨大システム専用のものなので現在研究中。一般汎用されるのは、一番小さいシステムのみと想定されている」
きっとそれが答えなのだろう。
もごもごと小さく解を唱えるシスカの寝言をアニーミは復唱した。
「よく予習してきているようですね。素晴らしい。着席しても良いですよ」
「は、はい」
ほっと息をついてアニーミは着席した。
そして寝息を立てているシスカを見て、嬉しそうに笑った。
「うっわー…寝ながら授業受けてるとか器用ね」
ユリアが呆れたような溜息を吐いた。

ユリアの隣に座るルカは机に伏して爆睡していた。

＊＊＊

放課後、帰ろうとしたシスカにアニーミが声をかけた。

「シスカさん！」

「ん？　どうしたの」

「あの、ちょっと付き合って欲しいところあるんですけど」

「え、いいよ。じゃあ、ルカ達も誘って…」

「い、いえ！　ちょっと時計が欲しくて。私、朝苦手なので時計を買おうと思って…でも、どういうのがいいか分からなくて。システムに詳しいシスカさんにアドバイス貰えたらって」

ただの口実である。

錬機術関連の誘いならシスカは断らない。

それを確信しての誘いだった。

「そっか。それだったらルカ達は退屈かも…。でもいいの？　俺、結構そっち方面だと…その」

「詳しい人に聞くのが一番ですからっ」

逃すものかとアニーミは必死に誘う。

「あー…うん、わかった」

了承するシスカを見てアニーミの表情が明るくなる。

「それじゃ、行きましょう」

「…？　うん」

何故此処までアニーミが嬉しそうなのか、シスカには意味不明だった。

＊＊＊

街に出ると、アニーミがリードしてシスカを連れ回した。

ファンシーショップにデパート。

そして錬機動ショップ。
機械製品が置いてあって何がなんだか分からなかった。
「あ、これ可愛い」
小さなオルゴールつきの時計が目に入った。
それを手にとって、シスカは首を傾げた。
「あの…すみません」
少し遠慮がちにシスカは店員を呼んだ。
「はい？」
「あの、これオプションつけられますか？」
「ええ、つけられますよ。どのようなオプションを？」
にっこりと笑う店員に、シスカは一つ咳払いをした。
「表面のガラス部分のフィルタをハンマリングフィルタのＳ型でお願いします。それから内部のオルゴールですが、チターの値を三つほど上げて下さい。それから消耗を防ぐためにアゴーギグをランク上のＬ型で。それと…――」
「あ、あのー…お客様？」
少し引き攣った笑顔で店員が制止する。
「あ、はい。何ですか？」
「申し訳ございません。当店では、オプションをメニューから選んで貰う仕様になっておりまして…」
「あ…そ、そうなんですか。えっと、見せてもらっても」
「はい、此方でございます」
そう言って店員は、メニューを渡す。
それを見ても機能性に特化するものはなく、アクセサリー等のオプションしかなかった。
「…なんか、いいのある？」
アニーミにメニューを見せてシスカは溜息を吐く。
どうやら、自分がオタクだということをしらしめたことと気に入ったオプションがないことに落ち込んでいるらしい。
アニーミ的には自分の好きな可愛いアクセサリーはあったが、シ

スカの様子を見て購入をやめた。
「えっと、これ…また今度にします。シスカさん、行きましょ」
「うん…」
丸くなったシスカの背中を押してアニーミは外に出た。
その後、何軒か回ってみるもデザインと機能が一致するものは見つからなかった。
二人は公園のベンチで休憩していた。
（うーん…。折角のデートなのに失敗しちゃったかなぁ）
アニーミは深い溜息を吐いた。
「何かごめん。俺、こういうのなると結局…こういうことになっちゃって」
シスカが少し項垂れて深い溜息を吐いた。
「あ、いえっ！　付き合ってもらっただけでも嬉しいですし…！」
「うーん。…あ、ちょっと待ってて」
何かに気付いたらしいシスカは、ベンチを離れて走っていった。
（…？　何だろう）
首を傾げてシスカの姿を見送るとアニーミは小さく溜息を吐いた。
（シスカさんは、デートだと思ってないんだろうなぁ。友達との買い物程度にしか、多分…）
「はい」
シスカは、アニーミにクレープを差し出した。
生クリームと色とりどりのフルーツの入ったクレープだ。
「あ、ありがとうございます」
アニーミがクレープを受け取るとシスカは少しだけ微笑んだ。
アニーミの隣に座ってアイスコーヒーを飲む。
「あれ、シスカさんは食べないんですか？」
「いや、俺…その量食べれないしさ。それに、俺…男だから…その」
男が外で甘いものを食べるなんて恥ずかしい。
そんな時代錯誤なことを言わんとしているのがわかる。
その顔にアニーミは小さく笑った。

「あ、良かった」
「え？」
何が良いのか、アニーミはきょとんと目を丸くした。
「何か…ちょっと落ち込んでたみたいだから。食べ物で釣るのは良くないって思ったけど…やっぱ、アニーミは明るい方が似合うし…」
シスカのその言葉にアニーミの顔が紅潮した。
意外と自分を見てくれているという事実が嬉しかった。
クレープを口に含むと酸味の利いたフルーツと甘い生クリームがマッチして美味しかった。
「あ、美味しい」
「それなら良かった」
美味しそうにクレープを食べるアニーミにシスカは笑いかけた。
優しい笑顔。
しかし、その笑顔はずっと向けられている。
何か…おかしい。
「あの…どうかしたんですか？　凄くニコニコしてますけど」
「あ、ごめん。何か、アニーミって犬っぽいなって思って」
「へ？　い、犬ですか？」
「何ていうか…人懐っこい仔犬みたいな。気に障ったなら…あの、ごめん」
アニーミは落ち込んだ。
恋愛対象どころか…犬扱い。
人間扱いすらしてもらえなかった。
でも…それでも、シスカの笑顔を見るのは好きだ。
だけど、今日はもう一つ目的があった。
シスカとニムの関係。
「あの…シスカさん」
「え、何？」
恐る恐る顔色を伺ってアニーミがシスカに尋ねる。
「シスカさんとニムさんって…恋人同士なんですか？」

「……は？」
意味が分からないという様子でシスカは固まった。
「あ、あの…今朝のこととか…。なんか、シスカさん…ニムさんのために凄く頑張っているっていうか」
そこでアニーミは、我に返った。
（何これ！　嫉妬丸出しじゃない、あたしっ）
後悔に苛まれていると、突然肩を掴まれた。
「アニーミ！　あんまりおぞましいこと言わないで。本当に！」
「へ？」
おぞましいこと？
シスカの顔が段々と青褪める。
「あの人は、人に恩を売って無茶難題なお礼をさせて相手が疲れているのを楽しんでいるドSなんだ。言われた通りにやっていけば、思っていたのと違うとか言われたことしか出来ないなんてこのお馬鹿とか…。今回だって完璧にしてオプションつけなかったら、俺殺されるとこだったんだから」
恐怖にまみれた表情でシスカは語る。
「で、でも…今朝のキスは」
「多分、あれもあの人の道楽。俺の反応見て楽しんでる。でも、キスは初めてだったかも」
「き、キスは…って？」
他にも何かあるのかと恐る恐る聞く。
「俺の手使って胸揉ませたり、耳噛んだり、首舐めたり…。セクハラだよ。何考えてんだか、あの人は…」
勘弁してよ、とシスカは頭を抱える。
つまり、シスカはセクハラの被害者だったらしい。
「あっれー？　シスカ、そんなこと言っていいと思ってんの？」
「ひぃっ！」
背後からニムの声が聞こえてシスカの背中に悪寒が走った。
「今朝のキスもセクハラだなんて随分な言いようじゃない？」

ニムがいた。
草葉の陰から歩いてくる。
「だ、だだだだって…ニムさん、いつも変なことばっかりして。というか、いつからそこにっ？」
「何よう、変なことって。じゃあ、セクハラじゃないってこと教えてやるわよ。おいでなさい」
ニムがシスカの腕を、無理矢理引っ張る。
「ご、ごめん。アニーミ！　また後で…。いや、今度時計作ってあげるか…っててて！　ニムさん痛いっ」
無理矢理連れて行かれてしまった。
アニーミは呆然とするしかなかった。
「な、何なのよ！　あの人ー！」
わなわなとアニーミの手が震えた。

＊＊＊

誰もいない高台に連れて行かれたシスカは、ニムに怯えていた。
一体何をされるのかと思うと震えが止まらない。
「じゃ、やるわよっ」
「な、何を…？」
楽しそうな表情のニムにシスカの顔が引き攣る。
「今朝の仕切りなおし」
「はあっ？」
「ね、シスカ。キスしよ」
満面の笑顔でニムが言うが、シスカは目を逸らした。
「そんな簡単に言わないで…下さい。だって、俺…そういうんじゃ」
「じゃあ、あの子だったら出来るの？」
「は？　あの子って」
「さっき一緒にいた彼女。アニーミちゃんだっけ？　アンタと一緒で奥手そうよねぇ」

「何でそこでアニーミが出てくるんですか。今日はたまたま買い物に一緒に行っただけで…」
「ほんと、お馬鹿ね。シスカは」
「…はい？」
話が噛み合わないとでも言うように呆れた表情をシスカは浮かべた。
「いいから、いくわよっ」
「え、ちょっ…ニムさ…ッ」
有無を言わさず、ニムはシスカの唇に口付けた。
今朝みたいな軽い触れ合いではない。
ニムの舌が、シスカの歯を抉じ開ける。
「ッ！」
舌が絡み合い、吸われる。
身体のどこかがむず痒くなり、震える。
自然とニムの身体を抱きしめていた。
（…どうせ、悪ふざけだ。でも…）
いつものセクハラと違う。
こんな濃厚なキスは知らない。
悪ふざけも此処まで来ると酷い。
シスカは、ニムを離した。
「シス…えっ！」
そのままシスカは、ニムの身体を押し倒した。
「…悪ふざけもいい加減にしてください。じゃないと、怒りますよ…」
真面目な顔つきだった。
こんなことを別の男にしたら、間違いなく誤解されて冗談じゃ済まないことになる。
「それとも…痛い目に遭いたいんですか？　傷つくのは、ニムさんなんですよ」
本気で心配して本気で怒っているようだった。

その姿にニムは小さく笑った。
「シスカじゃないとやらないよ、こんなの…。だって、本当にあたしシスカのこと…」
「…確かにニムさんには感謝しています。それでも、取引代わりにこういうのは…俺、おかしいと思うんです」
「おかしくてもいい。いいよ、別に好きになってなんて言わない。でも…今は、今このムードでさ、何もしないなんて男じゃないでしょ？」
「え…？」
「シスカ。本気なの、あたし。今だったら何されてもいい」
「…ニムさん」
きっとニムは本気だ。
今だったら…シスカになら何をされてもいいと本気で思っている。
普段は、こんなこと出来ない。
ニムとは友達だ。
恋愛感情なんて持ったこと無い。
「本当に…いいんですか？」
「うん。今ならシスカの言うこと何だって聞いちゃう」
「それじゃあ…」
ゴクリとシスカは息を飲んだ。
「家までうさぎ跳びで帰って下さい」
シスカの言葉にニムの目が点になる。
ニムから手を離して立ち上がると、シスカは溜息を吐いた。
「…別に報告とかいらないですから」
「ちょっ！　あんた…この空気で何もしない気っ？」
「出来ませんよ…。俺、そんな勇気も無いし…そういうつもりもないし。第一…」
シスカは周囲を見て一呼吸置いた。
「此処、学園の近くなので誰が来てもおかしくありませんよ…」
その言葉に暫しの間。

「あー、そっか。人に見られるの恥ずかしいんだ？」
「あ、当たり前じゃないですか！　し、しかも…一応、俺…男だからそういうの…えと…」
「ほほう？　じゃあ、室内ならいいんだ？」
「何でそういう流れに持って行くんですかっ。はい、うさぎ跳び！」
「ちぇ…。はーい、分かりましたぁ～」
少し膨れて、ニムはうさぎ跳びでその場を後にした。
その姿を影でアニーミは見ていた。
最初から…最後まで。
（な、何なの…。あの二人っ！　ま、ますますわかんないっ）
アニーミはただただ混乱するだけであった。

# 第１４話　揺れる自制心

ソルフェージュに戻ると玄関口にユリアが仁王立ちしていた。
怒りのオーラを発している。
「え…ゆ、ユリア？」
「ちょっとツラ貸してもらおうか。このくそ野郎」
「へっ？　え、ちょ…いだだだっ！」
ユリアに耳を引っ張られシスカは連れて行かれた。
庭園に辿り着くと、ユリアはシスカを突き飛ばした。
「いてっ…！　ど、どうしたの？」
何故こんなにもユリアは怒っているのだろうか。
皆目見当もつかない。
「どうしたのじゃないわよ！　よくも先にデートした女の子放っておいて、別の女とデート出来るわねっ」
「え…？」
きょとんとシスカは目を丸くした。
「えーと、誰と誰がデート…したの？」
「はあっ？　アンタがアニーミ放ってニムとデートしたのは分かってんのよ！　ホント最低な男よね、あんた！」
怒りのユリアが発した言葉に思考を巡らせ、シスカは苦笑を浮かべた。
「いや、アニーミとは買い物行っただけだし…ニムさんには拉致されただけだし」
「だけ？」
ユリアのドスのきいた眼力に、シスカは肩を震わせて口を噤んだ。
シスカの胸倉をユリアは掴んだ。
「あの子がどんな気持ちでアンタを誘ったのか分かってんの？　ニ

ムとどういう関係か咎めるつもりはないけど、他の子の気持ちちゃんと考えてやりなさいよ！」
「ご、誤解だよ！　俺とニムさんは、そういうのじゃ…」
「…ほんと、馬鹿」
「え…？」
「今度あの子のこと傷つけたら、絶対許さないから！」
乱暴にシスカの胸倉から手を離し、ユリアは歩き去っていく。
呆然とユリアを見送ったシスカは、体育座りで俯いて溜息を吐いた。
（アニーミが傷ついた？　途中で帰っちゃったから…だよね）
傷つけた。
そういう意味だったら、後で謝らないといけない。
アニーミを放って、ニムに着いて行った自分が明らかに悪い。
それに、ニムのことにしたって…。
あの高台のキスを思い出して、シスカは顔を紅潮させた。
（何でニムさんが、俺なんかのこと…。俺は、友達でいたいのに。
…それに）
シスカは自分の手を見た。
あのキスの時に抱きしめた自分の両手。
どうして、抱きしめたのだろう。
そして、あの雰囲気では無理矢理乗り切ったけど…流されていたら、もしかして。
「いくらなんでも、それは無いよね…」
はは、と小さく苦笑した。
それでも、あの出来事は暫く忘れられそうも無い。
アニーミには、本当に悪いことをした。
このお詫びは、しないといけない。
「よーう！　モテ将軍！」
頭上から声がした。
顔を上げると満面の笑みを浮かべたルカだ。

「…何だ、ルカか」
「何だとは随分じゃねぇか！　ま、お前がそれ所じゃねぇのは分かってるけどよ」
「…人事だと思って楽しんでる？」
「まぁまぁ、話聞けよ」
シスカの隣にルカが座った。
「ニムのことなんだけどよ…。あいつ何で戻ってきたか、分かるか？」
「え？　ニムさんが戻った理由？」
「…知らねぇのかよ」
確かにニムは、事業の開拓に街を出て他の街へと移った。
社員に任せてモティーフに戻っただけだと思っているが、違うのだろうか。
「親父さんが事業に失敗したんだと」
「え？」
ニムの父親？
完璧主義者でいくつもの大企業を仕切っていている男だ。
そんな彼の手駒の一つの会社が駄目になったくらいで、それが何だというのだ。
「そんで失踪したらしくてな。今も捜索はしてるけど一向に見つからねぇ。だから、家を守る為に戻って来たんじゃないかって話だ。クラスの奴が言ってた」
「失踪って…。家を守るって、だってあの人のお母さんは…。ほら、あの綺麗な…」
「は…？　おい、まさか知らねぇのかよ」
何が？
ニムの母親を何度か見たことがある。
上品でおしとやかそうで…とてもあの人からニムが生まれたのかと疑うくらいの清楚な人だ。
「あれ、母親じゃねぇぞ」

「え…？　それ、どういう…」
母親じゃない？
だって、確かにニムの父親と一緒にいたし家に出入りだってしていた。
自分の家のように。
「…まずったなぁ、くそ」
「ルカ、どういうことだよ。あの人がニムさんの母親じゃないなら、何なんだよ！」
「おい、落ち着けって。何かおかしいぞ、お前」
立ち上がり興奮して叫ぶシスカをルカが制止した。
「別に…おかしくなんて、無いよ…」
落ち着いたシスカは、再び座り込んだ。
「それで…何。どういうこと？」
動揺してる。
どうでもいいじゃないか。
ニムさんの家庭事情がどうだろうが、関係ない。
でも…。
でも……。
「…愛人なんだと。父親の。母親は、もう死んでいるらしい」
シスカの表情が硬直した。
ああ、そうか。
だから、父親と寄り添って歩いていて家にも出入りしている。
その父親がいなくなったら、当然愛人は…。そういうことだ。
つまり、家を守れるのはニムしかいなくなる。
「…だから？」
自分でも冷たい声だと思った。
「だからって、お前…」
「ニムさんの家庭がどうであれ関係ないよ。知ったことじゃない…」
そうだ。
知ったことじゃない。

俺には、関係ない。
母親がいないのに愛人を受け入れなければならない？
嫌なら受け入れなければいいじゃないか。
でも、あの人は違うんだ。
父親の重荷にならないようになりたくて、父親の幸せを願っていて…。
だから、好きでもない愛人を母親のように慕う振りをした。
我慢してたんだ。
自由奔放な”振り”をして。
でも、だから何だっていうんだ。
友達でいることには変わらない。
変わらない、筈なのに。
「戻ろう、ルカ。少し冷えてきたし」
「お、おう」
ソルフェージュの玄関へと歩いていく。
突如、シスカの携帯端末が鳴った。
発信元は、ニムだ。
「……」
出るか迷った。
反省すべきだ。
きっとまた軽々しくくだらないことをやるに違いない。
無機質で規則的な着信音が鳴り続く。
仕方ない。
そう思って、シスカは通話ボタンを押した。
「ニムさん。本当に、いい加減に…して…」
先手を打とうと思った。
しかし、様子がおかしい。
妙に静かだ。
しかし、すぐに大きな物音がした。
「シスカ…」

妙に弱々しい声だった。
「助け…助けて」
そこで、通話は切られた。
シスカの身体全体が硬直して、瞳が戦慄いた。
嫌な予感がする。
「あ、おい！　シスカ！」
自然と走り出していた。
ルカは追いかけようとしたが、それが出来なかった。
あんなシスカは見たことが無い。
前はそんなことなかったのに、ニムの話になると様子がおかしくなるのは確かだった。
その後姿を見て、ルカは呆然とするのだった。

＊＊＊

高台。
公園。
学園。
配達店。
自宅。
彼女が行きそうな場所には、何処にもいない。
「何処だ…。ニムさん…！」
周囲を見渡す。
一体、何処にいるんだ。
息を切らす。
嫌な予感しかしない不安で怖くなった。
「テメェが最初に誘ったんだろうが！　あァっ？」
男の怒鳴り声が聞こえた。

まさか。
まさか…。
まさか……。

＊＊＊

「だ、だから謝ってるじゃない。冗談だって…」
怯えた様子でニムが男二人に言う。
「良いことしないかって言って来るってことは、そういうことなんだろ？　今更、冗談で済むかよ。いいから、こっち来いよ！」
「い、痛い！　や…やめてよ！　男の癖に女の子にこんなことして…」
「女だからするんだろうが！　誰に電話したのか知らねぇけど、なめてんじゃねぇぞ」
男の一人がニムを押し倒す。
「やっ…！　嫌あぁぁっ！」
ニムの悲鳴と同時に彼女を乱暴に扱っていた男が吹っ飛んだ。
冷たく鋭い眼光。
シスカだった。
「何だテメェ…」
「…何だ？」
冷たい声で静かに言うと、男の胸倉を掴んで壁に叩き付けた。
「いっで！」
「お前らこそ、何やってんだ？」
男は抗うが、シスカの強い力に押さえ込まれびくともしない。
その目と力に恐怖で男は口をぱくぱくと開閉させた。
「調子乗ってんじゃねぇぞ！　ガキが！」
もう一人の男が折れ曲がった鉄パイプを持ってシスカに襲い掛かる。
しかし、掴んでいた男を背負い投げして向かってくる男を巻き込

んだ。
そして、男の一人の首を絞めた。
「調子に乗ってるのは、お前らだろ。女の子一人相手に男二人が何やってんだよ。この人に手出してみろよ。…殺すぞ」
「ぁが…！」
ギリギリと男の首を両手で絞める。
首の骨が軋み、本当に相手を殺してしまいそうだった。
「シスカ！　やめてっ」
ニムの声で、ハッとシスカは普段の表情に戻る。
男から手を離すと、二人は情け無い声を上げて逃げて行った。
シスカの顔が青褪めて、へなへなと座った。
「あー…また、俺…。何でこう…」
落ち込んだ様子でシスカは項垂れた。
最近、キレる確率が高い。
つい頭に血が上ってしまう。
「…ニムさん、平気？」
シスカは、優しくニムの肩を掴む。
情けなくて心配そうな表情だ。
「う、うん。あはは…ありがとう」
頭を掻いて苦笑するニムにシスカは顔を上げた。
パン、と乾いた音が裏通りに響く。
ニムは呆然とした。
シスカの平手打ち。
初めてだった。
「…本当に、心配しました。言った筈です…。　傷つくのは、ニムさんなんだって。俺が来なかったら、大変なことになっていたかもしれない…」
シスカはニムを抱きしめた。
その強くて優しい抱擁（ほうよう）にニムの頬が赤くなり、シスカを抱き返した。

「…ごめんね、シスカ」
「謝るくらいなら…最初からしないで下さい。俺以外だったら…みんな、誤解して当たり前です…」
「……シスカは、誤解してくれないの？」
少し寂しげにニムが言うと、シスカは言葉を噤んだ。
少しの間を置いて、再びシスカは口を開いた。
「誤解して欲しいんです、か…？」
少し消え入るような声。
ニムは小さく笑って、頷いた。
シスカは、顔を紅潮させた。
「でも、俺……その…。ニムさんとは…」
「お願い、シスカ。じゃないと…私、また」
「うっ…。それは、困り…ます…」
「じゃ、お願い」
ニムは笑顔を向ける。
慌てたように顔を真っ赤にするシスカは、息を吐いて少し抱きしめていた身体を離した。
「…本当に、もうやらないって…約束、出来ますか？」
「勿論。あたし、約束は守るもん」
そして、目を伏せたニムにシスカは息を飲んだ。
この一回…一回だけでいいんだ。
軽く、軽い所までで済ませる。
それが、彼女にとって物足りなくても…一回は一回だ。
目を伏せたニムにシスカは口付けた。
積極的に舌を絡ませる。
「んっ…」
拙いけれど、高台でキスした時よりも濃厚なキスだった。
キスをしたままニムを優しく押し倒し、唇から首へと徐々にキスをした。
顔を上げるとシスカは自分のしたことに顔を赤くして、今にも心

臓が爆発しそうだった。
「キス、上手いじゃん。他の子にもしてたとか？」
「ち、違…！　俺、こういうの初めてで…その…。本当に…いいの？　俺だから安心してるって言うなら…その…」
「此処まででして何言ってんの、馬鹿。知ってるわよ。シスカだって男の子だもん。狼になる時だってあるよ、そりゃ」
「うっ…。で、でも…」
「それとも、外だから嫌？」
「…もうそういうの、吹っ飛んでるかも」
はは、と苦笑してシスカは頬を掻く。
「……ニムさん。俺…やっぱり」
好きでも無い相手とこんなのおかしい。
そうは思う。
流されている。確実に。
「…お願い、シスカ」
彼女は求めている。
シスカがニムを友達以上に好きじゃないことは知っている。
だからこそ、最初で最後のわがままだ。
そうだ、彼女の為に軽くだけ…。
…最後までやらなければいいだけだ。
抑えないと…。
そうじゃないと、きっと今までの関係が崩れてしまう。
「……分かった」

＊＊＊

ジェントは、一人それを見ていた。
スフォルツァンドのシミュレーション結果。
真面目な顔で、それを見ている。
「…やっぱり、そうか。彼は…」

意味深に呟いて、ジェントは溜息を吐いた。
「これ、報告するの勿体無いなぁ…」
小さくぼやいて、子供のように楽しそうな笑みを浮かべた。

# 第15話　同化

憂鬱だった。
昨日の出来事を思い出して、シスカは机に突っ伏した。
幸いなのかは知らないが、ニムは欠席していた。
シスカが憂鬱な理由。
あの後、自制心がきかずに最後までしてしまったのである。
（しょうがないじゃないか。俺だって、男なんだから）
はぁ、とシスカは溜息を吐いた。
（でも、これでニムさんがあんなことしなければ…充分だ）
きっと彼女は、甘えたかったのかもしれない。
父親がいなくなって寂しくて、あの広い屋敷に一人…だから心許せる自分を頼ってきた。
でも、その甘え方は歪んでいた。
「あ、あの…シスカさん？」
アニーミの声がした。
顔を上げる。
「あの…次、移動教室ですけど…」
「あー…」
ぼうっとして周囲を見渡すと、アニーミとシスカ以外誰もいない。
とてもじゃないが、授業を受ける気になんてなれない。
そうだ。
アニーミに謝らなきゃ。
「アニーミ…」
「は、はい？」
「んと…ごめん。昨日、置いていったりして」
「……」
二人の間に沈黙が訪れる。

「あの、シスカさん…」
アニーミが何か言いかけた時、警報が鳴った。
避難勧告が発令された。
「…行こう、アニーミ」
「え、あ…はい」
一般市民は、シェルターへ。
騎士隊やそれに関係する者は、ソルフェージュへ急いだ。

＊＊＊

今日のルーディメンツは、無数の足が生えていて身体の至る所にゼリー状の皮膚がテラテラと見える。
「何アレ。きっも！」
ユリアが怪訝な顔をする。
「そいつの装甲は硬い。通常の武器では傷がつかないから強度の高いビーム粒子の武器を装備させた。頼むぞ、シスカ」
通信でロックの声を聞いて、シスカは顔を上げた。
「…はい」
もう前ほどの恐怖はない。
何故か落ち着けた。
冷静になれば、きっと見える。
シミュレーションテストでもそうやってきた。
でも、何処か精神が安定しない。
（駄目だ。集中しないと）
シスカは操縦桿を強く握った。
「さて、お手並み拝見だな」
カペラもブリッジで両腕を組んでモニターを見た。
（シスカさん…）
どうしてもアニーミは、シスカとニムのあの高台のやり取りが脳裏から離れなかった。

その後の情事を知らないのが幸いなのだが、アニーミは深い溜息を吐いた。

＊＊＊

ソルフェージュから飛び立つとその巨大なルーディメンツに息を飲んだ。

マシンガンを装備しルーディメンツに牽制すると、叫び声が轟き激しいスピードで向かってくる。

それを想定してビームサーベルを装備して斬り付ける。

一刀両断したかと思えば、ルーディメンツが分離した。

「分離したっ？」

向かってくる敵が二体になったことでシスカは焦り始める。

「ど、どうしよう…。斬る度に分離するんじゃ…こ、これ…」

『シスカ！　落ち着けっ』

ロックの喝に、ハッとシスカは抱えていた頭を離す。

『ダメージを与えることで増殖するなら、粉砕するんだ。爆弾があるからそれで叩け』

「は、はいっ」

パネルを弄り、爆弾を装備しようとした時だった。

「え……？」

遠くに何か小さい影が見える。

岩陰に隠れていたのは、貴族の男子生徒達…アルベルトとジェリドだった。

「へぇ、あれがブレスか。あの弱虫シスカが乗ってるなんてまだ信じられねぇぜ」

「どうせ無様に倒されるんだろ。まぐれがそう何度も続くものか。見届けてやろうぜ」

笑いながら、二人は双眼鏡でその戦いを見ていた。

その二人を見つけたシスカは、目を戦慄かせた。
「な、何で人が…。避難勧告は出た筈なのに…」
『シスカ、どうした』
「民間人が二人ほどいます！　敵を引き付けながら遠ざけます」
『待て、シスカ！』
ロックが呼び止める前にスフォルツァンドが敵を引き付け、アルベルトとジェリドから離そうとする。
そのためには、近接戦に持ち込むしかなかった。
（どうしよう。ああは言ったけど…守りながらの戦闘なんて）
いつも以上に神経質にならなければならない。
敵を引き付けようとするが、どうしても一匹しか引き付けられない。
目の前のことに集中していたせいか、ハッと気付くともう一匹が二人へと向かっていた。
「え、あれ…やばくね？」
「う、うわあぁぁ！　に、逃げろっ」
二人が走って逃げようとするが、敵の方が速い。
「くっ…」
スフォルツァンドは走った。
間に合え…間に合え…間に合えっ！
ルーディメンツが黒い霧を吐いて二人を攻撃しようとした時、ギリギリのラインでエネルギーシールドで守った。
初戦で使った搭載されていないはずの装備だ。
「早く…早く逃げて！」
シスカが叫ぶ。
「は？　…助けてくれた？」
「お、おい！　早く行くぞっ」
呆然とするジェリドをアルベルトが急かした。
黒い霧がシールドを溶かしていく。

二人が遠くに逃げるまで耐えないと…。
「や、やばい…！」
二人が充分な距離に到達しようという時、シールドが割れた。
「うわあああああぁぁっ」
黒い霧がスフォルツァンドを貫き、コックピット内のシスカを捕らえた。

「シスカ！」
ロックが叫ぶ。
まさか、また…。
今度こそ、あんな奇跡は起きない。
「くっそ！　いつになったら、俺は出れるんだよ！」
「落ち着けルカ。今騒いでもどうにもならん。シスカ、聞こえるか？　シスカ！」
通信を送り、ロックは叫んだ。

コクピット内のシスカは、黒い霧に首を絞められていた。
「ッ、かは…ッ。だ、大丈夫で…すっ」
精一杯の返事だった。
意識を強く保っているからか、飲み込まれることはなさそうだが息苦しいのは変わらない。
（苦しい…。早く、やらないと…！）
操縦桿に手を伸ばし体勢を立て直そうとした。
しかし、ルーディメンツが先にスフォルツァンドの頭に噛み付いた。
「ひぎっ、あああぁぁぁっ！」
脳味噌を無理矢理こじ開けられるような感覚。
何だこれは…。
スフォルツァンドが傷ついて、どうして中の人間に此処まで影響

が出る？
　人間と機械は切り離された存在のはずなのに、神経が通っているようだった。
　ルーディメンツの歯がスフォルツァンドを捕食する度、シスカの脳が汚染され、激痛が走る。
「うぁ…ッ！　ぐっ…あぁぁぅ！」
　ガリッ…ガリッ…ガリガリッ
　脳内を貪られる。
　それがルーディメンツの栄養となっていた。
「やめろおおぉぉっ！　うわあああああぁっ！」
　シスカは叫んだ。
　食べられる。
　このままじゃ…内部から汚染されて食べられてしまう。
　ガリッ…ガリリッ…バリッ…バリッ…バリッ。
「ひっ！　ふぅ…あっ！　あああぁぅ！」
　――バキッ。
　亀裂が入った。
「…ッ、ぁ…！」
　シスカの目が大きく戦慄いた。
　何かが壊れる音がした。
　スフォルツァンドが停止し、シスカの脳内にルーディメンツが干渉してきた。
「ッ、あああああああぁぁぁぁっ！」

「シスカッ！　返事をしろ、シスカッ！」
　ロックが呼びかけるも聞こえるのは、シスカの悲鳴だけだった。
「どういうことだっ！ブレスが傷ついてもパイロットにそこまで影響は…！」

「同化しているんだよ」
焦るロックに静かにジェントが言う。
「おかしいと思ったんだ。多少パイロットとブレスの相性にズレがある筈なのに、シスカの場合はそれがなかった。データを見て確信したよ」
「…どういうことだ」
「一ミリのズレがないんだよ。だから常に安定していたし、自分の手足のように操縦できる。相性が良すぎるどころの話じゃない。同化しているとしか思えない」
その言葉にロック達は驚愕した。
「…へぇ、興味深い」
ニヤリとカペラが笑った。
「テメェ…！　シスカがあんな目に遭ってるのに何笑ってやがる！」
ルカがカペラの胸倉を掴んだ。
「やめろ！　ルカっ」
ロックが制すると震えてルカが手を離した。
最高責任者に手を出したらどうなるかくらいルカにも分かっている。
身なりを整えてカペラは、息を吐いた。
「今までにない症例だ。ブレスとの同化。それが吉となるか凶となるか、楽しみだな」
「てめっ…！　あいつを何だと…！」
「兵器だ。ルーディメンツを倒すための道具だよ」
「ふ…ふざけんなあぁぁっ！」
ルカの怒りが頂点に達した。
「ま、待ってください」
今すぐにでもカペラに殴りかかりそうなルカだったが、アニーミの焦りの声が上がったことで止まった。
「パイロット…スフォルツァンドから分離。る、ルーディメンツとのシンクロを始めました！」

「な、何だとっ！」
ルーディメンツとのシンクロを開始？
もしジェントの推測が本当なら…。
スフォルツァンドの代わりにルーディメンツと同化するということか。
しかも、今のシスカは脳が汚染されている。
嫌な予感しかしなかった。

＊＊＊

シェルターに到着したアルベルト達は、恐怖に息を荒げていた。
「あ、あいつ…あんなのと戦ってんのかよ！　や、やばくね？」
「つか、俺達守ったせいでやべぇことなってやがる。し、死んだらどうしよう…」
アルベルトとジェリドは、頭を抱えて涙目になっていた。
「どういうこと…？」
ニムの声が聞こえた。
「ど、どういうことよ！　シスカが死にそうって…あんた達を守った所為でって、どういうことよ！」
怒りの形相でニムは叫んだ。
アルベルト達は、黙って目を逸らした。
拳を握って歯を食い縛り、ニムは座り込んだ。
「シスカ…。お願い、死なないで…。戻ってきてよ…！」
涙声でニムは切実に呟いた。

# 第１６話　知りたいもの知らないもの

ルーディメンツに脳を貪まれ、シスカは操縦桿を握り堪えていた。
自分でも分かる。
飲み込まれていくことが、分かる。
でも、絶対に負けたくなかった。
何処までもこいつらは、干渉してくる。身体を取り込もうとしているのが分かる。
きっと、自分が戦う前は同じように戦っていた人達がいた筈だ。
今も…みんな、戦っている。
きっと今まで沢山犠牲が出たのだろう。
ブレスが二機しかないのはそのせいかもしれない。
だとしたら…これ以上、犠牲を出したくない。
その中には勿論自分も…。
「ッ、…ぐぅっ！」
脳を掻き混ぜられる感覚がして、何度も吐きそうになる。
通信のパネルを押すが動かない。
スフォルツァンドも機能を停止している。
絶望的…。
いや、絶望なんて…簡単に思っちゃいけない。
生きている限り…絶望なんかない。
絶望を感じていた二年前だって、自分の足で歩けた。
ルカがいたから、一緒に歩けた。
今は、仲間がいる。
騎士隊のみんなが…いてくれる。
だから、俺は負けない。
「負けて…たまるかあああぁぁぁぁっ！」
汚染された脳内を振り払うように顔を上げて、操縦桿を力いっぱ

い握り締めた。
この気持ちは自分だけのものだ。
この気持ちまで侵されるわけにはいかない。
だから、頼む。
動いてくれっ！
シスカの叫びに呼応するように、スフォルツァンドの目が光り再起動する。
それだけではない。
スフォルツァンドのスマルト色の装甲が眩いほど更に青く輝いている。
シスカを巻き付ける黒い霧も消滅し、頭の中も妙にクリアだ。
「これは…」
自分でも不思議な感覚がした。
力が漲ってくる。
手に残る光の粒子を握り締める。
何がなんだかよく分からない。
でも、これは自分を優勢に立たせてくれる力だ。
あの時の…初めて戦った時の力の比じゃない。
あんなビームやシールドの比じゃない力が漲ってくる。
シスカは、スフォルツァンドを走らせた。
大きく口を開ける敵が迫ってくる。
その口に拳を入れて手を開くと爆発的なエネルギー粒子が弾け、ルーディメンツは木っ端微塵に吹き飛んだ。
「あと、一匹！」
ビームサーベルを構え、突進する。
普通に斬れば分裂するのは分かっている。
だったら…。
「粉々に吹き飛ばすだけだっ！」
敵の口から発せられる泥のような液体。
地面に跳ね返り、スフォルツァンドの足の装甲の一部を溶かした。

「うぐぅっ…！」
溶けた瞬間、足に激痛が走った。
「あぁっ！　…ぐっ…くっ…！」
この痛みが、生きていることを実感させてくれる。
「うおおおぉぉっ！」
痛みを振り切るように叫んで、敵をビームソードで串刺しにしてスフォルツァンドから伝わるエネルギーがビームサーベルを伝わり敵の身体へと集中する。
ビームサーベルを抜き取り、敵から離れた瞬間、爆発が起きた。
戦闘が終わった後、シスカは動かずに自分の手を見ていた。
スフォルツァンドと繋がる神経、謎の爆発的な力…。
スフォルツァンドとは何なのか、ブレスとは何なのか…ルーディメンツとは何か。
その答えを知りたかった。
大事な人達を守るために戦う。
でも、答えを知りたい。
政府が何故、こんな力を持っているのかと。

＊＊＊

ソルフェージュに戻ったシスカは、厳しい顔をしていた。
皆、勝利に喜んでいたが…何処か雰囲気がおかしいシスカに気付いて周囲も大人しくなった。
「よっ！　シスカ、やっぱお前はやる奴だと思っ」
「ごめん、ルカ。後で聞くから」
ルカを横切って、シスカは先程の戦闘で痛めた足を引き摺ってカペラとシロフォンへと近付く。
少し緊張した様子で目を泳がせ、漸くその顔を上げた。
「あの…教えて欲しいことが…あるんです。その、スフォルツァンドは」

「今日はよくやった。疲れただろう、休め」
シスカの言葉を遮り、カペラがはっきりと物言いをする。
「聞いてください。俺…！」
「悪いな。こう見えても忙しい身だ。今、君に語ることは何も無い」
「そんなっ！　だって、俺とスフォルツァンドは！」
「くどい。今日はもう休め。…命令だ、分かったな？」
「ちょっと待っ…待ってください！」
「シロフォン、行くぞ」
「はっ」
背中を見せてカペラとシロフォンは、去って行った。
語ることは無い。
どうして…？
だって、知らないことばかりじゃないか。
それなのに、どうして教えてくれないんだ。
モヤモヤする。
物凄く、心の中が…不快だった。
「シスカさん…」
シスカが俯いて拳を握る姿を見て、アニーミは小さく彼の名を呼んだが返答は無い。
俯いているシスカの頭に大きな手が乗る。
顔を上げた。
ルカだ。
「腹減らねぇか？　何か食いに行こうぜ。少し落ち着いてからでもいいだろ」
シスカの心中を察し、満面の笑顔をルカは浮かべた。
こういう時、ルカのこの笑顔に救われる。
単純だと思うが、少しだけ心が軽くなった気がする。
「んー！　あたしもおなかへった。　アニーミも行こうよ！」
「う、うん！」
背伸びをするユリアとシスカを見ていた視線をユリアに向けてア

ニーミも便乗する。
「おう！　ロック達はどうすんだ？」
ルカがロックとジェントに声をかけるが、二人は苦笑した。
「大人は、ガキ共と違って仕事あんだよ。お前らだけで行って来い」
「まぁ、あんまり遅くならないようにね。特にシスカは疲れているんだから」
「あ…は、はい」
気を使ってくれたのかどうなのか分からない。
それでも、今は大人達がいると余計なことを聞いてしまいそうだった。
また今度、頭の中を整理しよう。
今は…少しくらい、気が緩むのを許して欲しい。
「で、何が食べたいのよ。シスカに合わせるわよ。なんたって今日のＭＶＰなんだからね」
「えー…と、じゃあ…あの店かな」
「おっ！　もしかして、あそこか。お前も好きだな！」
ルカは足を引き摺るシスカの肩に腕を回し、無理矢理自分の歩幅に合わせ歩いていく。
「…何処？」
ユリアとアニーミは顔を見合わせ、首を傾げた。

＊＊＊

向かった先は、一軒のラーメン屋だった。
店内はお世辞にも綺麗とは言えなくて、壁には油の染みがあり何処か一昔前の雰囲気を彷彿とさせる。
「よーっす！　親父、久しぶりだな」
「久しぶりも何も、おめーは昨日来ただろうが」
頭にタオルを巻いて無精髭を生やす男が豪快に笑う。
「おっ！　シスカが来たってことは…恒例のアレか！」

「その為に此処選んだんだもんな？　賞金高ぇし」
「うん。おじさん、俺いつもの」
明らかに常連のシスカとルカを見てユリアとアニーミは呆然とした。
「しょ…賞金？」
「お前ら適当に頼んでいいぜ。どうせシスカの奢り…つか、タダだしな」
「は…？」
ユリアとアニーミは意味が分からないといった様子でルカとシスカを見た。
未だに状況が分からない。
「まだ決まったわけじゃねぇ！　シスカ、今度こそ負けねぇぞ！　今回はこれだっ！」
バン！と店主は、壁に張ってあるチラシを叩いた。
「激辛味噌特盛ラーメン、特盛チャーハン、餃子三十皿！　スープ一滴、米一粒残すことなく三十分以内に食えれば、賞金一万ネカだ！　食えなかったら、料理分の代金だ。やめるなら今のうちだぜ、シスカ！」
自信満々に腕を組む店主が笑うも、シスカは何事も無いようにカウンターに座った。
「じゃ、それでお願いします」
シスカは、特に怯える様子もなく店主の挑戦を受けて立った。
シスカにとっては、良い小遣い稼ぎだった。
他の同じような場所へ行っても賞金は精々三千ネカ。そうなると、この店は七千ネカも稼げる。
たくさん食べてお金も貰える。
貧乏なシスカには、持って来いの挑戦だった。
ぐぬぬ…と呻き、店主は厨房の奥に消えた。
「だ、大丈夫なんですか？」
「シスカはこの店のチャレンジ常連だからな。今まで、全勝してる

し大丈夫だろ」
「…どんな胃袋してんのよ」
呆れた表情でユリアはシスカを見る。
アニーミは心配そうにおろおろしていて、ルカは勝利を確信するように笑いながら各々が食べるメニューの注文をした。
そして並べられたチャレンジメニュー。
店の客全員が、ギャラリーとしてシスカを見ていた。
「…よし、始め！」
店主の掛け声を合図に割り箸を割り、シスカの挑戦が始まった。
ただ食べるだけではなく、無駄の無い動きはまるで研究を重ねた上で身につけた技術のようだった。
しかも時間を気にしながら苦しそうに食べるのではなく、美味しそうに食べている。
しかし、そのスピードは常人を卓越していた。
客全員が魅入っている中、最後のスープ一滴を飲み干しどんぶりを置いたことで勝負は決した。
「よっし、終わったな。さて、タイムだが…。……は？」
店主がストップウォッチを見て大量の汗を流しながら震えていた。
ゴクリと生唾を飲んでシスカ達が店主を見ると彼は、ストップウォッチを前に出して涙を飲んだ。
「二十三分四十秒…。うおおぉぉっ！　新記録じゃねぇか、シスカ！」
「今回も勝ったよ、ルカ！」
ルカとシスカがハイタッチすると、客からも歓声が上がり拍手が送られる。
「あ、おじさんご馳走様でした。激辛味噌おいしかったです」
特に嫌味でも何でもなく、シスカが笑って見せると肩の力が抜けたように店主は溜息を吐いた。
「ったく…おめぇには敵わねぇよ。このチャレンジコースで稼げると思いきや、おめぇみたいなのいるしよ。…まぁ、おめぇの姿見て

安易に挑戦した奴の屍は見てきたけど」
「し、屍って…。あ、おじさん。あとアイス食べたい」
「まだ食べるのっ？」
流石のユリアも突っ込まざるを得ない。
あれだけ食べておきながら、まだ食べるというシスカの胃袋が信じられなかった。
しかもラーメン屋にアイスが置いてあるのかという疑問もあったが、店主はすぐに市販のカップアイスをシスカへと渡した。
「この店でアイス食べる奴なんて、おめぇしかいねぇよ。…つーか、うちじゃ扱ってねぇんだけどな。良い食いっぷり見せてもらったから、おまけだ」
「ありがとう、おじさん」
美味しそうにシスカはアイスを食べていて、店主は機嫌よさそうに笑った。
しかし、ふとアニーミは疑問に思ったことがある。
「あれ？　そう言えば…シスカさん。以前、私にクレープ奢った時に全部食べれないって言ってましたけど…あれって」
「あー、あれ？」
前に時計を探しにアニーミと出掛けた日を思い出した。
「食事とデザートは別だから」
確かに別腹という言葉はある。
しかし、シスカの言っていることはそうではなく食べられる量の問題を言っているのだろう。
だが、シスカがこれだけ大食いであればクレープの一つくらいものともしないと思うのだが…。
「あと、ちょっと…生クリームが苦手でさ」
確かに、デザート系のクレープに生クリームは付き物だ。
それじゃあ、それと量の問題を取り除いたら…。
想像するだけで恐ろしい。
「ぎゃあああぁぁっ」

客の一人が悲鳴を上げた。
「かっら！　辛いっていうより、痛い！」
シスカが挑戦したメニューの激辛味噌ラーメンの並を食べていたらしい。
飛び跳ねるほどの辛さらしく、店主は誇らしげに笑った。
「あったぼうよ！　なんたってブート・ジョロキア十七本をスープに染み込ませたんだからな！」
その場の全員の顔が青褪めた。
ブート・ジョロキアといえば世界一辛い唐辛子と有名だが、それが十七本。
明らかに人間が食べる辛さでは無い。
それを涼しい顔で食べるシスカは、化け物かと思ってしまう。
「ほんとにシスカの辛党には参るぜ。おめぇ、いつか早死にすんぞ」
「大丈夫だよ。普段はちゃんと栄養取ってるし」
「だったら良いけどよ。おめぇが来ると心が躍っちまうぜ、別の意味で」
「うん。チャレンジメニューとは別に、此処おいしいから。次に来るのが楽しみになるよ」
「かー！　言ってくれるじゃねぇか！　その言葉あってこそこの商売やっていけるってもんだ！」
「うん、いつもありがとう」
そんな風に和やかな会話を聞くが、先程の戦場が忘れられないユリア達にはその光景が次なる戦いの宣戦布告にしか聞こえなかった。
「流石は、俺の見込んだ男だけあるぜ」
ルカは、満足そうに笑った。

＊＊＊

店を出る頃には、陽が沈みかけていてオレンジ色の空が眩しかった。

「さーってと、そろそろ帰ろっか。あたし、夜に見たいテレビあるし」
「俺も、ちっと筋トレしねぇとな。最近サボリ気味だし」
ユリアとルカは帰宅モード万全だった。
「それじゃあ、帰りま…――」
「あ、ごめん。俺とアニーミちょっと用事あるから先に帰ってて」
二人と同じく帰宅モードに入ろうとしたアニーミの言葉をシスカが遮る。
「えっ？」
驚いてアニーミは、シスカを見た。
その様子を何となく把握したユリアは、笑みを浮かべた。
「分かった。でも、あんまり遅くならないようにね！　…シスカ」
「え？　うわっ！」
ユリアはシスカの肩に手を回し、耳元で囁いた。
「次、アニーミを傷つけたら全力で殺すから覚悟しなさい」
「は…はい…」
先日、アニーミを置き去りにしたことを言っているのだろう。
あの時のことを肝に銘じておけということだ。
次、同じことがあれば自分の命は無い。
確信できた。
「おう、シスカ。あんま遅くなんなよ？　疲れてんだからな」
「うん、わかった」
ルカが念の為と注意をすると、シスカは頷いた。
「んじゃ、行くぞ」
「はいはい。アニーミ、シスカに襲われたら全力で助けを求めるのよ！」
そう言ってユリアは、ルカと共にソルフェージュへ向かって歩き出した。
「もう、ユリアったら…」
「ははは、信用されてないなぁ」

シスカは苦笑を零すも、次にはアニーミを見て微笑んだ。
その笑みにアニーミの胸が高鳴った。
「行こうか」
「…はいっ！　あ、あの…シスカさん…。その…」
「ん？」
「その…あの…手を…繋いでも…」
精一杯の勇気だった。
きっと自分からアプローチをしないと誰かに取られてしまいそうで不安だった。
ニムのことがあった以上、負けていられない。
ニムに負けないくらい、彼に気にかけてもらいたい。
（だ、駄目かな…。どうしよう）
駄目だったらどうしたらいいのかと考えて、うろたえるアニーミの前に手が差し出された。
「うん。ちょっと足痛いから、手…貸してくれると嬉しいかな。ありがとう、アニーミ。その…気を遣ってくれて」
アニーミの想いは届かずに勘違いをしていたが、それだけで充分だった。
シスカの手をアニーミが取る。
胸が高鳴って少しうるさい。
それでも、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

# 第17話　少女の面影

シスカとアニーミは、既に使われていない大きなビルの最上階を目指した。
差し詰め、経営困難になって倒産した企業というところだろう。
人はいなくても、オフィスのような机や椅子が各々の部屋に並べてあった。
エレベーターが使用できることから、まだこの場所は管理されているということが分かる。
切れかけた白熱灯が、薄暗い光を発し何処か不気味だった。
「あの、シスカさん…。ここは？」
何故こんな場所に連れて行かれているのか、アニーミは不思議だった。
しかし、シスカはずっと無言でアニーミの手を握って先導していた。
エレベーターの最上階は、屋上だった。
オレンジ色の夕陽をバックにした街全体が見渡せる綺麗な景色だった。
「綺麗…」
思わず感嘆の息をアニーミは漏らした。
「…俺、気に入ってるんだ」
「…綺麗ですもんね。こんなに街が見渡せて…ふふ、ちょっと街の建物が玩具みたいに見えます」
嬉しそうなアニーミにシスカは微笑んだ。
「こないだのお詫び。ルカにも教えてないんだ、此処は」
「そう…なんですか？」
大親友であり家族同然のルカにも教えていないこの場所をアニーミに教えた。

それは嬉しかったが、何故自分に教えてくれたのだろうか。
「ま、それだけなんだけどね。何となく、見て欲しかっただけ。アニーミだったら喜んでくれるかなって…。今は無性に誰かの笑った顔が見たくてさ…」
「笑った顔…？　……さっきのラーメン屋でルカさんやお店の人が思いっきり爆笑していましたけど」
「ルカの馬鹿笑いじゃなくて…。んー…うまく言えないんだけど。…あっ！」
困ったように頭を悩ませるシスカだったが、何か閃いたように笑った。
「そう、笑顔。嬉しそうな感じの…アニーミみたいな優しい笑顔が見たかったんだ、多分」
へへっと笑うシスカを見て、アニーミの胸が高鳴り顔が紅潮した。夕陽で誤魔化せているか誤魔化せていないかはわからない。
「…戦闘が終わるとさ」
シスカは、アニーミから夕陽に目を移してぽつりと呟いた。
「戦闘が終わると生きてる実感があって、ほっとする。また乗り越えられたんだ、みんなを守れたんだって。でも、今日は考えることが多くて余裕がなかった。それで、落ち着いてみるとちょっと寂しくなっちゃって…。誰かの優しい顔が見たいなって思ったんだ」
「寂しい…？」
「うん。子供みたい…かもしれないけど、ルカやユリアには癒し効果はあんま期待できないし。えぇっと…何て言えばいいのかな…。あの二人はどっちかと言えば、元気をくれる感じ。そうなると、やっぱアニーミかなって。えっと…わ、分かるかな？」
「シスカさん…」
嬉しかった。
上手く喋れなくてそれでも自分の言いたいことを伝えようとしているシスカを見て、アニーミの顔が自然と綻ぶ。
そんな戸惑った顔も、優しい声色も心地よかった。

やっぱり、この人が大好きなんだと実感してしまう。
しかし、アニーミはふと気になった。
「…あの、突然すみません。シスカさんって何歳なんですか？」
「俺？　十五…だけど」
アニーミは衝撃を受けた。
ルカと馬鹿話ばかりしているから、彼と同い年かと思っていた。
「と、年下…」
「え？」
「私…十七です。てっきり、ルカさんと同い年かと」
「あー…うん。よく言われる。ルカは、十八。あいつ馬鹿だから、幼く見えるのかな」
恐らくそれは違う。
ルカが馬鹿をやってシスカが正論を通す事でこの二人はバランスが取れているのだ。
見た目の容姿の問題じゃない。
確かにルカの存在もある。
しかし、それ以上に様々な苦境を乗り越えてきたシスカは、同年代の誰よりも精神的に大人なのだ。
「…ねぇ、アニーミ。何で、年聞いたの？」
素朴な疑問をシスカは投げかけた。
「いえ、さっきシスカさんが自分は子供みたいだって言っていたのが気になって…。充分に子供じゃないですか」
「…言われてみれば。はは、確かにそうかも」
「ですよね？」
シスカとアニーミは、くすくすと笑いあった。
その後、シスカも思い当たる節があったのかアニーミをじっと見た。
「俺も気になったこと聞いていい？」
「あ、はい！　何なりと」
何を言われるのかと緊張しながらアニーミは構えた。

「何で、アニーミって敬語なの？」
「えっ？」
本当にどうでもいい質問だった。
関心というよりは、ただの素朴な疑問だろう。
「上官のロックさんやジェントさんは分かるけど…。俺とルカに対して凄い敬語だよね。さん付けだし」
「そ、それは…」
「…まだ、仲良くなりきれてないってことなのかなって思っちゃって。あっ！　その、別に無理する必要は…ないんだけど。えと、出来たらで良いから呼び捨てがいいかなって…」
「よ、呼び捨てっ？　なっ、そんな大それた事を！」
「うわっ！　いてっ…！」
突然大声を上げたアニーミに後ずさりをしたシスカは、痛む足に力を入れてしまい少し表情を歪めた。
「あ、ああぁっ！　シスカさん、すみません！　…じゃなくて、ご…ごめん」
「大丈夫大丈夫。…んー、やっぱ呼び捨てがいいなぁ。現に俺の方が年下だし違和感感じるかも。あ、無理はしなくてもいいよ。年の関係って言ったら、俺だって今更アニーミさんなんて言えないからさ」
少し寂しそうにシスカは座り込んだ。
「わ、分かりまし…分かった！　い、言ってみる…。え、えと…シ…シッ…シシシ…ッ…シス…カ…。……さん」
言えなかった。
突然、変えろと言われても無理な話だ。
そもそも男の子を呼び捨てにすること自体が恥ずかしい。
ユリアと違って積極的になれない分、尚更だった。
茹で上がりそうなほど顔を真っ赤にして必死そうなアニーミを見て、シスカは噴き出した。
「あっはははは！　あ、アニーミ…！　ゆ、ゆでだこ…お、おもし

ろ…くくっ」
爆笑していた。
堪えられないというように涙を浮かべて笑い声を上げていた。
こんなシスカは見たことが無い。
「え、え…？」
「あははっ、もっかい言って。アンコール」
完全に引っかかっていた。
アニーミがすぐに出来ないことを知っていてやらせたんだと漸く気がついた。
多分、最初はそんなつもりはなかったのかもしれない。
でも、この様子を見る限り途中からは騙していたのだ。
こんなことをする人だとは思えなくて、益々シスカのことが分からなくなった。
「もうっ！　何やらせてんですかっ」
「ほら、敬語出てるって」
「うっ…うぅ…。シスカ君の馬鹿っ！」
ハッとアニーミは気付いた。
今、シスカ君と言った。
シスカさん…じゃなくて、シスカ君と言えた。
何故か、嬉しい。
「…ありがと、アニーミ」
嬉しそうにシスカは笑った。
「……。馬鹿って言われるのが嬉しかったの…？」
「いや、そうじゃなくて…」
シスカは論点がずれているアニーミに苦笑を浮かべた。
しかし、すぐにまた元の笑顔に戻った。
「アニーミがちゃんと対等に見てくれて嬉しいんだ。アニーミとも遠慮なく話せる友達に…なりたかったから」
「対等…？」
「うん。えっと…俺達四人でいる時、何となくかな…アニーミが一

歩引いてる感じがあって。違和感みたいなの…うん、感じちゃって」
「それ言ったら、シスカ君…もあんまり積極的じゃないような」
「俺は、ほら…何かあの二人が変に絡んでくるから引いてるだけで…。割と話すよ？」
意外だった。
そういえば、シスカは大人に対してはかなり言葉を飲み込む癖はあるものの自分達に大しては普通だ。
最初はびくびくしていたが、あれは人見知りゆえかもしれない。
それ以上に、騎士隊に入る時のシスカは心に余裕がなかった。
最近の彼は、普通に無理なく話をしている。
しかも、ルカには容赦なく殴るほどの仲良さで羨ましいくらいだ。
彼も普通の男の子なんだなと感じられて嬉しかった。
シスカは立ち上がり、アニーミに手を差し伸べた。
「…帰ろうか？」
胸がドキドキして、少しうるさい。
少しだけシスカと近い距離になれたことが嬉しくて胸が躍る。
今は友達でもいい。
此処から少しずつまた頑張れるような気がした。
「うんっ」
アニーミはシスカの手を取り、その手の温かさが心地よく感じた。

＊＊＊

「ルバートの修理が終わった？」
書類を纏めているロックにジェントが報告に来た。
「うん。ルカとの同調試験が終われば完璧。もうシスカ一人に頼ることなく出来るってわけ。ただ、戦力になるか足手纏いになるかっていうのは別の話だけど」
「近距離・遠距離共にバランスの取れているも装甲的には少し心許ないスフォルツァンドに対して、格闘に適した近距離型で装甲の硬

いルバートの欠点といえばスピードか。この二機が上手く連携が取れれば大きな戦力にはなる」
「シスカは最近何とか形になりつつはあるから…あとはルカ次第かな」
「……。…ルカか。あいつ大丈夫か」
「いや、まだ何とも。まずは、テストしてみないと…――」
「そうじゃなくて。…まぁ、これちょっと見てくれ」
ロックが端末のキーボードを弄ると、モニターにルカの顔写真とデータベースが表示される。
「ルスティカ＝ピッツィカード…って、え？　これって…」
データを見てジェントは驚愕に目を戦慄かせた。
「ああ…。もしかしたら、奴を前線に立たせるのは危険かもしれない。いや、そもそもシスカと一緒に戦闘に出ること自体が…」
「…シスカと？　それってどういう…」
ロックの言わんとしている事が理解できず、ジェントはデータを見ていた。
ルカのデータの次ページを開く。
そこには中年の男女と幼い少年と少女の家族写真らしきものがあった。
恐らく、この少年がルカなのだろう。
しかし、着眼点はそこではない。
少女の写真を見て、ジェントは驚きを隠せなかった。
黒髪にポニーテールの幼い少女の顔は、あまりにも似すぎていた。
彼が大切にしている少年の面影と瓜二つだった。
「これは…」
その先を続けることが出来ず、ジェントは口元を押さえた。
「…ルカのシスカに対する依存が強くなればなるほど感情が左右されてブレスとの同調が乱れる。…奴は、ある意味危険すぎる」
ロックは不安に満ちた表情で深い溜息を吐き、もう一度ルカのデータの中にある家族写真を…無邪気に笑っている少年と少女の姿を

見ていた。

＊＊＊

「……で、何でおめぇが此処にいるんだよ」

腕立て伏せをしながら、ルカは横目でその人物を見た。

その人物…ユリアはまるで自分の部屋のように寝転がりながらお菓子を食べ、テレビを見ていた。

「言ったじゃん。見たいテレビあるって」

「てめぇの部屋で見ろや！」

「あたしの部屋のテレビ映り悪いのよね。今度シスカに修理頼もうかな」

「シスカは便利屋じゃねぇんだぞ。あんま、あいつに甘えんなよ」

腕立て伏せから起き上がって少し機嫌悪そうにするルカを、ユリアはじっと見た。

「…んだよ」

「ルカって家族とかに騎士隊に入るって言わなかったの？　まぁ、シスカは身寄りが無いからしょうがないけど」

「あ？　だって、シスカの方が先に入ってたんだから許可いらねぇだろ」

「そうじゃなくて…」

ルカの認識では家族と言えばシスカらしいが、ユリアが言いたいのはそうじゃない。

「あんたの本当の家族のこと言ってんの。シスカ抜きでね」

「あー…」

ルカはユリアの言葉の意味を漸く把握したが、暫く考えて首を傾げた。

「どっちのこと言ってんだ？」

「は？」

「生みの親と育ての親のどっちだって聞いてんだよ。どっちにしろ、

んなもん取ってねぇけどよ」
ユリアは硬直した。
もしかしてルカは、人に話しにくいわけありの事情でもあるのだろうか。
そうすると、自分が安易に聞いたものは…。
「…なんか、ごめん」
「あン？」
「あんたも苦労してたのね」
「…どういうことだよ」
目を細めてルカは頭を掻いた。
「…トーン財閥って知ってっか？」
「へ？　ああ、確かかなーりでっかい金融企業よね。金持ち過ぎて明らかに貴族の中の選ばれし貴族っていうか」
「生みの親がそれ」
「え…？」
ルカが何を言っているのか分からなかった。
名門貴族中の貴族のトーン財閥の子息がルカ？
あまりにも似合わない。
「ま、血だけで言えばな」
「どういうこと？」
「兄弟多すぎて、養子に出されたんだよ。俺の苗字はそっからきてるわけ」
「兄弟多すぎてって…何人いんのよ」
「しらね。七十人はいるんじゃね？　母親もそれぞれ違うし」
「多すぎ…。それ、一夫多妻ってこと？」
「おー、それそれ。そんでよ、傑作なんだよこれが。トーン家にいられる将来有望な跡継ぎ候補と認められるのはたった三人でよ、それ以外はぜーんぶ養子に出される。な、ひでぇだろ？」
笑いながら話すルカにユリアは胸が痛んだ。
聞いてはいけないことを聞いてしまった気がする。

笑ってはいるが、ルカに余計なことを思いださせたのではないかと思ってそこで会話を終わらせようとした。
「ごめん、ルカ…。あたし…」
「まぁ、聞けって。そんで投げ捨てられた可哀相な俺様はよそ様の家の養子となり、そりゃ幸せな幸せな…」
「いいからっ！」
ルカの様子がおかしい。
いつも素直に感情のままに動いているルカじゃない。
何処か空元気のように見えて…無理をしている。
同情されたくないから、無理をしていて気が済むまで話そうとしている。
こんなのは見ていられない。
「あたし、部屋に戻る！」
ユリアは一刻もこの場所から離れたくて、ルカの部屋を出た。
その後ろ姿を呆然と見て、扉が閉まるとルカは溜息を吐いた。
「ほんとに幸せだったんだけど…何勘違いしてんだ、あいつ。…ナナ、どう思うよこれ」
ルカは、錬機手帳を開き画像ファイルを開いた先にある一人の幼い少女の写真に語りかけていた。
「…あー！　くそっ」
頭をがしがしと掻いてルカは立ち上がった。
「モヤモヤする！　風呂だ風呂！　大浴場だーっ！」
ルカは叫び、お風呂セットを持ってソルフェージュ内の大浴場へと向かった。
部屋の小さな浴室では我慢できないとでもいう表情で、エレベーターを使わず長い階段を駆け上った。
そのルカの様子に誰もが振り返り、ルカがまたおかしなことをしているというくらいにしか思わなかった。
思い出したくない思い出を振り払うように走り続けるルカは、少しだけ苦しそうな顔をしていた。

# 第18話　安定のない心

とある飲食店。
少し元気のないニムは、ビートと一緒にいた。
ニムの目の前には、ついさっき来たばかりのカルボナーラが置かれている。
「ほら、食べなよ。冷めちゃうよ」
ビートがニムにフォークを手渡すと、彼女はそれを受け取った。
しかし、料理には手をつけない。
「……シスカに会いたい」
ぽつりとニムが呟いた。
これで何度目だろう。ニムはこれしか言わない。
いい加減に聞き疲れたビートは苦笑を浮かべた。
「ニムちゃんは、もう決めたんだろ。シスカと距離を置くって」
ビートが、頼んでおいたペペロンチーノの麺をフォークで丸めて口に運ぶ。
ニムは俯き、その視線は自然とカルボナーラに向けられている。
「うん、幸せだったからもういいの。あのね、シスカの肌って凄く温かくて…触り方も優しくてね」
「ニムちゃん、その先はストーップ。飲食店で下ネタ禁止。しかも、そういうのは人に話すネタじゃないから」
「うっ…うん。分かってるんだけど…。もしかしたら、戦闘でシスカが苦戦していたのって…あたしとのことで集中出来なかったのかなって思うと」
「で、それをニムちゃんは謝りたいわけだ？」
ビートの問いかけにニムが頷くと、ビートは盛大に溜息を吐いた。
「それで謝ったら、シスカは怒るよ。絶対に」
「え…？」

「ニムちゃんはその件について後悔してる？　それは覚悟を決めて君を抱いたシスカの気持ちを踏み躙ろうとしているってことだよ。多分そういうことに気付かないニムちゃんと気付かせられなかった自分に怒って、最悪…一生口きかないかも」

勿論、シスカがこのくらいで口をきかないなんてことはありえないだろう。

しかし、このお嬢様にはこのくらい脅しをかけないと自分を甘やかして自制がきかなくなって同じ事を繰り返す。

振り向いてもらうことは無いのに、自ら傷つく方へと飛び込むかもしれない。

いい加減、成長すべきだ。

だから、敢えて大袈裟に事を運ぼう。

だが、シスカが怒るという意味では脅しでも何でもない。

間違いなく怒るし、自分自身を責める。

シスカと出会って二年見てきたのだ。

何となく分かる。

「シスカが怒るって…口きいてくれないなんて、絶対やだっ！」

ガタンと椅子から勢いよく立ち上がり、ニムは叫んだ。

「取り敢えず、落ち着いて。騒いでも解決しないよ」

ビートが宥めると、ニムは涙目で座った。

シスカが怒る…。

自暴自棄の自分を本気で怒ってくれて心配で心配でたまらなかったシスカの表情を思い出した。

もうあんな顔はさせたくない。

シスカに嫌われたくない。

「さて、ニムちゃんに出来ることは何でしょう？」

ビートは優しく問いかける。

「…ありがとう、かな。二重の意味で」

あの時のことと、ルーディメンツを撃退して守ってくれたこと。

彼に言うとしたらきっとそれだ。

「分かってんじゃん。ほら、早く食べないと冷えて固まるよ」
「う、うん」
漸くニムは、カルボナーラに手をつけた。
「そうそう、俺がニムちゃんに会いたかったのは君の愚痴に付き合う為じゃないんだよね」
「え、何か用事あるの？　あたしに？」
首を傾げるニムにビートは笑顔を向けた。
「見つかったよ。…行方不明になっていた、君のお父さん」
優しく笑いかけるビートにニムは硬直した。
いくら捜索をかけても見つからなかった父親が見つかった。
嬉しさよりも驚愕で言葉を発することが出来なかった。

＊＊＊

風が少し冷たい。
今日の晩御飯は何だろう。
昨日の余りものの夕飯かもしれない。
お母さんは、料理を作りすぎてしまう癖があるから。
そういえば、昨日のカレー…かなり余ってたっけ。
新しく買った大きな圧力鍋で張り切って作って、結局半分も消化出来なかった。
今日の朝も昼もカレーだったなぁ。
今夜もきっとカレーだ。
せめて、何か手を加えてアレンジしてくれたら嬉しいのに。
「お兄ちゃん？」
くいくいっとナナリーの小さな手が俺の服の裾を引っ張る。
「よしっ、帰ろっか」
「うんっ」
俺が笑うと、ナナリーも満面の笑顔を浮かべた。
ふわりと何か白いものが見えて空を見上げた。

白い結晶が落ちてくる。
「わぁ、雪だ」
「ほんとだ、初雪だ！」
「お兄ちゃんっ！　今度雪合戦しよ。私、負けないからっ」
「もっちろん受けて立つぜ！　あ、でも石入れるの危ないからやめろよ。硬く握るのも痛いから駄目」
「は～い！」
元気よく返事をして満面の笑顔を浮かべるナナリーの手を握った。
軽快な足取りで家に向かう。
何の変哲もない普通の一戸建て。家族は四人。
明るくて楽しい。
お父さんもお母さんも優しくて好きだ。
本当の妹じゃないけど…ナナリーも大好きだ。
この大好きな家族とずっと一緒にいられたら…。
いられたら…――――。

「――…カ。……ルカ」
遠くで名前を呼ぶ声がする。
誰だ？
「ルカッ！」
薄っすらとルカは目を開いた。
ぼんやりと視界に入ったのは、シスカだった。
「ったく、こんなとこで寝てたら風邪引くよ」
大浴場の脱衣室にあるソファで横になるルカの顔を心配そうにシスカが覗き込む。
「……ナナ…？」
「へ？　ルカ…うわあっ！」
シスカを力強く抱きしめた。

「いたっ…痛いって！　ルカッ」
「ナナッ！　ナナ、会いたかった！」
「……ルカ？」
シスカを抱きしめたまま、ルカは泣きじゃくっていた。
異常だ。
何処か頭をぶつけたのではないかと心配になった。
「ナナ～！　何処行ってたんだよ、お前！　俺、心配で心配で…」
重症だ。
これは目を覚まさせないといけない。
そもそも、このままでは動けない。
「いい加減に…しろっ！」
シスカは、ルカを殴り飛ばした。
その衝撃でルカは倒れて大の字になっている。
「ルーカー…。起きてよー…」
ルカの身体をシスカが擦ると、むくりとルカは起き上がった。
「…あー、ねっみぃ。あ？　おー、シスカ。何そんな疲れた顔してやがる」
「…別に。ただ、そんなとこで寝てたら風邪引くよ。せめて服着なよ」
見るとルカは、腰にタオルを巻いているだけで全裸だった。
しかも下半身のタオルも緩くなっていて、いつ生まれた状態になるか分からない。
「おー、わりわり。…あ、パンツ忘れた」
腰のタオルを直し、自分の使用していたロッカーの籠を見ると下着だけ無かったらしい。
「…もう付き合ってらんない。俺もう行くからね」
「おうっ！　湯冷めすんなよ」
「それ、俺がルカに言いたいんだけど。…あ、そうだ。ルカ」
「あ？」
少し考えた様子だったが、シスカはルカに尋ねた。

「ナナって誰？」
「なっ…！」
シスカのその言葉にルカの瞳が戦慄いた。
あんな夢を見たから何か口走ったのか…。
何を言ったのか何をしたのか全く覚えていない。
シスカの口からその名前を出されるのは、何となく嫌だった。
「あー…ちょっとした知り合いだよ」
歯切れが悪そうにルカは頭を掻いた。
「昔の彼女とか？　ルカも意外と…」
「そんなんじゃねぇよ！」
シスカがからかうように言うと、怒りを込めたような声でルカが叫ぶ。
怒鳴ったルカに驚いてシスカは硬直した。
二人しかいない脱衣所に沈黙が訪れた。
ルカの触れていけない何かに触れてしまった気がした。
「ご…ごめん」
その言葉しか出なかった。
少し落ち込んだような表情を浮かべるシスカを見て、ルカは自分の行いを後悔した。
シスカに自分の都合で怒鳴ったことなんてなかった。
シスカはどう思っただろうか。
理不尽に怒鳴られて、どう感じただろうか。
「いや、今のは俺が悪かった。すまねぇ」
「……。じゃあ、俺…行くから」
少し俯き加減のシスカの表情は分からない。
「待ってくれ！」
脱衣所を出ようとしたシスカの腕をルカは引っ張った。
少し怯えた様子のシスカを見て辛かった。
顔が重なる。
ナナリーが…悲しそうな顔をしている。

そうじゃない。
そうじゃないだろ。
こいつは、シスカだ。
家族同然の大親友の筈なのに。
おかしい。
あの夢のせいか？
「ルカ…手痛い」
「あ、あぁ…。わりぃ…」
力強く握った手を緩めて離す。
何となく…何となく、心がちくりと痛んだ。
傷ついているのは、シスカの筈なのに。
シスカが出て行き、脱衣所の扉が閉まる。
扉の音が冷たく感じた。

＊＊＊

少しだけショック…というよりも怖かった。
基本的にルカの笑った顔しか見たことなかったから、甘えていたのかもしれない。
きっと何か逆鱗に触れてしまったんだ。
それは多分、ルカも後悔している。
「そういえば、俺…ルカのこと何も知らない」
シスカは、ぽつりと呟いた。
ベッドでぴょんぴょん跳ねるスフォルをキャッチした。
「埃飛ぶから飛び跳ねちゃ駄目」
「きゅー…」
「…ねぇ、スフォル。俺、ルカにいつも助けてもらってばっかりだけど…俺がルカを助けるって出来るかな」
「きゅっ」
シスカの問いに応えるかのようにスフォルは、シスカの頬を舐め

た。
ぎゅっとスフォルを抱きしめ、悩み困ったような表情を浮かべてシスカは溜息を吐いた。
ズキッと足が痛んだ。
昼間の戦闘が終わってから、痛みが全然解消されない。
脈打つように熱い。
医者に見せろと言われたが、創傷も痕も無いからあまり意味のないように感じた。
「…考えることといっぱいだなぁ」
ぽすんとベッドに倒れこみ、シスカは溜息を吐いた。
「これから、どうすればいいんだろ…」
シスカのその言葉には、複数の意味が込められていた。
スフォルツァンドのこと。
ルーディメンツのこと。
今後の戦いへの対策。
スフォルツァンドと神経が繋がっている以上、まともに戦えない。
だから、知りたい。
そして…ルカのことも、どうしたらいいのか分からなかった。

＊＊＊

翌日。
シスカとルカのそれぞれブレスとの同調試験結果を見て、ロックとジェントは訝しげな顔をする。
二人とも、不安定だった。
常に安定している筈のシスカとスフォルツァンドは、メーターのラインが歪んでいる。
ルカに至っては、ラインが子供の落書きのように滅茶苦茶だ。
今迄で一番最悪だった。
「…どうした、お前ら」

ロックの問いに二人とも無言だった。
妙にピリピリとした空気が漂う。
「少し休んだら、もっかいやるぞ」
「はい…」
ロックの言葉に返事をしたのはシスカだけだった。
「ルカも分かったな？」
「あー、はいはい！　わかってらぁ！　ただ、時間ずらしてくれよ」
投げやりにルカは、ロックに返事をした。
しかし、気にかかる言葉があった。
「時間をずらす？」
「…シスカがいると集中できねぇんだよ」
「……え？」
ルカが投げ捨てた言葉に、シスカの表情が固まった。
しかし、その顔を見ずにルカは立ち去った。
「何だ、お前ら。喧嘩でもしてんのか？」
頭を掻いてロックは、シスカに尋ねる。
「いや、そういうわけじゃ…。…多分」
「何でもいいが、これからの戦闘でお前らの連携がキーになるんだから早く仲直りしとけよ」
「……はい」
少し落ち込んだ様子でシスカは項垂れた。
「それで、足の調子はどう？」
ジェントがシスカの足を見て尋ねた。
「あ、大丈夫です」
「…ていっ」
「うわっ」
ジェントがシスカをどんっと押すと、シスカはバランスを崩して座り込んだ。
「うぐっ…！」
足に激痛が走り顔を歪めたシスカを見て、ジェントは目を細めた。

「嘘つかないの。やっぱ医者に見てもらいな。そんなんじゃ戦えないから」
「でも…」
「これ、命令だから。ソルフェージュ内の医務室に腕利きの医者がいるから行っておいで」
「…はい」
溜息を吐いてシスカは立ち上がり、足の痛みに耐えながら歩いていく。
その背中を見送り、ロックは腕を組んだ。
「重症だな」
「色んな意味でね」
シスカの足や同調試験だけじゃない。
ルカの問題もある。
あからさまにシスカを拒絶しているその意味が分からなかった。
これが解決しないと、連携なんて夢のまた夢だ。
ロックが恐れていることが現実になるかもしれない。
執着にしても拒絶にしても、ルカは判断力を失ってしまう。
それを止められるのは、きっとシスカだけだ。
しかし、出来るだろうか。
ルカの態度に戸惑いを隠せないシスカには、話しておいた方が良い気がする。
だが、シスカは耐えられるだろうか。
様々な悩みを抱えている今のシスカにルカのことを…自分達が教えて良いのだろうか。
「きっかけを与えたほうが良いかもね」
「そうだな。俺達から話すと、悪化しかねない…。当人同士が解決した方が良いだろ」
ちゃんと言葉で話さないと通じるものも通じないのは、彼らが一番よく分かっている筈だ。
この件が解決されるまで敵が攻めてこないことをただただ祈るば

かりで、手のかかる子供達にロックもジェントも頭を悩ませずにはいられなかった。

# 第１９話　勘違い

医務室と表すにはその部屋は広すぎた。
部屋の規模からいうと町中の診療所並。
いくらソルフェージュが万能の施設を常備しているといっても、大袈裟な気がしないわけでもない。
税金がどのくらいかかっているのか、それも気になる。
しかし、それ以上に気になるのは…。
「骨や筋肉にも異常はなし。それでも激痛が走るって言うなら、あなたの話した通り神経に異常があるのかもしれないわね」
レントゲン写真を見て顔を顰めながら女性特有の喋り方をするその医者は、長身の男だった。
黙っていれば美男子にカテゴライズされ、周囲の女性は黙っていないだろう。
しかし、彼は正真正銘のオネエな男だった。
名前は、グレイス＝ローズ。
名は体を表すと言うが、彼のセカンドネームは何となく似合いだった。
「痛み止めを出しておくわね。多分、二日くらいで治ると思うわ」
「…ありがとうございます」
処方箋を書いて看護師に渡すと、グレイスはシスカに興味が沸いたような目を向ける。
「しかし、ブレスとの同化なんて珍しいわね。一体、どんな構造しているのかしら」
「俺も知りたいんです。メカと人間の神経が繋がるなんて理屈じゃ考えられないし」
「でも、現にそれは実現している」

「……はい」
膝の上でぎゅっと拳を握り、シスカは俯いた。
「でも、あなたがやっていることも理屈じゃ通せないことばかりよ？」
「俺が…やっていること？」
不安そうな表情でシスカは顔を上げた。
「そう。搭載されている筈の無いシールドや爆発的な攻撃力…蘇生やエネルギーの復元に機体の性能を超えた機動力。本当に理屈じゃ理解出来ないわ」
「俺は、知りたいんです。スフォルツァンドのこと…それにルーディメンツのこと」
「いち医者のあたしには専門外ね。ただ知りたいだけじゃ駄目よ、坊や」
「え…？」
「聞けば答えが返ってくるという考えは捨てなさい。社会っていうのは常に自分で努力して掴むこと。意味が分かる？」
「…自分で、調べろってことですか？」
「大佐が答えてくれないというのなら、これ以上のことは言えないわ。あたしも立場があるから」
「…分かりました。ありがとうございます」
シスカは立ち上がり、グレイスに頭を下げて踵を返した。
「あ、これ独り言なんだけど」
「え…？」
グレイスの言葉にシスカは振り返った。
「ルーディメンツを撃退するブレスを開発したブルーネル夫妻って、どういう経緯で開発まで至ったのかしら？　本当に天才の頭の中は不思議だらけね」
その言葉にシスカの瞳が戦慄いた。
ブレスを開発した両親…。
もし、それの意図や構図が分かれば近付けるかもしれない。

立場的に助言は出来ない。
だからグレイスは、独り言と言ったのだろうか。
「またいつでもいらっしゃい。可愛い騎士さん」
にっこりと笑い、グレイスは手を振る。
シスカは頷いて、医務室を後にした。
バタンと扉が閉まり足音が消えると、グレイスはシスカのカルテを見た。
「シスカ＝ブルーネル。…これも、巡り合わせかしらね。余計なことまで調べなきゃいいけど…」
ふぅと息をついてグレイスはカルテを看護師に渡して、次の患者を呼んだ。

＊＊＊

夕飯時、いつものようにシスカ達四人は一緒に食事を取っていた。
しかし、それはいつものように和気藹々としたものではなく何処か気まずい雰囲気だった。
原因はシスカとルカ…。いや、ルカだけかもしれない。
そのぴりぴりとした空気に、ユリアとアニーミも話しかけにくかった。
「あ、あのさ…ルカ。あれから、同調試験どうだった？」
「……」
シスカが恐る恐る声をかけるも、ルカは返答をしないで食事を口に運んでいる。
「あ、そうだ。そういえば、もうルバート使えるみたいだよね。ルカがいてくれたら、俺も安心して戦えるような気がするんだ」
「……」
またもや返答が無い。
ずっとこの調子だ。
シスカがいくら声をかけてもルカは無視を続けていた。

「…ねぇ、ルカ。本当にどうしたの？　俺、そこまで怒らせるようなことした？」

食事を食べ終わりトレーを持って席を立つルカは、イラついた様子で溜息を吐いた。

「別にしてねぇんじゃねぇの？」

素っ気無くそれだけ言って、ルカは去っていく。

あまりにも理不尽…というよりも原因が分からない。

脱衣所での件はお互いに謝ったし、普通だったらそれで水に流される筈だ。

いくら逆鱗に触れてしまったとしても、こんなあからさまに拒絶されるのはおかしいと思った。

「…何あれ。いくらなんでも酷いんじゃない？」

「シスカ君、大丈夫？」

ユリアとアニーミが心配で声をかけると、シスカは苦笑を浮かべた。

「大丈夫…って言いたいけど、ちょっときついかも。…あんなルカ見たこと無かったから」

このどうしようもない気持ちをどうすればいいのか分からなかった。

どうしたら、ルカと仲直りできるのか。

そもそもこれは喧嘩をしているのか？

それすら分からない。

「……ナナ」

「え？」

小さく呟くシスカにユリアもアニーミもきょとんとした表情を浮かべる。

「俺を見てナナって言ったんだ。ちょっとそれから様子おかしくて」

「何それ、昔の彼女？」

「俺もそう思って言ったら、激怒して…。お互いに謝ったけど、怖くて…俺逃げちゃったから」

「まぁ、いきなりそんなことで怒鳴られたらびびるわよね。ほんと何考えてんのかしら」
「それはルカにしか分からないだろうな」
シスカ達の席の近くにロックが座った。
「あ、隊長。お疲れ様です」
「お疲れ様です」
ユリアとアニーミがロックに挨拶をするとシスカもそれにならって頭を下げた。
「シスカ。お前…ルカとタイマンで話せ」
「へ？」
「今日の二十一時から小会議室Ｂを借りた。ちゃんと二人で腹割って話せ」
「でも…」
「大丈夫だ。逃げたら罰則を与えることにしたから。一ヶ月ソルフェージュ内の掃除。どうだ？　たまらんだろ」
「そ、それは確かに…」
考えるだけで目が回りそうだ。
ひとつの町に匹敵する大きさのソルフェージュ内の掃除を一ヶ月なんて、ある意味戦闘よりきつい。
「だから、色々話して解決して来い。多少の暴力沙汰は許可する」
「さ、先読み済みですか？」
「お前ら見たら分かるよ。シスカ、お前もただ大人しいだけの人間じゃないだろ」
「えっと、それは…」
「確かに、シスカがブチ切れるとやばいもんね」
「ちょっと、ユリア…」
ユリアが笑うとアニーミがそれを制止しようとする。
シスカもそれはあまり口外しないで欲しかった。
「そんなわけで、行って来い。お前らが解決するまで戻ってくんな」
「は…はい」

ロックに押されて苦笑を浮かべながらシスカは頷いた。
ロック達にとっては、戦力的な意味と士気的な意味で早く仲直りしてもらわないと困るというところだろう。
シスカも早くルカと普通に話せるようになりたい。
だから、このきっかけの場を作ってくれた上司に感謝した。

＊＊＊

約束の二十一時。
三十分は過ぎていた。
三十分間、二人は部屋で無言のままだった。
「あ、あのさ…ルカ」
「……」
シスカが声をかけても相変わらずルカは無言だ。
「その…俺のこと嫌いになった？」
暫しの間。
ルカは頭をがしがしと掻いた。
「そんなんじゃねぇよ…」
「じゃあ、何でだよ…。どうして俺を避けるんだよ！」
「うっせぇな！　別に俺のことなんか放っておけばいいじゃねぇか！　自分のことでいっぱいいっぱいだろ、お前はっ」
ルカが叫ぶと、シスカは怒りを抑えられなくて震えた。
「何だよ…それ」
震える手でシスカはルカの胸倉を掴んで壁に押し付けた。
勢いよく叩きつけられルカは小さく呻いたが、それにも構わずシスカは自分より大きなルカの身体を強く壁に押し付けていた。
「放っておけるわけないだろ、こんなことされて！　お前、俺のこと家族だって言ったよな？　ずっと一緒にいるって言っただろ！　それなのに逃げんのかよっ」
「逃げる？　おい、俺がいつ逃げたってんだよ！」

「逃げてるだろ！　何も言わないで勝手に避けて無視して…。俺から逃げてるじゃないかっ！」
「何言ってやがる。別に俺はっ」
「俺のこと嫌いになったとしか思えないよ…こんなの。ルカがいたから此処まで来れたのに…そのルカに捨てられたら、俺っ…」
泣きそうな顔のシスカは俯いて抑えきれない感情をぶつけていた。
地獄から太陽の下に戻った今の自分があるのは、ルカのお陰だ。
ルカにはいっぱい助けてもらった。自分にとってかけがえのない存在なのに…。
それなのに何も言わないで避けられるのは悲しかった。
「捨てるも何も…俺を捨てたのはお前だろ！」
ルカが叫んだ。
その言葉の意味が分からなくて、シスカは顔を上げてルカの胸倉から手を離した。
「え…？」
捨てた？
何を言っている？
誰が誰を捨てたって？
ルカが何を言っているのか分からない。
「俺が…ルカを捨てた？　え、ちょっと待って。意味が…」
「お、覚えてねぇのか？　今朝のことだぞ」
ショックを受けたような表情で今度はルカが泣きそうだ。
「へ？　今朝って…」
皆目見当がつかない。
何かルカの機嫌の損ねるようなことをしただろうか。
「朝によ…風呂一緒に入ろうぜって誘ったの覚えてるか？」
「え、うん。確かご飯食べた後に…あっ！」
思い出した。
朝食が終わったら風呂に入ろうとルカに誘われていたが、朝食を終えた後にメカニックに呼び止められスフォルツァンドの整備の手

伝いを頼まれてそこからすっかり忘れていた。
それを忘れたまま、同調試験を行った。
昨日のことで怒っていたのではない。
今朝の風呂に入るという約束をすっぽかしてしまったことを怒っているのだ。
「俺よりスフォルツァンド取ったんだもんな、お前は！　俺の方が先に約束してたのに…いつもいつも俺より目の前のことばっかりで。…傷ついたんだよ俺は！」
「うわっ」
ルカが叫び、シスカを押し倒した。
「この際だ。はっきりしようぜシスカ」
「は、はっきりって…？」
「俺とその他大勢どっちが大事だ？」
「え…？　な、何その嫉妬に燃えた恋人みたいな言い方…」
「嫉妬に燃えてんだよ！　何か…こう…お前が色んな奴に頼られてるの見てるとモヤッとしてよ。そんで、お前見てたら妙にイライラして…」
本当に嫉妬に狂った恋人のようだった。
それじゃあ、何か？
ルカは、ずっとそんな目で…。
シスカの顔が引き攣った。
「ご、ごめん。ルカ、俺そういうのは…いや、本当に勘弁して」
「あ？　何言ってやがる」
「…とにかくどいて。重い」
「お、おう。すまねぇ」
ルカがシスカを解放すると、シスカは乱れたシャツを整えてルカを殴り飛ばした。
「いっ…でえぇぇっ！」
拳が顔に当たり、ルカは悶絶した。
「俺は、昨日のことでルカが怒ったんじゃないかって…傷ついたん

じゃないかってずっと悩んでたんだよ！　お風呂くらいいつでも一緒に入ってやるから勘違いさせんなっ。この馬鹿ルカ！」
「は？　昨日って…。ああ、あれか」
軽い調子で何でもないようにルカは苦笑浮かべた。
「いや、お前に言われると逆上しちまってよ。ほら」
ルカが錬機手帳を渡す。
「え、何？」
錬機手帳を開き画像フォルダに至ると、シスカの瞳が戦慄いた。
何枚もある家族写真。
幸せそうに四人の家族が笑っている。
その中にある一人の少女。
シスカに瓜二つだった。
「これって…」
「俺が養子に出された家族。ま、その女は妹に当たるわけだが…そっくりだろ？　お前に」
「う、うん。…もしかして、ルカが俺を助けてくれたのって…」
「ちょっとだけな。でも、違うもんは違う。そうは思ってもたまに重ねちまうんだわ。死んだ人間と生きた人間を混同するなんて、トチ狂ったことがたまにあってよ。最悪だよな」
「死んだ人間って…まさか」
ルカが大事にしているこの写真は…もしかして。
思えば、ルカはずっとビートと一緒に住んでいた。
でもビートは、一年半前に出稼ぎに出るって町を出て行って…それからルカは一人で住んでいた。
家族の話なんて聞いたことが無い。
「まぁ…病気でな。十年位前に死んじまった。多分、生きてたらお前と同い年くらいだったかもな」
「ルカ…」
「ま、育ての両親も暫くしてから事故でいなくなっちまった。で、生みの親んとこ尋ねたら養子に出したんだから関係ねぇって門前払

いされてよ。ほんとに一人だった」
気が抜けたようにルカは遠い目をした。
その瞳は何処へ向けられているのか分からない。
「そんで俺はビートと出会った。ビートに拾われたんだよ、俺は」
「ビートに？」
「おう。話してやろうか？　俺とあいつのくっだんねー昔話」
「ルカの話は聞きたいけど…ビートはどうでもいい」
はっきりとした物言いのシスカにルカは喉元で笑った。
「くくっ…。あいつ完璧シスカに嫌われてやんの。つか、何でそこまでビートのこと毛嫌いすんだ？」
「…生理的に受け付けないってのもあったけど、ビートに襲われたことあるから。そこから嫌い」
「あァ？　お、襲われたって…お前、どういう…」
「ルカがいないときに尋ねたらビートがいて、押し倒されてキスされて身包み剥がされそうになった。ほんと、気持ち悪い」
考えただけでも悪寒がするとシスカの顔が青褪め、引き攣り笑いをする。
ルカは拳を震わせて怒りで顔を真っ赤にした。
「あんのくそ野郎！　シスカを穢しやがって！　俺がいねぇ間に手ぇ出すたぁ良い度胸じゃねぇか。よし、シスカ！　俺とキスしろっ」
「何でそうなんのっ？　おかしいから！　二人して気持ち悪すぎるって！」
「あの野郎にだけは負けたくねぇんだよっ！　いつもいつも俺が気に入ったもんに手ぇ出しまくって、上から目線で笑いやがって！　シスカの貞操返しやがれ！」
「え、ちょ…な、何でそうなんのっ？　奪われてないから！　気色悪い誤解やめろよっ」
「…あ？　身包み剥がされて掘られたんじゃねぇのか？」
「ないから。剥がされそうになって…気がついたらビートがパンツ一丁で外に吊るされてた」

「……それ、お前がブチ切れてやったんだろ？」
「た、多分。記憶に無いから…」
目を逸らしてシスカは苦笑した。
恐らく危険を感じたシスカのスイッチが入りビートを脱がして縛り上げたのだろうということは、ルカには容易に想像出来た。
「…それ、ＳＭじゃね？」
「ルカ、喧嘩売ってる？」
「う、売ってねぇ！　そ、そうだ。あれだな、俺とビートの出会いの話だったよな。いいぜ、話してやらぁ。と…途中で暴れるなよ？」
少し怯えた様子でルカがシスカに視線を送ると、少し不服そうな顔をしてシスカは溜息を吐いた。
「…分かったよ。俺は、ルカの話を聞きたいだけだから」
気持ちを落ち着かせて言うシスカの表情は笑顔だったが、何かしら引っ掛かる場所があったら間違いなくビートを殴りに行く。
いや、殴るだけじゃ済まない。
締め上げて重石をつけて海に沈める可能性も否めない。
それほど、シスカはビートに対して容赦は無い。シスカがビートを半殺しにしてきたのなんか何度も見てきた。
だから、ルカにビートが余計なことでもしたら…その先の地獄絵図は容易に想像出来る。
話をする上で覚悟が必要だとルカは思った。

# 第２０話　新しい生活

――――――　十年前

「一度外に出た身で無様にのこのこと帰ってくるな！　お前はもう我がトーン家の者ではない！　二度とこの敷地を踏み荒らすなっ」

都市で一番大きな豪邸の扉が男の怒鳴り声と共にバタンと閉じられた。

大きな扉の外にいるのは、小さな子供…八歳のルカだった。

「お願いします！　此処に置いて下さいっ！　あてがないんですっ！　お父さんっ、お父さん！」

子供なりの精一杯の力でルカは泣きながら扉を叩く。

「ルスティカ様、お引取り下さい。少しでもあなたに我がトーン家の誇りがあるというのなら此処にいるべきではありません。自らの足で生きていくしかないのです」

執事のクロニカがルカの扉を叩く手を引いて静かに諭す。

「だ、だって…これからどうすれば…！　どうやって生きていけばいいんだよっ」

「それが甘えだということがまだわからないかっ！」

扉が開き、大きな手がルカの頬を平手打ちする。

「旦那様…」

「貴様はこれまで一体何をやって来た！　外でこれまで何を学んだ！　恥を知れっ」

「ふっ…う、うぅ…ひっ…ひっく…」

父親の罵声にルカは嗚咽交じりに泣いた。

今まで育てられてきた家族が死んで本当の血が繋がったこの家しか頼りが無かったルカにとって、この結果は絶望的だった。

「人前で泣くな！　みっともないと思わないのかっ」

「あうっ」
もう一度、ルカの頬が叩かれる。
涙が止まらなかった。
痛みよりも何よりも本当の親に拒絶されたことが苦しかった。
「クロニカ！　とっとと、外に出せっ。この恥知らずな野良犬に、これ以上我が家の敷地を踏ませるんじゃない！」
「は…」
大きく扉を閉める父親にクロニカは頭を下げ、ルカの手を引いた。
「さぁ、行きましょう。外までお送りします」
「ひぐっ…ひっく…ううぅ…」
嗚咽を零しながらルカは、クロニカに手を引かれて歩いていく。
成す術もなく、ルカは泣くことしか出来なかった。
敷地の外まで送られると、クロニカは一枚のカードをルカに渡した。
「ルスティカ様、これを」
「え…？」
「奥方様が亡くなる前に私に託してくれたものです。ルスティカ様に何かあった時に使って欲しいと、個人で溜めていました」
「お母さん…が？」
ルカの涙が止まった。
「旦那様もああ言っておられますが、誇り高く強く生きて欲しいからきつく当たるのです。…ルスティカ様はちゃんとお二人に愛されていたのですよ」
「…違う。…違うよ、それは。家の名に泥を塗りたくないだけで…俺なんか…うっ、うっ…」
再びルカの目からぼろぼろと涙が零れる。
クロニカは優しくルカの頭を撫でた。
「強く生きてください。泣いていても誰も助けてはくれません。このカードがあれば一生楽に暮らせます。これをどう使うかはあなた次第です。このまま何かに頼って生きていくか、自分が人から必要

とされる人間になるか…その選択はあなたにしか出来ません」
「クロニカ…」
にっこりと笑い、ルカの小さな手を両手で包みクロニカはカードを握らせた。
「既に指紋認識システムでルスティカ様を登録済みです。…お元気で」
敷地の外に軽くルカを押すと、屋敷の柵が閉まる。
ルカはカードを眺めて放心していた。
気が抜けたように座り込むルカの瞳からはただ涙が零れるだけで、誰も見向きすらしなかった。

＊＊＊

商店でルカは、食料品を買っていた。
適当でいい。
食べ物なんて何だっていい。
あの家の…育ての母親の料理が食べれないなら、どんな高級料理も質素なパンも同じだ。
「お、ルカじゃないか。大丈夫かい？　ちゃんと食べてるだろうね？」
気さくに話しかけてくれる店の人間に対しても小さく頷くだけで、商品を受け取ったら身体を縮こまらせ俯き加減で歩き去っていく。
心配そうにパン屋の夫婦は、その背中を見送った。
「暫く立ち直れそうもねぇな」
「そりゃそうさ。少し前にナナリーちゃんが死んで両親も後を追うように事故に遭って…それで生みの親の所に行ったら門前払い。見てらんないよ」
前は元気すぎるくらい元気だったのにと付けたし、今後のルカがどうやって生きていくのか心配だった。
もしもの時は、自分達が支えてやろうと口には出さないもののそ

の目が物語っていた。
　感傷に浸っていると、店の扉が開かれ慌しい足音と共にカウンターに少年が突っ込んできたことで現実に戻される。
「おばちゃん、クロワッサン十個！　お代は出世払いでっ」
　元気よく明るい笑顔を振りまく少年に溜息を吐いて、パン屋のおかみが少年の頭に拳骨をする。
「いってぇ！」
「うちは、その場その場の現金しか扱ってないんだよ！　ビート、あんたまた教会の鐘鳴らしに行ったね！　悪戯もいい加減にしないとバチが当たるよっ」
「えー、だって暇なんだよ。金も無いし貧乏臭いテント暮らしだし風呂は川の水だしさ。今時期の冬にはマジ拷問だっつーの」
「だから、ちゃんと家に戻れって言っているだろ。そうすりゃせめて冬場凍えるってことはないし」
「絶対やだ！　頼むよ、おばちゃん。食うものないんだってマジで」
　目の前で両手を合わせるビートを見て、おかみは食パンの耳を袋詰めしてビートに渡した。
「売り物はあげられないからね。こんだけ大量にあれば大丈夫だろ？」
「やった！　ほんとありがと！　此処のパン美味しいから耳もすっげー美味いんだよね！　んじゃ、また来るよっ」
　店の外に出てガラス張りの向こうでビートは笑いながら手をぶんぶんと振ると、人ごみの中で大きく振舞っていたせいか人にぶつかる。
　ぶつかった人間に謝りながらパンの耳を謝罪代わりに一本やろうとするが、相手は苦笑を浮かべてそれを断る。
　断られると頭を掻きながらビートは笑って、人ごみの中に消えていった。
「…あいつも痛々しい境遇なのに、すげぇ前向きだな」
　呆れたように店の主人は遠目でビートが消えた方向を見た。

「前向きじゃないと生きていけないってさ。金がなくても家がなくても前向きになれば生きていける。そうやって自分に言い聞かせてる。子供の癖にたいしたもんだよ」
腕を組んでおかみは、溜息を吐いた。
「ルカもあの子くらいポジティブになれれば苦労しないんだけどね」
寂しげにおかみは苦笑を浮かべると、それにつられて主人も溜息を吐いて小さく笑った。

＊＊＊

泣き腫らした死んだような目でルカは俯きながら歩いていた。
周囲の人間は心配したり同情してくれたりしたが、ルカにとってはどうでもよかった。
大金が入っているカードにはまだ手をつけていない。
怖かった。
そのカードを使ったら、本当に落ちぶれてしまうような気がしたから。
なるべく何も考えないようにした。
悲しいことを思い出すと涙が止まらなくなるから、家に引きこもるよりなるべく外へ出てふらついていた。
どんっと背中に何かがぶつかる。
持っていた食材がいくつか転げ落ちた。
「あ、ごめん！」
ビートだ。
転げ落ちた果物を拾ってルカに返す。
「はいっ」
笑顔だった。
それを受け取り、何も言わずルカはそこから去ろうとした。
「あ、ちょっと待って！」
ビートはルカの肩を掴んだ。

「ぶつかったお詫び。パンの耳食べる？」
「え…？」
パンの耳？
ぶつかったお詫びにパンの耳…。
お詫びとして払うにしてもこれはおかしい。
意図が分からない。
「てか、何でそんな落ち込んだ顔してんの？　大丈夫？」
よしよしとビートがルカの頭を撫でる。
ルカの涙腺が緩んだ。
みんな心配はしてくれるけど触れては来なかったから、頭を撫でられる感覚に優しさが直に伝わって涙が出る。
「うっ…うぅっ…ふぇ…」
「えっ？　な、何で泣くの？　いや、ちょっとこれ…俺が苛めてるみたいじゃん！」
「うっ…うっ、うっ…ひっく…」
「と、取り敢えず…こっち！」
街中の往来で泣かれたら困るとでも言うようにビートはルカの手を引いた。
手が温かかった。
強く握るその手が、優しく感じて涙が止まらなかった。
ただ、手を引いて走る幼いその後姿が…何となく昔の自分と重なって…。
少しだけ辛かった。

＊＊＊

連れて行かれた場所は何の変哲もない川原で、ぽつんとテントが一つあるだけだった。
「ま、入れよ。つっても超狭いけど」
テントの中に押し込まれ、ルカは座り込む。

こんなものは見たことがない。
一時的な避難場所？
これでは雨風の時に耐えることは出来ない。
おまけに中にあるのはランタンと一枚の毛布だけだった。
「此処、俺の家」
「え、家？」
ルカは目を丸くした。
こんなものが家？
つまり、こいつは此処で住んでいるのか。
可哀相で今度は別の涙が出てきた。
「あー、泣くなって！　ほら鼻水出てる」
ルカの鼻から垂れた鼻水を拭いてやり、ビートは頭を掻いた。
「泣いてばっかだと疲れるぞ。お前、名前は？　俺はビート。ビート＝コンダクト！」
無邪気に笑うビートにルカの顔が綻んだ。
「ルカ…。ルスティカ＝ピッツィカード」
「ルカな。うん、ルカ。覚えた覚えた。んで、ルカどうしたー？　あんな世界の終わりみたいな顔して」
ぽんぽんとビートはルカの頭を撫でた。
「俺、一人ぼっちで…。家あっても、誰もいなくて…。ずっとこれからも一人で生きなくちゃ駄目だって…。ううぅ…」
「あぁぁぁ…だから泣くなよ！　ほらほら、また鼻水。えーい、このティッシュ全部やるからちゃんと拭け！　な？」
ティッシュ箱を差し出して優しく笑うビートにルカは頷いてティッシュで盛大に鼻を噛んだ。
「一人ぼっち…一人ねぇ。よし、わかった！　じゃ、俺がこれからお前の家に住むわ。ルカと一緒にいる！」
「え？」
「そうすりゃ一人じゃなくなるじゃん。俺も一人でずっと此処に住んでるし。いや、家っぽいものはあるんだけど逃げてきたからなぁ」

「逃げた？」
頬を掻いて苦笑するビートに、ルカは目をぱちくりとさせた。
「実の親に売られてさぁ…売られた先の家では、きっつい鉱山の強制労働させられて家に帰ったら掃除させられて埃がひとつでもあったらその晩は飯抜き。あ、これ死ぬなと思って逃げてきた」
実の親に売られた？
売られた先の家でも辛い思いをして、それで自分で判断して逃げてきた。
そして現在のテント生活…。
もしかしたら、自分よりも辛い境遇なのかもしれない。
ルカは心配そうにビートを見た。
「そんな顔すんなって。んー…でも、実際逃げてきて正解だった。いくら寝るとこあっても自由が全く無い場所より住む場所とか食べるの辛くても自由に突っ走れる方が生きてる感じがする。楽しいんだ」
「た、楽しい？」
「うん。だって自由に出歩けるお陰で今日ルカとも会えたし。一人もん同士、一緒に住もうよ」
「それは…」
「まぁ、初対面で一緒に住もうぜって言われて受け入れる奴なんて…」
「…いいよ」
ルカの言葉にビートが硬直した。
「は？」
思わず疑問形が口に出た
拒絶されると思った。
こんな震えていて泣きべそをかくような子供が、他人を簡単に受け入れるとは思っていなかったから。
「俺一人しかいないし、ビートも一人だし…。ていうか、此処で生活するの見てられないし」

「ど、同情？」
「うん」
はっきりと言うルカに対して、今度はビートが目を潤ませた。
「同情でも嬉しい！　心の友よっ！」
「うわっ」
ビートは思い切りルカに抱きつき、その反動で倒れこんだ。
「いったた…。はしゃぎすぎだろ。…ビート？」
「へへっ」
ビートはルカに抱きついて幸せそうに笑った。
その様子を見てビートが何を考えているか分からないが、悪い奴ではないと確信した。
ただ、ビートはルカの腰に抱きついたまま動かない。
「…ビート？」
「同情でも形で表してくれるなんて…嬉しいな。一緒にいてくれるんだなぁ…。へへへ…」
幸せそうに笑うビートの目には涙が浮かんでいた。
先程潤ませた涙の残りか新たに浮かべられたものかは分からない。
それでもビートにとって…ルカにとっても、お互いの居場所が出来た。
これからは、二人で一緒に生きていこう。
一人で抱える不安より、二人で分かち合えればそれだけで心が和らぐから。
人の温もりに触れたかった。
それが実現できると思うと、彼を信じたくなった。
出会って三十分。
友達になったばかりの奴と一緒に住むことになった。
ビートだったら、一緒にいてくれる。
お互い一人ぼっちが手を繋げば二人になってくれたから、一緒にいるに違いない。
予想外の楽しそうな生活に胸が躍った。

＊＊＊

何の変哲もない一軒家。

生前の育ての家族と一緒に暮らしていた家だった。

「おー、マジで家だ。屋根がある！　やべぇ、俺今日から此処に住めるんだな」

テント生活が長かったせいか、屋根のある家に住めるという感激のあまりビートは目を輝かせた。

そんなビートをよそに、ルカは紙袋から食品を取り出し冷蔵庫に食材を詰めていく。

「食材多いなぁ。ちゃんと飯は食ってんだ？」

「まぁ、食わないと生きていけないし」

正論だった。

しかし、そんな正論を解くルカの肩にビートは手を回し顔を近づける。

「この一週間、パンの耳と水道水で生きてきた俺に喧嘩売ってる？」

「よく生きてたな」

「まぁ、稀に雑草とかダンボール食ってた時もあったけどな」

「それ絶対、腹壊しただろ」

「それが意外と平気。野生生活になると大抵何でも我慢できるんだわ」

にしし と笑ってビートはルカの肩に顎を乗せて身を乗り出した。

「で、今日のお夕飯は？」

目を輝かせながらビートは、浮かれたような弾む声で尋ねた。

「に、肉じゃが…」

「肉来たこれっ！　うわ、マジで肉食ったのって……。…えーと」

記憶を探るようにビートは首を傾げた。

唸りながら腕を組んで悩ましげな表情を浮かべるビートにルカは不信感を持った。

「俺が最後に肉食ったのっていつだっけ？」
「知るかっ」
わけのわからない突飛な言葉ばかりを発するビートにルカは声を上げた。
「へぇ、ルカって…実は元気っ子？　さっき泣いてばっかいたから臆病なチキン野郎と思ってたのに」
目を細めてビートがにんまり笑うと、ルカは怒りが込み上げてきたようで近くの椅子を蹴り飛ばした。
そして笑いながらビートの胸倉を掴む。
「今すぐテントに戻るか？」
「やーん。ルカちゃんのいけずぅ～。チキン野郎とは全く真逆のタイプなのね、実は」
冷や汗を流しながら苦笑するビートから手を離すとルカは溜息を吐いた。
「ちゃんと手伝えよ。その為の二人暮らし…だよな？」
確認も含め、ルカがビートに不安そうな視線を送る。
「当然っ。二人で助け合いしようぜ」
満面の笑みを浮かべて、ビートは石鹸と水で手を洗った。
その顔にルカの表情も綻び、同じように手を洗った。
「あれ、そういやルカって何歳？」
「え、八歳」
「やった、俺九歳！　これからは兄貴と呼んでくれ」
「誰が呼ぶか！」
どや顔で自分を親指で指すビートの額を叩きルカは声を荒げた。
平和で楽しい生活が待っている。
悲しいことは沢山ある。
それでも…少しくらい笑うことを許してくれ。
これまで過ごした温もりを感じることは出来なくても、ずっと一緒にいる。
悲しいことも笑顔にしてくれるちょっと変な友達が一緒にいるん

だ。

そいつとこれから生きていく。

だから、前向きに頑張ってみるから見守っていてくれよな。

# 第２１話　小さな軌跡

ばたばたと慌しい足音を立てて、パン屋のカウンターに突っ込む。
いつもならこのパターンはビートだけだったが、今回は違う。
一緒に飛び込んできたのはルカだった。
「おばちゃん、クリームパン二十個！」
「ビート、お前ふざけんな！　食パン一斤でよろしく」
睨みあいをしながら騒ぐ二人に主人もおかみもぽかんと口を開けていた。
「る、ルカ？」
「ほら、早く！　早くしないとこの馬鹿に店のパン食い散らかされるぞっ」
「あ、あぁ…」
一週間前まで死んだ魚のような目をしていたルカだとは思えない。
すっかり元気を取り戻して、ビートとじゃれあいをしている。
一体何が起きたのか。
元気になったのなら何よりだが、原因を考えるとすると…。
「だって朝飯まだで腹減ったんだもん。ルーカー、クリームパン食べたい」
カウンターに顎を乗せて腹を鳴らしているビート以外考えられない。
「ちょっとビート。おいで」
「へ？　ちょ…うわっ！」
おかみがビートを引き摺って耳打ちする。
「あんた、ルカに何かしたのかい？」
「はあっ？　何もしてないって。利害が一致して一緒に住んでんの」
「一緒に住んでるって…はぁ、そういうことかい」

何か納得したようにおかみは頷いた。
「え、何？」
「いーや、何でもない。友達大事にするんだよ」
「うわっ」
おかみは笑って訝しげに眉を寄せるビートの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。
「おい、ビート。帰るぞ」
「おう、今行くー」
買い物が終わったルカに向かってビートが駆け寄り外に出た。
「おばさん、何だって？」
「よくわかんない。友達を大事にしろってさ」
「ふーん？」
ビートと同じくよく分かっていない様子でルカも首を傾げた。
ガラスの扉越しに二人の背中を見送るおかみは何となく嬉しそうだった。
「ビートも中々やるな」
主人も同じように嬉しそうな笑みを浮かべる。
「ま、天然だろうけどね。これからはルカも大丈夫だろうさ」
「しかし、まだ八歳や九歳のガキだ。何かあったら面倒見てやる…だろ？」
「はは、そんなお人好しでもないさ。ただ、見守ってやりたいだけだよ」
我が子を見るかのような優しい瞳で夫婦は心地良い気持ちになった。
苦境を乗り越えた二人だ。
きっと助け合えば生きていけるだろう。
そう思った。

＊＊＊

「ごちそうさまでした！」
朝食が終わると二人は手を合わせ、食器の後片付けに取り掛かった。
ルカが食器を洗ってビートがその洗い終わった食器を拭いて片付ける。
最初は何処かぎこちない二人だったが、今は慣れて生活に馴染んできた。
「あ、そうだ。ルカ」
「あー？」
食器を片付けるビートはテーブルを拭くルカに声をかけた。
「今日さ、ダンボールでソリやんない？」
「は？　ダンボールで？」
「そっ。プラスチックのあれよりダンボールの方が滑りがいいんだぜ」
うきうきと楽しそうにするビートを見て、ルカは噴き出して笑った。
「え、どうしたの？」
「いや、何でもねぇよ。んじゃ、滑りまくっか！」
「よしきた！」
ガッツポーズをするビートはルカと共にハイタッチをした。
「あ、その前に」
「え？」
「雪かきしねぇと」
ルカの言葉にビートは苦笑した。
大雑把に見えて中々細かいと早く遊びたくて仕方ないビートは、ルカと共に急いで家の周囲の雪かきを始めた。
「よっし！　今度こそ行くぞ」
「あ、ビート。ほれ」
ルカがビートにマフラーを渡した。
「今日すっげー冷えるらしいぜ。風邪引くなよ。病院代とか薬代と

かかかるから」
「心配してくれんのは嬉しいけど、なんかちょっと胸苦しい」
「もう風邪かよ」
「…ちげーよ。もういい、行くぞっ」
ルカからマフラーを奪い取り膨れた様子でビートは歩き出した。
「あ、おい。ビート！」
膨れた理由が分からずにルカは小走りでビートを追いかけた。
しかし、足並みを揃えると二人は笑って走り出した。

＊＊＊

「ひゃっほーい！」
ダンボールに乗って坂道の上から、雪道を下る。
確かにプラスチックのソリよりもこっちの方が良く滑る。
滑りすぎて転んでしまうこともあったが楽しかった。
お互いに雪の積もった場所にダイブすると、雪の冷たさで赤くなるお互いの鼻を指差して笑った。
滑りすぎてダンボールが水分を吸いすぎてぐしゃぐしゃになると、苦笑を浮かべた。
「やっぱ、ダンボールは消耗品だな」
「いっぱい持ってくればよかったな。なぁ、ルカ」
「ん？」
「お前、雪合戦とか好き？」
その言葉にルカは硬直した。
「雪…合戦…？」
冬の初め、ナナリーが初雪ではしゃいだ日を思い出した。
一緒に雪合戦をしようと約束した。
あの小さな手を握って約束を…。
その晩、ナナリーは急に倒れて翌日の朝に死んだ。
元々、身体が弱くて…肝臓の病気を患っていた。

病院にはワクチンがなくて、漸く輸送されるという時には遅かった。
もっと早ければ…ナナリーは死ななかったかもしれない。
そして、あの約束も。
「…ルカ？」
ビートが目に大量の涙を浮かべてるルカを見て心配そうに顔を覗き込んだ。
「大丈夫か？　お前、泣いて…」
「…ナナ」
「え？」
小さく呟いたルカの言葉にビートがきょとんと目を丸くした。
「いや、なんでも無い」
目をごしごしと擦り、無理矢理ルカは笑顔を作った。
「やろうぜ、雪合戦！」
そこでビートは自分の失言を悔いた。
知らなかったこととはいえ、ルカは家族を失っている。
その中で思い出もあった筈だ。
それは、きっと…。
「ルカ…ごめん、俺！」
「なーに謝ってんだよ。ほら、早く…――――」
無理に笑顔を浮かべるルカの姿を見ていられなくて、ビートはルカを抱きしめた。
「ごめん、ルカ。…無神経だった」
「んだよ…そんなもん知らなくて当たり前だよ。寧ろ、知ってたら怖いっつーの」
「ルカ！　我慢すんな。泣きたかったら泣けよ」
「泣きたいって…・大丈夫だよ…。俺は、だ…大丈…っ。う、うぅ…」
ぎゅっと抱きしめられるビートの温もりが、あの日のナナリーの手の温かさに似ていた。

「ナナ…！　ナナ…っ！　う、うわあぁぁぁぁん。ひぐっ…ひっく…」

「ルカ…」

「何で…何で死んじゃったんだよっ！　俺、俺っ…俺があの時連れまわさなかったら…」

あの日、寒い中連れまわさなかったらナナリーは死なずに済んだかもしれない。

連れまわそうが連れまわさなかろうがナナリーはもう長くないことは知っていた。

知らないのはルカだけだった。

だから、両親はベッドで死まで退屈な日々を送らせるよりも少しでも楽しい思い出を作って悔いの残らないようにとルカと二人で遊ばせていた。

その事実を知ったのは、両親が事故に遭う直前だった。

気がついたら、みんないなくなっていた。

何もかも自分が悪いのではないかと責めていた。

いや、今もルカは自分を責めている。

何の根拠も無く、家族が死んだのは自分のせいだと。

「ルカのせいじゃない。…ルカのせいじゃないよ」

「ビート…！　ビートはいなくならないよなっ？」

「いなくなるわけないだろ、馬鹿。俺、ルカ大好きだもん」

「う、うぅぅ…うえぇぇぇんっ」

その後、盛大にルカはビートの腕の中で泣いた。

周囲はその姿に目を見遣ったが、気にすることはなくビートはルカの背中を撫でながらルカが泣き止むのを待っていた。

（家族…か）

ビートは悲しそうな表情を浮かべた。

どうして両親は自分を知らない場所に売ったのだろう。

確かに貧しくて毎日食べるのも苦労した。

でもそれでも…家族がいれば幸せだったのに。

自分を売った本当の両親は、札束を受け取って歓喜の声を上げていた。
たった三十万ネカ…。
自分の子供より金を取ったんだ。
愛されてなかった。
いいじゃないか、ルカは。
家族に愛されていたんだから。
「いっ…！」
ルカの呻き声が聞こえた。
いつの間にか、ルカの背中に爪を立てていた。
「ご、ごめん！」
「あ、いや…。サンキュ、ビート。すっきりした」
泣き腫らした目でルカは笑った。
最低だ。
ルカに嫉妬した。
失ったとしても愛されていたんだからいいじゃないかと、一瞬とはいえそう思った自分が恥ずかしかった。
大丈夫。
大丈夫だ。
ルカがいれば何も怖くない。
きっと、これからは楽しい。
希望が見えてくる。
そう自分に言い聞かせた。

落ち着いて少し休んでいると、いつの間にか空がオレンジ色になって陽が沈みかけていた。
普段のルカとビートに戻り、二人はベンチから立ち上がった。
「そろそろ帰るか」
「おう。今夜はすっげー冷えるって話だし、鍋でもするか？」
「お、いいねぇ！　肉もよろしく」

「ビート…お前は、肉肉ってうるせぇな。ま、多分豚肉あった筈だから…」
そんな今日の夕飯の話をして家に向かって並んで歩いていると、中年の男女がルカ達の家の周囲をうろついていた。
見たことの無い人物にルカは訝しげな表情を浮かべたが、ビートの顔は青褪めていた。
「や、やべぇ…」
ビートは震えて一目散に逃げた。
嫌だ。
捕まったら…もう戻れない。
ルカと一緒にいられなくなる。
あれは…あれは…ビートが最も恐れている存在だった。
「え、おい。ビートっ？」
ビートが何故逃げたのか分からず呆けていると、中年の男女も走り出していとも簡単にビートを捕まえた。
「このガキッ！　散々手間取らせやがって！」
「嫌だ！　嫌だぁっ！　うぐっ」
男がビートの腹を蹴るとビートは呻いて倒れこんだ。
「ビート！」
状況が分からず、ルカはビートに駆け寄った。
「こっちは高い金払っててめぇ買ったんだ！　何こんなとこで遊んでんだ？　えぇっ？」
男がボールのようにビートを何度も蹴り飛ばし踏みつける。
その痛みに耐えるビートは倒れたまま蹲って頭を抱えていた。
「全く…ただでさえ、親に売られた屑なのにこれ以上迷惑かけんじゃないよ」
葉巻を吹かして化粧の濃い女は、蔑んだ瞳でビートを見た。
「な、何なんだよ！　お前ら、ビートに乱暴すんなっ」
ルカが叫ぶと男女は振り返った。
話の流れからすると間違いない。

こいつらは、ビートが逃げてきた家の夫婦…。
そして、ビートを連れ戻しに来た。
連れ戻されたらビートはどうなる？
辛い労働を強いられて、自由が全くなくなってしまう。
それどころか、こんな酷い目に毎日遭ってしまうかもしれない。
嫌だ。
ビートに会えなくなるのは嫌だ。
「何だ、このガキ」
「び、ビートに触るな！」
ぎろりと男がルカを睨むと、それに怯む。
しかし、友達を…ビートを助けたい為にルカは叫んだ。
「ルカ…駄目だ。お前まで…！」
「あ？　何だ、てめぇの知り合いか」
「坊や、あんたは何も見てないわ。さっさとおうちに帰りなさい」
優しげに女が言うと、悪寒が走った。
子供のルカでも分かる。
こんな場所で巻き込まれたくなかったらさっさと帰れとその顔は言っていた。
何をされるか分からない。
怖い。
こんな奴らにビートは飼われていたのか。
きっと理不尽な暴力だって受けていたのかもしれない。
それでも、此処ではちゃんと笑っていた。
ビートの笑顔が消えるのは嫌だった。
「ほんと、あんたはろくでもないガキだね。何であたしらがあんたみたいな屑を探さなきゃいけないんだよ！」
女が吸っている葉巻をビートの右手の甲に押し付けた。
「あああぁうっ！」
葉巻についた火の熱さでビートは悲鳴を上げた。
駄目だ…。

このままじゃ…このままじゃ、ビートが殺される。
例えこの場で助かっても、いつかは殺される。
足を震わせながら、ルカは何か無いかと周囲を見渡した。
人もいなければ、対抗する手段も無い。
商店街の誰かに助けを求めたくても、何処も閉店済みだ。
（どうしよう…。どうしよう）
そこでルカはハッと気付いた。
ポケットの中に平べったく硬い感触があった。
（…そうだ）
何か思いついたのか、ルカはその場所から走り去った。
「あーあ、怖くて逃げちゃった」
「おら、立て！」
くすくすと女がルカの背中を笑い、男も下卑た笑みを浮かべビートの腕を引いて引き摺る。
「…ルカ…ルカ…ッ」
ビートの目からぼろぼろと涙が零れた。
危険だから逃げた方がいい。
そう思っても、辛かった。
友達に…ルカに見捨てられてしまった。
その事実が痛い。
今まで過ごしたこの一週間の生活が走馬灯のように霞む。
「ダチにも見放されちまって可哀相に。ま、戻ったらそんなもん忘れるくらい忙しくなるんだから関係ねぇだろ」
「やだ…嫌だ！　ルカ…ルカっ！　ルカぁぁぁっ！　嫌だ、離れたくないっ。一緒にいるって約束したんだ！　ルカ、ルカッ！　助けてぇ！　助けっ…ぐはっ」
男がビートの髪を思い切り引っ張り腹を殴ると、ビートの叫びは止まった。
「うっせぇ、ガキ！　勝手に喋ってんじゃねぇぞ！」
「あんま騒いでると二度と口利けないようにしてやるよ！　ただで

さえあたしらに迷惑かけてんだから、せめて大人しくしな！　このゴミガキが！」

「うぐっ、うっ…！　ルカ…ルカぁ…。ひっ…ひぐっ…」

嗚咽を零しながら泣くビートを無理矢理連れて行くべく、強い力でその小さな腕を引き夫婦は歩き出した。

「待ちやがれっ！」

叫び声が聞こえた。

振り返ると息を切らせたルカがそこにいた。

「ルカ…！」

ビートの涙が止まった。

「何だよ…逃げたんじゃねぇのかよ」

悪態をつく男にルカはにやりと笑った。

「逃げる？　馬鹿言ってんじゃねぇぞ」

顔を上げてルカは夫婦を指差した。

「このルカ様が、てめぇらみてぇなくそ野郎相手に逃げるわきゃねぇだろうが！」

ルカは大声で叫んだ。

その言葉に夫婦の顔に青筋が浮かぶ。

「このガキッ！」

殴りかかろうとする男の前にルカが小切手を差し出した。

「七億ネカだ」

「は？」

小切手とルカから発せられた七億という言葉に男が止まった。

「この七億で、俺がビートを買う！」

誰もが驚いた。

夫婦もビートもその巨額の小切手とルカを見比べた。

夫婦は、小切手の名義を見て更に瞳を戦慄かせた。

「ルスティカ＝リディル＝トーン…って、まさかトーン財閥の…！」

「じゃ、これ本物っ？」
子供だからと思っていたが、それが世界一の金融機関であるトーン財閥と言ったら話は別だ。
現に、小切手は普通と違う上質な紙で作られている。
どう見ても子供が作る偽者には見えなかった。
女が目を輝かせると男はルカから小切手を奪い、ビートを投げ捨てた。
「こんなガキで七億貰えるなんて豪遊し放題だぜ！」
「子供雇って働かせなくてもいくらでも遊んで暮らせるってことよねっ。最高！」
笑いながら夫婦は、ルカやビートに見向きもせずその場を去っていく。
投げ捨てられたビートは、身体の痛みを堪え起き上がった。
「ルカ…」
「ははっ。生んでくれた母親が俺の為に溜めていた金、全部使っちまった」
笑ってルカは、あの日クロニカに渡されたカードをビートに見せた。
「何でそんな大事な金…！」
「大事？　馬鹿言うなよ。あんな金、ダチ守るためならいくらでもくれてやらぁ！」
「…何かっこつけてんだよ」
「かっこつけてんじゃなくて、かっこついてんだよ！　ま、これで完全に縁切れたってわけだな」
ルカは手に持ったカードを両手で割った。
パキッと音がして歪んで真っ二つになったカードを近くのゴミ箱に捨てた。
「てか、お前…トーン財閥って」
「…まぁ、この名前使うのも最後だよ。俺はルスティカ＝ピッツィカード。田舎町の一軒家に住むただのガキで、ビートっていう馬鹿

の友達だ」
笑ってルカはビートに手を差し伸べた。
そのルカの笑顔を見て、傷だらけの顔のビートはその手を取った。
「しょうもない買い物で七億使った馬鹿に馬鹿って言われたくないよ」
ビートも笑みを浮かべると、空から白い結晶が降ってきた。
「雪だ…」
「ほんとだ。これ、積もるかもね」
手を繋いだまま二人は空を見上げた。
さらさらとした雪を見てルカは、少しだけ涙を浮かべた。
いつか見たナナリーとの雪景色。
あの頃も心が凄く温かかった。
だけど、これからも楽しいこと嬉しいこと…ビートと一緒に積み重ねていく。
あの家の温もりを新しい温もりに変えて、生きていく。
だから、ナナリー。
お前に負けないくらい笑顔を絶やさないで生きていくよ。
お父さん、お母さん…。
向こうで、ナナリーをよろしくな。
「あれ、ルカ？　泣いてる…？」
空を見上げて涙を零すルカの顔をビートは覗き込んだ。
「…ああ」
小さく呟いた。
「俺、意外と泣き虫みてぇだ」
そう言って涙を流し続けるルカにビートは「知ってるよ」と微笑んで、垂れたルカの鼻水を拭いてやった。
「帰ろっか。俺達の家へ」
ぎゅっとビートはルカの手を握った。
涙を浮かべたまま、ルカは満面の笑顔を浮かべた。
「おうっ！」

白い息を吐いて手を繋ぐ彼らの後ろには、薄っすらと積もった雪に小さな足跡が続いていた。

# 第２２話　真実

話が終わった後、ルカはすっきりしたような顔をしていたがシスカは微妙に不機嫌そうに目を細めていた。
「ま、こんな感じだったけど…シスカ？」
「……何？」
少し膨れたような姿のシスカに対して意図が読めたのか、ルカはシスカの肩に腕を回した。
「何だよ、嫉妬か？　このこのっ、可愛いじゃねぇか！」
「うっさいな…！　大体、それルカがビートに拾われた話じゃなくて…ルカがビートを買った話じゃないか」
ルカの手を振り払ってシスカが言うと、真面目な顔でルカと向き合った。
「ルカ…」
「あ？　うおっ！」
訝しげな顔をするルカに笑顔を向けてシスカはルカの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。
「よしよし。よく頑張ったね」
「てめぇ、喧嘩売ってんのか？」
「う、売ってないよ。ただ…」
じっとシスカはルカを見た。
シスカの翡翠色の瞳に吸い込まれそうでルカは動けなかった。
「シスカ…？」
意味深にルカを見ていたシスカは再び不機嫌そうに顔を顰めた。
「……ビートむかつく」
顔を顰めたのは一瞬で、シスカは優しい笑顔を浮かべていた。
その笑顔には、完璧に殺意が込められている。
ルカの背筋に悪寒が走った。

「シスカ、待て…。落ち着け…」
「何言ってんだよ、ルカ。俺は落ち着いてるよ」
シスカは鼻で笑い、立ち上がった。
その足は何処か、ふらついている。
（や、やべぇ…）
ふらついているその足取りは、怪我によるものではなかった。
今、シスカとビートが会ったらとんでもないことになる。
ビートが海に沈められることを予想したルカの顔が引き攣った。
嫉妬。
そう、シスカはビートにルカを取られたようで嫉妬しているのだ。
からかいがあって可愛い奴と普通にそう思えればいいのだが、シスカ相手では無理だ。
とてもじゃないが、喧嘩ではルカも歯が立たない。
止められる時は、シスカがブチキレた時に目を覚まさせる一撃くらいで喧嘩になると話はまた別だ。
何度か喧嘩したことがあるが、見事にシスカにぼこぼこにされた記憶しかない。
下町で荒くれルカなんて言われているが、その称号は無茶ばかりして荒々しい程のトラブルメーカーという意味で喧嘩が強いというわけではない。
いや、一般的に言えばルカは喧嘩が強い。
その辺のチンピラより腕っ節は良いが、相手がシスカでは歯が立たない。
何処で鍛えたのか分からないが、強すぎる。力があるから、尚更一撃が重い。
弱虫シスカなんていうのは、シスカの消極的な性格から通っただけだ。
その強さを知らない奴らがそんな名前で呼んでいたり、本人も面倒ごとが嫌いなだけに彼の強さを知る者はルカとビート…それから被害に遭った者達と傍観者だけだ。

こんな危険な香りを仄めかしているシスカを放っておくわけにはいかない。
「落ち着け！　ほんとに落ち着け、シスカ！」
「言わせんなよ！」
「は…？」
シスカは振り返ってルカを見た。
そして、ルカの両頬を片手で掴んだ。
「ふぐっ！」
「ずるいよ！　…何でビートが俺の知らないルカを知ってんだよ！」
「へぁ…？」
両頬を掴まれて上手く喋れないまま、頭の中に疑問符を浮かべてルカはシスカを見た。
「…言わせんなよ。ルカを取られたみたいで悔しかったんだ。何で、ビートの方がルカを一番よく知ってんだって思ったら腹が立って…。子供みたいだって笑いたかったら笑えばいいだろ！」
恥ずかしさに顔を赤くして手を離すシスカを見て、ルカは笑いが込み上げてきた。
「ぶっ…ぶはっ…だーははははっ！　何だよ、その発想！　お前、ぜってー乙女だろ！」
ルカは半分涙目でシスカを指差して爆笑した。
その言葉に更にシスカの顔が赤くなる。
「お、おとっ…？　ルカ、ほんとに喧嘩売ってんのっ？」
「んだよ、笑えつったのお前だろ」
くくっと笑いながら楽しそうにするルカにシスカはどう反論するか迷っていた。
しかし、どんな言い訳をしたってルカには通用しない。
話を聞く男ではないのだから。
「うっ…で、でも…その…。も、もういいっ」
そっぽを向いて歩いていくシスカにルカは気付いた。
「おい、シスカ。おめぇ足大丈夫なのか？　もう引き摺ってねぇけ

ど」
「え？　ああ、うん。痛み止めが効いてるみたい」
「…ならいいけどよ」
心配だったが、何をどう言えばいいのか分からないルカは頭を掻いた。
「…ねぇ、ルカ。ひとつ聞いて良い？」
「あ？」
少し言い辛そうにしながら表情を曇らせて、シスカは何度か口を小さく開閉させた後に漸く言葉を発した。
「やっぱり俺にナナリーちゃんを重ねて…二年前、俺を助けたの？　俺がいいって言ってくれたのは、あれは…」
「あー…やっぱ、お前だからそう考えるよな」
深い溜息を吐いて、ルカはシスカの額を指で弾いた。
「いてっ」
「確かにちょっとは重ねたけど、俺はお前だから選んだんだよ。ナナは関係ねぇ。気にすんな。まぁ、気にさせた俺が悪いけどよ」
「でも…」
「俺はお前がいいんだよ」
ルカはシスカの頭を撫でて微笑んだ。
「…ルカ？」
シスカが見上げると、ルカは歯を見せて子供のような満面の笑みを浮かべた。
その様子にきょとんとするシスカだったが、その笑顔に絆（ほだ）されて小さく笑みを浮かべた。
言葉を通さなくても分かる。
ルカは出会った日からシスカを大事にしてきた。
シスカもルカを大事な家族だと思っている。
それだけでいい。
今、此処でこうしている事実が証拠だ。
理由なんていらない。

例え、誰かと重ねられたとしてもそれを受け入れる。
それでがルカの気持ちを和らげることが出来るなら…。
ほっと気持ちが一段落した。
「じゃ、戻ろうぜ」
「そうだね。ある意味どっと疲れたかも」
大きな溜息を吐いてシスカは先を歩くルカに続いて部屋を後にして、そこでルカと別れた。

＊＊＊

時計の針は二十三時近くを回っていて、明かりがついているフロアは少ない。
両親のことを調べるとしたら今かもしれない。
誰もいないうちに調べられたらそれに越したことは無いが、リスクは高い。
もし見つかったら…。
逆に昼間の人が多い時に調べた方が周囲に溶け込んで怪しまれないかもしれない。
でも、それだと表面の薄っぺらい情報しか手に入れられない。
足は自然に技術部の資料室に向かっていた。
自分のＩＤカードをカードリーダーに通すと、扉が開いた。
「…もしかして、基本的にこの建物の施設って全部入れるのかな」
通したＩＤカードを見て、シスカはごくりと息を飲み資料室へと入った。
胸が高鳴る。
いつ見つかるか分からないという恐怖と、この場所に両親の手掛かりがあるかもしれないという期待と不安。
それを知った時、もしかしたら謎が解けるかもしれない。
ひとつずつ保管記録を探していく。

＊＊＊

調査を始めて、どのくらいの時間が経っただろうか。
一晩でこの大量の資料を見るには全然足りない。
「此処の棚終わったら、明日に回すか」
何の手がかりも無いまま溜息を吐いて一つのファイルを手にする。
ページを捲っていると、ファイルに間に挟まっていた一枚のメモリーカードが落ちた。
足元に落ちたメモリーカードのケースを見ると、”研究記録：ジェシカ＝ブルーネル”と書かれている。
「母さんの…？」
間違いない。
シスカが探していたものだ。
この中に間違いなく、シスカが欲しい情報が入っているに違いない。
その小さなメモリーカードを持って、資料室の端末まで行くと電源を入れた。
そして、メモリーカードを差し込むとパスワードの認証画面が出てきた。
「パスワード…」
ロックをかけるということは、重要な資料だということが分かる。
思いつくパスワードが見つからない。皆目見当もつかない。
どんな気持ちでこの資料を作ったのか…それが分からないと。
何か無いだろうか…。
もし、間違った答えを入れて本格的なロックがかかって開かなくなったら…。
調べるものも調べられなくなる。
手がかり…。
ブレスの製作、ルーディメンツの対策、研究…。
二人が託したもの。

「託した…？」
シスカは抱えていた頭を離し、慌てた様子で錬機手帳を取り出した。
そして、昔の日記を検索する。
二人が忙しかった頃に日記を綴っていた。
ずっとさせられていたことだった。二人にそう教育された。
自分のこと、周りのこと…日記に毎日のことを綴ればいいと言われていたが、常に気がついた細部まで細かく描いていた記憶がある。
子供ながら面倒だと思っていたけど、それで二人が喜んでくれるなら…褒めてくれるなら…。
そう思って毎日、書いていた日記。
「あった…！」
六年前の五月十二日。
両親が亡くなる半年前…。
内容は、両親がその日ずっと帰って来なくて暗くて寂しくて夜中に泣きながら布団を被って寝たというもの。
帰ってきたのは、朝方で…その後すぐにまた慌しい様子で仕事に行ったんだ。
でも、帰ってきたのは父親だけで母親が帰ってきたのは翌日の朝だった。
父親も忙しい筈なのに、シスカが一人で寂しい思いをしないように早く帰宅して家で仕事をしていた。
母親は二週間、家に帰って来なかった。
仕事が忙しいから。
父親はそれしか言ってくれなかった。
「この時に母さんがこの資料を作っていたとしたら…。いや、こっちじゃなくて…これだ」
五月二十六日。
母親は、謎の言葉を残した。
”今日の日付と刑死者の数字が仲良しになるの。覚えておいてね”

何の話か分からなかった。
五月二十六日というのは分かったが、刑死者の数字というものが分からない。
「刑死者…。刑死者を表す…数字…」
手帳の更にページを捲る。
そこでシスカは気付いた。
その後に両親に連れて行かれたある場所。
今後の家族の未来を占ってもらったことがある。
軽い気持ちでたまにはやってみようと連れて行かれた。
そこで占ってもらった占いの方法…。
「タロットカード…」
それなら納得がいく。
更にページを捲ると、大アルカナと呼ばれる各々の名前と数字が書かれていた。
「五月二十六日と刑死者の番号十二が仲良しになる。合わさる…。足し算？」
試しにシスカはキーボードで全ての数字を足した解を打ち込んだ。
”４３”
しかし、パスワードは認証されない。
「多分、数字だけじゃ駄目なんだ。母さんの名前じゃバレバレだし…」
首を傾げて再びシスカはキーボードに手を添えた。
「俺に教えたってことは…俺の名前？」
試しに打ち込んだ。
シスカ＝ブルーネルに続き、先程解き明かした数字を。
パスワードが認証され、ソフトウェアが起動する。
「…これ、俺じゃないと分かんないんじゃないか？」
はっとシスカは気付いた。
このパスワードは明らかにシスカにしか分かる筈が無い。
母親が伝えたかつての暗号に、シスカの名前。

それは、つまり…。
「此処に辿り着いた時、俺に教えるため？」
本当は他の要因があるかもしれない。
しかし、そう信じたかった。
この中に知りたいものがある。
きっと大事な何かが…。
ごくりと息を飲んでシスカは、資料に目を通した。

”ルーディメンツ対策兵器、ブレスに関しての研究成果”

一枚目のタイトルにはそう書いてあった。

”人類を脅かすルーディメンツが開発されたのは、二十年前の国境戦争によるもの”

「国境戦争…？　二十年前？」
新たな謎が増えた。
二十年前、国の領地を争って行われた戦争。
話には聞いたことあるが、詳しくまでは分からない。
シスカは続きを読んだ。

”戦争の最中にルーディメンツのＡＩが暴走。故に周囲の判別が出来なくなり、その後人類を脅かす存在になった”

何もかも驚きで言葉が出なかった。
知らない事実…。
ルーディメンツは意志のあるコンピューターＡＩで起動していた人類が作った兵器。
つまり、人類の敵を人が作っていたということになる。

”だが、ルーディメンツの製造は終わることなく世界を蝕んでいった。この世界の崩壊を望む者こそ真の人類の敵と言える。故に私達は、ルーディメンツの研究を元にした対ルーディメンツ用戦闘兵器であるブレスを開発した”

「誰かが…ルーディメンツを操ってる？　そんな、それじゃ…！」

動揺する気持ちを振り払うようにシスカは首を横に振った。

まだだ。

まだ全部読んでいない。

少し冷静になれ。

この研究記録で何を伝えたいのかを…意志を受け止める為に。

”その中の一機、スフォルツァンド。これは、あるもの…私達にとって欠かせない存在を元にしたプログラムを組み込むことにした。いつか、あの子がこの場所に辿り着けた時にこれを読み、気付かされる真実…”

「スフォルツァンドは、あの子の脳に埋め込んだカデンツァチップの覚醒で本来の力を引き出す。故に思考・神経共に繋がったひとつの存在として私達はスフォルツァンドを遺す…」

文面の続きをシスカは口にして震えた。

”ごめんね、シスカ。あなたの身体を兵器の実験なんかに使ってごめんなさい。私達は、親という立場より研究者としての立場を取ってしまった。最低な親なのは分かっている。でも、あなたに賭けたかった。あなたが平和に暮らせる世界をあなた自身で作って欲しい。あなたを実験につかったその意味は…”

そこでシスカは、端末の電源を切った。

ダンッと机を叩き、目からは止め処ない涙がぼろぼろと零れてい

た。
この先は見たくない。言い訳なんかいらない。
事実…。
カデンツァチップ…。一体何なのか分からないが、スフォルツァンドを作るための実験として身体を弄られたのが事実だということが分かった。
だから繋がっていたんだ。
スフォルツァンドは、自分だから。
ルーディメンツを倒す兵器として、身体を…。
「何で…何で、こんなのっ…！　嘘だ…こんなの…嘘だっ！」
叫び、シスカは周囲を荒らした。
薬が切れかけている足の痛みなど関係無しに、怒りと悲しみをぶつけるように資料室を滅茶苦茶にした。
それでも晴れない。
信じたくないが、全ての辻褄が合って苦しかった。

泣き疲れて目が腫れた状態で、シスカは俯いて座っていた。
頭にゴリッと冷たく無機質なものが押し当てられる。
感触でなんとなく、それは銃だということが分かった。
震えたまま俯いたシスカを見下ろしたのは、カペラだった。
「随分暴れたようだな」
「……」
「世の中には知らない方が幸せな真実もある。お前がそうなってしまったのは、お前自身の責任だ」
「……」
「お前は脆いな。この程度で壊れたらこの先やっていけないぞ」
「……」
声は聞こえているが、シスカは俯いたまま動かない。
その様子に痺れを切らしたカペラは、シスカを押し倒し銃口をシスカの額に押し付ける。

「お前は兵器なんだ。ルーディメンツを倒すための道具だ。お前は人間じゃない。戦う以上の価値など無い」
「なっ…！」
「…そう言われれば満足か？　何を埋め込まれようが身体を弄られようが、彼女達の息子であるシスカ＝ブルーネルに代わりは無い筈だろ」
「俺は……」
「悲観的になるのは誰でも出来るんだ。真実を知りお前は絶望したのか？　この先もそんな顔で生きていくのか？　答えろ」
「…分からない」
「あ？」
渇いた目から再び涙が零れた。
しかし、表情はなく憔悴しきったような顔だった。
「何をすればいいのか…分からない。俺は実験に使われる為に育てられた…。二人は、俺を愛してなかったんだ」
「それは違う。二人は…」
「何も聞きたくないっ！」
シスカはカペラを振り払い、資料室から走り去る。
こんな足よりも心がずっと痛い。
誰にも触れられたくない。
何もしたくない。
利用されただけの戦いなんて、嫌だ。
「ッ、こんなものっ！」
シスカは床にエオリアキーを叩き付けた。
何処へ行くかも分からないまま、シスカはソルフェージュを出てひたすらに走った。
目的も無いまま…。
誰もいない場所を探して。

# 第２３話　出会い

翌日、朝。
騎士隊は急遽カペラに呼び出され、シスカの失踪を知った。
昨晩から帰ってこない。
恐らく、もう戻ってこないのだろうと予測できた。
「シスカが、失踪って…。何でだよ！　何であいつがっ」
「ルカ、落ち着け」
「でもよっ！」
「いいから、落ち着け！」
ロックに痛いほど肩を掴まれ制止の言葉をかけられると、漸くルカは押し黙った。
「レント少佐。これを預ける」
カペラがロックに渡したのは、シスカが投げ捨てたエオリアキーだった。
これが此処にあるということは、シスカは放棄したのだ。
戦うことを…ブレスに乗ることを放棄した。
「一体何が…」
その疑問を誰もが抱いていた。
暫く黙っていた後、カペラは重い口を漸く開いた。
「あることを知ってしまった。私の口から言えるのはそれだけだ」
「あることって…何だよ」
「それは言えない」
「何でだよっ！」
今にもカペラに掴みかかりそうなルカを周囲のクルーが抑えた。
カペラは、ルカの心中を察するようになるべく冷静に取り繕った。
「お前らがそれを知ったということが分かったら、シスカ＝ブルーネルの傷が広がるだけだ。昨晩の段階で錯乱していたんだ。これ以上の心の負担は危険だ」

その言葉に全員が硬直した。
言っている意味が分からない。
シスカにとって絶対に知られたくないこと。
それを他に…自分達に知られたら、傷ついた心が更に傷ついてしまう。
それほどに追い詰められているのか。
「しかし、奴は重要なブレスパイロットだ。我々も捜索をしている。私が話したいのは、今後の作戦の話だ。ブルーネルを抜いた戦闘についてな」
「シスカ抜きの戦闘…。つまり、それは」
「ああ、そうだ。ルバートが使えるようになったのは不幸中の幸いだな。ピッツィカード、奴が戻ってくるまでお前一人で戦うしかない。分かっているな？」
カペラの言葉にルカは拳を握って踵を返し背を向けた。
「シスカは絶対に帰ってくる。絶対にな！　それまで、俺があいつの居場所守ってやらぁ」
それだけを言ってルカは部屋を後にした。
一人で戦う。
そんなものどうでもいい。
シスカに何があったのか、知りたい。
しかし、その理由を知ったらシスカを傷つけてしまう。
だったら、待つしかない。
立ち直って戻ってくるのを待つしかない。
その為に、此処は自分が守る。
いつか帰ってきた時にシスカが不安な顔をしない為に。
ルカは、そう心に誓った。

＊＊＊

話が終わった後、部屋に残ったのはカペラとシロフォンだけだっ

た。
吸殻の山になった灰皿に新しい吸殻を落とし、カペラはシスカのデータが纏められた資料を見た。
「資料なんて、初めて見るな」
小さく笑い、目を細めてカペラは机に資料を投げた。
「…あの様子だと、やっぱり覚えていないようだな」
「覚えてない…と申しますと？」
「これを見ろ」
カペラは一枚の資料をシロフォンに渡す。
それを受け取り、シロフォンは資料を見ると目が戦慄いた。
「こ、これは…」
「ああ、そうだ。七年前の事故…。それを覚えていたら、あんな状態にはならなかったかもしれないが…。もう過ぎたことだな」
「もし、ブルーネルを発見された場合どうするおつもりですか？」
「…決まっている」
一呼吸を置いて、カペラは新しい煙草に火を点けた。
「それ相応の処分を受けてもらう」
強調されたその言葉に、シロフォンはごくりと息を飲んだ。
それ相応の処分…。
一体、どのようなことを行うのか…。
ブレスパイロットであることを放棄したシスカに与えられる罰は、きっと軽いものではない。
それを案じて、シロフォンはカペラから目を離せずにいた。

＊＊＊

「お父さんに会いたい？」
ニムの父親が見つかったと伝えた後日、同じレストランでビートはニムにそう尋ねた。
しかし、ニムは腕を組んで少し考えた後に首を横に振った。

「どうせあの人のことだから、失踪先でもお気楽元気にやってるんでしょ。てか、行方不明なの忘れてたわ」
あっはっは、とニムは笑う。
その様子にビートは苦笑を浮かべた。
「忘れてたって…。それ、酷くない？」
「えー…何処がよ。うちの家族は普通じゃないの。お互いに元気だって分かればそれでいいのよ。強がりでも何でもなくね」
「う～ん…。俺も普通の家庭ってのは知らないけど、ニムちゃんの家は特別変だということは分かるよ」
少し困ったような表情でビートは溜息を吐いた。
折角親子の感動の再会を取り図ろうとしたのに、存在すら忘れていたニムの父親に同情した。
しかし、ニムにはひとつの疑問があった。
「で、何でビート君が父さんのこと知ってんのよ」
「秘密♪」
笑顔を浮かべるビートにニムは怪訝な顔をした。
いくらなんでも胡散臭すぎる。
「ビート君、何やってる人？」
「おっ、察しがいいね。流石はいくつもの有名企業を牛耳っているカリスマ女子高生社長」
「茶化さないで。どういうことなの？」
「あ、そうだ。そろそろ帰らないと…」
「ビート君」
逃げようと席を立つビートにニムは少し怒りが篭った口調で彼を制止する。
「…分かったよ」
頭を掻いて観念したとばかりにビートは座った。
「俺、情報屋だから。君のお父さんの件は、別の仕事をしてたまたま手に入れた情報だよ」
「別の仕事って…？」

「それは企業秘密」
自分の口元に人差し指を当てて笑うビートを見て、ニムは怪訝な表情を浮かべた。
「なーんか、シスカがあんたを嫌う理由が分かってきたわ」
「え、何それ。酷い」
わざと傷ついたような素振りを見せるビートが白々しすぎて、ニムは疲れたように溜息を吐く。
「ビート君の用件ってそれだけ？　てか、ほんとにたまたまなの？」
「ほんとだって。何なら君のお父さんの居場所に案内しようか？」
「いや、別にいらない」
「ほんとに冷たい娘だね、君。まぁ、いいや…。案内も何も近いうち戻るだろうし」
「ふぅん…」
コーヒーを啜りながら言ったビートの台詞を流すニムに、ビートは限界なのか泣きそうな表情を浮かべる。
「な、何？」
「喜ぶとか驚くとかそういうのないの？」
「だから言ったじゃん。お互いに元気だって分かればそれでいいって」
本当に強がりでも後ろめたさでも何でもなかったようで、ニムはあっけらかんと答えた。
「貴族って本当に凄い人達多いんだね…」
項垂れたビートは、このやり場の無い切なさを何処にぶつけたらいいのか分からなかった。

＊＊＊

一晩中走った先には、深い洞窟があった。
街から離れて、今現在何処にいるのかも分からない。
呼吸が乱れて漸く隠れられる場所を探していて、いつのまにかこ

の洞窟で意識を失った。
それからどのくらいの時間が経ったのだろうか。
薄れた意識は、洞窟の天井の氷が解けた水滴が顔に触れたことで覚醒する。
「う…ん…？」
意識を取り戻し、起き上がり現状が理解できない頭を働かせる。
「うっ！　さ、さむっ」
周囲が氷に覆われた洞窟…寒さを感じない筈が無い。
壁も地面も天井も一面氷で覆われているこの場所に覚えは無かった。
こんな所で寝ていたのかと思うと背筋に悪寒が走る。
このまま眠り続けていたら、凍死していたかもしれない。
寒さで身震いをして、呼吸をするたびに白い息が吐き出される。
「早く、出なきゃ…」
凍える身体で足を前に出そうとした。
「あれ…？」
周囲を見渡すと分岐点がいくつもあって、道がこじれていた。
「ど、どうしよう。このままじゃ、凍死しちゃ…っくし！」
不安に掻き立てられるが、くしゃみをすることで改めて思考を巡らせた。
「とにかく、出口探さないと…」
立ち止まっていたら死んでしまう。
シスカはあてもなく、前へ進んだ。
前へ進んだのはいいのだが…。
「ふ、うぅ…寒い…」
寒さで感覚が麻痺してきた気がする。
手や足の指先の感覚は無く、上と下の歯がぶつかりあってカチカチと音を立てる。
呼吸時に吸い込んだ冷気が喉奥を凍らせるような錯覚さえしてしまう。

それでも、歩くしかなかった。
（こんな所で…俺は、死ねない）
誰もいない場所で孤独に死んでしまうのは嫌だった。
今はとにかく、この洞窟を抜けなければその嫌な方向へ向かってしまう。
「え…」
暫く歩いた先に光が見えた。
もしかして外へと続く光かとシスカは希望を抱いてその光へと向かった。
しかし、それは抱いていた希望とは違う光だった。
「何だ、これ…」
踏み込んだ先にあるのは、一面に光り輝く白い花に覆われた場所だった。
まるでそこだけが世界から切り離された不思議な場所だった。
白い息を吐きながら、歩いていくと白く咲き誇った花の絨毯の中にあるそれに目を奪われた。
その白い花と同化するが如く、綺麗な長い銀髪の少女が眠っていた。
少女の人形のような白い肌に触れる。
雪のように冷たかった。
こんな寒い場所で眠っているとしたら、もしかして…。
「ま、まさか…死ん…っ」
肌が冷たさが冷気のせいかそうじゃないのか分からない。
この少女が死体なのではないかと思うと怖かった。
このまま此処にいたら、彼女と同じ運命を辿ってしまうのかもしれない。
シスカは後ずさりをしてその場から去ろうとした。
「また逃げるの？」

静かな…それでいて凛とした声。
後ろを振り向くと、銀髪の少女が立っていた。
生きている…？
いや、それ以上に…。
「逃げていても失うばかりで何も手に入れられないの。逃げないで。…シスカ＝ブルーネル」
「な、何で俺の名前…」
「あなたの脳にあるものと私の中にあるものが接触したから。だから、私はあなたのことを知っている」
脳にあるもの？
彼女の中にあるもの？
接触？
一体、何を言っているんだこの子は。
「俺の脳って…。まさか…！」
口に出して、はっと気付いた。
昨晩得た情報…。
スフォルツァンドを作る時に脳に埋め込まれたもの…カデンツァチップ。
それが彼女にも？
彼女も身体を弄られたのだろうか。
実験の為に…。
「それは違う」
「え…？」
「あなたは全て勘違いしている。あなたの両親のこともスフォルツァンドのことも私のことも…あなた自身のことも」
「は…？」
少女が何を言っているのか分からない。
全て勘違い？
何を…何処から何処まで間違っているというのか。
「本当に覚えてないの？　七年前の事故のこと」

「七年前…？　事故？　一体何を…っ」
一体何を言っているんだと言おうとしたが、それは防がれた。
いや、塞がれたのだ。
呼吸が鼻でしか出来ない。
唇に柔らかくて温かいものが触れる。
身体の温度が上昇して、動機が早くなるのが分かる。
少女からの優しいキスは、ただの口付けじゃなかった。
（何だ？　頭の中に…）
脳内に様々な情報が飛び込んでくる。
機械が散乱したその場所で両親が研究に勤しんでいる姿。
ノイズが入る。
高い高いビルの屋上。
燃えるような赤い夕焼け。
足元が崩れる音…。
瓦礫の下敷きになった子供。
血の匂い…。
人のざわめき声に救急隊。
ごちゃごちゃとした医療器具…そして、見たことの無い小さな機械。
誰かが…泣いている。
白衣を着た人達が…泣いている。
あれは…。
あれは…！
「…ッ！」
シスカは少女を押し倒した。
「な、な…何だよ、これ！　何で父さんと母さんが…」
「七年前の事故」
「え…」
戸惑った表情をするシスカを少女は無表情で見ていた。
「あなたが忘れている記憶。無理も無いのかも…。悪戯であんな古

いビルで遊んでいたあなたは、瓦礫の下敷きになって生死の狭間を彷徨ったのだから」
「俺が…死にかけた？　七年前に？」
それじゃあ、今脳内に映ったあの子供は…。
あの子供は自分だというのか。
そんな話は聞いたことが無い。
事故に遭ったというのなら、その話を知らされてもおかしくない筈なのに。
「詳しく話す？　それとも、これ以上余計なことで傷つきたくないからまた逃げる？」
「別に俺は逃げてなんか…」
「逃げてる。傷つくのが怖いから真相を知りたくない。本当は知りたいと思った癖に都合が悪くと逃げる。自分は傷ついたんだって、可哀相なんだって…」
「違う…。俺はっ…！」
「自暴自棄になって逃げ出して、周囲に迷惑をかけたことも気に留めず自分のことばかり。それ故に視野が狭い」
「な…何なんだよ、さっきから！　俺の何を知ってそんなことっ」
「全て」
はっきりとした物言いで少女は答えた。
「私はあなたの全てを知っている。あなたの知らない記憶も。こうして接触したから」
「ど、どうして…」
「……」
その答えを少女は語ろうとしなかった。
何のことか分からなかった。
少女の素性も言っていることも自分との繋がりも。
彼女の存在が…分からなかった。
「…それで、どうするの？」
「え…？」

「聞く？　それとも逃げる？」
「……」
シスカは、ぐっと拳を握って俯いた。
悔しかった。
全て見透かされていて、図星ばかり突かれて反論できない自分が恥ずかしくて悔しかった。
確かに傷つくのは怖いし、逃げたい気持ちはある。
自分が情けないほど臆病なのも分かる。
だけど、一度は決めたじゃないか。
みんなを守ってやるんだって、逃げ道は作らないって決めたじゃないか。
「分かった、聞くよ」
シスカの答えに静寂が訪れる。
少女は微笑んだ。
その微笑みが天使のように見えて、一瞬だけシスカの顔が紅潮した。
「七年前の事故で、あなたは死ぬ筈だった。脳に大きなダメージを負っていて、医者ですら諦めていた。もう手の施しようが無いと」
「俺、そんなに…」
そんなに酷かったのかという言葉を飲み込むシスカに少女は頷いた。
「それでも諦めない人達がいた。それが、ゼウス＝ブルーネルとジェシカ＝ブルーネル」
「父さんと母さん…？」
「二人はあなたが生きるためにカデンツァチップを埋め込んだ。本来なら、スフォルツァンドは他のブレスと同じただの戦闘用メカとして開発される筈だった」
少女は続けた。
「カデンツァチップは、パイロットを強化する為の道具…カノンドライヴの一部のパーツとして開発される筈だった。でも、その時は

まだ設計段階でカノンドライヴの要となるカデンツァチップしか出来ていなかった。そして、二人は賭けたの。身体を強化させるカデンツァチップを人間の身体に埋め込んだら、あなたを助けられるんじゃないかって」

「まさか、それって…」

「あなたの命を救う為に行った実験。そのデータを元にスフォルツァンドは作られたのは確かだけど…それでも、あなたの命を救ったのはその実験のおかげなの」

「それじゃあ、俺は…」

「そう。結果的にあなたは元の生活を送ることが出来た。ううん、事故に遭う前よりもずっと健康で身体能力が高くなった」

「…俺は、強化人間ってこと？」

ブレスパイロットを強化する道具として使われる部品であるカデンツァチップを実際に埋め込まれたとなったら、それは…。

「そこまで大袈裟なものじゃない。普通の人より少しだけ丈夫になっただけ。たったそれだけ…」

シスカを助ける為に苦渋の選択として実験に使ってしまった両親。昨日の資料を最後まで読んでおけばよかったとシスカは後悔した。そうすれば、両親を憎むことなく更に尊敬することになったのだろう。

愛情…。

二人の愛情を一身に受けたのだと認識させられた。

何も考えず、勝手に誤解して勝手に裏切られたと錯覚した自分がこの上なく恥ずかしい。

胸に熱いものが込み上げてくる。

「…俺、馬鹿だ」

シスカは涙声で呟いた。

「父さんと母さんが俺をモルモットとして考えるなんてありえないのに…」

「私の話…信じてくれる？」

少女が不安そうに尋ねるとシスカは頷いた。
「うん、信じる。何となく…君がこんな嘘言うとは思えないから」
涙目で笑みを浮かべるシスカに少女は嬉しそうに笑った。
「セリカ」
「え？」
「私の名前。セリカ＝ハウル。よろしく、シスカ」
微笑みながら名乗る少女…セリカにシスカは、戸惑いながら頷いた。
今更だが、他人が自分のことを細部まで知っているというのは不思議な気分だった。
「というか、君は何で…っくし！」
少女の素性を尋ねようとしたところでくしゃみが出て再び凍えるような寒さが蘇って来た。
「ひとまず、此処から抜けよう。話はその後で…」
シスカは少女の手を引いた。
洞窟を抜けようと歩き始めたその時だった。
「心配には及ばない」
男の声がした。
慌しい複数の足音がして、それは止まった。
振り返ると、その声の主らしき背の高い黒髪の青年を中心に軍人がシスカ達を取り囲んでいた。
「シスカ＝ブルーネル。一緒に来てもらうよ。…どういうことなのか、分かっているね？」
カペラの命令でシスカを取り戻しに来たということは一目瞭然だ。
このまま逃げていてもきっと罪が重くなる。
逃げる必要もなくなったのだ。本当の真実を知ったのだから。
だから、勘違いをして人に迷惑をかけた罰は受けよう。
その罰がどんなものか恐怖を感じたが、シスカは受け入れることにした。
「…分かりました」

頷いてシスカは軍人に両腕を拘束され、歩き連れられていく。
「君にも少し話を聞きたい。悪いが、一緒に来てもらうよ」
シスカと一緒にいたセリカからも事情聴取したいのか、青年は優しくセリカに語り掛ける。
「シスカに乱暴しないで…」
「それは僕達が決められることじゃない。さぁ、行くよ」
青年は、セリカの手を引いて歩き出した。
セリカはシスカの背中を目を逸らすことなく見ていた。

＊＊＊

洞窟を抜けようと少し歩いた時にそれは起こった。
ゴゴゴと地面が響く。
洞窟の岩や氷が軋み、天井から細かい石粒が落ちてくる。
そして衝撃。
一際大きな揺れに倒れこんだ。
「うわあぁぁっ！」
大きく揺れるその地震…。
きっと地盤が緩いせいで余計に揺れを感じるのだろう。
このままでは、生き埋めになってしまう。
「この揺れはっ」
シスカには分かっていた。
何か巨大なものが歩いているような規則的な揺れ。
その原因は分かる。
今まで、それと戦ってきたのだから。
「ルーディメンツ…！」
震える声を振り絞って、シスカはその名を呼んだ。
その一言で敵の奇襲だということを確実に認識させられた軍人達と共に、急いで洞窟を抜けるべく走った。

# 第２４話　自分に出来ること

警報と共に騎士隊は作戦を開始する。
シスカのいないルカ一人の出撃。
近接戦用のルバート一機のみとなると、不利。
以前はジェントが一人でルーディメンツと戦ってきたが、それは彼に経験があって頭も切れることもあって出来た技だ。
初めて出撃するルカにとっては厳しい状況…。
冷静に戦術を組むなんてことはルカには出来ない。
此方から指示を出しても、イレギュラーなんていくらでも考えられる。
その時の対処方法なんか知るわけが無い。
ただ感情的に戦ったら危険…。
ルカは、その危険性を分かっているのだろうか。
「へっ、武者震いが止まんねぇぜ…」
ルカは強がったような笑みを浮かべた。
初めて戦場に出る緊張感…。
いくらルカでも戦場へ出る恐怖くらいある。
こんな気持ちだったのか。
シスカは、こんな気持ちで戦っていたのか。
手に汗を握り、ルカはエオリアキーを鍵穴に差した。
スフォルツァンドとはタイプが違う、近距離戦に適した少しごつめの黒い機体…それがルバートだ。
起動と共にルバートの目が光り輝いた。
「どうだ?」
ロックがジェントにルカとルバートの同調率を確認する。
「…緊張してるのか、少し乱れてるね。多分、普段のペースで感情的になったら切断される」

「切断されたら、どうなる？」
「俺みたいになっちゃうよ。だから気をつけて。敵じゃなくて、ルカに。特に今はシスカがいないから、不安なんだと思う」
ジェントのように…というのは、彼の左目と右足のことを言っているのだろう。
ジェントの戦闘不能により、シスカがスフォルツァンドに初めて乗ったあの時のことを。
「あの日、俺も同調が切れてされるがままだったから…。だから、隊長」
ジェントの言葉にロックは、力強く頷いた。
「作戦を始める！　ルカ、死にたくなかったら指示に従えよ」
ロックは、ルカに通信を送った。

「……」
その指示に対してルカは返事をしなかった。
ただ、操縦桿を握って何度も深呼吸をしていた。
『ルカ、聞いているのかっ！』
ロックの怒号が飛ぶ。
「うっせーな！　イメトレしてんだから邪魔すんなっ」
噛みつかんばかりにルカは牙を剥き出しにして大声を上げた。
そして再び深呼吸をして、操縦桿を握りなおした。
「…ルスティカ＝ピッツィカード、行くぜっ！」
ルカの言葉を合図にルバートは、飛び出した。
着地をしてルーディメンツに対峙すると、ルカは息を飲んだ。
視界に入ったのは、沢山の触手が生えた二足歩行の形をしているルーディメンツだった。
「うっわー…キモすぎんだろ」
わざと吐きそうな素振りを見せてルカは構えた。
『ルカ、まずは……――――』

「一撃入魂！　おらあぁぁっ！」
ロックの指示を待たずにルカの掛け声と共にルバートは走り出した。
そして、ルーディメンツとの距離を縮めて拳を構える。
「ダイナミックメガトンシャイニングパァァンチィィ！　ルカ、スペシャルウウゥゥ！」
古臭いヒーローアニメばりの必殺技を発し、勢いよくその拳をルーディメンツ目掛けて振るった。
しかし、至近距離であからさまに殴ろうとするルバートの隙をついてするりとルーディメンツは避けた。
「うおっ」
重心を保てない操縦のまま、ルバートはその直線状に転んだ。
「いててて…。いってぇな、くそっ！」
コクピットが揺れた衝撃で頭をぶつけたのか、ルカは頭を抑えた手で再び操縦桿を握る。
しかし、遅かった。
全てが遅かった。
ルーディメンツの無数の触手がコクピットにいるルカごとルバートを貫いた。
「がっ…！」
ルカの瞳が戦慄く。
触手がルカの身体から抜けると、貫かれた身体の箇所から血が噴き出した。
「は、はは…。マ…ジ…かよ…」
身体から噴く血を見てルカは、信じたくない死への恐怖に震えて自嘲気味に笑った。
＊＊＊
連行されたシスカとセリカは、漸くソルフェージュに辿り着いた。

しかし、後ろ手の拘束はまだ解かれる事なく解放される雰囲気は無かった。
「お願いします！　行かせて下さい。俺っ…！」
遠目だったが外の様子を見てルカが苦戦していることを知ってしまったシスカは、いてもたってもいられなかった。
助けないと、死んでしまう。
ルカが、死んでしまう。
今、ルカを守れるのは自分だけだとシスカは思った。
しかし、依然として解放はされない。
「それは、此方では決められない。この件は大佐からの承認が…」
「それじゃあ、このまま大人しく見てろって言うのかよ！」
シスカが声を荒げて叫んだ。
「落ち着くんだ。ブルーネル君」
「解放してくれないなら…！」
ぐっと力を入れて、シスカは拘束する軍人から離れ蹴り飛ばした。
「ぐはっ！」
シスカが本気を出せば、このくらいの拘束は簡単に解ける。
それを知らなかった軍人達は驚いた様子を隠せずにいた。
「手荒にしてでも行かせてもらいますっ！」
「こんな子供に…！」
倒れた軍人が起き上がって歯を食い縛りシスカに跳びかかる。
しかし、それは簡単に避けられてしまい周囲の軍人もシスカへと向かってくる。
その動きを見てシスカは、向かってくる全員を倒していく。
軍人がシスカ一人に引けを取るには理由があった。
子供だからと本気を出せないこと。
確保を頼まれているからには、乱暴なことはあまりしたくない。
それは、このリーダー格の青年の教育の賜物なのかもしれない。
だから、シスカ一人で彼らを簡単に伸すことが出来た。
「ブルーネル君、やめるんだ！　これ以上、罪を重ねたら…」

「罰だろうと何だろうと、そんなもの後でいくらでも受けます！でも…今は…今は、行かせて下さいっ！」
必死に抵抗するシスカを見て、セリカは青年の腕を抑えつけた。
「なっ…！」
「シスカ、行って」
「セリカ…。でも、君はっ」
「私は大丈夫。みんなにとってシスカは必要な人なの。だから、早く行って」
大人しい喋り方だが、その声には強い力が込められていた。
必死で青年を抑えるセリカに心配そうな表情を浮かべたが、すぐに頷いてシスカは走った。
その背中を見て、青年は溜息を吐いた。
セリカに抑えられていたのではない。
抵抗しなかっただけだ。
シスカの必死な表情を見て、束縛することなんて出来なかった。
「こりゃ始末書かな」
小さく笑って、青年は優しくセリカの手を解いた。
「…ごめんなさい」
セリカは小さな声で男に謝罪をする。
しかし、後悔はしていない。
シスカには、今出来ることをやらせてあげたい。
だとしたら、自分はその背中を押すだけだ。
「私は、少しでもあの人の力になりたいから…」
「だろうね。…ほんとに、若いなぁ」
青年は苦笑しながら、頭を掻いた。
「でも、きっと辛いよ。この戦いが終わったら…」
「覚悟してる。でも、大丈夫。あの人だったら…きっと、大丈夫だって思える」
セリカは小さく微笑んだ。
青年は、セリカの手を取った。

「それじゃあ、行こうか」
青年の優しくも厳しさの残る声にセリカが頷いた。

＊＊＊

「ルカッ！」
貫かれたルバートとルカの身を案じ、ロックは叫んだ。
「ルバートの装甲をぶち破る硬さとパワー…？　かなり、まずいかもしれない」
ジェントが呟いて気難しい表情を浮かべる。
戦況はかなり悪い。
もし、あのままルバートが攻撃を受け続けたら…確実にルカは死ぬ。
警報が鳴り響く。
「パイロットの生体反応、イエローからレッドです！」
アニーミのオペレーションを聞いてロックは歯を食い縛り拳を握った。
今のルカは、瀕死の状態。
想像以上に戦えないルカへの対処を巡らせる。
敵を倒すのが最優先。
しかし、パイロットの命を助けたい。
最前線で戦う者を優先して救いたい。。
「…ルカを下げろ」
「え…？」
低音で呟くような声量でロックは俯きながら言うが、ジェントはその言葉をはっきりと聞き取ることが出来なかった。
「ルカを下げろ！　これ以上の戦闘は無理だ」
今度は怒鳴りつけるように叫んだ。
ルカを下げたら戦う者がいない。
それならば、限界まで戦わせるべきだ。

それが、カペラの望んだ作戦だった。
「まだ持つだろう」
ブリッジの扉が開くと同時にカペラの冷たい声が聞こえた。
「まだ意識も保っている。死んでいるわけではない」
「しかし、これ以上の戦闘はっ！」
「まだだ。まだ持つ。…そうだろう？　ピッツィカード」
依然として腕を組んだまま表情も声色も変えることなく、カペラはルカに通信を送った。

流れが止まらない血を抑えるように腹部に手を当てていると、苦悶の表情を浮かべ大量の汗を掻くルカは無理矢理笑みを浮かべた。
「…ったりまえ…だろうが…！　こんくらいで俺が…死ぬかよ…っぐ！」
身体を動かすたびに、血がぼたぼたと流れ落ちる。
小さく呻くルカは、痙攣している血塗れの手で操縦桿に手を伸ばす。
『ルカッ！』
ロックの怒鳴り声が聞こえる。
『いいから、下がれ！　本当に死ぬぞ！』
カペラの意向を無視してロックは叫ぶ。
ロックは、自分が何をしているのか分かっていた。
感情に任せて上官であり最高責任者のカペラに楯突くということが、どれほどのものかと。
降格される可能性だけではなく、司令官として外されるかもしれない。
それでも、見殺しには出来ない。させるわけにはいかない。
しかし、ルカはそんなロックの心中を知る由もなくルバートを再起動させた。
ルーディメンツの手がルバートの頭を掴み、他の触手で動きを封

じて殴り続ける。
「ぐあっ！　あっ、ぐうぅ！　く…っそ…！」
意識が朦朧とする。
機体が軋み、激しく揺れて火花が散るコクピットでルカの指先の力が抜ける。
（こんな所で死ぬなんて…ありえねぇだろ。俺は、あいつの居場所守ってやるって決めてんだ。まだ死ぬわけにはいかねぇ…）
ガッ！　ガンッ！　ガンッガンッ！　バキッ！
遂にルバートの頭部に亀裂が入った。
直にルーディメンツの姿を視認した。
（…これまで…なのかよっ…！）
全身の力が抜け、ルカは倒れこみ意識を失った。

一方的に嬲られるルバートとルカを見てカペラは思慮深そうにモニターを見ていた。
「…作戦は失敗か。買い被りすぎてたようだ。まだブルーネルの方が使えるかもな」
カペラの冷徹な言葉にその場の全員が一斉に驚愕した様子で彼女を見た。
あまりにも酷な発言に震える。
「仰る意味が分かりませんが…」
ジェントはあくまで冷静に取り繕って問う。
「そのままの意味だ。ピッツィカードは使えない。兵器として機能しないと言っている」
「彼らは人間です。兵器ではなく、生きている人間なんですよ。機械と違って、一度壊れたら直すということは出来ません」
「ブレスは兵器だ。それを動かす者もそれと同等だ。それ以上でもそれ以下でも無い。今回の作戦は失敗だ。ブレスを回収しろ。パイロットの生死は問わん」

「大佐っ！　あなたという人は！」
ロックが怒りに叫ぶと、その肩をジェントが掴み首を横に振った。
そこで上気した顔が若干解れたが、悔しさで爪が食い込むほど拳を握った。
ブリッジに重い空気が漂い、機体が敵の視界から消えるようにステルス機能を沈黙したルバートに発動させ、回収作業に入った。
回収が終わって少し時間が経ったところで、廊下を走る音が聞こえブリッジの扉が開かれた。
「はぁ…はぁ…」
息を切らしたシスカだった。
「シスカっ？」
誰もがその人物に驚いた。
失踪していたという彼が、こんなに早く帰ってくるとは思わなかったからだ。
顔を上げてシスカは、息を整えた。
そのシスカの表情は、決意に満ち溢れていた。
「俺を…スフォルツァンドに乗せて下さい！」
シスカの声がブリッジに響く。
希望。
戦う術が無い自分達に希望が訪れたと誰もが思った。
しかし、カペラは腕を組んでシスカを睨んだ。
「駄目だ」
その言葉に全員が驚愕した。
「ブルーネル。何故、戻ってきた」
「そ、それは…」
カペラの言葉にシスカは押し黙った。
「自分の勝手な都合でやるべきことを放棄しておいてのこのこと戻って今度は戦わせろというのは、都合が良すぎるんじゃないか」
「わ、分かってます。でも…」
「此方で軍を向かわせたのは、あくまで罰則を与えるためだ。大事

なブレスパイロットには変わりはないが、今のままでは示しがつかないのだよ」

カペラの言いたいことは分かる。

人に迷惑をかけて、都合よく戻ってきて今までと同じように…というのは、通じない。

それが人類を守るためだとしても、カペラは社会を守る義務がある故に簡単に認めるわけにはいかないのだろう。

他の者に示しがつかない。

勝手なことをして迷惑をかけたシスカの行動を認めてしまったら、周囲に影響を与えてしまうかもしれない。

その為には、シスカの願いを叶えるわけにはいかない。

「罰は受けます。…どんなことでも。でも、今は…今は俺が戦ってみんなを助けたいんです！　俺はもう逃げない。これは、俺にしか出来ないことだから。だから、戦わせて下さい！」

今までのシスカとは違っていた。

頼りなく怖い怖いと言い訳をして逃げていたシスカとは、全くの別人のようだった。

何処か、成長したようにも見えた。

「お前は本当に似ているな…。奴らと」

「似ている…？」

鼻で笑うカペラが何を言いたいのか、シスカには分からなかった。

「似すぎていて…反吐が出る」

怪訝な表情を浮かべ、カペラが銃口をシスカに向けた。

シスカの瞳が戦慄き、彼女がこれから起こすかもしれない行動に身体が震えた。

一体何を考えているのか分からない。

今、優先することはそうじゃない。そうじゃないだろ。

人を殺すことではなく、人を守る方が大事なのではないか。

身体を震わせ恐怖でぐっと目を瞑るシスカを嘲笑うように、カペラは薄ら笑い浮かべた。

「大佐！　そんなことして、一体何をっ」
ロックが声を荒げると同時にブリッジに銃声が轟いた。
目を瞑っていたシスカがゆっくりと目を開く。
シスカの近くの壁に弾痕が残る。
銃を持ったカペラの腕を取っていたのは、シロフォンだった。
「大佐、今ブルーネルを殺したら戦力が減るだけでは…」
「戦力？　こんな周囲を掻き乱す子供が戦力になるか。今までのまぐれが今後通じるわけが…」
「本当にそう思っていらっしゃるのですか？」
「……」
シロフォンの言葉にカペラは舌打ちをして掴まれた手を振り払った。
そしてブリッジを出ようとシスカを横切る。
「ブルーネル…。先程の言葉、覚えていろ。この戦闘が片付いたら、お前は私のものだ」
横切る際、カペラはシスカにだけ聞こえるように小さく呟いて足早にブリッジを出る。
それにならい、シロフォンは一礼をしてカペラの後を追った。
「……」
シスカは、カペラが何を考えているのか分からなかった。
ただ、何か憎しみのようなものが込められている…。
それだけは確かだった。
先程の言葉とは、どんな罰でも受けると言ったそれを示しているのだろう。
何をされるか分からない…。
覚悟が必要だと思った。
ロックがシスカに向かってエオリアキーを投げ、それを受け取った。
「シスカ、必ず生きて帰って来い！」
ロックの言葉に呆然とするシスカだったが、その場のクルー全員

が行って来いと背中を押すように力強く頷いた。
手の中にあるエオリアキーを見て、再び握り締めるとシスカは頷いた。
「はいっ！」
シスカのその目は、とても頼りがいのあるものだった。
今までとは違う。
一体、彼に何が起きたのかはわからないがこれなら何とかしてくれる。
そんな彼を見て安心出来た。
今の彼になら、安心して任せられる。
だから、そんな彼の背中を押してあげよう。
一緒に戦っていこう。
彼に負けないくらい、自分達の出来ることをしてみせる。
その場の全員が、本気でそう思えた。
戸惑うことなくシスカは、ブリッジを出て格納庫を目指した。

＊＊＊

格納庫に辿り着くと、一点に人が集まって慌しい様子で声を荒げている。
その近くには、ズタボロになっているルバート…。
じゃあ、ストレッチャーに乗せられている血塗れの人物は…。
目を閉じて力なく動きが止まっている人物は…。
「ルカ…？」
信じられないとでもいう目でシスカの顔が青褪めていく。
普段だったら取り乱してルカの名前を叫んでいるかもしれない。
心の中が爆発しそうだった。
「ルカッ…！」
しかし、堪えた。
拳をぐっと握り、歯を食い縛った。

今は、倒さないといけない。
ルカが生きていることを願って…目の前の敵を倒さなくてはいけない。
傷ついたルカのためにも、必死に生きようとするみんなのためにも…。
荒ぶりそうな気持ちを振り払うように首を振って、シスカはスフォルツァンドへ向かって走った。

# 第２５話　想い

カペラは執務室に戻ると、戦況を見る為にモニターの電源をつけて椅子にどっかりと座りイラついたように煙草を吹かした。
モニターは、スフォルツァンドに搭乗しようとするシスカを映していた。
シスカの少し成長したような落ち着いた表情を見てカペラは怪訝に眉を寄せた。
「ピッツィカードを見ても平静を装うか…。少し逞しくなったと賞賛すべきか？　臆病なままでいればまだ可愛かったものを」
「…お言葉ですが、大佐」
「何だ？」
シロフォンは表情を強張らせカペラに歩み寄った。
「先程の発砲…。個人的なものだったのでは？　罰と言うよりもあれではまるで」
「シロフォン」
カペラがシロフォンの名前を呼んだ。それ以上は言うなと制止するように。
しかし、カペラはすぐに困ったような表情を浮かべる。
ポーカーフェイスを装ういつものカペラとはまた違う…見たことの無い優しげで儚い表情だった。
「分かってるよ。私は、あの夫妻を憎んでる。奴らが私の人生を狂わせたんだからな」
「は…？　ブルーネル夫妻が…ですか？」
「……」
シロフォンの問いには答えず、カペラは再び冷めた瞳でモニター

を見た。
「さて…奴らの優秀な息子は、どうやって戦うのか…見ものだな。お前もそう思うだろう？」
シスカを差すその言葉は、あからさまな皮肉がこめられていた。
そしてカペラが同意を求めた相手はシロフォンではない。
その場には、もう一人いた。
「……」
その人物は言葉を発することは無く、モニターだけを見ていた。
妙に緊張感のあるこの雰囲気にならい、シロフォンもモニターに視線を移した。

＊＊＊

スフォルツァンドに乗り込んだシスカは、スフォルを抱きしめた。
「スフォルごめん…。投げ捨てたりして」
「きゅー」
スフォルは心配そうにシスカを見上げた。
「大丈夫、もう捨てたりしない。逃げないって決めたから。…だから、また俺に力を貸してくれ」
「きゅっ」
任せろと言わんばかりにスフォルはエオリアキーに戻り、鍵穴に入った。
自分の身体やルカの負傷…目の前に聳え立つ敵に少しだけ心の中に残った不安や臆病な気持ち。
スフォルツァンドに乗ることの痛みや恐怖。
嫌なこと全てから逃げてしまいたい気持ち。
それを振り払って覚悟を決めたように、シスカはエオリアキーを捻った。
スフォルツァンドの目が光り輝く。
「シスカ＝ブルーネル…。スフォルツァンド行きます」

冷静な声で出撃を伝え、飛び出した。
その目は、今までの穏やかさも情けなさも全く無い鋭いものだった。
「俺は父さんと母さんの意志を継ぐ。俺の手で…世界を変えてみせる！」
シスカの叫びと共にスフォルツァンドは、ビームサーベルよりも二周りほど大きな武器であるビームソードを構えた。
「うおおおおぉぉっ！」
スフォルツァンドが光り輝き、コクピット内に密集する青い粒子を纏うシスカは操縦桿を強く握り締めた。
スフォルツァンドが更なる光を発し、襲ってくるルーディメンツの触手を目にも止まらぬ速さで薙ぎ倒していく。
触手が地面に突き刺さり、爆発を起こした。
「ぐうっ！」
爆発の火種の一部がスフォルツァンドの腹部装甲に当たり、シスカは呻いて蹲った。
「はっ、はぁ…ふ…っぐ」
内臓が焼けるように熱く痛む。
息をするのも苦しくて倒れこみそうになるが、それを堪えて操縦桿を握った。
「こんな痛み…なんかっ…！」
苦しみに歪んだ顔を上げると、何かを感じたようにシスカは目を大きく見開いた。
（シスカ…）
セリカの声だった。
脳に直接呼びかけてくる。
一体、何処から…？
周囲を見渡し、ブリッジのモニターも見るが何処にもいない。
気のせいかもしれない。
しかし、何故だろうか。

力が漲ってくる。
痛みが消えていく…。
「セリカ…？」
一体、彼女は何者なのか…。
しかし、この痛みを消してくれるのは彼女であることは確かだった。
何処か安心出来た。
戦える。
彼女が一緒なら…この痛みが無いのなら、戦える気がした。
触手を失ったルーディメンツがスフォルツァンドに向かってくる。
黒い霧が吐き出された。
「そう何度も同じ手にやられてたまるかぁっ！」
光の粒子が黒い霧を消し去り、ビームソードがルーディメンツを貫いた。
その斬線に迷いは無い。
貫いた矛先を上げると、ルーディメンツの身体が縦に真っ二つとなる。
破壊されたことによりルーディメンツから大きな爆発が起こり、スフォルツァンドが瞬時に離れた。
全て、一瞬の出来事に見えた。
ルカをあんなに早く墜としたルーディメンツが一瞬のうちに砕け散った。
スフォルツァンドが…いや、シスカが少し怖かった。
最初の頃と全くの別人のようだった。
泣きながら逃げ回って奇跡を起こしていたシスカ…。
しかし、彼の今日の戦いは奇跡でも何でもなかった。
実力だ。
全て自分で計算し、スフォルツァンドを自由自在に動かして特性を活かす。
その戦いは完璧なものだった。

敵の殲滅を確認すると、スフォルツァンドから光が消えコクピット内の光の粒子も消えた。

「……」

何を言うわけでもなく厳しい表情も崩すことも無く、敵を倒した達成感も仲間を守れた安心感もない。

それが当たり前のように感じた。

倒せて当たり前で守るのも生きるのも当たり前だ。

どうしてそう思える…？

自信？　いや、違う。

自分のやらないといけないことが見つかった。

無理矢理やらされていることじゃない。

自分で選んだものだ。

この手で、両親が望んだことを実現させる。

ルーディメンツを殲滅して、平和な世の中を作る。

それが願いだから。

だから、実現させてみせる。

エオリアキーを抜いてスフォルツァンドを降りると、軍人達がシスカを包囲した。

軍人の群れから、カペラとシロフォンがシスカに向かって歩いてくる。

「約束は約束だ」

「はい…」

特に抵抗するわけでもなく、手錠をかけられシスカは軍人達に無理矢理歩かされた。

「シスカ！」

ブリッジから走ってきて息を切らしたロックが叫び、ジェントやユリア、アニーミ達も続いた。

シスカが立ち止まる。

しかし、振り向くことはなかった。

「…俺、こんな所で終わりませんから」
そして、振り向いた。優しい笑顔だった。
しかし、何処か違和感を感じた。
突然、目まぐるしい成長を遂げたシスカが何を考えているのか分からない。
でも、きっとそれを問うのは今じゃない。
いつか自分で話してくれる。
彼が何の決意をしたのか、何をしようとしているのか。
それをいつか伝えてくれる。
そう信じられる。
「だから、待っていて下さい」
それだけを言って、後ろを歩く軍人に押されて再び歩き出した。
自分達は、彼のその背中を見送るしか出来なかった。

＊＊＊

為すがままに歩かされているシスカは顔を上げた。
「すみません…」
「何だ？」
シスカの言葉にカペラが振り向く。
「…ルカに会わせて下さい」
「それは出来ない」
「どうしてっ！　だって、ルカは…ルカはどうなるんですか！　あんな大怪我…。もしかしたら、このままルカにずっと会えなかったら…！」
泣きそうに顔を歪めて叫ぶシスカに怪訝な表情を浮かべてカペラは、シスカの頬を叩いた。
「…っ」
何故叩かれなければならないのか。
何もおかしいことは言っていないのに…。

カペラの瞳に貫かされそうだった。
冷たく刺すような目。
今までだったら、怖くて逸らしていた。
だけど、今は逸らさなかった。
逸らそうとも思わない。
負けじと睨み返した。
「まるで別人だな」
「……」
「だが、お前は勘違いをしている」
「勘違い…？」
「そうだ」
カペラは執務室に連れて行き、手で軍人達を制すと彼らは敬礼をして去る。
「ピッツィカードは死んでいない。死んでいたら、集中治療室で治療を受ける必要は無いからな」
「……」
「お前は、諦めるのか？　奴を」
「そんなわけっ…！」
「だったら信じろ。容態が良くなれば、いつでも会える」
淡々とカペラが言うと、シスカはそれ以上何も言えなかった。
カペラの言うことは最もだ。
会えないのなら、信じるしかない。
ルカは、まだ生きてる。戦っているんだ。
だったら、今はそんなルカを見に行くことじゃない。
信じて…自分は自分の為すべきことをするだけだ。
「言っておくが、お前に与える罰は死や暴力的なものでも永久の監禁でもない」
「え…？」
「私のビジネスに尽力してもらう。彼女と一緒にな」
「彼女…？」

一体誰のことだと周囲を見渡すと、窓際で外を見ている銀髪の少女がそこにいた。
「セリカ？」
シスカがその名を呼ぶとセリカは振り向いた。
「シスカ」
乏しいが嬉しそうな表情を浮かべ、セリカはシスカへ駆け寄った。
「良かった。無事で…」
「うん。…セリカの声が聞こえたから」
その言葉にセリカは優しく微笑み、その柔らかい笑みにシスカの顔が紅潮して胸が高鳴る。
「話を続けるぞ」
カペラの言葉にハッとし、シスカはセリカからカペラに視線を戻した。
「先程も言った通り、お前達には私のビジネスを手伝ってもらう」
「ビジネスって…」
「ブルーネル、銃は扱えるか？」
「なっ…」
カペラの言葉にシスカの顔が怒りのものへと変わる。
「どういう意味で言っているんですか…！」
ビジネスというのは、まさか裏の危険な仕事ではないのだろうか。
その不安と嫌悪感がシスカの心の中を支配する。
しかし、その様子にカペラは小さく笑った。
「あくまで護身用だ。人殺しなどお前には出来ないだろうからな」
「それじゃ、何を…」
「悪漢退治だ」
「…は？」
カペラの言っている意味が分からなくて、疑問形を口にする。
「最近、この街…タカートの治安が悪くてな。裏のゴロツキ共の流れだろうが…ある店に奴らが狙いをつけている。まだその店もオープン前だから手は出せないだろうが」

「ある店？」
「そうだ。お前達には、伏兵になってもらう」
「…そいつらが仕掛けた時に倒せってことですか？」
「流石に此処まで言えば分かるだろうな」
シスカは拳を握り締めた。
「…やりたくありません」
「何だと？」
「だって、そんなの警備隊に任せれば良いじゃないですかっ！　どうして俺達が…」
「…警備隊に任せたら、奴らが警戒するだろう」
呆れたようにカペラは溜息を吐いた。
「このままでは、店の従業員にも危害が及ぶ。警備隊が突入したら大事になる。最悪、死人が出るかもしれん。そのくらい危険な奴らだ」
「あまり市民の不安を煽りたくないが故…お前たちの協力が必要ということだ」
カペラの言葉にシロフォンが続いた。
「お前の戦闘能力を買っているんだよ、私は」
「何でそんなこと…」
確かに喧嘩も強いし、足や力には自信がある。
しかし、それが何だというのだ。
何故、そんなことを…。
「部下のデータも知らない間抜けな上官だと思ったか？」
「…プライバシーも何もないんですね」
少し皮肉を込めた。
どうしてもカペラのやり方に納得がいかない。
最初からそうだった。
使えるからと無理矢理に騎士隊へ入隊させて、戦わせて…挙句の果てに兵器扱いだ。
数日前の戦闘のブリッジのやり取りなんか全部掌握済みだ。

シスカを兵器扱いしてルカを怒らせたこと…。
きっと、煽るためなんかじゃなくあれは本音だ。
正直、カペラの内心なんか知りたくもない。
でも、今は…知らなければならない。
これからの自分の運命を左右するかもしれないから。
だけど、納得は出来ない。
何故セリカまで巻き込む？
「でも、セリカは…。俺一人じゃなく、どうしてセリカまでっ」
「彼女を大切に思うならお前が守ってやれ。セリカ＝ハウルは、お前の力になるだろう」
「意味が分からない…」
「まぁ、ものは試しだ。…やってみろ」
「うん…」
カペラの言葉にセリカは小さく頷いた。
そして目を伏せる。
（シスカ…。聞こえる？）
「っ！」
頭の中にセリカの声が流れてくる。
セリカを見ると、彼女は目を伏せたまま微動だにしない。
（これが私の力…。あなたと接触したことで解放された能力…。あなたのことが全て分かる…。あなたに信号を与えることも出来る）
「信号…？」
（そう。私は、あなたのための存在。あなたの両親が望んだ…あなたを助けるための存在…）
セリカの口は動いていない。
ただ、脳に直接働きかけてくる。
「カデンツァチップに信号を与えてる…？」
「よくわかったな」
シスカが驚きを隠せずにセリカを見つめていると、カペラが喉元で笑った。

「彼女の体内には、様々な情報が埋め込まれている。お前のことだけじゃない。これまでの歴史や現在の世界の情報にブレスやルーディメンツのこと…。そして、日が経つにつれてその情報は随時更新される」
「それって…」
まるで機械じゃないかとシスカは口に出しそうだったが、それを噤んだ。
「言っておくが、彼女は人間だ。お前と変わらん…私の手駒のひとつだ」
手駒…。
つまりそれは、カペラの部下であることを示す。
「どういうことですか…。セリカを軍に入れる気なんですか？」
「……」
「答えろよっ！」
声を荒げるシスカの腕をセリカが掴んだ。
「私が言ったの。カペラにシスカを助けたいって。…力になりたいって」
「君は利用されてるんだよ！　この人は、人の命を何とも思わない。俺は知ってる…。この人は俺達を使い捨ての駒にしか考えていない」
「それは違う。違うよ、シスカ」
セリカは首を横に振った。
「カペラはこの世界を守りたかっただけ。あなたと同じ。…でも、やり方が不器用なの。感情で動けないの」
「だけど、結果的に…！」
「今のカペラを作ったのは…あなたのお父さんとお母さん」
「え…？」
シスカの両親が今のカペラを作った？
セリカの言っている意味が分からない。
「余計なことは言わなくていい」
腕を組んでセリカを睨むカペラに顔を曇らせたセリカは頭を下げ

た。
「ごめんなさい…」
「…話が脱線したな。作戦は来月のオープン初日だ。それまで銃の練習でもしておけ。それ以外は、普段通りの生活をしていろ」
カペラは、シスカの手錠を外した。
「ブルーネル…。これは、罰だということを忘れるな。お前は私のものだ」
「俺は、ものなんかじゃ…」
「眠れ」
カペラがポケットの中から出した小さなリモコンのスイッチを押すと、シスカの脳に激しい電撃が走ったような痛みを感じた。
「うぁ…！」
シスカはその衝撃で意識を失い、床に倒れこんだ。
「ふむ…。成功のようだな」
「…あまりそれ使わないで。シスカのカデンツァチップが壊れちゃう」
「それならば新しいものを入れるだけだ。同じもののストックはいくつもある」
喉元で楽しそうに笑い、カペラはリモコンを見つめた。
「こいつのカデンツァチップに高周波のエネルギーを放つ道具…。近距離じゃないと発動しないのは不便だが、充分だな」
「でも…必要以上にシスカを傷つけたら私は協力しない。情報も与えない。あなたを許さない」
身体の力が抜けぐったりとするシスカを抱きしめて、セリカはカペラを睨む。
「分かっているよ。此方もそいつに壊れられたら困るからな。復讐はこれからだよ」
「そういうこと言わないで…。シスカは関係ない」
「奴らの子供という時点で関係がある。私が味わった屈辱をそいつにも受けてもらうだけだ。…行くぞ」

「はっ…」
踵を返し部屋を出るカペラに、シロフォンは続いた。
扉の先に光が見えたが、その光は扉が閉まることで消えた。
目を伏せて意識の無いシスカを見てセリカは物悲しそうな顔をした。
「シスカ…。私が、あなたを守ってあげるからね…。だから、心配しないで」
ぽつりと静かに呟いて、セリカはシスカに優しく口付けた。

# 第２６話　眠りの外で

集中治療室では、過酷な治療が行われていた。
身体中を貫かれて出血が酷いルカのＲｈマイナスＡＢ型と珍しい血液型の輸血に時間はかかったものの、何とか出血多量で危険な状態になるということもなかった。
傷穴の全ての縫合が終わると、手術は終了した。
「急所に穴が開いてたらまずかったけど、その心配もないわね。ただ、体力が持つかどうか…」
グレイスは目を開かないルカに視線を送ると、ルカを乗せたベッドが集中治療室を出た。
重傷のルカを見て、彼を知る者の誰もが辛そうな表情を浮かべた。
破天荒で元気が取り得の無茶苦茶な男が、今は静かに眠りながら生と死の狭間で戦っている。
そしてルカは一際大きな病室に運ばれ、扉が閉められた。
「ルカ…」
辛そうな表情でユリアは病室を見ていた。
何度も扉に手をかけようとしたが、その手は震えて触れられずにいた。
「入ってもいいのよ」
背後からグレイスの優しい声がすると、ユリアは振り向いた。
「傷穴も塞いだし、出血多量の心配もないわ。あとは自力で起きてくれる事を願うだけ」
「でも、あたし…。そんなルカ見ていいのかな。ルカはそんな自分見られたくないんじゃないのかな」
ユリアは俯いた。
ルカはきっと自分の弱いところは見られたくないんじゃないかと、

そう思わずにはいられなかった。
うるさいくらいの大きな声を発して無茶をやるルカが、今は目を伏せて何も語らない。
そんな姿を見ていいのか、ユリアは戸惑う。
「全く…あの子も可哀相ね」
「え？」
グレイスの言葉にユリアは顔を上げた。
「誰も会いに来てくれないで気を遣われた方が怒ると思うわよ？ああいうタイプは割と寂しがりやなんだから」
「寂しがり…。あれ、グレイス先生。ルカの家族は…？」
「…え？　あの子確か一人よね？」
「そうじゃなくて、肉親の方！　実の親なんだもん。こんな時くらい…」
「難しいわよ」
「え…？」
グレイスの言葉にユリアは、言葉が出ずに固まった。
腕を組んでグレイスはルカの病室の扉を見た。
「トーン財閥のトップで何十人も子供がいるあの父親が見舞いに来るかしら。それも絶縁状態の息子に」
「それは…」
確かに確率的に言ってしまえば、来てくれる可能性などほぼ皆無だ。
分かってはいる。
分かってはいるが…。
「もしかしたらってこともあるかもしれない。…縁が切れたって家族なんだから」
ユリアは悲しそうに胸元でぎゅっと拳を握った。
そんな姿にグレイスは苦笑を浮かべた。
「そうね…。それじゃ、あたしも行くわ」
「先生も？」

「あなたみたいな小娘なんか門前払いよ。此処は大人の出番」
「先生…」
ユリアは優しく接するグレイスに感銘を受けた。
この人は、医者の鑑だと思う。
病気や怪我だけじゃなくて、人の心にも真剣に向き合う。
だからこそ、みんな彼を頼ってくるのだと思える。
「それじゃあ、行きましょうか。あの子のこわ～いお父さんのところに」
「はいっ！」
ぐっと拳を握ってユリアは意気込んで歩き出した。
その様子にグレイスは小さく笑って、意気込んだユリアの後ろを歩いた。

＊＊＊

軍用施設で練習用の人型をした的が銃撃を受けている音が響く。
しかし、その的はあちこちに外れて身体の真ん中や頭部に中々当たらない。
苦戦していたのはシスカだった。
「や、やっぱ無理だよ。銃なんて触ったこと無いし…」
震える手で銃を握るが、人を殺せる道具を持つことには抵抗があった。
それとは別に、撃ち慣れないせいもありコントロールも悪い。
「大丈夫」
セリカがシスカの手に自分の手を重ねる。
「…シスカなら出来る」
「いや…でも、出来ても困るというか…」
慣れたくない。
こんな道具なんかに慣れたくない。
でも、やらなければならない。

やらないと…セリカを守れない。
そんなことを頭の中でぐるぐると考えていると、セリカが微笑んだ。
「シスカ、見てて」
「え…？」
セリカは銃を構え、的に連続で発砲した。
シスカは呆けた。
言うならば百発百中。
百発も撃っていないが、それ以外の言葉では表せない。
的のウィークポイントに全弾命中していた。
あまりにも不釣合いだった。
白くて細い手に握られた黒くて重い拳銃。
おまけに顔に似合わず、銃の腕は軍人に引けを取らない。
「せ…セリカ？」
顔が青褪める。
正直、引いた。
寧ろ守られるのは自分ではないのかと思ってしまう。
「シスカ、やって」
「無理だよっ！」
彼女と同じことなんて出来るわけが無い。
初めて銃を触って、しかも全弾見事に外すコントロールの悪さ。
カデンツァチップで身体能力が上がったといっても、コントロールは関係ないらしい。
「シスカなら出来る」
そう言ってセリカはシスカの銃を持つ手に自分の手を重ねた。
冷たくて白く柔らかい手にシスカの胸が高鳴り、顔を紅潮させる。
あまりにも近い。
密着して、身体に柔らかい胸が当たる。
「あ、あの…セリカ」
「こうやって…」

シスカの腕を導くその手に益々動悸が早くなる。
「此処。撃って」
「う、うん」
言われた通りに引き金を引く。
「あ…」
銃弾が的のウィークポイントに当たる。
撃てた。
「ね？　出来たよ」
セリカはシスカに優しい微笑みを浮かべた。
その笑顔が可愛いと思えた。
表情だけで言えばそうなのだが、この状況でのセリカの言葉は嬉しくない。
「セリカ…。俺は…」
こんなの出来ない方がいい。
そう言いたかったが、飲み込んだ。
「シスカ、駄目だよ」
「え…？」
「決めつけたら駄目。これからのこと考えてるなら、出来ないと死んじゃう」
「……」
セリカの言葉にシスカの表情が曇った。
「俺は、父さんと母さんが願った俺達の平和を作りたいんだ。だけど、こんな…」
「必要と感じたら使わないといけない時が来る。敵は多い。ルーディメンツだけが敵じゃない。ブレスだけじゃ勝てない…」
「でも…」
「一番怖いのは人間。あなたも分かってると思う」
「セリカ…」
優しい喋り方だが突き刺すようなセリカの言葉に、シスカは銃を所定の位置に置いた。

こんな気持ちで練習なんか出来ない。
迷っている。
目的を持ちながら、その過程を怖いと感じている。
いつか、この手で人を殺す日が来るのだろうか。
「…俺、ルカの所に行って来る」
「シスカ…怒ってる？」
不安そうにセリカはシスカの背中を見た。
「そうじゃない。そうじゃないよ…。ただ、まだ割り切れないんだよ。こういうの分かんなくて…」
俯いたシスカは、セリカを見ようとしなかった。
「強がってるだけだ。すぐに変われるわけが無い。臆病な俺が世界を守るなんて大義名分…まだ荷が重いよ」
弱音だった。
心の中にあったものを少しずつ吐き出すようだった。
両親の願いといっても、少し前までただの平凡な子供が突然こんなことを実現させようということ自体が難題かもしれない。
それでもやらなくてはいけないことだった。
自分自身で決めた答えがそれだから。
「だからごめん…。少し考えたいんだ」
泣きそうな声でシスカはぽつりと言った。
我ながら情けないと思う。
もう逃げないと言っておいて、自分自身から逃げたくてたまらない。
必要だったらやらなければならない。
みんなを守りたいのに誰かを殺さなきゃいけないものがあるなんて考えたくない。
「シスカ」
後ろからセリカがシスカを抱きしめた。
「大丈夫、一人じゃないよ。私もいるから一人で抱え込まないで」
「セリカ…」

女の子に励まされてしまった。
銃の腕だけじゃない。
彼女は強い。そう思えた。
だからこそ、彼女に助けてもらいたいなんて情けないことを考えている。
どこまで自分は臆病なのだろうか。
かっこ悪すぎて嫌悪感を感じる。
「ごめん、セリカ」
振り絞ったような声で彼女の名を呼んだ。
「…ルカの所行って来る」
セリカの手を解いて、シスカは背を向けたままその場を後にした。
「シスカ…？」
シスカが何を考えているのか良く分かっていない様子でセリカは扉の向こうを見た。
いくらシスカのことが分かると言っても、感情や心までは読めない。
「君がセリカちゃん？」
セリカの背後からジェントが声をかけた。
足音も何も聞こえなかった。
しかし、振り向かなくてもセリカは分かっていた。
「ジェント＝シャープ。二十八歳。階級は大尉。ルバートの初期パイロット。ルーディメンツとの戦闘で左目と右足を失い、現在は騎士隊副司令官。司令官のロック＝レントとは士官学校からの友人。二十年前の国境戦争で両親を失い、現在は姉と二人暮らし」
機械のように淡々と情報を口に出すセリカにジェントは苦笑した。
「ほんとにシステムっぽい子なんだから。…用件は分かってる？」
ジェントが尋ねるとセリカは振り向いて頷いた。
「ロンドベルシステム…。ブレスの状態異常をクリアにし、遠距離からパイロットと同じ目線で念意を送り戦闘をアシストするシステムパイロット。それが私」

「…でもいいの？　精神的にかなり負担がかかるよ」
「その為に私はいる。シスカの力になりたいから此処にいる。それにロンドベルシステムを扱える設計を私に合わせたのだから…私以外の適合者はいない」
淡々と話すセリカにジェントは苦笑を漏らした。
「…了解。それじゃ、試験するからこっち来て。本当に大佐は急すぎるんだから」
「急じゃない。これはずっと前から計画されていたもの。シスカと会うずっと前から…」
「来るべくして…か。シスカは君のこと巻き込んだんじゃ無いかって思い込んでるんじゃない？　ちゃんと話してあげないと」
「うん…。でも、今のシスカは大変だから…。きっとこの話をしたら怒ってカペラに当たっちゃう」
「大佐に？」
「シスカはカペラのこと快く思って無いから…」
「ま、まぁ…あんなことあったらね」
昨日の戦闘前のブリッジのやり取り…。
シスカがカペラに対して口答えをして、カペラがシスカに銃口を向けた。
それだけで二人は互いに手を取れる関係じゃないことが分かった。
「カペラも分かってる筈。憎んだところで傷が癒えるわけじゃない。余計に傷つくだけ」
「一体何の話を…？」
セリカの言いたいことが理解できなくてジェントは困惑した表情を浮かべる。
「ううん、何でもない。ジェント、案内して」
誰に対しても呼び捨てなのかと少しだけ思い苦笑を浮かべたジェントは、頷いて歩き出した。
セリカはその後ろを歩く。
考えてることはシスカのことのみ。

彼を軸に物事を考え、行動に移す。
シスカとずっと一緒にいたい。彼らの忘れ形見であるシスカの力になりたい。
それが願いだった。

＊＊＊

白くて無機質な病室では、ルカの生命維持装置を示す機械と彼の中に送られる酸素の音だけが鳴っていた。
目を伏せて、生きているのか死んでいるのか分からないほど大人しいルカを見て椅子に腰かけたシスカは今にも泣きそうだった。
「ルカ、ごめん。俺がもう少し早かったら…」
俯いて膝の上で拳をぎゅっと握った。
謝罪しても返事は無い。
指先一つ動かない。
このままルカが目を覚まさないことを考えると怖かった。
そんなことがあったら…。
「俺が…ルカを殺すようなもんだよ」
ぎりっと歯を食い縛った。
少し顔を上げて静かに眠るルカを見た。
生命維持装置の規則的な音がする。
その音だけが繋ぎとめてくれる。
ルカの命と…シスカの罪悪感を。
シスカはルカの頬に触れた。
「ルカ…」
シスカがルカの名を呼ぶと無機質な携帯端末のバイブレーションが響く。
それに気付いたシスカは、ポケットから携帯端末を取り発信元を見た。
「ビート…？」

病室を出て、通話ボタンを押す。
「…もしもし」
ビートに何て言えばいいんだろう。
こんな状況を教えたらビートだって傷つく。
そう思って、シスカはあまり話をしたくなかった。
「…シスカ」
静かな声だった。
「…お前と二人で話がしたい」
いつものふざけた声色ではなく、物静かで冷たい声だった。
その言葉にシスカの背筋に悪寒が走る。
きっと気付いてる…。
ビートは知っているんだ。
だから、怒っているかもしれない。
ごくりとシスカは息を飲んだ。
「分かった…」
掠れるような小さな声で呟くようにシスカは返答した。

# 第27話　掻き乱される気持ち

ビートの電話から一時間後、シスカは約束していたルカとビートが住む家へと向かった。
もう陽が落ちかけたにも関わらず、家の電気はついていない。
重い足取りで玄関扉に手をかける。
手に導かれるように扉は開いた。
少し躊躇ったが、意を決したように家の中に入る。
「…ビート」
リビングには、ビートがいた。
暗い部屋でシスカを睨んだビートの目が冷たく光り、その目にシスカの肩がびくっと震えた。
「…何で呼ばれたか分かっているよな？」
「……」
ビートの言葉にシスカは拳を強く握りながら歯を食い縛って目を逸らした。
「…ごめん」
シスカが発したその一言にビートは、怒りに顔を赤くしてシスカの胸倉を掴み壁に叩き付けた。
「…っ」
「ふざけんなよっ！　お前が…お前がちゃんとしなかったせいでルカがあんなことになったんだぞ！」
「……」
「俺は知ってんだよ。お前が逃げたこともお前の居場所守ろうって戦ってたルカのことも…お前が後から来てヒーロー気取りしたこともなっ！」
「違う…！　そんなんじゃない。俺はっ」

「お前なんか…お前が、ああなればよかったんだ！　何でルカが…！」

涙混じりにビートは叫んで手をシスカの胸倉から首にかけた。

「いつもそうだ。ルカはお前にばっかり振り回されて…。お前なんか昔から嫌いだった！　ルカに守られて、あいつが一緒にいるのが当たり前な顔をして…都合が悪くなると自分可哀相ですっていうアピールだもんなぁ！」

「くっ…ぁ…ぅ…」

違う。

そう言いたかった。

確かにルカと一緒にいてそれが当たり前に感じていた。

でも、違う。

ビートが考えてるそれとは違う。

別に振り回したつもりはない。ただ一緒にいたくていたんだ。

確かに都合が悪くなると逃げていた。

怖いから…傷つくのが怖いから、逃げていた。

ビートは正しい。良く分かっている。

でも、今は違う。

今は…。

言葉を発したくても首を絞められた苦しさで声が出ない。

「ルカが笑ってくれるなら何でも良かった。ルカが気に入ってるなら俺も仲良くしよう。そう思ってたけど…」

「ビー…ト…！」

「お前だけは嫌いだ！　お前なんかいなくたって世界は変わらない。だけど、ルカがいないと俺の世界はないんだ！」

「がっ…！」

ビートが手を離すと同時にシスカの腹を殴った。

その痛みでシスカは蹲った。

「ごほっごほ！　かは、ごほっ！」

「ほら、言い訳聞いてやるよ。俺が間に合っていたら？　俺のせい

で？　どうせお前はそんなことばっか言うんだろ！」
「そんなことっ…」
反論したかった。
したかったけど、出来なかった。
だって事実じゃないか。
俺が逃げたせいでルカがああなった。
一人で戦う事だって無かった。
俺がいたら…。
「お前なんか…お前なんか…！」
「落ち着いてくれ！　ルカは、ルカはまだ…っ！」
まだ生きているんだ。
そう言いたかったが、ビートが涙を浮かべて銃を構えたことで遮られる。
その銃口はシスカを狙っている。
「ビート！」
「お前が死ねば良かったんだ！」
「……っ」
ビートの叫びと共に、狭い一軒家に銃声が轟いた。

＊＊＊

トーン家の広い敷地に案内されたグレイスとユリアはその敷地内の広さに驚いた。
使用人であり門番のクロニカに事情を話すと、彼は落ち着いた物腰で敷地に入ることを許可した。
ただ、クロニカに出来る事は家の前まで。
家の中まで案内できるとするなら主の許可が必要だった。
「旦那様…。軍の方がお見えです」
主に通信を送って、クロニカが静かに伝える。
暫く話しているのを見ると、クロニカは通信を切った。

「お会いになるそうです。どうぞ、此方へ」
玄関扉が開かれると豪邸と呼ぶに相応しいその場所にユリアは口をぽかんと開けた。
「これが…ルカの実家？」
話には聞いていたが、信じられないものが現実として刺さる。
大理石の床に数多もの使用人。一般人が一生かけても手に入りそうも無いシャンデリアにレッドカーペット。
豪邸というよりも城のようだった。
「此方です」
クロニカがユリア達を書斎に案内する。
扉の前で軽くノックをした。
「旦那様、連れてまいりました」
「…入れ」
主の許可が取れたことで書斎の扉が開かれた。
威厳のある中年の…髭を生やした男。それがルカの父親だった。
「ノール＝ランベルト＝トーンさんですね？」
「軍人さんが何用かな」
「…ルスティカ君のことです」
グレイスの言葉にノールは眉間に皺を寄せ、怪訝な顔をした。
「彼は、政府直属騎士隊のブレスパイロットとして所属しています」
「ブレス？　あの巨大なメカか」
「…先日の戦闘、あれにはルスティカ君が乗っていました」
「……」
机に肘を立てて無言でノールは、グレイスを見ていた。
「その戦闘で重傷を負い、彼は生と死の狭間で戦っています」
「…何が言いたい？」
「一度、彼に会いに行ってくれませんか。彼もきっと心のどこかでは父親に会いたがっていると思います。ただ一人、肉親のあなたを」
グレイスの言葉を聞いてノールは鼻で笑った。
「やはり出来損ないの屑だな」

「なっ…！」
ノールの言葉にユリアは身を乗り出すが、グレイスがそれを制した。
「もうあれとは何の関わりも無い。何処で死のうが生きようが私には関係ない話だ」
「ちょっと待ってください！　そんな言い方…っ！　ルカはあたし達の為に一生懸命…――――」
「結果が全てだ」
ユリアの言葉を遮ってノールは厳しい声で言った。
「いくら努力しようが結果が伴わなければ意味が無い。あれにもそう教育したが…やはり学ばぬ男よ」
「…いくら口でそう言っても、ルスティカ君があなたのご子息であることには変わりはありません。あなたは永久に彼の父親です」
「だが、あれは私を父と認めないだろうな。私を憎んでさえいるだろう。子供を捨てた父親を」
「それは違いますっ！」
ノールの言葉にユリアは大声で否定した。
「ルカは憎んでなんかない。いつだってあいつは笑ってた。感情に素直な馬鹿だけど…誰かを憎んでいたら、あんな顔出来ない！」
「ユリアちゃん…」
悲痛に叫ぶユリアにグレイスはかける言葉もなかったが、ノールは嘲笑うかのようにユリアを見た。
「綺麗事だな」
「なっ…！」
「…今更私に父親面しろと言うのかね、君は」
「でも、ちょっとくらい…」
「私とあれは赤の他人なのだよ。見知らぬ赤の他人が見舞いに行くなどおかしな話だと思わないか」
「そんな…」
ノールの決意が揺らがないことを知ったユリアは自分の胸元を握

り悔しそうな表情を浮かべた。
「用件はそれだけですかな。悪いが、忙しい身なのだが」
「待ってください！　ルカに会ってあげてください！」
「…お忙しい中ありがとうございます」
「先生っ？」
グレイスはノールに頭を下げ、ユリアの手を掴んで書斎を後にした。
扉が閉まる音が聞こえると、ノールは携帯端末を取り出し何処かへ繋いだ。
「…私だ」
厳しい声でノールが相手へ向かって話す。
「この後の取引が終わり次第、向かって欲しいところがある。…大丈夫だ、そんなに時間は取らない」
そう言ってノールは、通話を切った。
そして立ち上がる。
「…馬鹿者が。無様な姿を晒すんじゃない」
小さく噛み潰すような声を振り絞りノールは俯いた。

無理矢理グレイスに引っ張られるユリアは納得がいかなかった。
「グレイス先生！　待って。まだ話は…っ」
「此処までよ、ユリアちゃん」
グレイスはユリアの両肩を掴んだ。
「…分かっていたことでしょう？」
「でも、これじゃルカがあまりにもっ…！」
「人の家のことに口を挟めるのは此処まで。無理矢理連れて行ってどうなるの？」
「……っ」
正論だった。

無理矢理に連れて行っても意味が無い。
本当に彼がルカに会う気が無いと駄目なのだ。
分かっている。
分かっているつもりだった。
「それに…あの父親、覚えていたのね」
「え…？」
小さく笑うグレイスにユリアは彼の意図を理解出来なかった。
「…何十人もいる子供の中で、外に出した子供も多いでしょうに…。ルカ君の名前を出してすぐに話に食いついたわ」
「それってどういう…」
「忘れられていたら可能性はゼロ。でも、そうじゃなかったら…」
グレイスの言葉にユリアの表情が明るくなる。
希望。
まだ希望がある。
「あとは信じるだけね。あの父親と…ルカ君が目を覚ますのを」
小さく微笑んだグレイスにユリアの顔が綻びそれは笑顔になる。
「はいっ！」

＊＊＊

硝煙の匂いがする。
発砲されたことで目を伏せたシスカは、ゆっくりと目を開く。
「え…？」
銃弾を浴びたのは、シスカの脳天ではなく床だった。
床の中に見たことも無い機械が設置されており、銃弾によって壊れて薄っすらと煙を吹いていた。
「…やっぱり此処にもあったか」
溜息を吐いてビートは銃を懐にしまい、頭を掻いた。
「ビート…？」
一体何のことか分からないという様子で目を丸くするシスカに、

ビートは笑みを浮かべてシスカの頭を撫でた。
「ごめんな。演技とは言え、酷いこと言っちゃって」
「演技？」
「そう。俺がお前を殺したと思わせる演技。多分、長くは持たないだろうけど」
「ちょ…ちょっと待てよ。意味が…」
意味が分からない。ビートが発する言葉のひとつひとつの意味が分からなくて困惑する。
ビートの顔は先程の殺気に満ちた表情とは異なり、普段の柔らかい表情だった。
「どうして…」
ビートの意図が分からなくて戸惑うシスカに、ビートは苦笑を漏らしてシスカの頭に手を乗せた。
「嘘だよ」
「…何が？」
「俺がお前のこと嫌いだって言ったのも…お前のせいでルカが死にそうだっていうのも全部嘘。だって俺さ…ルカと同じくらいシスカ大好きだもん」
苦笑を浮かべたままのビートの言葉に、いつもだったら気持ち悪いとか言って離れるところだ。
でも、どうしてだろう。
今、それを言ったらビートは傷つくかもしれない。
それ以前に嘘だとは思えなかった。
ビートは二年前からルカと同じくらい一緒にいてくれた。
だから、この言葉は嘘じゃないと思う。
嫌いじゃないっていうのは、きっと本音だと思う。
ビートを見上げて呆けているシスカを見て、ビートは軽くシスカの頭を撫でて手を離した。
「…シスカ、今からちょっとショッキングな話するよ？」
「ショックな話？」

「そっ。かなりショックな話」
腕を組んでビートは壁に凭れれ、目を細めてシスカを見た。
「シスカ…。お前さ、狙われてるよ」
「は…？」
誰が狙われてるって？
俺が？
どうして？
疑問しか出てこなかった。
「ルーディメンツ開発組織、バースノヴァ。奴らが本格的に動き出したんだ」
「バースノヴァ？　ルーディメンツ開発って…。――…まさか！」
母親の研究資料を見たときのことを思い出す。
二十年前の戦争で兵器として使われたルーディメンツ。
それの製造がまだ…。六年前の段階だけではなく、今でも製造されている？
今まで戦ってきたのが残党ではなく、あれを動かしている人間がいるというのか。
「…って、何だよ。知ってんの？」
「母さんの資料で見たんだ！　二十年前の戦争で使われていたルーディメンツ…。あれは、自然に生まれたものじゃない。人間が作ったものだって！」
「人間が作ったもの…ね。あの人達も勘違いしてたのか…」
肯定も否定もすることなくビートは、何か言葉を発するのを躊躇っていて独り言を呟いた。
「なぁ、シスカ。ルーディメンツって何だと思う？」
「え…？」
ルーディメンツとは何か。
その問いの回答は決まっている。
今、言った筈だ。
「人間が作った…兵器だろ？」

確認の為にそう言った。
しかし、ビートは言い辛そうに目を泳がせていた。
「…半分だけ、正解かな」
「え、どういうことだよ…」
半分正解？
じゃあ、もう半分は不正解？
だとしたら、不正解の部分は何が当て嵌まるというのだろうか。
「ルーディメンツってさ…あれって、ただの兵器でもなくて誰かが作ったとかでもなくて…」
「何が言いたいんだよ。ちゃんと話さないと分からないだろ」
「……」
暫く無言で目を伏せていたビートは、少し考えた後に目を開きシスカを見た。
「…人間だよ」
躊躇ったようでやっと口を開いたビートから発せられた言葉はそれだった。
「ルーディメンツは、元々人間なんだよ」
思考が停止した。
ルーディメンツは…人間？
そんな馬鹿な…。
そんな馬鹿な話があるものか。
自分にそう訴えるが、ビートから発せられた言葉に頭の中が真っ白になり唇が震えて声が出なかった。

# 第２８話　暗躍する影

”ルーディメンツは、元々人間なんだよ”

ビートから発せられた言葉が信じられなくて硬直していた。
指先が痺れる感覚…。冷たくなっているのが分かる。
唇が震えて何処に目線を合わせればいいのか分からない。
「ルーディメンツが人間…って…」
信じられない言葉を震える声で発する。
それは…つまり…自分が戦っていた相手は…。
「俺…人を…殺してた？」
「シスカ、ちょっと待って。それは…」
「だ…だって、ルーディメンツが人間ってことは…」
肩が震える。
自分はとっくに人殺しだった。
そう思うと震えが止まらない。
「…シスカが戦わないと他の人達が大勢死んでたよ」
「でもっ！」
誰かを殺したことには変わりない。
そう思わずにはいられなかった。
「…ウイルスだよ」
「え…？」
「これ見て」
ビートは懐からボールペンを取り出した。
「…何か、それ普通の錬機手帳と違う」
一般人が使う錬機手帳より形状が違うものだった。
ボールペンのようなもののスイッチを押すとＡ５サイズほどのモ

ニターが映し出される。
「流石はシスカ。よく錬機手帳だって分かったね」
「一応、そういうのも作ったことあるから。でも、多分中身も違うんでしょ？」
「当たり。これは、俺専用の改造版。…ほら、これだよ」
ビートはモニターをスライドし、ひとつの写真を映す。
人間と呼んでいいものかわからない。
顔と右半身が赤い結晶で包まれて倒れた者、別の写真にはその結晶部分の身体が吹き飛んだように原形を留めていない姿。
「うっ…！」
吐き気がして口を抑えた。
あまりにも凄惨な姿…。
一体、これは何なのか。何が起きているのか分からなかった。
「バウンスの末期症状の失敗作…」
「バウンス？　失敗作って…？」
少し顔を青くしたシスカがビートに問う。
「…ウイルスだよ。バウンスっていうのは、人間を化け物に…ルーディメンツに変えるウイルスなんだ」
人間をルーディメンツに変えるウイルス？
「ご、ごめん…。展開が急すぎて…。頭が追いつかない」
何が起きているのか…唐突に知らない情報を投げつけられた気がして、シスカの頭が眩みそうになる。
そのウイルスは何処から来たものだ？
そもそも何故そんなことをビートが知っているのだろうか。
「ビート…何かあった？」
「ん？」
ビートとは暫く会っていなかった。
一年半前に出稼ぎに行っていた。
週末には帰ってきていたが、会っていない間に何かあったのだろうか。

「だっておかしいよ。こないだの俺とルカの内部事情知ってたり、俺が狙われてるって言ったり…。それに、ルーディメンツの件だって」
「それが俺の仕事なんだよ」
「は…？」
状況が分かっていないシスカに少し苦笑をしてビートは少し間を置いた。
「…ビート？」
様子がおかしいビートに不安を抱いて彼の名を呼ぶ。
「俺、情報屋だから。齧ってた時代数えるともう三年かな」
「三年？」
シスカと出会う一年も前。
では二年前に出会った時、既にその仕事に就いていたというのか。
「もしかして、女遊びで朝帰りだったのは…」
仕事をしていた？
「ん、まぁ…そういうこと。流石に言うわけにはいかなかったから…」
「じゃあ、どうして今…」
今になって教えてくれるのか。
それを問おうとビートに詰め寄ろうとするが、モニターをスライドしてビートは口を開いた。
「今は…知らないと、やばいくらいに犠牲が出るから」
「犠牲…。それってルーディメンツが攻めてくるって意味の？」
「…違うよ。これ見て」
モニターに映し出されたのは、一人の男と先日戦った無数の触手のあるルーディメンツだった。
「こいつが、こないだのルーディメンツ。そんで…」
少し間を置いた後、訝しげにビートは目を細めた。
「…ガキの頃、俺が売られた家に住んでいた男だ」
「え…」

十年前にビートが逃げてきた家に住んでいた男。
理不尽な暴力ばかり受けていたビートが憎んでもおかしく無い相手。
だが、ビートのその目は憎しみではなかった。
「ルーディメンツは素体の心を具現化する。この男は欲望に溺れていて…欲しいものが手に入れば次々と欲望を抱いて手に入れようとする。だから、あのルーディメンツには手がいっぱいあったんだ」
欲しいものを手に入れようと無数に手を伸ばす。
それが、この男の心の象徴になっていた。
本人は知っていたのだろうか。
自分が違う生き物になって…醜い姿になってしまったことを。
「…意識も身体も全て融合されて全く別の生き物になる。二十年前の戦争でこんなイカれたウイルスを兵士達は喜んで使ったんだってさ」
「……あの、さ…」
気まずそうにシスカは目を泳がせた。
「その人だけだったの？　一緒に住んでる女の人は…？」
「何でお前がそんなこと…」
「ちょっと前にルカに聞いたんだ。だから、その…ビートの事情も少し分かる」
視線を合わせることなく言い辛そうにするシスカを見て、ビートは一瞬驚いたがすぐに気の抜けた表情を浮かべた。
「…そっか」
出てきた言葉は短いそれだった。
しかし、その柔らかい表情もすぐに厳しいものになる。
「…殺したよ」
冷たい声だった。
驚いてシスカは言葉が出ず、喉の奥に入った空気が冷たいと感じる。
「身体の七割方、結晶化してたんだ。あのまま放置していたらあの

男と同じことになる。だから殺すしかなかった」
「…ビートがやったの？」
「ああ、そうだよ。命乞いするあの女の脳天に何発も鉛玉を撃ちこんでね」
「……っ」
ショックを受けないといったら嘘になる。
ビートが人を殺した。
人々を危険に晒さないためとはいえ、人を…。
でも、それを考えたら自分だって人殺しだった。
「シスカは悪くない」
「え…」
「悪くないんだから、自分責めてるような顔すんなよ」
「…うん、大丈夫。ビート、続き」
「ん、あぁ…」
シスカが話を急かすとビートはモニターをスライドする。
「バウンスを作ってる組織がバースノヴァ。二十年前に戦争に負けた腹いせか分からないけど、バウンスで人を化け物にして帝国を潰す気なのかもしれない。立派なテロリストだな」
「何でそれが俺の狙われる理由になるんだよ。狙われてるっていう意味だったらこの国全体じゃ…」
「お前がスフォルツァンドのパイロットだからだよ」
さらりと言ったビートの言葉を一瞬で理解できた。
ルーディメンツを尽く退けた今、彼らの脅威となるのはスフォルツァンドとそれを操縦するシスカだ。
ルカが目を覚まさない今、シスカを殺してしまえば帝国を守る者は誰もいない。
「だから、俺はお前の護衛をする。お前が強いのは分かってるけど、念のためにな」
「でもビートって…弱いよね？」
「あらー…信用されて無いわねぇ。ま、いいけど…。それでだ、最

有力情報。ビート君マジかっこよすぎて惚れる情報がひとつ。これでシスカ君もビート君にきゅんきゅんしちゃうかもね」

「…殴っていい？」

ふざけたビートの言葉に怒りを感じて拳を握り締めるシスカにビートは目を逸らした。

「ま、まぁ…今は落ち着けって。えーと…これだ」

ビートがモニターに映ったカメラ映像を映す。

そこに映っていたのは大きな町…。ソルフェージュや学園のあるタカートという名の町だった。

「奴らが一番最初に仕掛ける場所が此処だ。帝国で一番大きな町だからね。しかもお役人さんや軍も此処にいる。お前がソルフェージュに住んでるのも分かってるかもしれない。条件としてはパーフェクトだね」

間違いなく、バースノヴァはタカートを襲う。

ビートの放つ言葉が全て正しく思えて、反論出来ない。

もし、被害を受けたらただではすまない。

そもそも、ソルフェージュが堕とされたら全てが終わりだ。

守る術なんかありはしない。

「でもあのでかい町にどうやって仕掛けるんだよ。ソルフェージュだけで町ひとつ分あるのに、タカートを襲撃なんか出来るかな。軍人だって多いし…」

「バウンス大量に含んだガスを撒くか…もしくは、ターゲットを決めて一人ずつ嬲るか…分からないけど、仕掛けてくるのは確かだよ」

「…つまり、タカートで俺が餌になれば」

「ああ、目ぼしい奴が必ず姿を表す。でも、これは却下」

「え、何で？」

「ルカにぶっ殺されるから」

確かに危険を承知でテロリスト達を誘き寄せるなんてことをさせたら誰が何を言おうともルカだけは許さないだろう。

ビート自身もシスカを危険には遭わせたくない気持ちがある。

「それに表立ってシスカが目立っちゃうと、シスカが狙われているのをこっちが知っているって情報を与えちゃうから。だから溶け込まないといけないし、普段通りの生活をしないといけない」
「そんな話聞いた後でそんなこと言われたって…」
「ま、肝に銘じててねってこと。あと周りも見てて。バウンスを接種した人間は必ず何かしらの痛みを訴えるから…。絶対にその周辺にバースノヴァがいる筈」
「わ、わかった」
まるで別の世界の話のような気がして目が眩みそうだ。
取り敢えず、日常生活の中で注意を怠らないことが重要らしい。
しかし、目の前でバウンスを接種してしまった人間がいたらどう対処すればいいのだろうか。
「でも、目の前で発症されても対策出来ないと辛いんじゃ…」
「うん、だからワクチンも渡しておく。発症の一時間以内なら効くはずだから。バウンスの量にもよるけど。一応気休め」
ビートは、薬の入ったケースをシスカに渡す。
「だけどシスカ、覚えてて。一番は自分優先。自分が接種しちゃったら最優先で自分に使うこと。お前以外ルーディメンツと戦える奴なんかいないんだから」
「う、うん…」
「…プレッシャーかけちゃうみたいだけど、これマジだからさ。あと、この話は内緒。何処で洩れるか分かんないから」
「うん…」
少し曇らせた表情で頷くシスカにビートはへらりとした笑みを浮かべた。
「じゃあ、情報提供料代わりにちゅーしていい？」
「殺すよ？」
間髪入れないシスカの毒の篭った返し。
その拳はビートの顔面を狙っている。
「じゃあ…」

「却下」
「まだ何も言ってねぇよ！」
自分の言葉を遮られたことで悲しみに声を荒げるビートを見て、シスカは仕方ないとでも言うようにビートの頭を撫でた。
「はい、えらいえらい。教えてくれてありがと」
若干棒読みだったが、ビートはだらしなく口角を歪ませてシスカに顔を近づけた。
そしてビートは噛み付くようにシスカの唇に口付けた。
「…っ！」
殴り飛ばしたくて離れようとしたが、頭を押さえられて身動きが出来なかった。
「んっ…んーっ！」
気持ち悪い。
一番殺したい人物がいるとしたら、ビートなのは間違いない。
あまりの気持ち悪さにシスカの怒りが蓄積される。
「ご馳走様」
唇を離されビートがにっこり笑うと、シスカは涙目で真っ先に洗面所に向かった。
「おえぇぇっ」
気持ち悪くて吐きそうだった。
それでも口をゆすごうと何回もうがいをした。
「…そんなに嫌？」
念願叶って嬉しい筈なのに、ビートは切なくて悲しくて仕方がない。
「あったりまえだろうが！」
洗面所からシスカが走ってきてビートに跳び蹴りをする。
「ぶぐふぉっ！」
シスカの重い跳び蹴りが首に直撃するとビートは悲鳴を上げる。
そしてシスカは倒れたビートの胸倉を掴んだ。
「ほんとにお前ふざけんのもいい加減にしろよ。殺す。マジで死ん

でくれよ」
「やだなぁ。冗談だって」
「冗談であんな気持ち悪いことすんなっ！」
「えー、いいじゃん。一部の民族では、キスは挨拶代わりなのよ？」
「俺、そこの民族じゃないから」
「あはは、俺も。別にいいじゃん、そんくらい。べろちゅーしたわけじゃあるまいし」
「なっ…！」
ディープキスなんかされた日には何をするかわからない。
思い出しただけで鳥肌が立ち、身の毛が弥立つ。
「シスカって中世的な顔だからさ、来月だっけ？　新しくオープンするお店での伏兵やる時は気をつけな？」
「何でそんなことまで…」
カペラが命令したシスカとセリカが行う仕事内容。
外部に洩れるはずが無いものを何故ビートが知っているのだろうか。
「俺、情報屋だから」
「ああ…そう」
へらりと笑うビートに対してシスカは呆れたように視線を逸らし、それから深い溜息を吐いてビートから離れた。
「帰る…」
「おう。”普段通りの生活”よろしくな」
「はいはい…」
どっと疲れたようにシスカは背中を丸めて扉に手をかける。
「シスカ」
背後からビートの声が聞こえた。
ふざけた口調ではない。
先程、真面目な話をしていた時と同じ声色だった。
「ほんとに…気をつけてな」
振り返ってビートを見ると、心底心配したような表情だった。

「…うん、わかった」
短くそれだけを言った。
安心させようと小さく笑みを浮かべ、シスカは玄関扉をスライドして外に出た。
扉が閉まるとビートは腕を組んで考えるように首を傾げた。
「…キスはハードル高い？」
しまったなぁと口に出してビートは苦笑を洩らした。

# 第２９話　有為転変

日も暮れて夜も更けようとするその時間、リノリウムの床に革靴が擦れる音がする。
その足が向かった先は、一際大きなルカの病室だった。
扉をスライドさせて病室に入ると、大袈裟な装置に繋がれたルカの姿が見えた。
「…馬鹿者が」
ノールは押し殺すかのような声を振り絞り、ルカの近くへと寄って彼の前髪に触れた。
「…ルスティカ、お前は何をやりたかったんだ。戦場に出ればどうなるか分かっていただろう」
切なげにノールが呟いて俯く。
「…一体お前はどんな人間に育った？　どんな人間に恵まれて育ったんだ？　…どうやって生活していたんだ、お前は」
聞きたいことが山ほどある。
今更父親面なんか出来ない。
それでも、目の前にするとどうしても知りたくなる。
十年前に出戻ったルカを追い出してから、何も知らない。
「…お前はこれからの人間だ。例え、縁が切れようと血は切れん。ならば、私に恥じぬような人間になれ」
ぽつりとノールが呟くと、何かに反応したようにルカの指先が一瞬痙攣した。
「っ！」
その瞬間を見逃さなかった。
生きているのは知っている。
しかし、動かなかったルカの指先が動き薄っすらと目が開かれた。

「ルスティカ！」
「……」
焦点が合わない様子でいるルカを見てノールは声を荒げた。
「…誰…だ…？」
意識が半分しか無いようでルカは目の前の人物が分からなかった。
見知っているものならともかく、相手は幼い頃に捨てた父親。
もう覚えていないのかもしれない。
「私は…私は、ただの」
ただの見舞い客だとそう言おうとしたが、弱々しい力でノールのスーツの裾を掴むルカを見た。
「…お、や…じ…？」
掠れた声でそう言った。
親父と呼んだ。
虚ろな瞳でそれでも言葉を紡ごうとするルカに、ノールは拳を握り締め溢れそうな涙を堪えた。
「馬鹿者…。無理をするんじゃない」
「……な、んで…」
「理由が必要か？」
ノールの言葉にルカは薄っすらと笑みを浮かべて一筋の涙を流した。
まるで子供のようだった。
迷子の子供が親を見つけて安心感で泣いているそれに似ていた。
胸が締め付けられた。
親の資格など無かったが、このルカの笑顔を見て張り詰めていた気持ちが絆される。
安心したんだ。
生きていてくれて、目を覚ましてくれて安心した。
その顔を見れただけで充分だった。
ノールは嬉しさを噛み締めてナースコールを押した。

＊＊＊

翌朝、シスカを見つけたアニーミは驚いた。
久々に見たその姿…。
学園の制服を身に纏っていた。
先日の戦闘が終わった後、拘束されたシスカが解放されたと聞いてはいた。
しかし、シスカが拘束された後に見たのは今が初めてだった。
「シスカ君！」
アニーミが駆け寄ると、少しぼうっとした様子でシスカは振り向いた。
「あぁ…。アニーミ、おはよ」
少し眠気眼で少しだけ気の抜けた様子のシスカにアニーミまで気が抜けてしまう。
「あ、うん。おはよう。…大丈夫？」
「ん、あぁ…。ちょっと寝不足…」
シスカは欠伸をかみ締めた。
「寝不足って？」
「ルカが夜に意識戻ったって聞いて、そこから朝方までいたから。二時間くらいしか寝てない」
「ルカ君の意識が？　え、戻ったのっ？」
明るい笑顔を浮かべて喜ぶアニーミを見てシスカも嬉しそうに笑った。
「学校行く前に寄ってくけど…アニーミも行く？」
優しく問いかけるシスカを見てアニーミは頷いた。
「うんっ」
ルカが目を覚ましたことも嬉しそうなシスカを見るのもアニーミは喜ばずにはいられなかった。
そして、シスカと肩を並べてルカの病室へと向かった。

＊＊＊

シスカ達より先にユリアがルカの病室に来ていた。
制服を身に纏っているあたり、彼女も学校へ行く前にルカの顔を見に来たらしい。
「ほんっとに…心配したわよ、馬鹿」
ベッド脇の椅子に座ってユリアは大きな溜息を吐いた。
ルカは既に酸素マスクや生命維持装置を外して高さを調整したベッドに凭れ掛かっていた。
まだ自分で起き上がるのは辛いらしい。
「みっともねぇとこ見せちまったな、くそ」
「そういう問題じゃないでしょ。みんな心配したんだから」
「あー…そうだな」
流石に今回の怪我で大勢に迷惑かけたのだけは分かる。
溜息を吐いた後にルカは、ユリアの目を見た。
「…わりぃ。動けねぇからよ、ちょっとこっち来てくんねぇ？」
「え、何よ」
手の届く距離にいるのに。
そう思いながらもユリアはルカに近付いた。
「もっとだよ。ちゃんと顔見せろ」
「はあ？　何なのよ、あんたは」
「ごちゃごちゃ言わねぇで来い」
「…はいはい」
ユリアはルカの顔を覗き込むように視線を合わせる。
しかし、ユリアの顎が掴まれ直後に唇に柔らかいものが当たった。
あたたかいそれは…ルカの唇だった。
触れるような数秒のキスから解放されるとユリアは顔を紅潮させて口をぱくぱくと開閉した。
「あー、なんかこう…はずいな」
頭を掻いてルカは視線を泳がせる。

「ど、どういうつもりよ！」
「あ？」
漸く言葉を発せられるようになるとユリアは叫んだ。
その様子にきょとんとルカは訝しげにユリアを見る。
「だ、だから今のっ…！」
「そのまんまだろ」
「はあっ？」
そのまんまとは何なのか、ルカの行動も言葉も意味不明でユリアは混乱する。
「だから…」
ルカは頭を掻きながら何度か深呼吸をする。
そんな時、小さなノックが二回ほどして返事を待たずにシスカとアニーミが入ってきた。
「俺は、お前が好きなんだっつーの！」
病室内に静寂が訪れる。
ルカがユリアに告白したことでルカ以外の全員が硬直した。
「る、ルカ？」
状況が掴めなくてシスカはルカの名を呼んだ。
「あ？　…って、お前らいつから」
「…ナイスタイミングなことに、今だけど」
口角を引き攣らせてシスカは頬を掻いて苦笑した。
「ゆ、ユリア？　大丈夫？」
口を開けたまま硬直したユリアはアニーミの声で漸く我に返った。
「あああぁぁぁぁっ！」
ユリアは茹蛸にならんばかりに顔を真っ赤にしながら大声で叫んで走り去った。
その姿にルカは呆然として、深い溜息を吐いた。
「…ふられた」
小さく呟いてルカは項垂れた。
「いや、今のは違うと思うけど…」

「じゃあ、何で逃げるんだよ！　怒りに顔真っ赤にして走ったって事は、そういう…っぐ！」
「ルカッ」
叫んで身を乗り出すルカが痛みに呻くと、シスカはルカの身体を支えて寝かせる。
「ちゃんと寝てないと傷開くよ」
「おー…わりぃ。…何か情けねぇな」
「何が？」
落ち込んだ様子のルカにシスカは訝しげな表情を浮かべた。
「すぐにやられちまった上に、折角直ったたルバートまでぶっ壊した挙句これだぜ？　だっせぇよな」
「何馬鹿なこと言ってんだよ。何処もださくないし情けなくもないよ。…見てないけど」
「最後のいらねぇだろ」
「だって見てないし。…その場に俺いなかったから」
目を逸らすシスカにルカは小さく笑ってシスカの頭を軽く叩いた。
「な、なんだよ」
「ほんとにお前は飽きねぇな。その辺のガキみてぇにすぐ顔に出やがる」
「…ルカ、ごめん。殴っていい？」
「はっ…？　や、流石にやめろ！　今、お前のパンチ食らったらマジで死ぬ！」
ルカが怯えた様子で首を横に振ると、握っていた拳を解いてシスカは小さく笑った。
またこうして話をしてくれて嬉しい。
ずっと不安だった。
ルカが目を覚まさない間、色んなことがありすぎて辛かった。
でも、今はこうして話をするだけで心の中が穏やかになる。
「シスカ」
「ん？」

「…戻ってきてありがとな」
ルカは歯を見せて明るい笑顔を向けた。
ルカの言葉と笑顔にシスカは、涙ぐみそうになるのを堪える為に拳を握った。
「うんっ」
そして笑顔になった。
また頑張れる。
ルカが元気に笑ってくれるなら頑張れる気がした。
そんな二人をアニーミは微笑ましく見ていた。
ふと時計を見た。
既に八時を回っている。
「し、シスカ君」
「ん？」
少し焦ったような口調でアニーミは時計を指差すと、何を伝えたいのかシスカにも理解できた。
「あ、やばっ…！　ごめん、ルカ。学校終わったらまた来る！　いって！」
慌てて立ち上がったせいで掛けていた椅子に足をぶつけて体制を崩すシスカにルカは噴き出した。
「おー、行って来い行って来い。また問題起こして怒られんなよ」
「うっさい、馬鹿ルカ！　そっちこそ無理に動いて傷広げるなよっ」
お互いに憎まれ口を叩く二人を見てアニーミはくすくすと笑う。
しかし、時間はそんなひと時さえ猶予を与えてくれない。
バタバタと慌しげにシスカとアニーミは外に出た。
それを笑顔で見送り扉が閉まると、ルカは深い溜息を吐いて表情を曇らせた。
「やっぱ、ふられたのか。俺って…」
顔を赤くして走って行ったユリアの姿が脳裏に焼きついて離れなかった。

＊＊＊

ギリギリセーフでモノレールに乗ることが出来たシスカとアニーミは、ほっと息を吐く。
「ま、間に合った…」
「ほんと、ぎりぎり。今、風紀強化期間だから遅刻したら職員室行きだよ…」
ソルフェージュとフィルイン学園が一緒の町にあると言っても、その距離はとてもではないが徒歩でいける距離ではない
だから、学生である者達はモノレールで通わないといけないのだ。
モノレールを降りた後は、更に十分ほど歩かなければならない。
ソルフェージュを出た後にバイクで行こうとしたシスカは、校則違反だからという理由でアニーミに止められ今に至る。
「風紀強化期間？」
アニーミの台詞にシスカは首を傾げる。
「あ、そっか。シスカ君、休んでたから知らないんだ。えっと…校則とか風紀とか先生や風紀委員が念入りにチェックする期間かな。一週間くらいあって、今日が最終日なの」
「そうなんだ。何か学校って面倒なことばっかりやるんだね」
「まぁ、だからみんな今は気をつけてるの。えっと…シスカ君」
「ん？」
アニーミが言い辛そうにシスカの顔を伺った。
まじまじとシスカの身体を見ている。
「…アニーミ？」
「シスカ君、多分引っ掛かっちゃうと思う…」
「え？」
「服装検査…」
ぽつりとアニーミが呟いた。
「服装検査？」
きょとんとシスカは目を丸くした。

制服の着こなし方、シスカ本人は普通だと思っている。
しかし、ワイシャツのボタンは二つほど外し、しかもワイシャツをスラックスにインしていなくて、ブレザーのボタンは閉めていない。
着崩したその格好は、学園の風紀的には好ましくないものらしい。
「今日一日くらいは、ちゃんと制服着た方がいいと思う」
「え、制服の着方まで指導すんの？」
「うん、結構厳しいの。貴族もそれなりに多いから、家の名に恥じぬようにって意味もあるんだって」
「つまり…とばっちり？」
「うーん…。政府関係者も少しいるから…そういうのもありそう」
考え込むようにアニーミが首を傾げる。
ふと気がついたことがある。
「政府関係者って俺達四人だよね？」
「え？　ううん、もう少しいるよ」
「…聞いたこと無いんだけど」
「ねぇ、シスカ君…。もしかして、騎士隊のクルー覚えきれてない？」
「へっ？」
素っ頓狂な疑問形を口にする。
騎士隊のクルー？
確かに、あまり用のない人とは喋っていない。
シスカのコミュニケーション能力を考えれば、自分から用の無い人間に話しかけるというスキルを求める方が難しいだろう。
「他の課の子もいるし、うちのオペレーターと整備士も何人かいるんだけど…」
「あー…確かいたような。多分…」
はは、とシスカは小さく笑う。
「もう！　パイロットなら補助してくれるクルーのことちゃんと覚えてあげないと駄目だよ！」

「ご、ごめん。見たことはあると思うけど話したこと無くて…」
アニーミに怒鳴られ、シスカは苦笑を浮かべた。
そんな久しぶりの学園生活のことを話しているうちに、モノレールが学園前に止まる。
扉が開き、学園へと歩を進める。
モノレールにさえ乗れれば、特に寄り道でもしない限り遅刻はない。
走る必要がないと思ったシスカとアニーミは校門前の風紀委員を見て制服を整えた。
そうして風紀委員のチェックから潜り抜けると、校舎に入る。
周囲を見ると普段は制服を着崩したり髪を染めている生徒が模範生徒ばりの風紀を乱さない格好だった。
「凄い…。目に見えない戦場みたい」
「まぁ、この時期はね…」
妙にピリピリとした空気にうんざりするシスカとアニーミが教室に入ると同時に鐘が鳴り、急いで席に着いた。
鐘が鳴り終わると同時に、教師が入ってくる。
そして朝から教師の長い話が続いた。
「最近はルーディメンツの出現が多いため、避難勧告が出されて気持ち穏やかでは無いと思いますが、その中で一部には警戒心を持たずにすぐ避難しない者もいるそうです。メディアを見れば分かると思いますが、政府からも警戒心を常に怠らぬようにとの通達もあります。避難勧告が出たら速やかに避難シェルターに行くように」
その言葉を聞いてシスカは、アルベルトとジェリドに視線を移した。
少し前に戦闘を近くで見ようとして危険に晒された二人は何を思っただろう。
二人もシスカに視線を移したが、申し訳なさそうにすぐに逸らした。
「そして、皆さんにもうひとつ。このクラスに転入生があります」

教師が発した転入生という言葉にクラスがざわめいた。
「あー、静かに。…入りなさい」
教師が扉の方に声をかけると、扉がスライドされて一人の生徒が入って来る。
アルベルトとジェリドを見ていたシスカは、再び正面を見る。
瞳が戦慄き、開いた口が塞がらなくて驚愕した表情を浮かべた。
「セリカ＝ハウル君だ」
男子生徒がざわめく。
可愛いとかそれに類似する言葉達が発せられる。
そこにいたのは間違いなく、シスカの知っている少女…セリカだった。
「せ、セリカ…？」
信じられないものを見るようにシスカが彼女の名前を呼ぶ。
周囲は、知り合いなのかとシスカを見た。
シスカやカペラ達、上の者しか知ることのない彼女のことを知らないアニーミやユリアも様子のおかしいシスカを見ていた。
「シスカ」
シスカを見て微笑んだセリカは駆け寄って彼を抱きしめた。
それを見てクラスがざわめき、アニーミはショックを隠せない表情を浮かべた。
「ちょ…セリカ。ま、待って…！」
「これでシスカとずっと一緒。嬉しい…」
顔を赤くするシスカに心底嬉しそうなセリカを見て止まることのないクラスのざわめきに教師の顔に青筋が立つ。
この後、クラスの秩序を乱したシスカ達は職員室に呼び出され叱られてしまい、憂鬱な気持ちにならざるを得なかった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1948x/

錬機動騎士スフォルツァンド

2011年12月18日11時49分発行